

兵庫県文化財調査報告書第30冊

丁・柳ヶ瀬遺跡 発掘調査報告書

—本文編—

1985. 3

兵庫県教育委員会

序 文

昭和51年秋、台風17号が西播磨地方を襲い多大な被害を及ぼしました。兵庫県土木部は、二級河川大津茂川・西汐入川工区激特事業として河川改修などの計画を進め、河川流域の保全に努めておりました。姫路市勝原区所在の丁・柳ヶ瀬遺跡に事業が計画されることとなり、姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

本書は、昭和54・55年度の二箇年、三次に互って実施した発掘調査の成果を収録したものです。

報告にみられるように、丁・柳ヶ瀬遺跡は低地にありますが縄文時代の土器群、弥生時代の彩文土器や彩文木製品、古墳時代の二棟の住居址や奈良時代の墨書土器・人形を含めた歴史時代に互る数多くの貴重な成果をあげることができました。

発掘調査から出土資料の整理・報告に至るまでに多くの人々の努力と協力を得ましたことに感謝の意を表わします。

本書が、埋蔵文化財保護の理解を高める助けとなり、併せて研究資料の一つとなれば幸いです。

昭和60年3月

兵庫県教育委員会

教育長 井野辰男

例 言

1. 本書は姫路市勝原区丁に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡の発掘調査報告書である。昭和51年秋の台風17号による災害復旧を因とした、二級河川大津茂川・西沙入川地区激特事業に先立って発掘調査を実施したものである。

調査は兵庫県教育委員会が、昭和54年秋に第1次調査を実施し、引続き冬に第2次調査を実施した。昭和55年には第3次調査を行い、昭和56年度から兵庫県教育委員会王子分館・魚住分館・兵庫県埋蔵文化財調査事務所において整理事業を行ってきたものである。

2. 第1次調査で確認を終えた西沙入川工区・ショートカット工区について、全面調査を実施し、北よりA・B（第2次調査）、C・D（第3次調査）各地区とし、大津茂川工区において表面採集及び機械掘削の立会い調査を実施した箇所をE地区とした。

標高はB・M、L=O.P.+5.00mをもちいた。

4. 遺物番号は時代区分にしたがって、縄文時代をA、弥生時代をB、古墳時代をC、(飛鳥)奈良時代をD、平安時代・中世をE、江戸時代以降をFとし、さらに遺物の種類によって木製品をW、石器をS、鉄器をI、土製品をCとした。なお、土器については種類別表示の記号を除いた。遺物の時代と種類を2つのアルファベット記号の組合せで示し、その後に個別の遺物の整理番号を付した。たとえば、AS2は縄文時代の石器であり、D10は奈良時代の土器の10である。

3. 本書は本文編と図版編とに分れて編集しており、図版編は写真図版(カラー・コロタイプ)のみを掲載している。なお、本文編の巻末に遺物図面のうち土器図面の多くをまとめ掲載している。

5. 本書の執筆者および執筆分担は以下の通りである。

岡崎正雄 第1章・1・2・3, 第3章・1・2, 第4章・1・5, 第5章

深井明比古 第1章・4・5, 第2章・2, 第3章・3・4・5共同執筆, 第4章・2(1)共同執筆・7・8・9

高橋 学 第2章・1

池田正男 第3章・4

種定淳介 第3章・4, 第4章2(2)・2(3)・3(1)

楠老拓治 第3章・5共同執筆

釜江秀典 第4章・2(1)共同執筆

藤村淳子 第4章3(1)・4

吉田 昇 第4章3(3)

森岡みゆき 第4章6

なお、自然科学的調査を中心とした分析について、諸先生方から玉稿を戴き、付章自然科学的方法による調査として八篇掲載している。

6. 遺物の実測は調査員と釜江秀典・藤村淳子・森岡みゆき・中納久美子が行い、拓本は坂本きよみ・巻幡睦子・森岡みゆきが行った。

7. 写真撮影は、遺構については第1・2次調査は岡崎・深井が、第3次調査は輔老拓治・深井が行い、遺物については多くを森昭氏に依頼し、一部深井が行った。

8. 製図・浄写については、遺構は深井と岡崎・池田が行い、遺物は和田早芳子・池野栄子の協力を得て、深井・藤村・中納・森岡が行った。

9. 編集は藤村・中納の協力を得て、深井と岡崎が行った。

10. なお、巻頭カラー図版1遺跡の原版については神戸市立博物館の協力を得て掲載させて戴いた。

目 次

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 第1次調査	8
第3節 第2次調査	12
第4節 第3次調査	15
第5節 整理作業	20

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	23
第2節 歴史的環境	28

第3章 層位と遺構

第1節 A 地区	33
第2節 B 地区	37
第3節 C 地区	42
第4節 D 地区	51
第5節 E 地区	57

第4章 遺 物

第1節 縄文時代の土器	59
1. 縄文時代中期	59
2. 縄文時代後期	63
3. 縄文時代晩期	64
第2節 弥生時代の土器	71
1. 弥生時代前期	71
2. 弥生時代中期	97

第3節 古墳時代の土器	101
1. 土 師 器	101
2. 須 恵 器	120
第4節 奈良時代の土器	125
1. 土 師 器	125
2. 須 恵 器	131
3. 特殊土器類	139
第5節 平安時代から中世の土器	147
第6節 近世及びそれ以降の土器	150
第7節 木 製 品	153
第8節 石 器	163
第9節 鉄 製 品	175

第5章 ま と め

付 章 自然科学的方法による調査

第1節 丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境	183
第2節 丁・柳ヶ瀬遺跡の古地磁気学的研究	188
第3節 丁・柳ヶ瀬遺跡の花粉分析	205
第4節 珪 藻 分 析	208
第5節 弥生土器の黒色化手法について	223
第6節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土のサスカイト遺物の 石材産地分析	228
第7節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土木製品の樹種	239
第8節 編 物	245

図 面 目 次

- 第1図 縄文式土器 (中期) A・B地区 深鉢
第2図 縄文式土器 (中期) B地区 深鉢
第3図 縄文式土器 (中期) A・B地区 深鉢
第4図 縄文式土器 (中期) A・B地区 深鉢
第5図 縄文式土器 (中期) A・B地区 深鉢
第6図 縄文式土器 (中期) A・B地区 深鉢・浅鉢
第7図 縄文式土器 (中期・後期) A・B・C・D地区 浅鉢・深鉢
第8図 縄文式土器 (晩期) A・C・D・E地区 深鉢・浅鉢
第9図 縄文式土器 (晩期) C・D地区 深鉢
第10図 縄文式土器 (晩期) 各地区 深鉢
第11図 縄文式土器 (中期・後期) C・D・E地区 深鉢・浅鉢
第12図 弥生式土器 (前期) B地区SX02・SX01 壺・甕
第13図 弥生式土器 (前期) B地区包含層 壺・甕・鉢
第14図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第15図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第16図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第17図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第18図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺 彩文土器
第19図 弥生式土器 (前期) C・D地区 壺 彩文土器他
第20図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第21図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第22図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 壺
第23図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 甕蓋・甕
第24図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 甕
第25図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 甕
第26図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 甕
第27図 弥生式土器 (前期) C地区SX02 鉢
第28図 弥生式土器 (前期) D地区SX09 壺・甕

- 第29図 弥生式土器（前期） D地区SX10 壺
- 第30図 弥生式土器（前期） D地区SX10 壺
- 第31図 弥生式土器（前期） D地区SX10 甕
- 第32図 弥生式土器（前期） D地区SX10 鉢・壺底部
- 第33図 弥生式土器（前期） D地区SX10 壺・甕・鉢
- 第34図 弥生式土器（中期） 壺・鉢・甕・高杯
- 第35図 弥生式土器（中期） 蓋・壺・甕
- 第36図 弥生式土器（中期） C地区SX03・E地区 壺・甕・高杯
- 第37図 弥生式土器（中期） 壺・甕
- 第38図 土師器（古墳時代） C地区SX03 壺
- 第39図 土師器（古墳時代） C地区SX03 壺
- 第40図 土師器（古墳時代） C地区SX03 壺
- 第41図 土師器（古墳時代） C地区SX03 甕
- 第42図 土師器（古墳時代） C地区SX03 甕
- 第43図 土師器（古墳時代） C地区SX03 甕
- 第44図 土師器（古墳時代） C地区SX03 甕
- 第45図 土師器（古墳時代） C地区SX04 甕・台付甕
- 第46図 土師器（古墳時代） C地区SX03 高杯・甕
- 第47図 土師器（古墳時代） C地区SX03 器台
- 第48図 土師器（古墳時代） C地区SX03 鉢・蓋・製塩土器・小型丸底壺・
手焙形土器・ミニチュア土器
- 第49図 土師器（古墳時代） C地区SI01・SI02 壺・甕・高杯・器台・鉢
- 第50図 土師器（古墳時代） C地区C-5区・42G 壺・甕・高杯・器台・蓋・
鉢・製塩土器
- 第51図 土師器（古墳時代） C-6区・E地区 壺・高杯・器台・鉢・蓋
- 第52図 須惠器（古墳時代） C地区 杯蓋・杯身・高杯・提瓶・甕
- 第53図 土師器（奈良時代） C地区 杯・皿・高杯・碗
- 第54図 土師器（奈良時代） C地区 甕
- 第55図 須惠器（奈良時代） C地区 杯蓋・蓋
- 第56図 須惠器（奈良時代） C地区 杯・皿・鉢
- 第57図 須惠器（奈良時代） C地区 杯

- 第58図 須恵器(奈良時代) C地区 杯
- 第59図 須恵器(奈良時代) C地区 杯・平瓶
- 第60図 須恵器(奈良時代) C地区 壺・鉢
- 第61図 須恵器(奈良時代) C地区 横瓶・甕
- 第62図 須恵器(奈良時代) C地区 甕
- 第63図 須恵器(奈良時代) C地区 甕
- 第64図 土師器・須恵器(奈良時代) E地区 杯・杯蓋・皿・高杯・鉢・甕・壺
- 第65図 須恵器(奈良時代) E地区 杯・甕
- 第66図 土師器・須恵器(奈良時代) 墨書
- 第67図 須恵器(奈良時代) 墨書
- 第68図 土師器・須恵器(奈良時代) 墨書
- 第69図 須恵器(奈良時代) 墨書・朱書・へら書・刻印
- 第70図 須恵器・土師器他(平安時代～中世) 椀・皿・鉢他
- 第71図 須恵器・土師器(平安時代～中世) 鉢・甕・羽釜・土鍋
- 第72図 陶磁器・土師器(近世以降) 椀・皿・鉢・甕他

挿 図 目 次

挿図1	調査地区位置図	2
挿図2	9G遺構・土層・土器	8
挿図3	第1次確認調査グリッド位置図	8・9
挿図4	第1次確認調査土層柱状図	8・9
挿図5	14G出土鉄鍋	9
挿図6	31G出土須恵器杯蓋	9
挿図7	37G土層と瓦	9
挿図8	42G遺構・土層・土器	10
挿図9	44G遺構・土層・土器	10
挿図10	A・B地区調査位置図	13
挿図11	古地磁気調査風景	14
挿図12	A～D地区主要遺構配置図	16
挿図13	SX09編物取り上げ作業	18
挿図14	土壌サンプリング作業	18
挿図15	発掘調査に参加した人達	19
挿図16	森昭氏遺物写真撮影作業	20
挿図17	大津川下流域の条坊復原図	26
挿図18	丁・柳ヶ瀬遺跡周辺遺跡分布図	28・29
挿図19	A地区トレンチ位置図	33
挿図20	A地区土層図	34
挿図21	Aトレンチ13層遺物出土状況	35
挿図22	Aトレンチ14層遺物出土状況	35
挿図23	B地区調査区割付け図	37
挿図24	B地区コンタマップ	37
挿図25	B地区土層図	38
挿図26	B地区遺構図	39
挿図27	B地区SD01と弥生式土器	40

挿図28	B地区SD01土層図	40
挿図29	B地区SD02と遺物	41
挿図30	B地区SD02土層図	41
挿図31	C地区遺構分布図	42・43
挿図32	SX0・SX03土層断面図	43
挿図33	C-1区ビット1土器出土状態	44
挿図34	SD12土層断面図	44
挿図35	SI01・SI02平・断面図	45
挿図36	SX03土器群平・断面図	46
挿図37	C-5区土層断面図	47
挿図38	SX06(橋状遺構)橋脚杭樹種分類図	47
挿図39	SX06(橋状遺構)平・断面図	48
挿図40	D地区遺構分布図及び時期別自然流路図	50・51
挿図41	SE01平・断面図	52
挿図42	D-1・2区南側 D-3・5区北側土層断面図	52・53
挿図43	SX10土層断面図	53
挿図44	D-4区調査区全景	54
挿図45	D-5区土層断面図	55
挿図46	大津茂川左岸土層堆積状況模式図	57
挿図47	土錘・耳栓	64
挿図48	播磨の縄文時代晩期後葉の土器文様変遷図	68
挿図49	A地区Aトレンチ出土Ⅰ壺	71
挿図50	A地区Aトレンチ出土Ⅱ壺	71
挿図51	B地区SD01出土壺	72
挿図52	B地区SD02・包含層出土鉢	72
挿図53	B地区出土鉢復原想定図(S=1:4)	73
挿図54	C-1区ビット1出土壺	74
挿図55	SD08出土壺	74
挿図56	C地区42G出土壺	75
挿図57	中国遼寧省鏡子窩単陀出土彩色土器(S=1:5)	75
挿図58	刻目の種類	77

挿図59	SX02出土土製品 (S=1:2)	80
挿図60	弥生時代前期土器底部の契痕 (2倍)	84
挿図61	D地区包含層出土壺	84
挿図62	D-4区出土壺木葉文	85
挿図63	D-5区出土壺・甕	85
挿図64	E地区出土壺	85
挿図65	播磨弥生時代前期遺跡分布図及一覽表	88・89
挿図66	丁・柳ヶ瀬遺跡北端部出土遺物	92
挿図67	C地区土師器 高杯・杯・鉢	117
挿図68	C地区須恵器 提瓶・器台	121
挿図69	D地区須恵器 杯蓋・杯身・高杯・甕	122
挿図70	E地区須恵器 杯身・高杯	123
挿図71	C地区土師器 鉢・壺・甕	129
挿図72	B・C・D地区須恵器・土師器	130
挿図73	叩きと当て具痕	130
挿図74	爪状圧痕	133
挿図75	杯Aの分類	134
挿図76	叩きと当て具痕	138
挿図77	墨書土器の分布	139
挿図78	墨書土器	141
挿図79	ヘラ記号	143
挿図80	SX10 狭楾・楾・加工材・弓・布巻具・蓋	154
挿図81	SX02 槽・尖頭状木器・不明木器	155
挿図82	SX10 彩文鉢	156・157
挿図83	SX10 加工材	157
挿図84	SX03・SX04 柄・布巻具・不明木器	157
挿図85	SX03・SX04 楾・丸楾・不明木器・棹	158
挿図86	B・C・E各地区 付札状木器・人形	159
挿図87	C-5区 漆碗	160
挿図88	SX06 杭-1	160
挿図89	SX06 杭-2	161

挿図90	A～D地区	石鏃・石錐	167
挿図91	A～E地区	楔形石器・削器	168
挿図92	A～C地区	石錘	169
挿図93	B・C地区	石棒	170
挿図94	B～D地区	石斧・石錘・石庖丁	171
挿図95	A～D地区	砥石・敲石・磨石・凹石・台石	172
挿図96	C・D地区	台石	173
挿図97	SX03	土器群 鉄鏃	175
挿図98	SX05	直刀	175

目 次

第1表	発掘調査一覧表	3
第2表	C地区遺構一覧表	49
第3表	D地区遺構一覧表	56
第4表	SX02出土 壺文様構成一覧表	76
第5表	SX02出土 甕口縁形態・胴部文様構成一覧表	79
第6表	SX10出土 壺文様構成一覧表	81
第7表	SX10出土 甕口縁形態・胴部文様構成一覧表	83
第8表	播磨の弥生時代前期土器文様等変遷表	89
第9表	古式土師器分類表	102
第10表	土師器 杯・皿法量表	126
第11表	つまみの直径と高さ	131
第12表	須恵器 杯蓋法量表	132
第13表	須恵器 杯B法量表	133
第14表	須恵器 杯A法量表	135
第15表	墨書土器一覧表	140
第16表	C-5区出土供膳形態の内訳	145
第17表	木製品一覧表	153
第18表	SX05 橋状遺構杭一覧表	162
第19表	石器一覧表(1～3)	164～166

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

姫路市勝原区丁に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡は、二級河川大津茂川中流域の左岸、京見山山塊及び、その山裾に位置する丁古墳群、丁・瓢塚古墳の母集落ともなる位置にあるとされていた。山陽新幹線建設の際に調査された、『川島・立岡』遺跡の報告の中にも、大津茂川流域の自然堤防上の遺跡群についての論考があり、『電野市史』の中にも弥生時代の拠点集落として規模も大きく、継続的な遺跡として取扱われていた。

昭和51年秋の台風17号災害による大津茂川の改修工事で、上流の川島遺跡の近くで弥生時代の絵画土器の採集や下流域の朝日谷橋下流での縄文式土器等の採集が相次いだ。

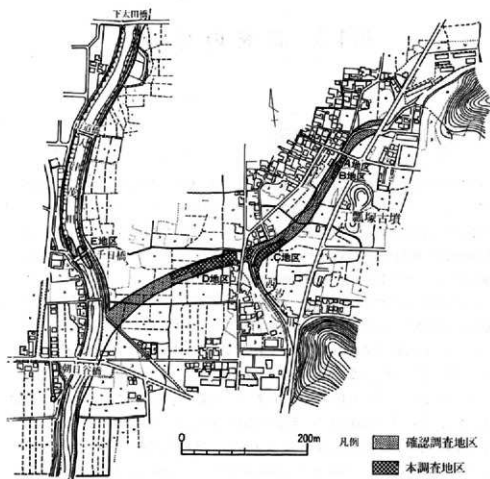
ここで、丁・柳ヶ瀬遺跡周辺に兵庫県土木部姫路土木事務所が、二級河川大津茂川・西汐入川激甚災害事業として大津茂川の護岸工事と西汐入川の改修及び大津茂川へ水路をショートカットする大規模工事を計画するにあたり、姫路土木事務所の依頼を受け、兵庫県教育委員会は丁・柳ヶ瀬遺跡を大津茂川中下流域の自然堤防上に位置する遺跡群として、丁・瓢塚古墳の西隣の地区でもあることより、西汐入川及び大津茂川へのショートカット地区について全地域幅約25m、長さ700mの面積約17,500m²を調査対象として、長さ20m間隔を基本として約70箇所の調査グッド(2m×2m)を設け、遺跡の範囲と詳細について確認調査を約25日間の予定で昭和54年秋に実施することとなった(第1次調査)。

確認調査の結果(挿図1)、A・B・C・D地区について面積約3,300m²の全面調査が必要となり、工事工程等を検討し急ぎA・B地区のみ、引続き発掘調査を実施することとなった(第2次調査)。

昭和55年4月より残りのC・D地区の全面調査と大津茂川護岸工事にかかわる地区(E地区)について、調査を行い、調査完了区より順次、改修工事を開始し、完成に至っている。なお、発掘調査経費は二箇年で合計51,964,000円を費した。

調査で出土した遺物は、整理コンテナ約400箱と多量であり、縄文時代から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世そして近世と幅広く、土器・石器・木器・鉄器等と遺物の種別もと多岐で、しかも住居址、溝と井戸といった遺構群と各時代の自然流跡の中から出土した。

これらの遺物及び遺構の整理作業を通じ、消えた丁・柳ヶ瀬遺跡の復元を行うことが必



挿図1 調査地区位置図

要で、昭和55年より整理作業を開始し、昭和60年報告書の刊行に至ったものである（第1表）。

なお、整理事業経費は五箇年で18,624,000円を費した。

第1表 発掘調査一覧表

年度	発掘調査			整理作業				総経費	担当者			
	期間	概要	経費	期間	場所	概要	経費					
54	S54.10.17 ↓ S54.12.4	(第1次調査) 西砂入川 ショートカット工区 付随所の確認調査	千円 7,838					千円 7,838	岡崎 深井			
	S54.12.5 ↓ S55.1.28	(第2次調査) A・B地区 約400㎡ 全面調査										
	S55.4.15 ↓ S55.1.19	(第3次調査) C・D地区 約2,600㎡ 全面調査 E地区立台調査		千円 44,126	S55.4.1 ↓ S56.3.25	兵庫県教育委員会 王子分館	第1・2次調査 出土品整理			千円 2,304	千円 46,330	幡老、深井 池田、吉田 植之、(岡崎)
					S56.7.1 ↓ S56.8.31 S56.9.1 ↓ S57.3.25	王子分館 魚住分館	第3次調査 出土品整理 (水洗、ネーミング)			千円 4,680	千円 4,680	岡崎 深井
57			S57.4.1 ↓ S58.3.25	魚住分館	・ (総合、実測) 写真	千円 3,948	千円 3,948	・				
58			S58.4.1 ↓ S59.3.25	魚住分館	・ (実測、トレース、 写真、レイアウト)	千円 988	千円 988	・				
59			S59.4.1 ↓ S59.7.31 S59.8.1 ↓ S60.3.30	魚住分館 兵庫県用益文化財 調査事務所	取 扱 報告書発行	千円 6,804	千円 6,804	・				
計			千円 51,964			千円 18,624	千円 70,588					

調 査 組 織

調査主体 兵庫教育委員会

昭和54年度発掘調査の体制

(調査事務) 社会教育・文化財課

課 長 林 五和夫

文化財担当参事 田中 幹雄

副課長 道畑 實

課長補佐 池田 義雄

埋蔵文化財係長 村上 敏揚

技術職員 小川 良太

課長補佐兼管理係長 河合 幸一

係 長 堀 洋

事務職員 山崎 桂子

(調査担当) 技術職員 岡崎 正雄

同 深井明比古

調査補助員 首藤 良男

作業員 小谷 五郎・小谷義男(第1, 2次), 株式会社八木組・株式会社太平工業(第1次), 関 春雄・野夫井 彰・福井 一雄・西井 義貴・榎得 安治・福井 鉄治・池田 信夫・長谷川重夫・本行貞子・浅見 芳子・小西 美幸・東口 博子・福井美智子・長谷川みさゑ・福井とよ子(第2次)

事務員 本間 久子

整理作業員 光田 孝子

昭和55年度発掘調査・整理作業の体制

(調査事務) 社会教育・文化財課

課 長 藤和 重喜

文化財担当参事 田中 幹雄

副課長 道畑 實

課長補佐兼埋蔵文化財係長 池田 義雄

	主査	大村 敬通
	技術職員	森内 秀造
	課長補佐兼管理係長	河合 幸一
	係長	堀 洋
	事務職員	山崎 桂子
(調査担当)	技術職員	輔老 拓治
	同	池田 正男
	同	吉田 昇
	同	深井明比古
	同	種定 淳介
	調査補助員	岡本 武恵, 渡辺 玲, 宮本 昌典, 菅原 明弘, 高橋 学, 山本 明彦, 岡本 真一, 二葉 滋
	作業員	池田 信夫, 野夫井 彰, 前川 重義, 関 春雄, 福井 一雄, 小西 健詞, 都出 正文, 関 凡人, 前川 輝行, 小谷 考司, 長田 安雄, 長川隆一郎, 吉田 由夫, 西井 義貴, 宮下 鉄治, 金山 五市, 小谷 五郎, 小谷 義男, 本行 貞子, 浅見 芳子, 小西 美幸, 東口 博子, 福井美智子, 長谷川みさ 丞, 浅見みさお, 潮田 朝子, 毛呂喜代子, 福井と よ子, 福原 博枝, 大塚 美子, 大塚佐代子, 大西 成子, 吉田 昌代, 近藤 梅子, 中谷 清子, 外崎 恵美子, 三木かね子, 佐々木カヅエ, 石田富美子, 甲 玉恵, 山田ふじ子
	事務員	本間 久子
	整理作業員	光田 孝子, 榎得 咲子, 雑賀 弘子
(整理担当)	技術職員	岡崎 正雄
	整理補助員	坂本きよみ, 巻幡 睦子, 釜江 秀典

昭和56年度整理作業の体制

(整理事務) 社会教育・文化財課

課長	藤和 重喜
文化財担当参事	田中 幹雄
副課長	道畑 實

副課長 中北 勝
 埋蔵文化財係長 池田 義雄
 主 査 大村 敬通
 主 任 小川 良太
 課長補佐兼管理係長 河合 幸一
 係 長 堀 洋
 事務職員 山崎 桂子
 (整理担当) 技術職員 岡崎 正雄
 同 深井明比古
 整理補助員 坂本きよみ, 巻幡 睦子, 釜江 秀典

昭和57年度整理作業の体制

(整理事務) 社会教育・文化財課

課 長 藤本 繁
 文化財担当参事 吉村 芳郎
 副課長 道畑 實
 副課長 中北 勝
 課長補佐 池田 義雄
 埋蔵文化財係長 大村 敬通
 主 任 西口 和彦
 課長補佐兼管理係長 福永 慶造
 主 任 八家 均
 (整理担当) (主 任 岡崎 正雄)
 技術職員 深井明比古
 整理補助員 坂本きよみ, 藤村 淳子, 池田 頼信

昭和58年度整理作業の体制

(整理事務) 社会教育・文化財課

課 長 西澤 良之
 参 事 大西 章夫
 副課長 森崎 理一
 副課長 馬田 力
 埋蔵文化財調査係長 櫃本 誠一

技術職員 大平 茂
 課長補佐兼管理係長 福永 慶造
 主任 八家 均
 (整理担当) (主任 岡崎 正雄)
 技術職員 深井明比古
 整理補助員 藤村 淳子, 森岡みゆき
 作業員 茨木恵美子, 和田寿佐子, 渡辺二三代, 光沢 鈴子,
 木村 淑子

昭和59年度整理作業の体制

(整理事務) 社会教育・文化財課

課長 西澤 良之
 参事 大西 章夫
 副課長 森崎 理一
 副課長 馬田 力
 埋蔵文化財調査係長 榎本 誠一
 技術職員 大平 茂
 " 森内 秀造
 管理係長 小西 清
 主査 坂本 豊明
 (整理担当) 主任 岡崎 正雄
 技術職員 深井明比古
 整理補助員 藤村 淳子, 森岡みゆき
 (中納久美子・和田早芳子, 池野 栄子)
 作業員 和田寿佐子, 渡辺二三代, 光沢 鈴子, 木村 淑子,
 藤吉真弓

第2節 第1次調査

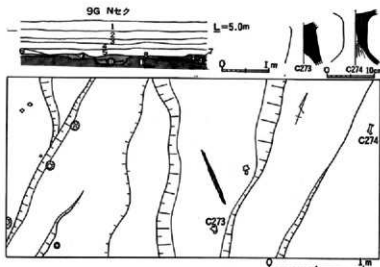
昭和54年10月17日より発掘調査を開始し、大洋川のショートカット部分は、現況が水田で調査とし得たが、西汐入川地区については、水田部のみを調査対象とし、現西汐入川河道部は調査対象とし得なかった。

第1次調査は、2m×2mの調査区(グリッド)を計画水路幅(約20m)を三分するよう、長さ20m間隔の千鳥式様に67箇所設け、グリッドでは十分な結果が得られないものについては、グリッドを拡張し2m×4mにする等、補足しながら確認調査を実施した。

ショートカット部分は1G～35G、西汐入川蛇行部分は36G～47G、西汐入川北区は48G～63Gとし順次調査を進め、64G～67Gを補完した(挿図3)。

挿図4の土層柱状図は、各グリッドの主な土層堆積を凡例に示したように、1. 埋込土、2. 暗灰色土、3. 黒色シルト、4. 砂、5. 砂礫、6. 黄色土とし、周辺の土層を比較して見る。これは、後述の高橋孝氏の散地形分類と異なるが、遺跡の環境を概る粗い作業図である。なお、各柱状図の右側に土層毎の遺物量の目安をドットしている。

調査の結果、ショートカット部分については、1G～17G部分で上層に古墳時代後期から中・近世に至る土器や中世の鉄鍋 E11 等遺物を包含し、暗灰色土層に弥生時代中期の



- | | | | |
|------------|--------------|-----------|----------------|
| 1. 耕土 | 4. 暗灰黄色砂質粘質土 | 7. 淡灰色砂 | 10. 灰白色砂 |
| 2. 灰黄色粘質土 | 5. 淡灰褐色砂質土 | 8. 暗灰色粘質土 | 11. 暗灰茶褐色砂質粘質土 |
| 3. 灰黄褐色粘質土 | 6. 暗灰褐色粘質土 | 9. 淡灰色砂 | |

挿図2 9G遺構・土層・土器

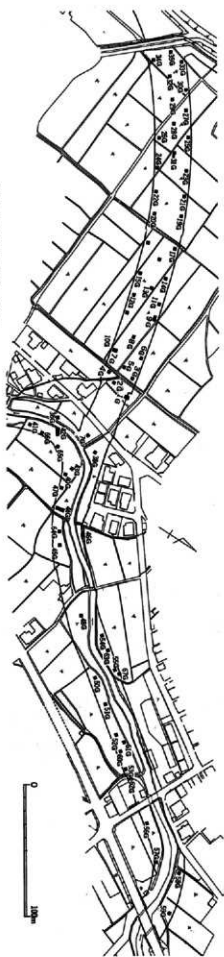


图3 第1水保工程平面图



图4 第1水保工程土质剖面图

- 图例 1. 土质
- 砂土
 - ▨ 砂壤土
 - ▩ 壤土
 - 粘壤土
 - 粘土
 - ▬ 砂壤土
 - ▭ 粘壤土
 - ▮ 粘土
2. 尺寸
- 直径
 - 边长
3. 建筑物名称
- 堤防
 - 涵洞
 - 水闸

图例 第1水保工程土质剖面图

土器が多く出土し、黒色シルト層に弥生時代前期の土器、黄色土（自然堤防砂）面に溝等の遺構を検出したため本調査D区とした。D区の東隣地は、確調査時に用地確保ができていなかったため本調査時に調査対象とするかどうかの第2次確認調査を予定した。9Gは、D地区の上層の古墳時代初めの遺構（溝又は自然流路）としたもので、溝肩に枕が打ち込まれている（挿図2）。

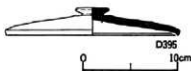
18G～35Gは、例えば32G黒色シルト層で、弥生時代前期小形磨製石斧（BS 25）が検出されたり、31Gの瓦用粘土採掘後に埋め込んだ土層より須恵器杯蓋 D395 等検出したりましたが、遺跡の末端なのであるのか、遺構を検出し得なかったため、全面の調査対象から除外した。

西沙入川蛇行部分については、西沙入川旧河道部分が検出され（36G～43G, 45G, 46G）、44Gでは弥生時代前期の溝が検出された。

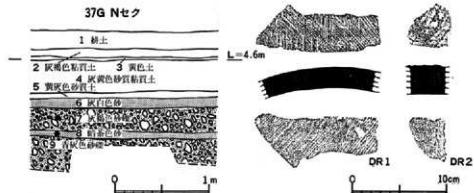
37Gでは、旧河道堆積物7層灰褐色砂礫・8



挿図5 14G出土鉄鍋

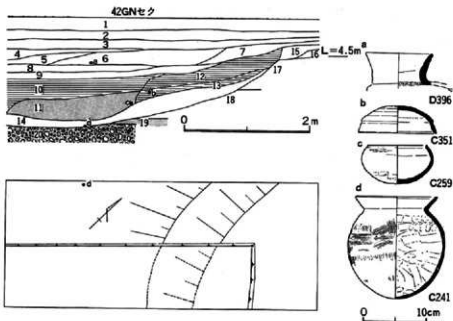


挿図6 31G出土須恵器杯蓋



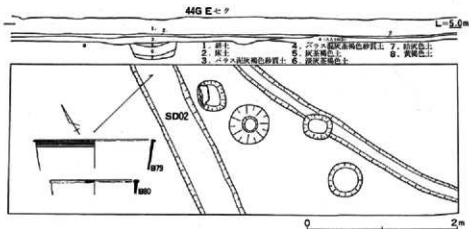
挿図7 37G土層と瓦

層暗茶色砂より上流の下太田廃寺跡関連の瓦（DR1・DR2）や縄文式土器、弥生式土器の摩耗したものが出土している（挿図7）。42Gでは、調査区を拡張し、旧河道堆積の層序と遺物の包含状況を把握した。古墳時代前期布留式土器甕 C241から奈良時代の須恵器平瓶 D396がみられる（挿図8）。44Gも調査区を拡張して、弥生時代前期の土器 B79・B80が6層灰茶褐色土に包含される溝 SD08と4層ガラス混灰茶褐色砂質土に古式土師器を包含し、更に上層より掘り込まれた柱穴が4箇所検出された（挿図9）。以上より、



- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 黄土 | 6. 茶灰色砂質粘土 | 11. 青灰色砂質土 | 16. 灰茶褐色砂質粘質土 |
| 2. 黄灰色粘質土 | 7. 暗茶灰色土 | 12. 暗灰色粘質土 | 17. 黄茶褐色粘質土 |
| 3. 灰黄色砂質粘土 | 8. 灰褐色砂質土 | 13. 暗茶灰色粘質土 | 18. 明青灰色粘土 |
| 4. 黄灰褐色砂質粘質土 | 9. 灰黄褐色砂質土 | 14. 青灰色砂質土 | 19. 青灰色砂 |
| 5. 黄灰茶褐色砂質土 | 10. 暗灰色砂質粘土 | 15. 灰黄褐色砂質土 | 20. 暗灰青褐色 |

挿図8 42G遺構・土層・土器



挿図9 44G遺構・土層・土器

西汐入川蛇行部では、東岸の南は41Gより北64Gまで、西岸では37・38G周辺を本調査の対象とした。

西汐入川北部では、旧河道部分と後背湿地部分で中世の漆碗(48G)、弥生時代中期の土器(54G、63G)が出土するも、縄文式土器を出土した53Gを中心として、出土遺物量を考慮しながら、黄色土の広がる地域(52G~62G)のみを本調査の対象とした。

第1次調査(昭和54年10月17日~12月4日)

- | | |
|---|---|
| 10. 17 兵庫県教育委員会王子分館から姫路市丁の現場事務所へ器材を搬入。 | 11. 6 9Gで表土下180cmで青灰色砂検出。 |
| 10. 18 丁区長と協議し、諸準備を開始する。なお、岡崎は奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターへ遺物保存科学課程研修出張のため、深井が11月2日まで一人で現場を指導する。 | 11. 8 9Gで溝、自然流路を掘る。 |
| 10. 19 台風20号来襲。 | 11. 9 14Gにて縄文式土器の包含層を確認する。 |
| 10. 22 姫路土木事務所で、太平工業・八木組と作業員他について協議。 | 11. 13 13~35G調査、32Gより石斧出土。 |
| 10. 23 遺跡遠景写真撮影。 | 11. 14 20~30G調査。 |
| 10. 24 発掘調査を開始。40箇所のグリッドを設定。 | 11. 15 王子分館より荷物搬入する。 |
| 10. 25 2Gより弥生時代前期削出し突帯壺が出土。 | 11. 19 西汐入川蛇行部の調査(36G以東)を開始。 |
| 10. 29 1~5G調査。3Gよりササカイト製石鏃出土。丁所在の石棺蓋転用の石橋を見学する。 | 11. 21 43Gで弥生時代前期壺出土。 |
| 10. 30 大津茂川(E地区)にて、黒色シルトより弥生式土器や奈良時代須恵器杯身を発見。 | 11. 21 42Gで溝検出し、43Gにて縄文時代晩期と弥生時代前期の土器を検出。 |
| 10. 31 1Gで旧河道状堆積を観察。 | 11. 22 雨のため室内にて遺物整理。 |
| 11. 2 6~10G調査。神戸新聞社が取材。 | 11. 25 44Gで弥生時代前期の溝を検出。48Gのシルト層から漆器碗を検出。 |
| 11. 5 雨のため、水中ポンプを使用開始。岡崎は研修より現場復帰。 | 11. 27 42~53G調査。53Gで石鏃2本出土。 |
| | 11. 29 53~60G調査。53Gで縄文時代の浅鉢出土。 |
| | 11. 30 54Gより弥生式土器が多量に出土。 |
| | 12. 3 62~67G調査。 |
| | 12. 4 本調査するべく範囲を確認。太平工業、八木組の作業員は本日に終了。 |

第3節 第2次調査

第1次調査の結果、挿図1に示したA・B・C・D地区の全面調査が必要となり、12月5日から急ぎ昭和54年度調査として、A・B両地区の発掘調査を実施することにした。A・B両地区調査位置（挿図10）は、第1次調査で52Gから62G北の市道橋までに限って全面調査地区とした。

A地区は、62G（1m×4mのトレンチ）の周辺の現河道を調査することがなく、幅3m、長さ11mトレンチを調査し、倍の幅に拡げて調査したのみである。客土盛土が厚さ1mと多く、コンクリート基礎が有るため、ユンボによる排土を第1次調査に続いて行い、縄文式土器の包含層を調査した。縄文時代中期末から後期にかけての時期と晩期から弥生時代前期の土器を包含する旧河道の後背湿地の堆積状況から、集落は調査区の東南方向に延びているものと推測できる。

B地区は、52Gから53G北の黄色土の続く範囲で、水田部分を幅約10m、長さ約30mの川幅拡張部分を調査した。A地区に続いて、耕作土をユンボを使用して排土し、手掘りで調査を実施した。縄文時代中期末から後期にかけての遺物群と、旧河道の後背湿地や溝の中から弥生時代前期の土器が出土し、旧河道の蛇行部の砂層中より弥生時代から平安時代の遺物が包含していた。また、弥生時代前期の溝は、南東方向よりの水の流れが考えられ、集落の末端と西沙入川の関係を示すものである。

第2次調査（昭和54年12月5日～55年1月28日）

- | | |
|---|--|
| 12. 5 A地区トレンチをユンボ使用して掘削開始。縄文式土器、石鏟、石鏝他が早くも出土。神戸市立教育研究所前田保夫氏来訪。 | 12. 18 A地区トレンチを完掘。B地区砂層を除去。 |
| 12. 6 丁区の作業員出役開始。B地区掘削開始。 | 12. 19 B地区溝SD01を調査。幅60～70cm、深さ40～50cmを測る。 |
| 12. 10 B地区黒色シルト層をベルトコンベアーを配列して排土。 | 12. 20 B地区B ₁₋₄ で旧河道を掘る。 |
| 12. 11 A地区土器、石鏟2、石鏝出土。B地区A ₁₋₄ 、B ₁₋₄ 調査。 | 12. 21 A地区を有刺鉄線で、B地区をトラロープで囲障し、昭和54年の調査を終了。 |
| 12. 12 B地区A ₁₋₄ にて溝検出。 | 1. 9 新年の雨水の排水より作業を再開。 |
| 12. 13 A地区14層で深鉢形土器出土。 | 1. 10 B地区B ₁₋₄ で人形を検出。丁区で地元作業員他の方々に調査中間報告会を開催す。 |
| 12. 14 A地区14層で縄文式土器の広がりを確認。B地区で弥生時代前期土器出土。 | 1. 11 B地区溝SD01・SD02をトレン |

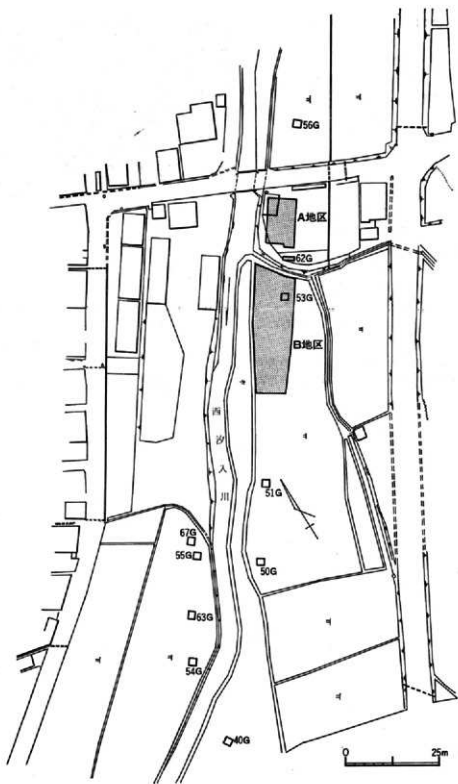


插图10 A·B地区调查位置图

チにて試掘。B₅₋₄の旧河道を平板測量にて復原。

1. 12 溝を調査。

1. 16 A地区のトレンチを拡幅するため、AⅡトレンチを幅3m ユンボにて掘削。B地区溝の土層図実測、写真を完了。B₁最下層砂礫より切目石鏝出土。

1. 17 A地区AⅡトレンチ13層掘り下げ、縄文式土器単層を調査する。

1. 18 B地区発掘完了し、全景写真撮影。

1. 21 B地区遺構平面実測を開始。A地区AⅡトレンチ調査。

1. 22 前田保夫氏、神戸大学理学部安川克己氏、井口博夫氏、熊野茂氏来跡し、花粉・古地磁気・珪藻の各分析のためのサンプリングをA地区AⅡトレンチ西壁にて行う。

1. 23 A地区の全景写真撮影。姫路市立飾磨高校増田重信氏来跡。新聞記者発表。



挿図 11 古地磁気調査風景

1. 24 B地区遺構実測。A₁砂より深鉢形土器口縁と磨製石斧を抽出。午後、丁婦人学級にて文化財学習会を催す。

1. 25 現地説明会。B地区溝SD01の断面を行い図面完了。

1. 26 プレハブ撤去の準備とB地区にシートを張る。

1. 28 王子分館へ遺物と器材を搬出。

第4節 第3次調査

第3次調査は、発掘作業最終年度にあたり、第1次調査（確認調査）で想定された遺跡のC・D・E地区全面調査を主に、一部西汐入川河川の川床の調査などの遺物採集を目的とする調査を実施した。

C地区は、第1次調査の36G～38G・40G～45G・47G・64G～66Gの範囲で河川改修を行う河川幅12m、長さ110mをはかり、市道から東側の西汐入川を含む氾濫原や、東から続く微高地末端部をさす。本調査区は、古くからの旧河道が集まる低地にあたり、しかも西汐入川が多少の雨で氾濫を起こすことから河道面より低位を発掘するところは困難を極めた。検出された主な遺構は、弥生時代前期の溝、ピット、土壌、弥生時代中期の溝、古墳時代初頭の住居址がある。また当地区は、微高地に挟まれた所で自然流路がたえず蛇行していたものと考えられ、弥生時代前期・古墳時代初頭・奈良時代・中世およびそれ以降の自然流路を検出した。C地区の遺物の多くは、それらの自然流路に堆積したもので、同時に植物維体などが見られた。また、西汐入川の川床下は、調査範囲の制約と安全を考え、ミノボで遺物採集及び断面観察を行った。

D地区は、第1次調査の結果1G～17Gの範囲で遺構及び土器包含層が検出されたため全面調査を行った。また部分的にトレンチ調査を行った所もある。またこの地区は、西汐入川が最もきつく蛇行する箇所から大津茂川に至るショートカットにあたる部分で、河川予定地幅22m、長さ140mを発掘した。

本調査は、7区に分け、東寄りから調査を行った。当地区は、西汐入川に近い市道から、丁・柳ヶ瀬遺跡の本体と考えられる微高地末端部にあたり、自然流路及び後背湿地にあたる。

D地区から検出された遺構は、弥生時代前期、中期の溝、古墳時代の溝や、時期は確定できないが古墳時代～古代頃と考えられる耕作跡状遺構が検出された。なお、旧地形からも判断できるように、微高地間には縄文・弥生前期の遺物を含む自然流路、人為的なものかもしれない弥生前期の凹地や、平安時代の自然流路などの自然形成によるものも多くみられた。

E地区の調査区は、大津茂川河川内にあたり、以前から遺物の出土が確認されていたことから、拡張工事区域に遺構が検出されるのか不明であったため、調査を実施したが遺構は検出されず、河川内の遺物採集調査を主に行った。遺物は、縄文時代～近・現代までおよぶものであり、奈良時代と考えられる人形や、墨書土器も出土した。

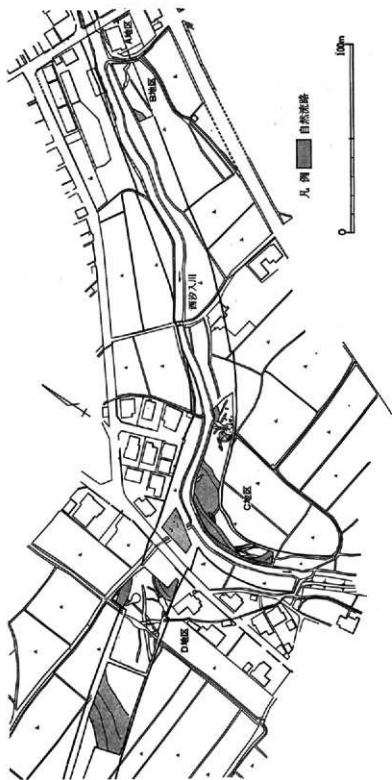


插图12 A~D地区主要道情况配置图

第3次調査（昭和55年4月15日～56年1月19日）

4. 15～16 発掘器材搬入。姫路土木事務所と打合せ。
4. 17 D-1区内に確認トレンチを設け発掘開始。
4. 18 D-1区内確認トレンチで溝3本を検出。C-5区内確認トレンチ上層部を機械排土を行った。
4. 21～22 C-5区確認トレンチで多量の奈良時代須恵器、土師器出土。E地区千日橋付近で立会調査。C-5区確認トレンチ発掘。
4. 23～25 D-1区全面機械排土。
4. 30 雨のため野外作業中止。
5. 1～6 C地区全面機械排土。D-1区SX07（平安時代）旧河道発掘。
5. 7～12 C-4区第1遺構面の調査完了。SX03の上面精査を行ない規模をつかむ。
5. 13～14 C-3区SD09を発掘。SX03上面精査。
5. 15～16 大雨のため調査区全域が冠水。
5. 19～20 C-3区SX03上面精査し、土器群の一部検出。
5. 21 終日雨のため作業中止。（大雨洪水警報発令。）
5. 22～23, 26～30 C-1～3区住居址、溝、土壌等の遺構検出。SX03発掘開始。
6. 2 雨のため作業中止。
6. 3～6 C-4区SX03発掘完了。断面実測。C-3区SX03発掘中。
6. 9～13 E地区立会調査。
6. 16～17 C-3区SX03土器群発掘。
6. 18 雨のため作業中止。
6. 19 C-3区SX03土器群発掘。
6. 20 雨のため作業中止。
6. 23～24 C-3区SX03土器群写真、実測。E地区立会調査。
6. 25 C-2・3区溝実測。E地区墨書土器など多量遺物出土。
6. 26 C-4区SX03断面実測。
6. 27, 30 C-2区SX02発掘
7. 1 雨のため作業中止。
7. 2 C-3区西壁一部崩壊。
7. 3～4, 7～8 C-3区西壁復旧作業。SX02掘下げ。SX03土器群発掘完了。
7. 9 雨のため作業中止。
7. 10 C-4区最終遺構面で発掘中。
7. 11 雨のため作業中止。
7. 14 C-4区最終遺構面まで発掘中。
7. 15～17 C-4区SD12発掘。
7. 18 午前中雨のため作業中止。午後C-4区SX04発掘を開始。
7. 21～22 C-4区SD15, SX04発掘。
7. 23～25, 28～31 C-4区SX04発掘。C-1区SI01発掘。
8. 1～2, 4～8 C-2区SI02発掘。C-3区SX02発掘。弥生前期遺物多量に出土。
8. 11～13 C～5区全面調査を開始。表土機械排土。
8. 14～15 C-1・2区SD07・SD08発掘。
8. 18～19 C-2・3区SX02発掘。
8. 20～22 雨のため西汐入川が決壊し、復旧作業を行った。
8. 25～28 C-1・2区遺構写真撮影。C-3区SX02発掘中。弥生前期遺物（彩文土器など）多量出土。
8. 29～9. 1 西汐入川沿いのC-4区付近で決壊。
9. 2～3 現場復旧作業。SX02断面写真撮影。
9. 4～6 C～2・3区SX02発掘。弥生前期彩文土器、土製品出土。
9. 8～10 西汐入川沿いのC-2区にて決壊。復旧作業。

9. 11 C-1~4区調査終了全景写真。
 9. 12~19 C-5区礎群及び橋状遺構検出。下層から奈良時代須恵器、土師器多量出土。
 9. 20, 22 C-5区橋状遺構の杭取り上げ、平面図完了。
 9. 23~26 D-1区黄色土層上面の各遺構を検出中。
 9. 27 D-1区SX09より弥生前期朱塗編物出土。



挿図 13 SX09編物取り上げ作業

9. 29~30 D-1区遺構写真撮影。
 10. 1~2 D-1区黒褐色土発掘完了。SD17, SD18, SX09実測完了。SD19, SD20, SD21写真撮影完了。
 10. 3 D-1区黒褐色土を発掘。D-1区南断面実測。
 10. 4 D-1区調査完了し全体写真撮影。
 10. 6 D-2区調査開始。北及南断面清掃。
 10. 7~9 午前中降雨のため作業中止。午後D-2区サブトレンチ発掘。褐色砂層まで発掘。
 10. 10 SD25(現代溝)写真撮影。
 10. 13 灰色シルトの畦畔状遺構?を検出。
 10. 14 降雨のため作業中止。
 10. 15~17 灰色シルト層上面の畦畔状遺構?耕作跡状遺構を発掘。
 10. 19 高橋孝氏現場視察。遺跡周辺の微

- 地形分析の方法と調査の打合せを行った。
 10. 20 SD25石組み溝掘りかた全掘。
 10. 21 耕作跡状遺構を実測。
 10. 22 八賀晋氏現場視察。畦畔状遺構?を実見していただき、概観的根拠に乏しいことが判明した。
 10. 23 橋枠井戸(SE01)検出。SD17(弥生中期)完掘。
 10. 24~25 SE01写真撮影。
 10. 27 D-4区南断面精査。D-3, 5区表土掘削開始。
 10. 28~29 黒褐色シルト上面のSD17弥生中期, SD26写真撮影。黒褐色シルト掘り下げ。
 10. 30~31 最終遺構面(黄色土)を検出し、D-2区を完掘。全体写真撮影。
 11. 1 D-2区北側断面実測。
 11. 4~5 SE01たち割作業を行った。D-3区は、サブトレンチ発掘を完了させた。
 11. 6~7 D-3区褐色砂層を発掘。耕作跡状遺構を発掘。D-2区断面実測。



挿図 14 土壌サンプリング作業

11. 10～12 D-3区褐色砂層下面自然流路跡（古墳時代）検出。D-5区黒褐色土上面まで掘削。弥生中期土器出土。

11. 13～14 D-3区褐色砂層下面自然流路跡発掘。写真撮影。

11. 17～19 D-3区灰褐色シルト発掘。C-6区調査で弥生前期、古式土師器などの遺物多量に出土。

11. 20～21 D-3区最下層の褐色砂層を発掘。

11. 25～26 弥生中期土器を含む自然流路跡を発掘。

11. 27～28 D-1区北部ポンプ場予定地機械排土完了。

12. 1～2 サブトレンチにて土層確認。D-3区弥生中期流路跡写真撮影。

12. 3～5 D-1区 SX08（平安時代）自然流路を発掘し写真撮影。D-3区 SX10（弥生前期）発掘。甕などの木製品と彩文土器出土。

12. 8～12 D-3区 SX10下層から縄文後期土器出土し完掘。

12. 14 丁公民館にて遺跡調査スライド説明会開催。

12. 15 勝原小学校5, 6年生350人を対象に遺構遺物の説明。D-4, 7区 SX10発掘開始。

12. 16～17 SX10 第1暗灰色シルト層から木製木葉文付彩文鉢や甕など出土。

12. 18 奈良国立文化財研究所, 坪井清足, 田中琢阿氏来訪。D-3, 5区北壁実測完了。

12. 19 D-4・7区 SX10断面写真。D-1区発掘を再開。

12. 22～26 SX10 断面取りはらずし, D-3区北・東・西壁実測。

S56. 1. 6～7 D-3区南壁, D-1区平面, 断面実測完了し, D地区調査を終了した。

1. 21～23, 26 C-6区調査を完了。弥生前期, 古式土師器等出土。

1. 27～29 現場事務所内の物品, 遺物を王子分館に運搬し発掘調査を完了した。



挿図 15 発掘調査に参加した人達

第5節 整理作業

丁・柳ヶ瀬遺跡の第1～3次調査で出土した遺物は、コンテナ約400箱にのぼり、整理作業が長期にわたる事が予想されたため、昭年54年度の遺物を昭55年度から兵庫県姫路土木事務所への委託を受け、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が整理作業を実施した。

昭55年度の整理作業は、昭54年度第1・2次発掘調査分の整理作業を神戸市灘区王子町、兵庫県教育委員会王子分館で行った。整理対象遺物は、縄文・弥生式土器が多く特に縄文式土器では、軟弱な土器が多く存在しパイプダー17による処理工程が入ったため、思うように作業は進まなかった。整理作業は、上記遺物の洗浄、ネーミング、拓本を行ない、遺物カードと拓本カード作成まで行なって第1・2次調査出土遺物のカード化は完了した。

昭56年度の整理作業は、主に昭55年度第3次発掘調査分の整理作業について上半期を王子分館で行ない、下半期は分館の移転に伴ない明石市魚住町清水字立合池の下、兵庫県教育委員会魚住分館で整理を行った。整理作業は基本的には昭55年度と同工程のもので、遺物洗浄・ネーミングを行ない、接合復原、着色、拓本カードを作成し、トレースの一部と完形土器の写真撮影を行なった。しかし、この年度の整理作業については分館全ての移転であり、しかも充分な整理体制でなかったことから整理作業の進行はうまくいかなかった。



挿図 16 森 昭氏 遺物写真撮影作業

昭和57年度の整理作業は、昭和55年度の第3次発掘調査分の整理作業を魚住分館で行ない、須恵器、土師器、弥生式土器の接合・復原・着色・実測やトレース・レイアウトの一部を行った。また、木製品・石器・鉄製品の実測及び写真撮影を実施した。

昭和58年度の整理作業は、昭和54・55年度の発掘資料を対象とし、実測・トレース・レイアウトを行ない、鉄製品も同様の作業を行った。また、写真撮影は奈良時代の墨書土器、土師器暗文や、俯瞰撮影を森昭氏に依頼し、その他を深井が担当した。

昭和59年度の整理作業は、下半期から原稿執筆を中心に若干の遺物見直し分の整理作業を行ない印刷段階に至った。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

揖保川・林田川・大津茂川の3河川によって形成された広義の揖保川下流域平野は、現景観として条里型の土地割が広く展開することや、播磨国風土記(堂元元年715)をはじめ船御庄条里図(嘉暦4年1329)、大徳寺領播磨小宅庄内三職方条坊坪付図(文和3年1354)などの古文書、古絵図が残存することから、歴史地理学や歴史学の研究者にとって格好の調査地となってきた。また、近年、中国縦貫道や電野太子バイパスなどの建設に伴って、遺跡の発掘調査も急速に数を増している。

従来、このような研究に際し、現在の景観が過去においてもほとんどそのままであったかのようにしばしば取り扱われてきた。しばしば見受けられた。この傾向は自然景観の場合、特に著しく認められる。しかしながら、過去においては河川の流路をはじめ海岸線的位置、微地形、山地の植生などのさまざまな点で、現在のそれとは異なっていたのである。ここで注意が必要なのは、自然景観といえども、あくまでも人間を取り巻く環境として捕えられなければならない点である。すなわち、第四紀全体といったスケールで見れば、ほとんど問題とされないようなわずかな環境変化であっても人間の生活との関わりを考える時には無視しえないのである。たとえば、50 cm の比高をもつ段丘崖が形成された場合、段丘化した地形面上において地形の形成が停止するのはもちろんのこと、洪水の危険性や地下水位の変化などが直接的に引き起こされる。また、そこが水田として利用されていたならば、湿田から乾田へといったような土地条件の変化やそれに伴う土地生産性の変化がおり、その結果、灌漑システムの変更が余儀なくされることもある。わずか 50 cm とはいえ、1/1000 ほどしか傾斜のない河川の下流域においては、灌漑用水の取水口を 500 m も上流側に移動させねばならない事態を招くことになるのである。遺跡の地理的環境を考慮するにあたっては、研究対象とする過去の時代について、それを復元し、その中で考察を進めていく必要がある。本節では、このような観点から、丁・柳ヶ瀬遺跡を中心に広義の揖保川下流域平野の環境と土地開発について、若干の検討を加えてみたい。

当地域を訪ずれた旅行者がおそらく最初に目を引かれるのは、平野の中に点在する孤立した山地であろう。それは、あたかも瀬戸内海に浮ぶ島であり、その周辺のかつて海であったところが、河川的作用により現在は陸化してしまっているように見える。しかしなが

ら、第5章において詳述するように、少なくとも最近数万年間に島となったことがあるのは、これらのうち下野特殊遺跡〈挿図18-16〉の立地する標高23mの小山と、御津町の基山およびそれに隣接する標高38mの3地点にすぎない。立岡山、壇特山、朝日山等はいずれも周辺を河成堆積物が厚く覆って堆積しており、海成堆積物が認められないことから高であったとは考えがたい。

周囲の山地は、ほとんどが波紋岩・緑色凝灰岩類および花こう岩類から構成されているが、そこは二次植生のアカマツ-モチツツジ群集の粗林となっている。本来ならば、当地域はセイヨウカシノ群集が成立するはずのところであるが、現在、この植生を見ることは、ほとんどできない¹⁾。このようなハゲ山現象は、一般に平安時代末にはじまり、近世初頭以降に人口密度の高い地域で明確になったという。また、その主要原因としては、製塩や農業の燃料、あるいは燈火燃料として植生の伐採があげられている²⁾。

林地の荒廃は単に山地の問題ではない。平野においては洪水が頻発するようになり、山地から流出した土砂は地形変化を引き起す原因となる。すなわち、これは付章第1節第2図に示した自然堤防Nが、16世紀以降に急速に形成されたことと関連している可能性が高いと考えられるのである。

さて、次に平野に目を移してみよう。揖保川下流域平野の地形は付章第1節第2図のように14微地形、5地形帯、3地形面からなる低地、山地および人工地形から構成されている。これらの地形学的な検討については後に章を改めることとし、ここでは遺跡の立地や土地開発について考察してみたい。

挿図18の遺跡分布図を参照すると、山地の尾根に分布する古墳群を除き、ほとんどの遺跡が完新世段丘面に立地することに気づく。完新世段丘面は古墳時代末～古代末に段丘化した地形面であり、0.5～2mの崖によって現在も形成途上にある氾濫原面と区別される。したがって、この地形面上では古墳時代末以降に土砂の堆積による地形変化は、ほとんどおこらなかった。このため、遺跡の埋没深度は浅く、現地表面に遺物が散布することが多いため、遺跡として認識されやすい。また、完新世段丘上では氾濫原面のように、かつての微起伏が完全に埋積されてしまったり、侵食され消滅したりしていないため、現地表面の詳細な微地形分析によって遺跡の広がりや立地場所を比較的容易に推定しうる。これによれば、完新世段丘上で現在までに知られている遺跡は、いずれも段丘化以前において、最も居住に適していた中州状、あるいは自然堤防状の微高地を占拠しているのである。

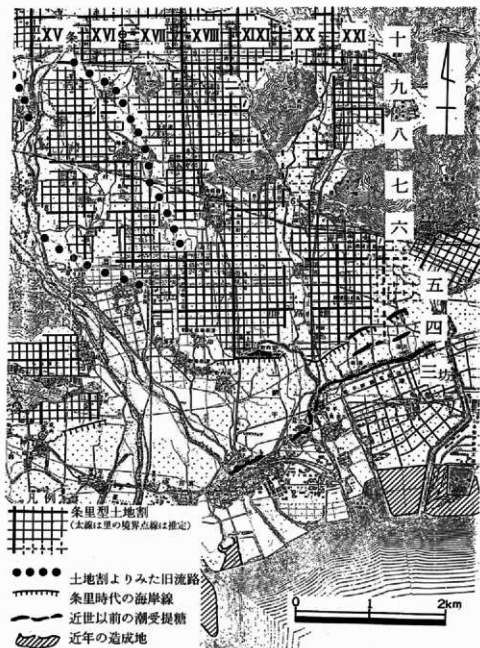
他方、山戸遺跡(弥生前期～古墳)、南山戸遺跡(弥生・古墳)、および沼高田遺跡(縄文後期～弥生)〈挿図18-18, 17, 22〉は氾濫原面三角州帯に位置している。前二者は縄文後進最盛期以後、もっとも早く自然堤防Dが形成され陸化した部分にあたる。これに対し、後者が立地するのは後背湿地である。ここには現地表面の分析からは明らかにできな

い微高地が後背湿地堆積物の下に埋没しているか、あるいは微高地の規模が小さいために認識できなかった可能性が考えられる。しかし、遺物が二次堆積しているということもありうるため注意が必要である。以上の遺跡および完新世段丘面の末端に位置する茶屋遺跡（弥生中～後期）〈挿図18-19〉は、縄文海進最盛期以降の環境変化を考察する上で極めて重要であり、今後の慎重な検討が望まれる。

ところで、播磨国風土記の開拓説話に注目した亀田隆之氏は、『大田村与富等』を現在の丁付近に比定し、京見山の山麓部が溜池の築造により5世紀頃に小規模な開発を受けたと推定した³⁾。他方、福井大池で実施されたボーリングによれば、現地表面下約6mまでが軟弱な粘土層から構成されており、この池が築堤以前のかかなり古い段階⁴⁾から、谷の出口を大津茂川の本流性堆積物により堰止められ沼沢化していたことが知られる。また、推古朝（592～628年）に国家権力の介入によって大規模な開発がなされた朝日山の南付近にあたる『勝部岡』は、現在、完新世段丘面と分類される。しかし、開拓当時、この地域の段丘化はまだ進行しておらず、比較的容易に河川からの引水が可能であったと考えられる。

次に低地を広く覆う条里型土地割に目を向けよう。当地域の条坊（里）については谷岡武雄氏が復原を試みている⁵⁾。それによれば条は揖保郡境より約9町西に食いこんだところに始まり東へ25条まで数えられるが、実際には地形的な制約から23条の半ばで終わっている。また、坊は御津町南端の海岸線から北へと進み、林田川で24坊、揖保川上流では30坊に達している。また坪付は南東端から始まる千島式である。このうち、真北より約4度西へ偏った阡線をもつ条里型土地割が現存するのは、主に完新世段丘面上に限られている。ただし、揖保川右岸の御津町の一部および大津茂川の下流では、三角州帯にもその土地割が検出された。挿図17は大津茂川下流の状況を示したものである。これと付章1節第2図を対照させると、条里型土地割は最も陸側に位置する砂堆1を南限としていることが判る。この境界線は、縄文海進に伴う低湿化により有機物に富む砂・シルトが堆積した範囲と海面層の分布する所の境に一致している。すなわち、後に条里型土地割の施行されるころは縄文海進最盛期には三角州のプラットフォームであった。

ところで、現存する条里型土地割の施行時期について、近年、奈良盆地や琵琶湖の沿岸など各地の発掘成果から、従来考えられていたほど古くまで遡らないとの指摘があり問題となっている。揖保川下流域平野の場合、条里型土地割は大部分完新世段丘面上に展開しているため、古墳時代後期以降の堆積物は少なく、発掘調査の際にしばしば旧耕土層が確認されるが、その時期を明確にすることはかなり困難である。このようななかで、林田川左岸に位置する福田片岡遺跡⁶⁾では、現地表面の条里型土地割と一致する畦畔で区画された水田跡が、12世紀末～13世紀初頭の遺構面より下層から発見された。しかしながら、この水田跡よりさらに下層には、これと異なる方向のN45～60°Wに延びる水路と水田跡が検



挿図17 大津茂川下流域の条坊復原図
 (武岡武雄 1964年部分)

出され、水路を埋める堆積物中からは8～12世紀頃の須恵器が出土している。このことから、福田片岡遺跡において、現存の条里型土地割は12世紀頃に施行されたものが初源をなすと判断できる。

さて、揖保川下流域平野においては、福田片岡遺跡で検出された水路と同方向に延びる水路をいくつも見出すことができる。なかでも龍野市堂本の南から広山へ向う水路、桜ヶ坪の北から井上の南へと流れる水路は、完新世段丘を人為的に掘削したものである。これらはいずれも文和3年(1354)の大徳寺領播磨国小宅庄内三職方条坊付図に記されていることから、それ以前に遡るものであることは疑いないが、福田片岡遺跡の場合のように現存の条里型土地割に先行するものであるかどうかは今のところ明らかでない。

他方、丁・柳ヶ瀬遺跡の北にある下太田庵寺(挿図18-10)は白鳳時代～奈良時代のものと考えられるが、これは坪境にまたがるものの、周辺の条里型土地割とはほぼ同じ方向性を持っているようである。ただし、ここにもすぐ北側に条里型土地割を斜めに横切る水路が認められ注意を引く。

播磨平野は奈良盆地と並んで条里型土地割の研究が進んだ所であり、なおかつ圃場整備などの改変もまだあまり進展していない。したがって、今一度従来と異なった観点から古代の土地開発にアプローチを試みるフィールドとしては、格好の場所であるといえよう。

注 1) 中西哲福(1977)『播磨西部地域植生調査報告書』播磨西部地域植生調査研究会 150頁

2) 千葉徳爾(1973)『はげ山の文化』学生社 233頁

3) 亀田隆之(1978)『日本古代用水史の研究』吉川弘文館 417頁

浅田芳朗(1981)『図説播磨風土記への招待』柏書房 149頁

秋本吉郎 校注(1980)『風土記』岩波書店 1～32頁, 258～354頁

4) 前田保夫氏は別のボーリングデータから池の地下に10mを越える軟弱層が堆積していることを報告し、このうち上部約2.5mが沖積層にあたと考えている。なお、前田氏が山陽新幹線工事の際に、表土下に発見した黒色腐植層は、周辺の発掘調査の結果からみて、ウルム氷期最盛期(約2万～1万年前)と考えるよりは、縄文時代晩期～古墳時代初原のものとしたほうが良さそうである。

前田保夫(1971)『川島遺跡の地質』川島・立岡遺跡所収 太子町教育委員会 15頁

5) 谷岡武雄(1964)『平野の開発』古今書院 344頁

谷岡武雄(1976)『聖徳太子の傍示石』学生社 233頁

6) 岡崎正雄氏の御教示による。

7) 淡路県の大岡寺遺跡、榎木立遺跡、穴太庵寺遺跡などの様に白鳳期の寺院の周辺には、現存する条里型土地割に先行して正方位の土地割が施行されたが、後に消滅したという。

近藤滋(1965)条里制研究会で報告

第2節 歴史的環境

丁・柳ヶ瀬遺跡は西播磨地方の大津茂川下流域の左岸に広がる自然堤防上やその周辺にあり、標高4～7mの低地に位置する。

播磨地方における河川を代表するものは、東から明石川・加古川・市川・揖保川・千種川が存在する。その間を数多くの中・小河川が瀬戸内海に流れており、大津茂川や西沙入川はそれらの一つである。これらの河川の影響により西播磨地方でも多くの集落址や墳墓などの遺跡が存在する。

先土器時代の遺物は地元研究者の熱心な踏査により、多数採集されており、西播磨では姫路市手柄山北丘中央部出土のナイフ型石器、姫路市青山出土の尖頭器、姫路市節西長池出土のナイフ型石器などほとんどが単独出土例である。瀬戸内海に浮かぶ家島群島の太島では家島群島学術調査団によりナイフ型石器などの石器類が発掘された¹⁾。また近年の発掘により、プライマリーな状態での出土例がある、姫路市御着波遺跡は昭和52年～54年にわたり調査され、中世に営まれた城址で、この地を形成する洪積層の黄色土から小型ナイフ、角錐状石器などの石器類が多数出土し、西播磨地方での先土器時代の遺跡では原位置を保った唯一の例であろう。また揖保郡太子町坊主山遺跡²⁾ではナイフ型石器と有舌尖頭器各1点が出土している。

このように西播磨地方における先土器時代の遺跡の発見は近年増加しつつあり、今まで地山と考えられていた黄色土層やその下層洪積層からの遺跡発見が相次ぐことはそう遠くないものと思われる。

縄文時代の遺跡分布は平野部や海岸部に集中した状態であるが、北部山間部においても近年のは場整備事業に伴う発掘作業で明かにされつつある。早期の遺跡では宍粟郡波賀町高田遺跡⁴⁾、神崎郡神崎町福本遺跡⁵⁾などがあげられる。前期では、山間部の宍粟郡波賀町皆木神田遺跡⁶⁾、三林遺跡⁷⁾が代表され、東播磨の平野部においては高砂市日笠山貝塚⁸⁾があげられる。中期の遺跡は宍粟郡一宮町福野遺跡⁹⁾、姫路市辻井遺跡¹⁰⁾、龍野市片吹遺跡¹¹⁾など山間部・平野部を通じて、その遺跡発見数は増加しつつある。後期になるとその数も平野部を中心に増大し、姫路市辻井遺跡¹²⁾、橋詰遺跡¹³⁾、今宿丁田遺跡¹⁴⁾、揖保郡太子町川島川床遺跡¹⁵⁾、東南遺跡¹⁵⁾、城山遺跡¹⁵⁾、龍野市片吹遺跡¹⁷⁾、赤穂市猪壺谷遺跡¹⁸⁾、堂山遺跡¹⁹⁾など遺跡数、遺物量も増大する。晩期になると遺跡はいちだんと平野部に集中し、姫路市今宿丁田遺跡²⁰⁾では晩期後半を主体とする凸帯文土器が多数出土し、その土器中に北陸地方の下野式と考えられる他地域の影響を受けた土器が出土している。また姫路市堂田遺跡²¹⁾では小規模な貝層中から、晩期滋賀里Ⅲも式土器と共に石棒が出土している。揖保郡新宮町宮内遺跡²²⁾では爪形文を有

圖101 丁·野中隱居地及遺跡分布考圖



番号	遺跡名	考
1	丁·野中隱居地	古蹟
2	丁·野中古蹟	古蹟
3	丁·野中古蹟	古蹟
4	川島遺跡	古蹟
5	川島遺跡	古蹟
6	川島遺跡	古蹟
7	丁·野中古蹟	古蹟
8	丁·野中古蹟	古蹟
9	丁·野中古蹟	古蹟
10	丁·野中古蹟	古蹟
11	丁·野中古蹟	古蹟
12	丁·野中古蹟	古蹟
13	丁·野中古蹟	古蹟
14	丁·野中古蹟	古蹟
15	丁·野中古蹟	古蹟
16	丁·野中古蹟	古蹟
17	丁·野中古蹟	古蹟
18	丁·野中古蹟	古蹟
19	丁·野中古蹟	古蹟
20	丁·野中古蹟	古蹟
21	丁·野中古蹟	古蹟
22	丁·野中古蹟	古蹟
23	丁·野中古蹟	古蹟
24	丁·野中古蹟	古蹟
25	丁·野中古蹟	古蹟
26	丁·野中古蹟	古蹟
27	丁·野中古蹟	古蹟
28	丁·野中古蹟	古蹟
29	丁·野中古蹟	古蹟
30	丁·野中古蹟	古蹟
31	丁·野中古蹟	古蹟
32	丁·野中古蹟	古蹟
33	丁·野中古蹟	古蹟
34	丁·野中古蹟	古蹟
35	丁·野中古蹟	古蹟
36	丁·野中古蹟	古蹟
37	丁·野中古蹟	古蹟
38	丁·野中古蹟	古蹟
39	丁·野中古蹟	古蹟
40	丁·野中古蹟	古蹟
41	丁·野中古蹟	古蹟
42	丁·野中古蹟	古蹟
43	丁·野中古蹟	古蹟
44	丁·野中古蹟	古蹟
45	丁·野中古蹟	古蹟
46	丁·野中古蹟	古蹟
47	丁·野中古蹟	古蹟
48	丁·野中古蹟	古蹟
49	丁·野中古蹟	古蹟
50	丁·野中古蹟	古蹟

する凸帯文土器が出土し、姫路市の船場川流域では、小山遺跡²³⁾、標遺跡など遺跡の集中する地域がみられ、弥生時代へと継続する集落の存在が目立ってくる。

弥生時代の代表的集落遺跡は姫路市市之郷遺跡²⁴⁾、千代田遺跡²⁵⁾、橋詰遺跡²⁶⁾、今宿丁田遺跡²⁷⁾、小山遺跡²⁸⁾、八反長遺跡²⁹⁾、龍野市門前遺跡³⁰⁾などがあげられ、縄文時代から弥生時代へと継続するタイプの集落遺跡が多くなる。また中期や後期の短期間に集落が形成されたと考えられる姫路市八代深田遺跡³¹⁾、前東代遺跡³²⁾、揖保郡太子町川島遺跡³³⁾、立岡遺跡³⁴⁾などがあり、銅鐸の鋳型が出土した名古山遺跡³⁵⁾も含まれる。一方、揖保川以西の山塊に立地する龍野市半田山遺跡³⁶⁾、養久乙城山遺跡³⁷⁾、龍子向イ山遺跡³⁸⁾、長尾タイ山遺跡³⁹⁾、南山遺跡⁴⁰⁾では山陽自動車道などの発掘により、平野に位置する独立丘陵や山塊に立地する重要な遺跡発掘が相次いでいる。

弥生時代末から古墳時代初頭の集落では、船場川流域で住居址や大溝から大量の遺物が出土した姫路市長越遺跡⁴¹⁾、権現遺跡⁴²⁾などがあり、揖保郡太子町川島遺跡⁴³⁾、立岡遺跡⁴⁴⁾など大津茂川流域の自然堤防上の遺跡がある。

また播磨地方では弥生時代末から古墳時代初頭にかけての墳墓が数多く、特に揖保川流域の養久山墳墓群⁴⁵⁾、半田山墳墓群⁴⁶⁾などが有名である。前期古墳では揖保郡新宮町吉島古墳⁴⁷⁾、揖保郡太子町松田山古墳⁴⁸⁾、姫路市丁瓢塚古墳⁴⁹⁾、兼田古墳⁵⁰⁾などがあげられ、中期古墳では龍野市龍子三ツ塚古墳群⁵¹⁾、姫路市壇場山古墳⁵²⁾、山之越古墳⁵³⁾、初期須恵器や金製垂飾耳飾が出土した宮山古墳⁵⁴⁾、方形プランの横穴式石室をもつ龍野市西宮山古墳⁵⁵⁾、海岸沿いの山塊に位置する御津町鞍部山古墳群⁵⁶⁾などが知られている。

古墳時代の集落遺跡としては、古墳の数から考えても少なく、揖保郡太子町上太田亀田遺跡⁵⁷⁾や船遺跡⁵⁸⁾では数次におよぶ調査で方形竪穴住居址が発掘されているが全体の集落構成が判明する遺跡の発掘例はない。

奈良時代の遺跡も発掘例が少なく、姫路市播磨国分寺⁵⁹⁾、上原田遺跡⁶⁰⁾、奈良から平安時代にかけての国府推定地である本町遺跡⁶¹⁾、辻井廃寺⁶²⁾、龍野市小犬丸遺跡⁶³⁾などが主要なところで、奈良・平安時代の播磨の様相については考古学からはまだ十分にせまっていない。

中世の遺跡になると肥沃な土地に荘園などが多く存在し、船荘に位置する福田天神遺跡⁶⁴⁾や大規模な堀をもつ館址が検出された福田片岡遺跡⁶⁵⁾をはじめ姫路市加茂遺跡⁶⁶⁾の発掘で中世集落の規模の一端が知りえる状態まできており、陶磁器や土師器、須恵器の編年も確立しつつある。

近世遺跡の調査は姫路城関係が中心で、兵庫県歴史博物館建設に伴う発掘調査⁶⁷⁾では17世紀後半から18世紀末にわたる生活面が3面検出され、今まで絵図等でしか判らなかつた武家屋敷などの町割りがよく姿を現わした。

丁・柳ヶ瀬遺跡周辺に目を移すと、大津茂川下流域は肥沃な土地と共に山塊が存在する

ことから、自然堤防上に位置する集落から高地性集落や古墳などが多様な分布を示す。

川島川床遺跡は川島遺跡西側の大津茂川河川改修時に遺物が採集された遺跡で、縄文時代中期～晩期、弥生時代全層を通じての遺物が多数存在する。東南遺跡では縄文時代後期津雲式期の埋甕や方形住居址が検出され、西播磨における縄文時代遺跡の主要遺跡である。また大津茂川下流域の沼高田遺跡では縄文時代後期及び弥生時代の土器が出土している。

弥生時代になると全般的に遺跡数も増大し、山戸遺跡では弥生時代前期後半の土器が出土している。中期の遺跡は上太田亀田遺跡や川島遺跡、立岡遺跡などの主要な遺跡はもとより、大津茂川流域の自然堤防上に、下太田、下太田（B）、太田寺畑、丁・柳ヶ瀬、丁B、勝山町、和久、茶屋、山戸、南山戸などの各遺跡が続いている。また壇特山山頂付近でも弥生時代中期の住居址と考えられる遺構や包含層が検出され、高地性集落であると考えられる。

古墳時代になると集落も弥生時代から続いて自然堤防上に営まれると考えられる。遺構も上太田亀田遺跡で住居址や自然流路が検出され、川島遺跡では住居址、土壇、溝が、立岡遺跡では住居址、土壇、溝、丁・柳ヶ瀬遺跡でも住居址、自然流路などが若干判明しているにすぎず、集落構成を追求するまでには至っていない。一方、古墳は丁・柳ヶ瀬遺跡内に全長約100mの前方後円墳の丁・區塚古墳が存在し、前方部の平面形がバチ形を呈することや、周濠がなく、特殊器台と考えられる破片が採集されていることから古墳時代前期のものと考えられている。山戸古墳群4号墳は竪穴式石室を内部主体にもつ前方後円墳である。この他丁古墳群、勝山町古墳群、壇特山古墳群、朝日山古墳群などの横穴式石室を内部主体にもつ古墳群が周辺の山塊に分布している。

奈良時代の遺跡としては下太田廟寺があげられる。この寺院址は現在も塔礎石が残存し、古くから数多くの瓦などの遺物が採集されている。

以上周辺の遺跡においては特に大津茂川自然堤防上に位置するものが大半でしかもその中でも縄文時代から続く丁・柳ヶ瀬遺跡は大津茂川遺跡群の拠点的な集落の一つと考えられる。

註 1) 鎌木義昌「無土器文化」『家島群島』1962年

2) 秋枝 芳「姫路市における先土器時代について—とくに御着城跡出土遺物を中心として—」『旧石器考古学』21 1980年

3) 昭和55年兵庫県教育委員会が行った太子・鹿野バイパス建設に伴う発掘調査で出土したものである。

4) 昭和53年兵庫県広域行政事務組合がほ場整備事業に伴い発掘調査を行った。

5) 増田重信「播磨福本遺跡の押型文土器」『兵庫史学』13 1957年

増田重信「播磨福本遺跡と出土遺物について」『古代学研究』18 1958年

増田重信「播磨岡部本押型文土器」『瀬戸内考古学』2 1958年

増田重信・岡崎正雄・吉識隆仁・深井明比古「福本遺跡発掘調査の記録」神崎町教育委員会

- 1980年
- 6) 垣内 章『皆木神田遺跡』波賀町教育委員会 1984年
 - 7) 垣内 章『茨城県道の遺跡と遺物』『ふるさと安富』安富町 1984年
 - 8) 赤松啓介・喜谷美宜・河野通哉『日笠山貝塚 第1次発掘調査報告』高砂市文化財調査報告 1 1964年
喜谷美宜・河野通哉他『日笠山貝塚 第2・3次発掘調査報告書』高砂市文化財調査報告 3 1968年
 - 9) 昭和55年茨城県広域行政事務組合が発掘調査を行ない、中期末～後期の住居址が発掘された。
 - 10) 浅田芳朗『播磨辻井遺跡の調査に就いて』『考古学』11-3 1940年
浅田芳朗『辻井石器時代遺跡調査日誌』『兵庫史談』3月号 1940年
浅田芳朗『辻井人骨発掘秘話』『播磨郷土文化』2 1948年
今里幾次『姫路市辻井遺跡—その調査記録—』古代播磨研究会 1971年
松本正信・加藤史郎『辻井遺跡発掘調査報告書』姫路市教育委員会 1971年
 - 11) 市村高規・泉 拓良・玉田芳英・森本 晋『片吹遺跡』鹿野市教育委員会 1985年
 - 12) 浅田芳朗・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』1960年
 - 13) 昭和55・57年姫路市教育委員会が発掘調査を行ない、縄文時代後・晩期、弥生時代前・中期を主体に遺物が出土した。
 - 14) 中溝康則氏の御厚意により遺物を実見させていただいた。
 - 15) 昭和53・55年太子町教育委員会が調査を実施し、住居址、配石遺構、埋塞などを発掘した。
 - 16) 町道建設に伴う発掘調査で元住吉山Ⅱ式土器が出土した。三村修次氏の御厚意で実見させていただいた。
 - 17) 註11)と同じ。
 - 18) 松岡秀夫『縄文時代の赤穂』『赤穂市史』1981年
 - 19) 昭和54年兵庫県教育委員会が山陽自動車道建設に伴い発掘調査した。
 - 20) 註13)と同じ。
 - 21) 昭和55年兵庫県教育委員会が水尾川河川改修工事に伴い発掘調査した。
 - 22) 松本正信・加藤史郎『新宮・宮内遺跡』新宮町教育委員会 1983年
 - 23) 今里幾次『播磨小山遺跡埋没地点の弥生土器』『古代学研究』32 1962年
東洋大学付属姫路高等学校考古学教室『姫路小山遺跡発掘調査報告』1964年
 - 24) 今里幾次『播磨市之郷弥生式遺跡の研究』『古代文化』14-9 1943年
 - 25) 浅田芳朗『千代田貝塚』『播磨郷誌』2 1927年
小西孝四郎『姫路貝塚の発見』『人類学雑誌』31-8 1930年
直良信夫『姫路千代田町貝塚』『播磨文化資料』1961年
杉原莊介・小林三郎『兵庫県千代田遺跡』『日本農耕文化の生成』(本文篇) 1961年
 - 26) 註12)と同じ。
 - 27) 註13)と同じ。
 - 28) 註25)と同じ。
 - 29) 昭和57年兵庫県教育委員会が水尾川河川改修に伴う発掘調査を行ない、溝等の遺構を救出した。
 - 30) 上田哲也・河原隆彦・中溝康則『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告書 5 1971年
 - 31) 秋枝 芳・山本博利『八代深田遺跡—姫路市八代字深田—』姫路市文化財調査報告 6 1977年
 - 32) 西口和彦・水口富夫『前東代遺跡』兵庫県文化財調査報告書第29冊 兵庫県教育委員会 1985年

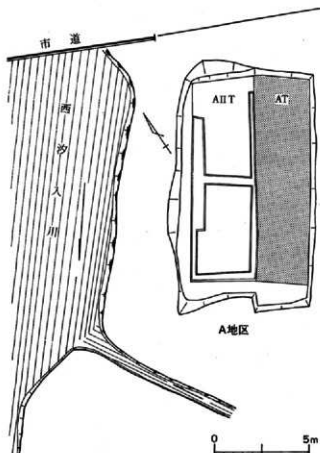
- 33) 石野博信・榎本誠一他『川島・立間道跡』太子町教育委員会 1971年
- 34) 註33)と同じ。
- 35) 浅田芳朗・上田哲也・増田重信・矢内 澄・是川 長・松本正信・松岡秀樹『姫路市名古山
弥生住居址発掘調査経過報告』(中間報告)姫路市教育委員会 1960年
- 36) 昭和59年兵庫県教育委員会が山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施し、土器等が出土した。
- 37) 昭和57年兵庫県教育委員会が山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施した。
- 38) 渡辺 昇・村上賢治『龍子向山』兵庫県教育委員会 1964年
- 39) 上田哲也・是川 長・中溝康則『長尾・タイ山古墳群』熊野市教育委員会 1962年
- 40) 昭和55年兵庫県教育委員会が山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施し、住居址等の遺構を
検出した。
- 41) 松下 勝他『播磨・長尾道跡一昭和49・50年度調査報告書一』兵庫県文化財調査報告書12
兵庫県教育委員会 1978年
- 42) 松下 勝・山本三郎『播磨権現道跡一兵庫県姫路市権現道跡調査概報一』兵庫県文化財調査
報告書6 兵庫県教育委員会 1972年
- 43) 註33)と同じ。
- 44) 註34)と同じ。
- 45) 近藤義郎他『養久山墳墓群』揖保郡揖保川町教育委員会 1965年
- 46) 註36)と同じ。
- 47) 近藤義郎他『古島古墳』新宮町文化財調査報告4 揖保郡新宮町教育委員会 1983年
- 48) 昭和35年に壁穴式石室内から、鏡・銅鏃・筒形銅器・鉄剣・玉類が出土した。
- 49) 従来、平地に築かれた中期古墳と考えられていたが、最近、前方部がバネ形に開くことや特
殊器台型埴輪が出土していることから前期古墳であるという考えが有力視されている。
- 50) 松本正信・加藤史朗『西播磨地方の考古学の動向』考古学研究114号 1982年
- 51) 梅原末治『龍子の三ツ塚古墳』『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』9 1932年
- 52) 梅原末治『播磨壇場山古墳の調査』『人類学雑誌』39-2 1912年
- 53) 註52)と同じ。
- 54) 松本正信・加藤史郎他『宮山古墳発掘調査概報』姫路市文化財調査報告I 1970年
松本正信・加藤史郎『宮山古墳第2次発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅱ 1972年
- 55) 武藤 誠『西宮山古墳発掘調査略報』『論叢』終刊号 1956年 関西学院短期大学
- 56) 是川 長『綾部山古墳群調査報告書』御津町教育委員会 1971年
- 57) 昭和56年太子町教育委員会が太子・龍野バイパス建設に伴い発掘調査を実施した。
- 58) 上田哲也『船道跡』『播磨土師器の研究』東洋大学付属姫路高等学校考古学研究会 1973年
- 59) 多瀬誠樹『史跡播磨国分寺跡発掘調査報告』姫路市教育委員会 1970年
- 60) 輔老拓治・西口和彦他『上原田道跡調査概報』『播磨連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文
化財調査報告書』1980 兵庫県教育委員会
- 61) 秋枝 芳・山本博利『本町道跡』『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』兵庫県教育委員
会
- 62) 鎌谷木三次『播磨上代寺院址の研究』1924年
昭和57年から姫路市教育委員会が発掘調査を実施している。
- 63) 昭和57～59年兵庫県教育委員会が県道拡幅工事に伴い発掘調査を実施した。
- 64) 市村高規・鈴木重治他『福田天神道跡』熊野市教育委員会 1982年
- 65) 昭和56～60年兵庫県教育委員会が太子・龍野バイパス建設に伴い発掘調査を実施した。
- 66) 秋枝 芳・山本博利『加茂道跡』姫路市文化財調査報告5 1975年
- 67) 長谷川 真・岡田章一・朽木史郎『特別史跡姫路城跡』兵庫県立歴史博物館 1964年
- 68) 松下 勝『壇神山道跡確認調査報告』『川島・立間道跡』太子町教育委員会 1971年
- 69) 上田哲也『姫路丁古墳群』東洋大学付属姫路高等学校考古学研究会 1966年

第3章 層位と遺構

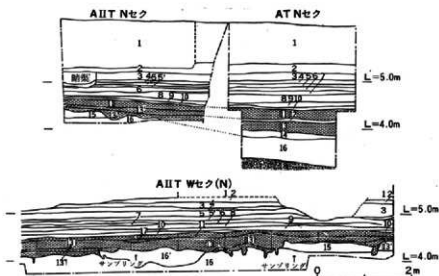
第1節 A地区〔図版7・8〕

A地区は西沙入川北部の東岸にあり、前方後円墳丁瓢塚古墳の北西約35mに位置する。第1次調査62Gでは、黒色シルト層より弥生時代前期土器が若干出土しており、南の縄文式土器・石鏃を確認したB地区に続くものとして、62G南の西流する水路を南限とし、北は市道橋を限りとする調査範囲を決めた。調査区が宅地として、旧耕作土上面に約1mの盛土整地しているため、機械（ユンボ）を使用して排土後、調査を行うこととした。また、排土捨て場確保のため、幅約3m、長さ10mのトレンチ(AT)にて、とりあえず調査を行い、後に西へ幅約3m、長さ約10mのトレンチ(AⅡT)を増設し、調査を二回に分け実施した(挿図19)。

調査は、西沙入川現河床より東へ約5~10m隔る後背湿地である為、排水のサブトレンチを設けながら、AⅡTでは南北に分区し調査を行い、最後にAⅡTの西端(Wセク)において古地磁気、花粉、珪藻各分析土壌サンプリングを二箇所で行った。縄文式土器を含まない下層16・18層の部分掘り下げも行った。



挿図19 A地区 トレンチ位置図

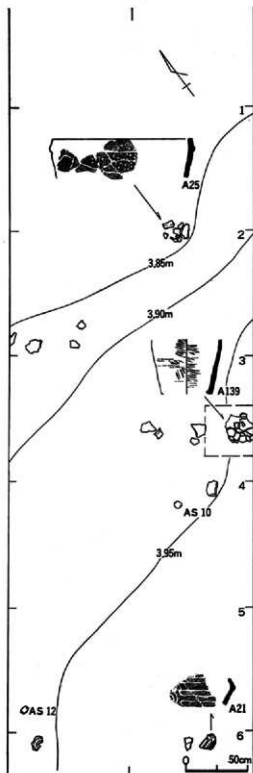


- | | | | |
|-----------------|--------------|--------------|----------|
| 1. 盛土 | 6. 灰褐色砂質粘性土 | 11. 黒色粘土 | 16. 水色粘土 |
| 2. 耕土 | 7. 暗灰褐色粘質土 | 12. 淡灰色粘土 | 17. 茶褐色砂 |
| 3. 黄褐色砂質粘質土(床土) | 8. 淡褐色砂質土 | 13. 暗灰褐色粘土 | 18. 砂礫 |
| 4. 灰黄褐色砂質粘性土 | 9. 淡茶褐色砂質土 | 14. 淡灰緑色粘土 | |
| 5. 茶灰褐色砂質粘性土 | 10. 茶褐色砂質粘性土 | 15. 黄褐色砂質粘性土 | |

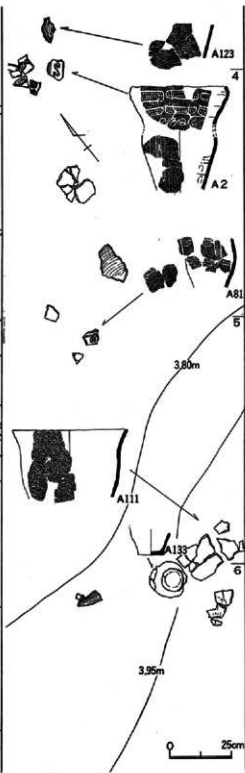
挿図 20 A 地区 土層 図

土層及び遺物出土状況を見ると、挿図20で観察できるように、9層淡茶褐色砂質土・10層茶褐色砂質粘性土では弥生時代中期の土器を包含し、上層では古墳時代後期から中世にかけての遺物が包含しており、また、水田として利用していた土壌が観察される。11層黒色粘土(シルト)及び17層茶褐色砂に弥生時代前期貼付突帯土壺、13層暗灰褐色粘土に縄文時代晩期凸帯土器、13層下面・13層・14層淡灰色砂質粘性土に縄文時代中期末葉土器他がそれぞれ包含されている。縄文時代中期以前の西沙入川旧河道砂礫が標高約3m ATNセク(18層)で観察されるが、縄文時代中期末葉には、縄文人が川東の水辺に生活を営み、後に後背湿地化する縄文時代晩期、弥生時代前期の時に、B地区溝SD01が明らかに集落の末端を示すように、A地区の南東に人々の生活の場が営まれていたと想像できる。

A地区では遺構は発見されなかったが、ATで西沙入川の水辺近くの微高地に一括性のある遺物群を観察することができた。それは挿図21・22の13層下面及び14層上面で、調査区南東の微高地より標高約3.8~4.0mの北へ下がる長さ約4mの間に遺物がまとまりをもって出土した。13層下面では、縄文式土器A21・A25・A139と石鏝AS10・AS12等、14層上面では、縄文式土器A2・A81・A111・A123等がある。これらは、一括性のある遺物として出土状況を考えるに、A地区東隣接地には住居址等の遺構が存在すると想定で



挿図 21 AT 13 層遺物出土状況



挿図 22 AT 14 層遺物出土状況

きる。

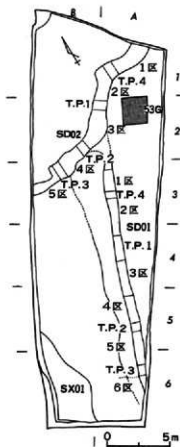
なお、A Tでは縄文式土器1,369片と石鏃1点、削器1点、石錘10点、磨石1点が出土し、A II Tでは縄文式土器が106片出土している。

第2節 B地区〔図版9・10〕

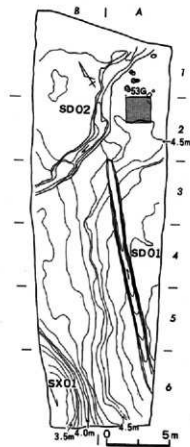
B地区の調査は、第一次調査53G等で縄文式土器浅鉢A127と石鏝を検出したことより、A地区と併行して第二次調査として発掘をすることとなり、幅約10m、長約33m、面積330m²を対象に全面調査を行った。あらかじめ、耕作土を機械（ニンボ）で除去し、調査区を5m方眼に区切り、東西列をA・Bとし、南北列を1～6と分区した。

調査に発見された遺構は、溝二本（SD01・SD02）と自然流路（SX01）がある。溝は、遺構面検出後、予備トレンチ（T.P.）を設け、後に小区（1～6区）毎に調査を行った（挿図23）。

遺構面は、A地区で観察されたとおり、南東方向に敷高地（標高約4.5m以上）と西に西沙入川旧河道（標高約4.0m以下）蛇行部に位置する（挿図24）。溝SD01は北北



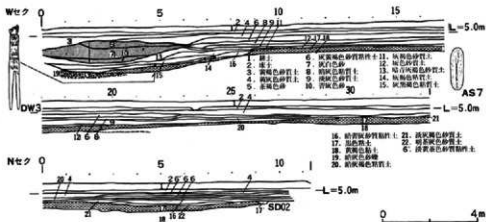
挿図23 B地区調査区割付図



挿図24 B地区コンタマップ図

東に向かって流れ、SD02は南西に向かって西沙入川へと流れ込む。西沙入川旧河道は調査区南西隅で北方向から西へ蛇行する部分 SX01 を発掘した。

微高地は黄褐色自然堤防砂、遺構面は18層黄褐色粘土となり、17層黒色粘土に弥生時代前期・縄文時代晩期の遺物を包含している（挿図25）。それは、A地区11層と同一である。



挿図25 B地区土層図

弥生時代前期の生活面は、自然堤防砂の上にあり、溝 SD01 が遺構である。溝 SD02 は、A地区の南東端の縄文時代中期に既に形成されていた微高地より流れ出る自然流路とも思える溝で、幅も一定せず蛇行し、底は浅いものである。包含する遺物は、弥生時代前期と縄文時代晩期のもので、地山をえぐる為、一部縄文時代中期の遺物が出土している。また西沙入川蛇行部 SX01 では大量の遺物が、15層灰黒褐色粘質土・16層暗青灰色砂質粘性土・17層黒色粘土に出土し、16層上面に平安時代初頭の人形 DW3 が発見される。また17層から切目石鏝 AS7 や弥生前期の壺などが多く発見されている（挿図26）。調査区西隅の河道部分際までは調査を展開していない。南も SX01 が蛇行しながら南下するものと考えており、調査終了後の立会いで、工事の掘削時に河道堆積物の中に、縄文土器 A3 や石斧 BS23 を発見した。

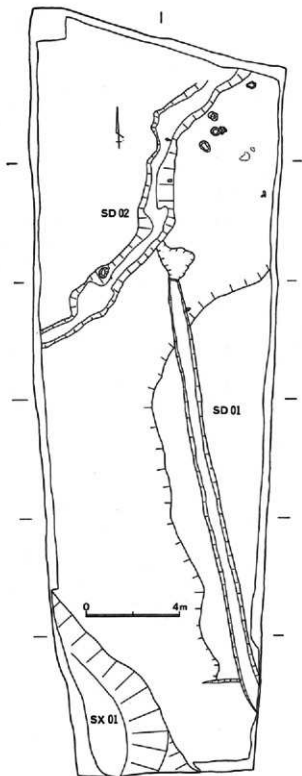
ところで、SD01 は、幅約 70 cm、深さ 30~40 cm の U 字形の断面で、長さ約 18 m に及んで調査が出来たもので、溝が埋まる 2 層淡灰色砂質土面に弥生時代前期の甕 B6 が一個体出土し、遺構の掘削はそれ以前の時期が考えられる。南の集落からの排水施設として北の SD01 と、西沙入川河道へと取り付くように造られている（挿図27, 28）。

SD02 は、幅 90~150 cm と蛇行し、深さ約 10 cm と浅い溝で、長さ約 14 m を調査した。縄文時代晩期の凸帯文深鉢 A183 や弥生時代前期の鉢 B67~77 と石鏝 2 点・石斧 1 点・石鏝 1 点等が出土している。SD02 は自然流路と考えるもので、縄文時代中期末葉の土器

の包含層を一部挟んでいる
(挿図29)。

自然堤防末端A 2区で砂
が凹地に堆積している箇所
で縄文時代中期末葉の一括
遺物、縄文式土器A1・A
4、石斧AS6を抽出した。
しかし、凹地部の砂を精査
したが、北のA1区で小さ
な凹地土器の細片を発見し
たのみで、縄文時代の明確
な遺構は発見できなかつ
た。

遺物の中で石器は、縄文
時代の石鏃3点・石錐1点
・石斧1点・石剣6点・石
棒1点と、弥生時代の石鏃
6点・楔形石器1点・石斧
2点・敲石1点・磨石1点
と各々の石器組成としてま
とまりをもっており、集落
内の様子を示している。



挿図26 B地区遺構図

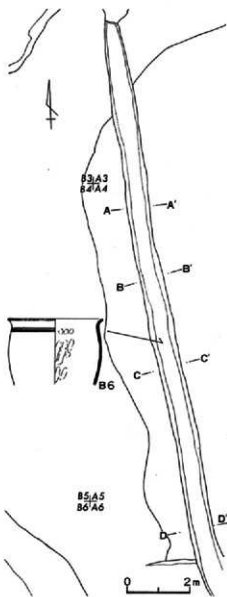
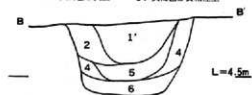


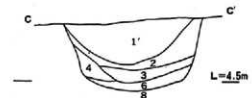
插图27 B地区SD01与弥生式土器



- (土層) 1. 暗灰色黏土 2. 淡灰色砂質土 3. 灰褐色砂質土 4. 淡灰色粘質土 5. 淡黃灰褐色砂質粘性土 6. 黃褐色砂質粘性土 7. 黃褐色粘土 8. 淡灰黃色砂質土



- (土層) 1'. 灰色土 2. 黃褐色粘土 3. 淡灰黃色砂質土 4. 淡灰色粘質土 5. 淡黃灰褐色砂質粘性土 6. 黃褐色砂質粘性土 7. 黃褐色粘土 8. 淡灰黃色砂質土



- (土層) 9. 暗灰黃色土 10. 灰褐色砂質土 11. 暗灰褐色砂礫



插图28 B地区SD01土層図

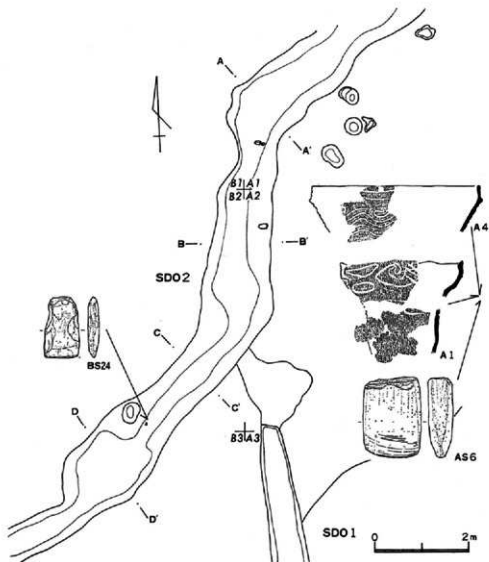


插图29 B地区SDO2 遗物

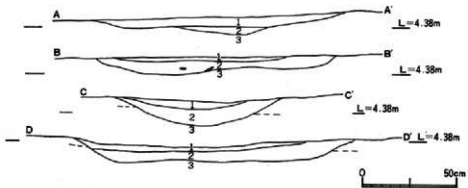


插图30 B地区SDO2 土层图

第3節 C 地 区

C地区は当事業のほぼ中間地点にあたり、西汐入川が蛇行し、南流する地点で地表標高は約5mである。地形からみると調査区両側が自然堤防にあたり、一部その部分をかすめるような形であるが、多くの範囲が旧河道或は現河道にあたるものである。調査前までは水田であり、しかも大雨であれば必ず冠水状態になることはまぬがれなかった土地であった。

調査範囲は確認調査の結果を踏まえ、西汐入川左岸である123m×13mの弧状を呈する範囲と、西汐入川右岸の調査区に大きく分れる。左岸調査区は任意に1～4区とし、右岸部は5区、また西汐入川現河川下を6区として調査を行った。

C地区の自然堤防にかかる所では、礫層上に黄色の自然堤防砂が厚く堆積しているものと考えられ、多くの時代の遺構はこの土層を掘り込んでいた。

弥生時代前期の遺構はC-1・2区自然堤防上に幅40～60cmで両端が途切れるSD07・SD08が検出された。SD07では埋土に茶灰色細砂が入り、少量ではあるが弥生時代前期土器が出土した。SD08は確認調査時に検出されていたもので、淡灰茶褐色土が入り、逆L字口縁を呈する甕が出土し(挿図55)、播磨弥生時代前期編年¹⁾d段階或はe段階初頭にあたるものと考えられる。またC-1区では径64cmのビツ中に口縁が大きく反し、肩部に文様部をもつ壺が出土した(挿図39)。

SX02(自然流路)は最大幅15m以上で、C-2区の一部をかすめ、C-3区の多くやC-4区端を含め、西方向に蛇行する形で検出された。基本的な土層は最下層に木質を多量に含む無遺物層である黒色泥土層があり、上層に多量に遺物を含む青灰色砂泥層が堆積し、シルトや砂の堆積層が続いている。出土遺物は前期弥生式土器、石器、木器、編物、土製品の他、晩期縄文式土器、石器も出土した。このSX02は出土遺物の中でも土器が多く、コンテナに約30箱出土した。これらの多くは削出突帯、ヘラガキ沈線、貼付突帯で文様構成されており、多くは弥生時代前期c段階に属するものであり、水分の多い土層で保存状態も良好であり、器面の調整、黒色塗抹物、彩文が明確に識別できるものであった。またSX04の下層で一括出土した土器はSX02の一部がSX04に削られず残ったものと理解している。

弥生時代中期の遺構はC-4区にてSD12、SD15が検出された。いずれも自然流路にて切られたり、調査区外に延びているため規模は不明である。SD12は幅1.5～2.0mで深さ70cm、堆積は4層からなり、最下層から甕底部が出土したのみである。SD15も幅1.9m、深さ50cmで土器片が少量出土し、いずれも弥生時代中期としか判断できな

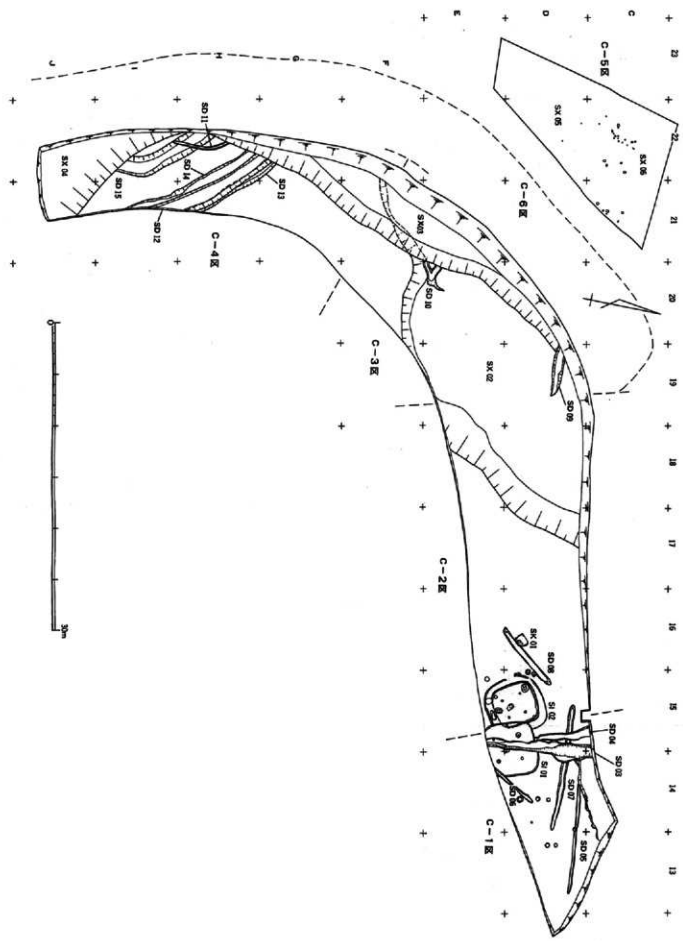
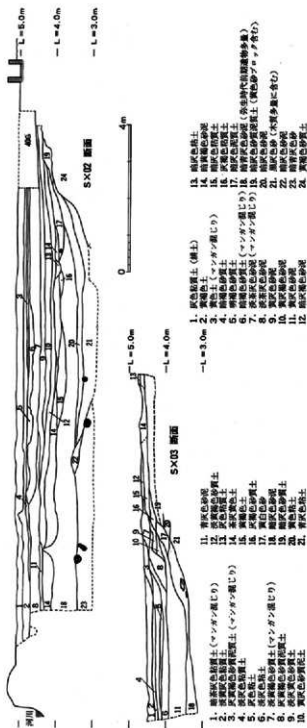


图231 C地区各部分分布图



挿図32 SX02・SX03土層断面図

った。

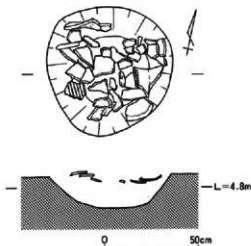
古墳時代前期初頭の遺構はC-1・2区で隅丸方形竪穴住居址 SI01・SI02を検出した。C-2区にてSK01(土壇)、C-3・4区にまたがりSX03(自然流路)、C-4区でSX04(自然流路)、SD11(溝)を検出した。

SI01はSI02を切り、一辺5.3m、深さ25cmの隅丸方形竪穴住居址で、炭が多く混入した中央土壇と径20cmの柱穴4ヶ所を検出した(挿図35)。出土遺物は土器のみで、庄内式併行期(新相)と考えられるものが出土した。

SI02は拡張されたもので、一辺5.7m、深さ15cmの隅丸方形竪穴住居址で周壁溝をも、主柱穴4ヶ所と住居址内南東方向に炭の混入する土壇を検出し、器台・鉢が完形で出土した。また拡張前の住居址は一辺4.2m、深さ5cmのもので50cm×30cmの中央土壇や2.1m間隔の主柱穴を検出した。SI02の出土遺物は古・新相を明確に分けることは困難であるがおおむね庄内式併行期(古相)を示すものと考えられる。

SX03はSX02を切り、南流しており幅6m以上のもので、北部肩部において庄内式併行期の土器群が検出された。土器は流路の傾斜に沿った状態であり、水平状態ではなかった。器種も壺・甕・鉢・高杯などの土器類と共に鉄鍔が1点出土したもので、土器群の性格等は不明である。

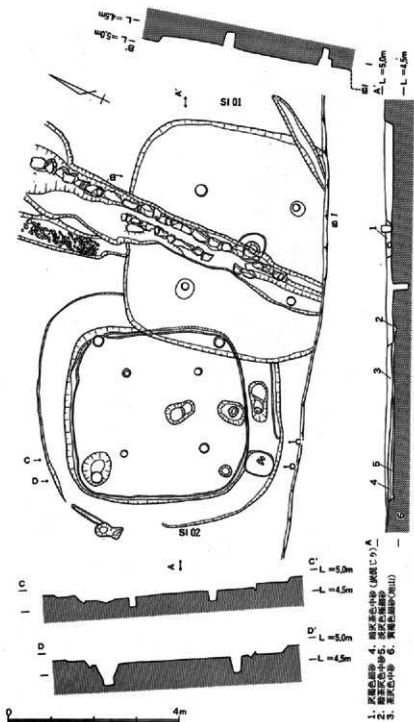
SX04はC-4区の微高地をめぐる状態で、幅7m以上のものを検出した。出土遺物はSX03と同様で、庄内式併行期の土器が出土した。調査範囲の制限上で不明な点があるが、SX03と同一流路である可能性がある。



挿図33 C-1区 ビット1土器出土状態



挿図34 SD12土層断面図



挿図35 SI01・SI02平・断面図

1. 灰層地盤
 2. 灰土中心中砂 (灰土じゅう)
 3. 灰土中心中砂
 4. 灰土中心中砂 (灰土じゅう)
 5. 灰土中心中砂
 6. 灰土中心中砂
 7. 灰土中心中砂

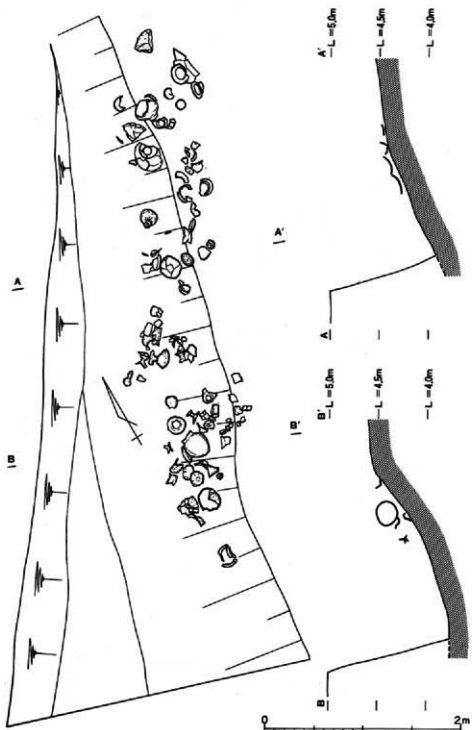
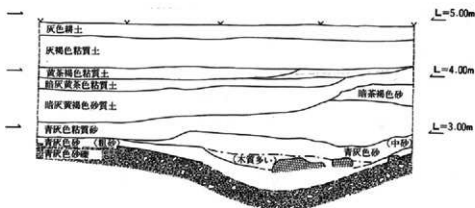


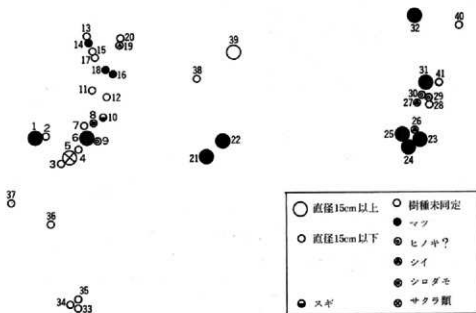
插图96 SX08土器群平·断面图



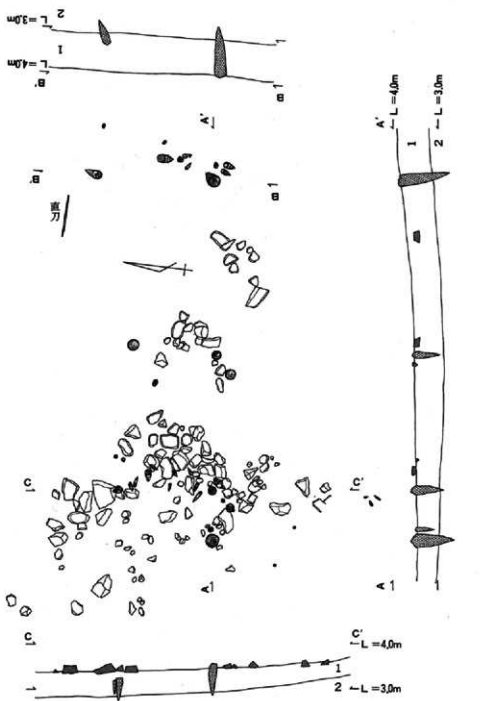
挿図37 C-5区 土層断面図

C-5区ではSX05が検出された。青灰色砂礫から奈良時代前半の須恵器、土師器等が多量に出土したもので、特に墨書土器が12点余り出土した他、2段暗文や螺旋暗文の入った精製された土師器が出土した。

SX06はSX05の堆積層に橋脚杭を打ち込んだ橋状遺構である。橋脚と考えられる径15cm以上の杭が南北2.0m東西約4.0m間隔で3列が検出された。また主に護岸付近に打ち込まれたと考えられる小型の杭が21本検出された。杭は長さ117cm径27cmのものが最大級で、水に強い松材を多用し、一部ヒノキ、サクラ、シイ、シロダモなどの木材も使用している。この橋状遺構は南北に貫流する流路を横断する形で、東西方向に橋が



挿図38 SX06 (橋状遺構) 橋脚杭樹種分類図



1. 青灰色粘質砂(奈良時代遺物包含自然流路)
2. 青灰色細砂(無遺物層)



挿図39 SX06(橋状遺構)平・断面図

第2表 C地区遺構一覧表

遺構名	略号	地区	規模 (m)	時期	備考
溝	SD 03	C-1・2	長10.0+ α 巾0.8~1.8	近世?	南北方向、溝底に礫
"	SD 04	C-2	長4.8+ α 巾0.6	近世?	南北方向、溝底に礫
"	SD 05	C-1	長11.0+ α 巾0.3		
"	SD 06	C-1	長5.2+ α 巾0.4		
"	SD 07	C-1・2	長12.5 巾0.6	弥生前期	
"	SD 08	C-2	長7.2 巾0.6	弥生前期	
"	SD 09	C-3	長0.5+ α 巾1.0	中世?	
"	SD 10	C-3	長2.0+ α 巾0.5		平面Y字を呈する
"	SD 11	C-4	長5.5+ α 巾0.3	古墳後期	
"	SD 12	C-4	長9.0+ α 巾1.5~2.0	弥生中期	
"	SD 13	C-4	長8.5+ α 巾1.0+ α	弥生前期?	
"	SD 14	C-4	長13.0 巾1.1+ α	弥生前期?	
"	SD 15	C-4	長10.5+ α 巾1.9	弥生中期	
竪穴住居址	SI 01	C-1・2	5.3×4.7+ α 隅丸方形	古墳前期	
"	SI 02	C-1・2	5.5×5.7 隅丸方形	古墳前期	建替えあり
土 堀	SK 01	C-2	1.2×1.0 方形	古墳前期	
ピ ッ ト	SP 01	C-1	径0.62 深0.18	弥生前期	
自然流路	SX 02	C-2~4	長40+ α 巾13+ α	弥生前期	遺物多量
"	SX 03	C-3~4	長42+ α 巾5+ α	古墳前期	遺物多量
"	SX 04	C-4	長16+ α 巾7+ α	古墳前期	
"	SX 05	C-5		奈良	遺物多量
橋状遺構	SX 06	C-5	長8+ α 巾1.8~2.6	中世?	橋脚枕等約40本出土

かかっていたものと考えられる。また橋脚枕が太いことから数本単位のものではなく1本で支えていたものと考えられ、南側の橋脚は2本程度残っており、洪水時等で杭の打ち換えが行なわれたものと考えられる。また上面の石材は橋の周辺に多くみられることから護岸部に置かれたものであろう。橋状遺構の南西に中型の杭が5~6単位で並列して打たれているが、これは一時期の護岸である可能性があり、それより南西に大型杭が存在するということは河川移動による際の打ちかえであらう。以上のように中世或はそれ以降の橋状遺構については事例は少なく、河川移動による打ち換えや橋の破損による補修が数回なされたものと考えられる。²⁾ またこの橋状遺構の時期を決める遺物は少なく、杭検出面で漆碗が出土したのみであり、中世~近世までのものと考えられる。

兵庫県下における橋状遺構は姫路市長越遺跡で弥生時代末から古墳時代初頭のものがあると、神戸市吉田南遺跡で奈良時代のものが発掘されている。³⁾

C-6区の調査は西汐入川掘削工事の際に立会及び遺物採集したものであり、縄文時代晩期・弥生時代前期・中期・古墳時代前期の土器が出土したもので、いずれもSX02, SX03, SX04(自然流路)からの遺物と考えて差しつかえないものである。

註

- 1) 播磨弥生時代前期の編年については、第4章第2節1でa～dの5段階を設定し、説明している。
- 2) この橋状遺構については、奈良国立文化財研究所、宮本長二郎氏の御教示による。
- 3) 昭和48年度に瀬戸内考古学研究所、鎌木義昌氏により発掘されたものである。松下 勝他『播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会 1978年。
- 4) 神戸市吉田片山遺跡発掘調査団『吉田南遺跡現地説明会資料』Ⅵ 1980年。

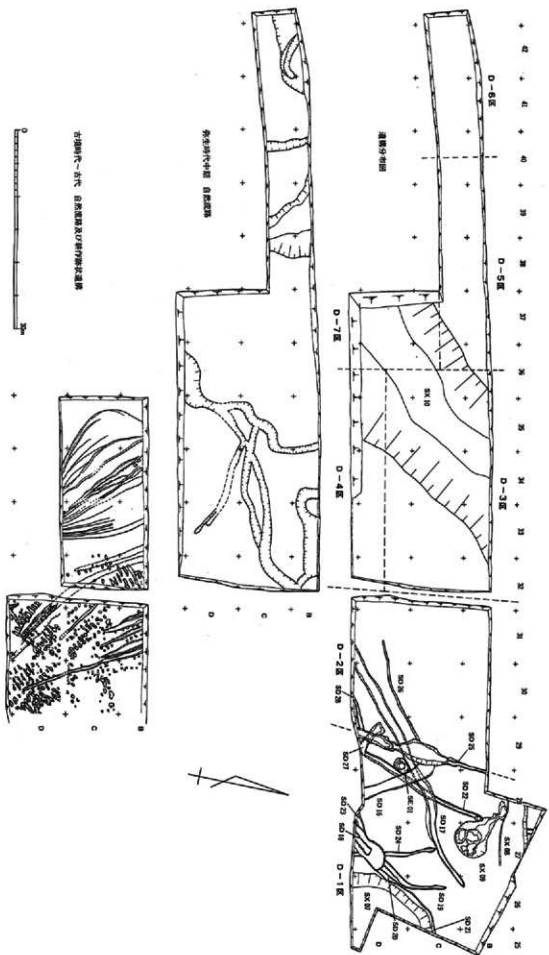


图 40 D地区地质分区图及V形剖面自然地质图

第4節 D 地 区

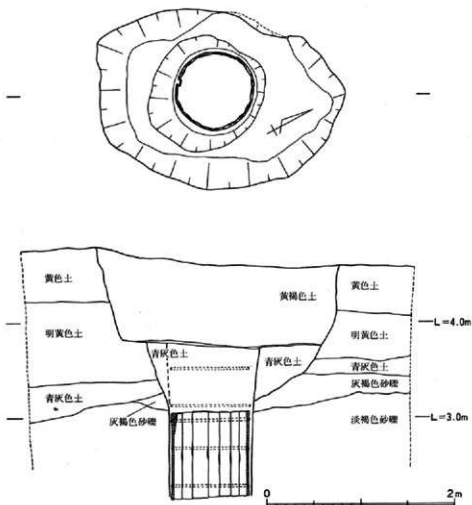
D地区は調査対象範囲内の西方に位置し、標高は約5mである。またこの地区は市道から西側の地域を示すもので、幅20m、長さ135mの範囲を7区に小分割し全面調査を行った。発掘調査の結果、付近の地形から、現在の丁集落の一連のものと考えられる自然堤防上に、溝等の遺構が検出され、D-3・4・7区にて、縄文時代後期の包含層があり、弥生時代前期にはほぼ堆積してしまふ自然流路SX10がある。その他の地区においても古代～近世までの水田耕土や、耕作跡状遺構、洪水等による一時的な流路跡が検出され、弥生時代中期の遺物を含む土層も確認された。

D-1・2区の調査は、確認調査時の1G～7Gにて遺構や包含層が検出されていたものであり、ほとんどの遺構が黄色砂層（地山）上で検出されたものであった。調査は、耕土及び耕土直下で検出したSD16・SD25が検出され、SD25では、近・現代の遺物を含み、一部石積みで護岸部をつくる溝であることが判明した。また、SD16に切られた状態で、SE01（井戸）を検出した。掘り方は、2.7m×1.9m、深さ2.6mで、地山である黄色砂層まで掘り抜き、井戸枠として径82cmの桶を2段重ねていたものと考えられる。また出土遺物は、玉緑の白磁片など数片が出土しているが、桶枠材の加工に鉋を使用していることなどから、近世の井戸と考えられる。また、D-2区を中心に13層黄灰褐色砂質粘土層下面も凹凸な状態が検出されたため平面的に精査したところ30cm×40cm、深さ15cmの凹地が北西～南東方向に規則性をもって並び、自然の影響ではこのような状態はできないとの判断もあり、古墳時代以降の耕作跡状遺構と考えた。また、部分的に畦畔と考えられる高まりを検出したが、旧地表の等高線に直交する状態で、その高まりが続くことから畦畔としては考えられなかった¹⁾。

奈良～平安時代の遺構としては、SD18が考えられるが出土遺物は少なく、図示できるものさえなかった。また、自然流路SX07はC地区で検出された多くの自然流路の最西端を削って流れたもので、19層灰色泥土層から10世紀頃の須恵器碗が出土したことから、平安時代のもと考えており、上層の遺物から判断すると比較的短期間に堆積が完了したものと考えられる。SX08は、縄文～奈良・平安時代の遺物を含むもので、堆積上も中～粗砂が中心となり、一般的な流路と考えられよう。

古墳時代の遺構は、SD19・SD20が検出されたのみで、最も新しい時代の土器が、5世紀末～6世紀初頭の須恵器を含むところから、この時期を想定したものである。

弥生時代中期の遺構は北東～南西方向に流れる溝SD17・SD23・SD26・SD28があり、その直角方向にあたる溝SD27が存在した。SD17は、幅1.5m長さ39m以上で、上層

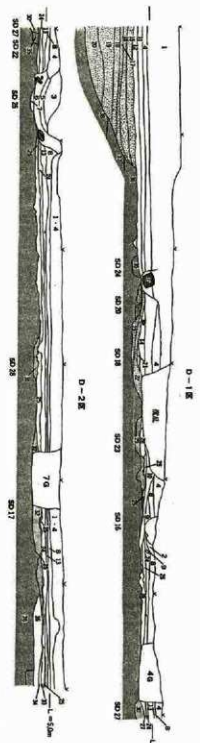


挿図41 SE01 平・断面図

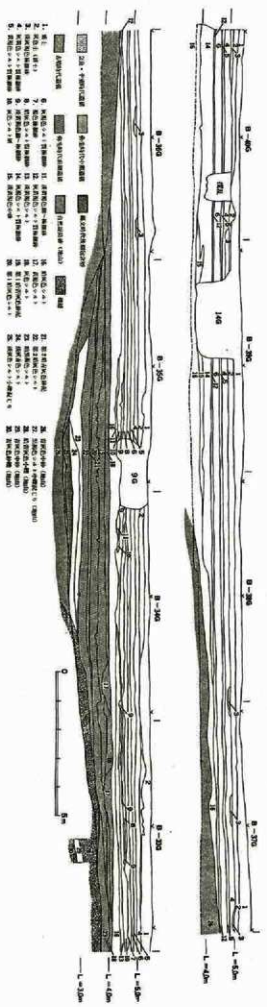
下層にわかれ、出土遺物は弥生時代中期要底部とその他破片が出土したにすぎない。その他の弥生時代中期の溝もほぼ同じ状況であった。

弥生時代前期の遺構は、黄色砂層を掘削しており、幅1m、長さ29mではほぼ南北に貫流する溝 SD22 と、若干東方に掘りが見られる溝 SD24 が見られた。また、SX09は、5.2m×5.0m 深さ0.8mの不定形な土坑状を呈するもので、堆積層は中砂を主としており、その中から弥生時代前期d段階に考えられる土器と共に、表裏とも朱塗で飾られた編物（図版4-2）が出土した。

D-3区では、旧耕土が続き、その下層ではラミナを示す砂の堆積と、マッシュな状態で堆積したシルト質極細砂が交互に見られ、10層灰色シルト層上面では古墳時代初頭と考え



1. 地
2. 砂
3. 砂
4. 砂
5. 砂
6. 砂
7. 砂
8. 砂
9. 砂
10. 砂
11. 砂
12. 砂
13. 砂
14. 砂
15. 砂
16. 砂
17. 砂
18. 砂
19. 砂
20. 砂
21. 砂
22. 砂
23. 砂
24. 砂
25. 砂
26. 砂
27. 砂
28. 砂
29. 砂
30. 砂
31. 砂
32. 砂
33. 砂
34. 砂
35. 砂
36. 砂
37. 砂
38. 砂
39. 砂
40. 砂
41. 砂
42. 砂
43. 砂
44. 砂
45. 砂
46. 砂
47. 砂
48. 砂
49. 砂
50. 砂

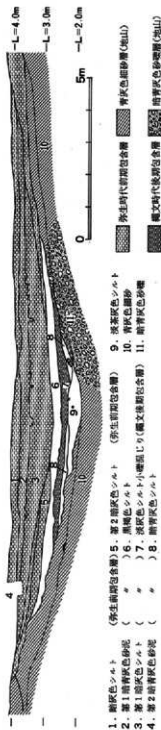


附圖 D-1 之說明 D-2 之說明

られる杭が数本出土した。おそらく、水田に關係する水路の護岸等の施設であると考えられるが、部分的にしかわからなかった。なお、この面において洪水の影響と見られる弧状を描く流路跡が検出された。また、11層淡黄褐色細～極細砂層では、SX10がほぼ堆積しきった上面に一時的な流れで凹みが生じており、弥生時代中期の土器を含んでいた。その下層は、18層灰色シルト層から22層第2暗灰色シルト層までは、弥生時代前期の遺物を純粋に含む自然流路 SX10で、幅約15mで北東から南西方向に流れている。遺物は、C地区 SX02出土の土器に比べて、逆L字形口縁をもつ甕が多く、雨出突帯が少なく、多条沈線の土器が目立つところから若干時期が新しくなる一括資料であると考えられる。また、第1暗灰色シルトから、木葉文の彩文を有する木製鉢が出土した。

弥生時代前期、自然流路の下層では若干の無遺物層を挟み、7層淡灰色シルト(挿図43)にて縄文時代後期中葉の津雲式土器が、ほぼ純粋な状態で出土し、下層は、地山である青灰色砂層や黒褐色シルト中礫混じりとなる。要するに、D-5区では縄文時代に形成された谷間に、後期の包含層や弥生時代前期の自然流路によってほぼ埋まった状態になり、若干の凹地に弥生時代中期に洪水による浅い自然流路が何本も形成し、シルトのマッシュな堆積と砂層が堆積を繰り返して現在の地表面まで達していることが判明した。

D-7区は、D-3・4・5区と接し、D-3区で検出されたSX10の南西を追うべく設定されたもので、基本的な土層や遺物出土状況は、D-3と同様である。しかし、遺物出土量は、南西方向になるにつれて少なくなっていた。



挿図43 SX10 土層断面図



挿図44 D-4区調査区全景

D-4区はD地区のほぼ中央部にあたり、長さ33m、幅5mのほぼ東西方向の調査地区である。耕土の直下には黄灰色砂質土と灰褐色砂質土がそれぞれ25cmずつ均一に水平に堆積している。その下層の東端には、ほぼ南北方向に走る深さ約20cmの溝状遺構(時期不明)、西側に溝状を呈する浅い落ち込みが検出された。この溝状の落ち込みの埋土と、下層の灰褐色粘質土からは弥生時代中期の土器が若干出土している。西方のさらに下層より、弥生時代前期のSX10の一部が検出された。

D-5区と名づけた調査区は、調査地の西方に位置し、調査を実施した地点は、B-37~40、C-37~40までの東西32m、南北16mの約512m²を調査対象面積としている。

調査は第1次確認調査(第14~17G)の結果を踏まえて、大型重機により遺物包含層の直上まで掘削を行い、その後、人力により発掘調査を開始した。

調査を進めていく過程で、一部後世の計画的な瓦粘土の採掘が行われ、深い所では、弥生時代の遺物包含層にまで達している例があった。

D-5区の基本的な土層のあり方を第45図の北壁土層図を参考にして、遺跡の立地する旧地形を復原してみると、まず、第45図上段に図示した如く、第1層、耕作土層、第2層、灰色粘質土層、第3層、黄褐色粘質土層、第4層、灰褐色粘質土層、第5層、灰黄褐色粘質土層までは粘土質の土が自然堆積しているのに対し、第45図下段の東壁土層図に示したように、遺物を包含する第6層以下においては砂が交互に堆積する層序を示しており、そ

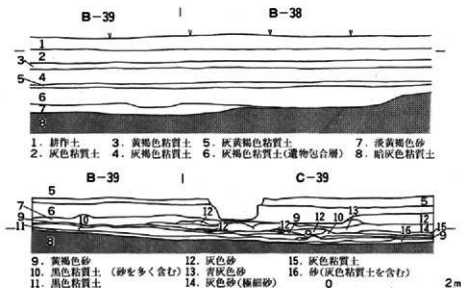
の自然傾斜は大きかではあるが、約1mに5cm程の勾配をもち、北（上流）から南（下流）の方向へ幾回も土砂が堆積したことを示している。

いいかえれば、旧河道が埋没していく中で、弥生時代の前期・中期を違えても、上流にあるであろう弥生時代の集落から弥生土器が押し流され、出水のたびに川筋を変えていた。そして、河道がしだいに東へ移るにつれて、D-5区は後背湿地と化し、土砂の自然堆積が続くと共に徐々に高くなり安定した土層を形成していった。

次に、出土遺物について第45図下段の東壁土層図を参照して述べると、調査の関係上、第5層直上まで、重機により掘削をしたため表土層から土の堆積順に沿って説明出来ないが、すでに述べた如く、第1～5層までの自然堆積が見られる上部層と、第6層からの砂を中心とする粘土と砂の互層を呈する下部層との土質と堆積の状況の違いから大きく2つに分けることができる。

その内、この下部層中、特に砂層中より多くの土器を検出した。

出土遺物について、図面第34～37図、図版第53・54図を参照して述べると、第1次調査の確認調査で検出した第14G一壺（B527）、有孔底部（B576）、17G一壺（B502、557、559）、甕（B567、570、571、574、575）、発掘調査においては、第6層一壺（B501）、甕（B513、515、516、572）、高杯（B517）、第7層一壺（B503、504、555、556）、甕（B429、431、432、434）、蓋（B521）、高杯（B518、519）、鉢（B506）、底部（B522～523）、有孔底部（B525）、第9層一壺（B507、558、565）、甕（B508、510～512、514）、高杯（B520）、底部（B526、528）、第10層一壺（B430）、甕（B509）、第11層一壺（B502、



挿図45 D-5区 土層断面図

第3表 D地区遺構一覧表

遺構名	略号	地区	規 模 (m)	時 期	備 考
溝	SD 16	D-1	長10.7+α 巾1.4~1.8	近・現代	
〃	SD 17	D-1・2	長39+α 巾1.5	弥生中期	
〃	SD 18	D-1	長7.8+α 巾3.0	奈良~平安?	
〃	SD 19	D-1	長11.0+α 巾0.7	古墳後期	
〃	SD 20	D-1	長4.0+α 巾0.7	古墳後期	
〃	SD 21	D-1	長11.0+α 巾0.8+α		
〃	SD 22	D-1	長29.0+α 巾1.0	弥生前期	
〃	SD 23	D-1	長3.5+α 巾1.1	弥生中期?	
〃	SD 24	D-1	長12.0+α 巾0.6	弥生前期	
〃	SD 25	D-1・2	長21.0+α 巾2.0~3.0	近・現代	
〃	SD 26	D-2	長22.0+α 巾0.3	弥生中期?	
〃	SD 27	D-1・2	長5.0+α 巾1.0~1.5	弥生中期?	
〃	SD 28	D-2	長5.0+α 巾0.7	弥生中期?	
井 戸	SE 01	D-1	掘方2.7×1.9 深2.6	近 世	福神區0.82
自然流路	SX 07	D-1	長14.0+α 巾14.0+α	平 安?	
〃	SX 08	D-1	長10.5+α 巾4.2	奈良~平安?	
土 壟 ?	SX 09	D-1	5.2×5.0 ほぼ円形	弥生前期	編物出土
自然流路	SX 10	D-3~5・7	長40.0+α 巾20.0	弥生前期	遺物多量

557, 559), 甕 (B567, 570, 571, 574, 575), 第16層一壺 (B560, 561, 563), 鉢 (B505) である。

以上のような土器を検出したが、第4章第2節で詳細に触れるが、畿内第I様式、第II様式の土器が層位的に捉えられることなく、混在していることが明らかになった。そのことは、調査区外の上流に弥生前期・中期に属する集落が営まれている可能性が高いことを示している。

D-6地区はD地区の最西端にあたる長さ20m、幅7mの調査地区である。西側は一部擾乱を被っており、黄褐色土がポーラスな状態で堆積している。北西部に深さ30cm程度の不整形な落ち込みの南東部の一部が検出され、灰褐色砂からなる堆積層より弥生時代中期の土器が出土しているが、その他の遺構は認められなかった。なお、最下層の黒灰色粘質土からも、弥生時代中期の土器が出土している。

注

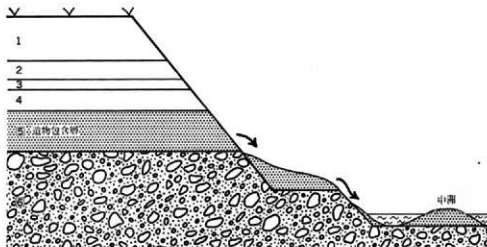
- 1) 八賀晋氏に現地調査を依頼し、その結果、畦畔ではないとの結論に達した。

第5節 E地区の調査

E地区（大津川）の調査は、河川改修事業に伴って河川内からの遺物の発見が相次いだことから、河川内の遺物散布状況を確認したうえで調査を行なうものとした。

散布地を大きく、橋に区画された各区に分けて分布調査した結果、市道橋と千日橋に挟まれたC地区と千日橋と朝日谷橋に挟まれたD地区とに遺物の散布がみられた。その他の地区では若干の散布はみられたが、そのほとんどが上流から流れたため磨滅が著しく、河道内のものであるため、上記の2地点にしばらく調査を実施した。C地点、D地点は千日橋を挟んで北約100mと南50mの一画で、現大津茂川河道内の左岸ぎわにあたる場所である。土層は、左岸の法面において観察でき、大まかに1層黄褐色土（盛土）、2層黒色土（耕土）、3層黄灰色土（床土）、4層黄色砂、5層青灰色砂泥（包含層）、6層青灰色砂礫の層序がみられ遺物の多くは、青灰色砂泥層に堆積していることが判明した。しかし、河川改修に伴う掘削は僅かであるため、工事に伴って数ヶ所トレンチを発掘し、その状況を判断して全面を掘削する方法をとった。トレンチによる発掘の結果、遺物の検出はなく、大津茂川の旧河道にあたると思われる堆積土からの遺物であると判明し、全面による掘削が行なわれた。また、現河道内からの出土遺物は以前の河道内左岸の掘削と水流の影響で、青灰色砂泥層が河川内に再堆積したものと判断し、河川内の遺物採集を行なった。

遺物は、コンテナに約20箱分出土し、その遺物の時期は縄文時代中期・後期・晩期、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期、奈良時代、中・近世までに及ぶ長期間の遺物が



挿図46 大津茂川左岸土層堆積状況模式図

含まれていた。特に、弥生時代の土器や、奈良時代の須恵器（墨書土器）、土師器、人形などの遺物は量的にもまとまっており、丁・柳ヶ瀬遺跡本体付近の遺物とその関係を知る上でも重要な資料を提示してくれた。

第4章 遺物

第1節 縄文時代の土器

丁・柳ヶ瀬遺跡の縄文時代の土器は、細片を含めると2,717点を超える多くを数えるが、文様構成や形態の比較的理解しやすい土器を図化したものは、土器量の9%、245点のみに留まる。出土地区別に述べるとA地区126点(1,475片)、B地区26点(409片)、C地区36点(185片)、D地区27点(483片)、E地区9点(25片)そして、その他14点である。A地区51.4%、B地区10.6%、C地区14.7%、D地区6.5%、E地区5.7%の比率となる。245点の縄文式土器は、中期後葉から晩期終末までと時期幅をもつ。ここでは、6期に分ける。中期は1・2期で、1期は中期後葉船元Ⅱ式、里木Ⅱ式ないしは里木Ⅲ式で3点(1.2%)、2期は中期末で146点(59.6%)と多い。後期は3・4期で、3期は後期前葉、中津式・福田Ⅱ式の12点(4.9%)で、4期は後期中葉、津雲A式併行・一乗寺K式の16点(6.5%)と少い。晩期は5・6期で、5期は晩期中葉、原下層式26点(10.6%)で、6期は晩期後葉、凸帯文土器で濫賀Ⅱ式と終末の土器42点(17.1%)である。その時期別に各地区の分布をみると、2期はA(B)地区を中心とし、3期はC・D・E地区に若干出土し、4期はC・D・E地区を中心に、5期もC・D地区を中心とし、そして、6期はC地区を中心に各地区に散見される。特に、2期のA地区出土土器は49%と半数近くを占めている。

いづれの土器も明確な遺構に伴うことがなく、自然流路と考えられるB地区SD02やC地区SX02、E地区の旧河道堆積物層に混在するものが多いが、A地区では沼沢地や小河川際に纏まって発見されたものがある。

また、土製品として土鎌AC1と耳栓AC2が各1点出土している。

1. 縄文時代中期(図版28~32・34, 図面第1~7・11図)

1・2期に属する土器群は、A・B地区を中心に出土し、D地区とE地区表採資料が少しある。

1期(中期後葉)

A217はE地区で船元Ⅱ式に属する深鉢の口縁部片であり、A218・A219は里木Ⅱ式に属する小破片で、E地区・A地区で出土している。この時期は土器3点のみであるが、丁


・柳ヶ瀬遺跡に縄文人の姿をうかがう上限の資料である。そして、この時期も瀬戸内土器分布圏に入っていることを示し、次の2期への連続性をも示している。

2期（中期末葉）

里木Ⅱ式とは異なり、丹後地方の平CⅢ式及び平KⅠ式と併行する時期で、³¹泉拓良が新しく北白川C式と提唱した後半の時期と考える土器群があり、点数も多い。それは、北白川C式の地域性として把握できるものである。

出土地区別にみると、A地区120点（49%）、B地区22点（9.0%）、D地区2点（0.8%）、E地区2点（0.8%）となり、A・B両地区に集中している。

土器を形態別・器種に分類すると、深鉢A・深鉢C・深鉢D・深鉢F・浅鉢とその底部と有文深鉢胴部となる。³²

深鉢A類は、「口縁下にすぐ口縁部文様帯のくる水平口縁もしくは主文様帯が波状を呈する深鉢⁴¹」で、口縁部と胴部とを区分する手法で1～6類に細分される。A₁類は隆帯で区分し、「口縁部文様帯下に直接胴部文様がつく」。A₁は4単位の波状口縁で隆帯と沈線とによる区画文（楕円文・)と渦巻文を描く。胴部は一条の沈線と横走の弧文を配し、以下胴部は縄文LRを地文とする。横走の弧文は里木Ⅱ式の伝統をもち、隆帯には縄文を施す。A₁類は「口縁部と胴部とがより直線的につながる土器」である。A₄は口縁部の幅が狭くなり、口縁が屈曲し、隆帯で区画し、2条沈線を引き、その間を竹管で刺突を行い上下を縄文（LR）で飾る。胴部は連弧文が波状文にかわり、横走の³³「字文」を描いているようで、中津式の成立とかわる文様である。A₁と共存している。ここで、A₄はA₃類と隆帯が結びついたものでA₂類よりA₃類に入れるべきかもしれない。A₃類は「口縁部と胴部との境が屈曲する」器形で上下2段の指頸圧痕文、円形区画文、つなぎ文様である楕円形区画文、渦巻文、多重沈線による楕円文を胴部に施し、文様が器壁内面にまで押し出されていることに特徴を示す。⁶¹A₂₀は隆帯でコブを出し頂部に上下2段の指頸圧痕文を施し、楕円形区画文を描き、区画内を刺突する。下半は沈線で渦文などを描く。A₂₁はA₂₀と同一個体と考えられ、口縁の波頂部下に沈線で同心円文を飾り、左右に沈線で平行線を描く。A₂₂～A₂₄も同じ。A₆は屈曲する口縁で楕円形区画文と区画内に刺突を施し、胴部はA₄に近い波状文からくる文様と斜めの葱杵状区画文と多重連弧文を配する。A₇～A₁₁も同様で沈線と刺突に種類がある。A₁₀では隆帯に縄文が施される。A₁₈・A₁₉は胴部の区画文内の刺突文と下半の連弧文破片である。A₉₀は沈線で楕円形区画文を引き、中に縄文LRをころがす。A₉₁と同じ。沈線のみで、縄文LRをころがす口縁に内彎するA₉₂・A₉₃と屈曲するA₉₆～A₉₈がある。A₄類は「口縁部と胴部とを多重沈線による連弧文で区分する」土器で星田式がこれに入る。A₂は口縁が8単位の小波口縁を呈し、波頂下に楕円形区画文が二段構成で描かれる。楕円区画文の描き方は、幅5mmの棒

状工具で、上下に平行線を引き、後に左右を弧線で閉じる。区画内は大きさに応じて2段または3段のD字形の刺突を行う。楕円形区画文下には波状文が施されるが、描き方は弧線を上下につなぎながら連続的に描いている。A₁類は胴部に垂下沈線をもたないものを特徴しているが、A₂では同一個体と考える縦の平行沈線を下端で閉じた3本組みの垂下沈線が描かれた胴部破片があり、泉の北白川C式深鉢A₄類の細分1・2期の胴部の縦位の縄文にかかわるものと理解できる。A₃類は口縁部と胴部の区分が不明瞭な土器で、口縁部と胴部とが文様帯の相異だけで区分される。A₂₅は隆帯のみで、口縁部文様帯は消失しており、A₁類A₆の楕円形区画文が横走の沈線文に組みこまれたもので、その内に竹管文が施されたものである。A₂₉は同様の竹管文がある。口縁部文様が連弧文によるものはA₄₅があり、A₄₆~A₄₈とA₅₃がある。連弧文と曲線の文様はA₄₉~A₅₂がある。渦巻文はA₆₀~A₆₄・A₆₇・A₇₀・A₇₁があり、渦巻文が他の曲線文とついで横走の「J」文化するA₆₅・A₆₆・A₇₂がある。また、連弧文と区画文が合体して区画内に竹管による刺突を施したA₃₈~A₄₀と刺突のみのA₄₁がある。他に、A₃₀は⁷⁾縦位の楕円形区画文に刺突を施し、楕円形が崩れた区画文に刺突を加えるA₃₁・A₃₂がある。

深鉢C類は、「4~6個の突起状山形口縁をもつ胴がきつくくびれた深鉢」で胴部文様は山形頂部下に渦巻文や円形区画文を配することが多い。A₃は6単位の方柱状口縁で、口縁にA₂と同じような沈線で楕円形区画文を描き、口唇は4・5本の沈線をやや弧線状に引き、沈線内を刺突する。その下は弧線と連弧文で区画文を形成し、胴部は二本の沈線で紡錘形に近い線を引き、一部短斜線にて飾る。外面に煤と炭化物の付着が著しい資料である。泉は深鉢C類の細分において、楕円形区画文間を沈線だけで表わす土器を深鉢C₁b類として、A₃を北白川C式4期に位置づけている。深鉢C₂類としてA₃₇方柱状口縁は沈線のみで表現され、縄文LRを施し、主文様は渦巻文に刺突を施す。A₃₆は山形口縁が退化したもので、渦巻文または同心円文に竹管文を施したものである。また、深鉢C₃類としている口縁部が無文となり、C₁・C₂類の口縁部文様が胴上部に移動した土器と考えるA₃₃がある。より文様が退化し、地文を条痕としたA₇₃や、A₇₄のように沈線で文様を描き、縞状の短細線を刻むものがあり、中津式に近い。

深鉢D類は「縄文だけで器面を飾る」土器である。器壁が薄く輪覆み痕が観察されるA₁₀₀、または口唇に縄文を施すA₁₀₁・A₁₀₂がある。やや厚みがあるA₁₀₈・A₁₀₉・A₁₁₀がある。縄文LRの摺りである。

深鉢F類は無文の土器で条痕の調整を残すもので、二種類の条痕がある。植物繊維状のもので浅い条痕調整が施された土器で、口唇が平らなものA₁₁₁・A₁₁₇と成形時の小さな波状を残すA₁₁₂・A₁₁₃・A₁₁₅・A₁₁₈がある。二枚貝条痕で調整された土器は、A₁₂₀とA₁₂₃が同一個体でA₁₁₉・A₁₂₁を含め口縁が平らなもの、小波状口縁で口唇に刻み

目を施すA122・A124と波状口縁を施すA125等がある。

浅鉢は量が少なく、A127は口縁下に沈線を引き、直下に粘土紐を貼付けたものを指圧し刻みを施し、口縁を注ぎ口状に指で押えている¹⁰⁾。A128は同一個体である。他に小破片で判らないが、浅鉢と考えられるA129・A130・A132がある。

底部は、平底A133・A136・A138、凹み底A135と高台底A134・A137・A141がある。底は判らないが、底際の粘土の貼り付けが観察される資料A139・A140がある。深鉢F類の底部でA133はA111と同一個体と考えられ、二枚貝条痕調整のA139・A140がある。

有文深鉢胴部破片は細片であり、器形・時期が不明なものが多い。横位の沈線と刺突のあるA42、横位の刺突の押引状のA43、横位の刺突のあるA44、条痕地に波状沈線文を描くA77、擬似縄文を施すA75・A76がある。A₃類に入るものと考えられるが、A81は沈線で縦位の楕円形区画文を施し、その間を蛇行文で飾り、胴下位は多重連弧文を施し、それぞれの文様の区画内に縄文LRをころがす。下部は磨いている。A82は波状文が横走の「」字文を生みだす文様構成で、A81同様縄文LRを施す。沈線で文様を描出したのち縄文を施す手法があり、平行線A85～A89、渦巻文A84などにみられる。A84は中津式に近い。また垂下沈線と縄文を施すA104・A105例がある。

ところで丁・柳ヶ瀬遺跡ではこの時期の土器についても、住居址などの遺構から出土したものがないが、A地区挿図21、22やB地区図版11の出土状況から一括性のあるものと扱いたい。

龍野市片吹遺跡¹¹⁾の分析から玉田芳英は、北白川C式の平CⅢ式にみる地方化の土器群と類するものとして片吹遺跡の土器群を理解しており、「兵庫県西部から鳥取県等の日本海沿岸地域は中期末の時期、里木Ⅲ式が分布し、里木Ⅲ式が終末を迎えた後に北白川C式の強い影響下に平CⅢ式に類する土器群が成立した可能性を認めており、船元・里木Ⅱ式系の文化圏の退行に対して北白川C式の文化圏が拡大し、中津式の成立を迎える状況を示す」と論考している。丁・柳ヶ瀬遺跡でも、同様のことが考えられ、土器組成については深鉢A₃類・A₄類が主体を占め（合せて50%）、次いで深鉢F類（16%）が多く、そして深鉢C類・深鉢D類が続く（各6%）。深鉢A₃類・A₄類・A₅類・A₆類と浅鉢が若干出土しているが、深鉢B類はない。片吹遺跡のSB01・SB02と比較しても深鉢A₃類が少ないが、沈線内刺突や刺突文の日本海沿岸地域に特徴的とされた深鉢A₃類土器も多く、似ている。北白川C式と比べると深鉢F類が深鉢D類より多く出土している。また、丁・柳ヶ瀬遺跡では、A・B地区（中期末）からD地区（中津式）へ集落の移動が考えられ、中期末に深鉢F類の全面に貝殻条痕を施す粗製深鉢が存在することも含め、横走「」字文の成立などを考え合せると中津式の成立への状況が着手される材料となる。

2. 縄文時代後期 (図版34, 図面第7・11図)



3・4期に属するC・D・E地区を中心に出土した若干の資料がある。D地区では自然流路SX02の下層に縄文大木と同一層に若干の資料が出土している。

3期 (後期前葉)

中津式の土器は中期と異なり、D地区に多く、C・E地区にも出土している。山形口縁の波頂部に太い沈線(φ3~5mm)で施文するA222・A223と波頂部を棒状工具で刻み、器面は軽い条痕がみられるA226がある。口縁部文様帯が無くなり、口縁下にJ字文(磨消縄文RL)を施すA224や波頂部下に太い沈線で文様を描くA225があり、D地区出土で同一個体と考えるA227~A230がある。

中津式で古い様相のA227~A230とより新しい様相のA224等に分れる。¹²⁹

4期 (後期中葉)

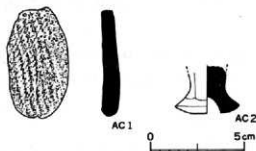
条痕土器¹³⁰でE地区出土のものは瀬戸内的なA237・A240があり、近畿地方的なD地区出土のA238・A243・A244がある。A237は深鉢で口縁を肥厚させ上方へ拡張させている。拡張の口唇部に加飾する。文様の頂点で「」状突起を呈し、口唇部に入組文の沈線がくずれ、刺突を施し、斜沈線を一方に施すものである。外面は横位の二枚貝条痕地に「」文様を描き、炭化物が付着し内面は丁寧に磨かれている。A240・A241は二枚貝条痕調整の粗製深鉢でA240は家島群島小網手遺跡¹⁴⁰の資料と似ており、口唇に条痕原体による刻目が施される。A238は楕円文と短沈線で口縁部文様を描き、A244は多重の中開き半円文で縄文地を消す。A243は口縁が折返しの条痕帯となって、条痕調整後、ナダ磨きされている。A239は頸部破片で爪形の刺突が2段に矢羽状に施され、胴部は縄文RLで飾る。

次に、一乗寺K式と考えられる土器がD地区で4点出土している。A245は薄手の土器で平行沈線間に短斜行沈線を施している。A246は縄文RLを地文とし、浅い沈線で幾何学文を描き、交点を刺突し中を磨消す土器で、A247は薄手で波状口縁の波頂部にコブを作り、真上から刺して円孔をあけ、コブの下に浅い沈線で平行線を描き垂下する交点を浅い沈線を刺突するように施す。コブと沈線間は浅い斜め刻目を施す。A248は粗製の深鉢で口縁を面取りし、内面に細く硬質のもので斜刻目を施す。

後期の土器の底部は5点(A255~A259)あるが、平底が4点と凹み底が1点ある。

また、土製品として土鏝AC1と耳栓AC2が各1点ある。AC1は土器片鏝で、縄文RLの胴部破片の両端に切目を入れ土鏝としている。AC2は耳栓の一部で、高さ2.4cm、径が3.4cmの小形で、多面を磨き凹みをつけている(挿図47)。

ところで、後期前葉は瀬戸内地方の影響下に北白川C式の深鉢A₁類・A₂類の横走の「」字文の萌芽から「」字文の成立・中津式を生み出すことが考えられ、後期中葉になると縁帯文土器については瀬戸内地方的なものと近畿地方的な土器群が併存し、一乗寺K式になると近畿地方の文化波及が強く、瀬戸内の要素が薄れる。



挿図47 土鉢・耳栓

3. 縄文時代晩期（図版32・33、図面第8～10図）

5・6期に属する土器で、5期はC・D地区に、6期はC地区を中心に各地区で出土している。出土点数は中期に次いで多い。

播磨の晩期の編年観を描出する遺跡は少ないが、姫路市内の今宿丁田遺跡¹⁶⁾・堂田遺跡¹⁷⁾・辻井遺跡¹⁸⁾の発掘調査例がある。本遺跡では、自然流路や後背湿地の土層中に土器が多く、包含されており、単一の遺構内での出土はない。

5期（晩期中葉）

原下層式の深鉢口頸部の破片A147がE地区から出土している。波状口縁となり波頂部の下に、縦位の爪形文を施し、波頂部口唇も刻む。そして、波頂部内面は波頂部下に沈線を引く。肩部も縦位の爪形文と直交する部位に横位に爪形文で逆T字に区画する。A148も同様の肩部破片で横位のD字爪形文で、胴下半は削る。

原下層式の中にも斜行沈線にて山形文を描くものがあるが、D地区出土のA151～A153は同一個体のもので、口縁直下に刻目凸帯文を施し、その裏面はA147の波頂部口縁裏面の沈線と対応するように、幅の短い沈線が引かれている。口頸部は磨かれ、3本の斜行沈線で山形文を描き出している。A151の胴下半部は横位の削り調整がみられる。A154～A158は頸部破片で、3・4木の単位の沈線で山形文を描き、肩部は横位の一条沈線で区画を行うものである。A149・A150は胴下半の資料で、A149は沈線下は横位の削りのままである。

ここで、A151～A153は凸帯文成立が、原下層式A147深鉢の波頂部の口唇刻目が、口縁下に粘土紐を貼付し、凸帯化し刻目を施すものとなり、口縁裏面は原下層式の沈線を施す系統をひく。爪形文が原下層式でも押引かれるが、ヘラを引き、条線化して伝統的な山形文で加飾している。胴下半の削りは滋賀里Ⅲb式・N式の影響となる。

浅鉢は A167 で、口縁裏が玉縁状に肥厚し、おそらくリボン状突起などがつく器形となる。

6期(晩期後葉)

凸帯文の成立以降の土器群をここで扱う。形態として深鉢形・浅鉢形土器がある。

粗製の深鉢には A173 があり、輪積み外面を下から上へ削り、内面は横方向の削り調整のままの土器で、A175 や A193 と D 地区から出土している。

浅鉢は A168、A169・A170、A171 の 3 形態出土しており、A168 は小形で口縁に小波状の刻目をもつ鉢で、A178 と一緒に出土している。A169 は大形で横位の磨きが丁寧な茶色の良品で、A170 は口縁端が少し外反し、肩部が沈線で区画されたもので、磨きは A169 と同じ横位である。A171 はやや口縁より下がった部位に沈線を施し、その部位でやや外反する浅鉢で、磨かれている。

凸帯文で図化したものが、A 地区(4)、B 地区(4)、C 地区(21)、D 地区(4)、E 地区(3)とその他(6)の 42 点がある。口縁部が 32 点、肩部が 10 点で、器形がわかるものは 4 個体のみである。そのうち、口唇、口縁部に刻目が有るものが 3 点(A175・A178・A179)がある。A214 と A215 は同一個体である。家根祥多の凸帯の分類によると、a₁ 類と b₁ 類が多く、a₁ 類、b₂ 類がある。刻みは D 字、V 字、小 D 字、小 O 字がある。

A176 は遊賀里Ⅱ式的一条凸帯の深鉢で、口縁よりやや下がった位置に断面三角形の凸帯(a₁類)を貼付け、D 字刻目を施す。器面調整は口頸部はナゲ磨き、肩部下半は上部は横位の削りそのままである。A177 は A176 とセットを成す深鉢で、肩部が大きく屈曲し外反し、外面は丁寧に磨きで仕上げられており、裏面は A176 同様、輪積み底(幅 2 cm)がみられる。

A178 と A179 は口縁部口唇の刻目が D 字か小 O 字化し、肩部の区画沈線から凸帯化することと刻目が小 D 字から小 O 字化することに時間差を考えている。A175 と A193 は波状口縁と砲弾状の底を考える土器と二条凸帯の深鉢形土器である。刻目は D 字である。

A207・A214・A215 の凸帯文は A 地区 AⅡ T から出土しており、上層から弥生時代前期貼付突帯文壺が出土している。

弥生時代前期の土器の胎土に近い凸帯文 A197・A198・A199・A203・A205 の 5 点が C 地区で出土しており、弥生式土器と共存していた可能性を示すものである。縄文時代の土器作りの伝統性が新しい技術を消化しきれない状態がある。それが、弥生時代前期の溝 SD08 出土の甕 B80 につながるものと考えられる。

ところで、山形文の描出の技法が弥生時代前期の土器 B67～B75 の同一個体の鉢の復原でみられる四本で描く技術に伝っていく。鉢は伊丹市口酒井遺跡²¹⁾の浅鉢に似ており、小波状口縁で口縁内面に山形に沈線を施すもので、ただし、削出し突帯化しており、新しい技

法を導入している。

ここで、播磨地方の縄文晩期後半の編年についてまとめてみたい。中国・四国地方の編年については、春成秀隆が「土器型式と地域色」²³⁾の中で、晩期土器について論考し、山口東部・広島西部・岡山西部の地域にわけ、岩田式・福田B式・津賀下層式と中山B式を晩期初頭に位置づけて、それぞれの地域を代表する型式としている。つぎに黒土BⅡ式をあげ「器形の単純化・文様の簡素化へ向かう傾向」をみとめている。そして、原式(原遺跡下層出土品を標式とする)の深鉢形土器に「口縁端に突帯に類似する肥厚帯をつくりだし、その上端には浅い刻みを密にほどこされている」。「原式」に類似する前池式を、原式の口縁部肥厚帯が口縁下の刻み目つき突帯に変化し、平底が出現していることより、後出のものとしている。更に、突帯文土器・黒土BⅡ式が晩期最終末をかざる型式とし、津島遺跡出土土器をより新しいものとしている。

家長は瀬戸内地方を、晩期前葉は岩田第4類をあて、次いで原下層式をとりあげ、近畿地方の滋賀里Ⅲb式と併行させ、つづく前池式を滋賀里Ⅳ式と併行させている。ここで従来の中山B式の土器を再検討し、島根県九郎原遺跡²⁴⁾・愛媛県叶浦B遺跡²⁵⁾などの類似資料が出土しており、浅鉢から前池式前半期乃至ややこれに先行する時期を考えている。つまり西日本における刻目凸帯文土器の古い資料として中山B式を扱っている。そして、近畿地方船橋式と併行する土器として百間川遺跡²⁶⁾出土資料をあげている。量は少ないが夜臼式系の壺が存在するとのことである。百間川遺跡の資料に続くものとして、姫路市今宿丁田遺跡²⁷⁾の二条凸帯の土器群をとりあげており、近畿地方の長原式と併行を考えている。

つぎに、播磨地方の晩期後葉の土器編年について、丁・柳ヶ瀬遺跡を中心に考えてみることにする。①原下層式の爪形文②原下層式の山形文・X字状文③刻目凸帯④肩部⑤底部などの検討する要素がある。

初めに中山B式的位置について考える。波状口縁のなごりとして方形突起部に波頂・波頂下の押圧の系譜をひくものが、丁・柳ヶ瀬遺跡A178・A179・A200である。A178は口縁・口唇にD字刻目が施され、肩部の一条沈線の始点部の上方の延長上の凸帯に指圧で大きな刻目を施し、小D字刻みをめぐらす。これは、土器の正面観ともかわるが、波頂部の押圧のなごりである。A179は二条凸帯の深鉢で口唇に小さな刻目を施し、口縁部と肩部の小O字刻目の中で、押圧の大きな刻みを施す真上に押圧する位置を決めるが如く、口唇に2箇所少し深い刻みがある。中山B式を前池式の前半期かそれに先行する時期に位置づけるならば、この影響による丁・柳ヶ瀬遺跡A178・A179の押圧の大きな刻みは理解しやすい。そして、波頂部のなごりとして、波状口縁の凸帯文土器がある。A175は波頂部に刻目を施し、a₂型の凸帯でD字刻目である。百間川遺跡にも同様の例がある。

沈線文について、有文深鉢は岩田第4類の類部の凹線文のなごりと、近畿地方の有文浅鉢の影響のもとに、再度加飾を展開しているもので、黒土BⅠ式から原下層式の二本ないしは三本の沈線による山形文・X字状文、中山B式の三本・五本沈線によるX字状文などがある。原下層式については、岡山県百間川遺跡³⁰⁾や宮ノ前遺跡³⁰⁾があり、沈線は三本を基本としており、爪形文による逆T字の加飾がなされる。口縁は低い方形または弧状の突起をつくり出し、黒土BⅠ式からの退行がみられ、口縁裏の沈線も突起部のみで、弧状の沈線や爪形で描くものとなる。播磨では丁・柳ヶ瀬遺跡A147・辻井遺跡・堂田遺跡に爪形文がみられる。なお、三本の沈線による山形文は後に多条化する傾向がある。丁・柳ヶ瀬遺跡A151～A153は三本沈線による山形文の描出と口縁の低い突起部の形成と口縁裏の短沈線などは、原下層式であり、口縁端に低い凸帯をつけ、D字刻目を施している。この時期に刻目凸帯が導入されたものである。丁・柳ヶ瀬遺跡A154～A156は、肩部区画の沈線が引かれた後へラ描き沈線による山形文を描いており、A151～A153などよりは後出である。肩部のへラ描き沈線による区画は、原下層式の横位爪形文の連続押しきり施文から来るもので、前池式にあり、これは爪形文の展開によるものでより後出である。肩部区画の横位爪形文の展開は、原下層式から前池式で凸帯文とかさなり、新宮・宮内遺跡³⁰⁾では二条凸帯の肩部に横位爪形文と凸帯が重列で飾られている。丁・柳ヶ瀬遺跡A154などは、前池式の併行ないしは、より後出のものである。

更に、へラ描き沈線による山形文の系譜について分析すると、原下層式は2本ないしは3本沈線で、前池式は2本ないしは3本沈線、丁・柳ヶ瀬遺跡は3本とより多条化するものがある。兵庫県内の出土例では、宍粟郡山崎町菅野遺跡³¹⁾は半截竹管状の3本と浅い沈線で多条化したもの、高砂市塩田遺跡³²⁾は2本ないしは3本、神戸市篠原A遺跡³³⁾は2本、揖保郡太子町常全遺跡³⁴⁾は4～6本がある。岡山県百間川遺跡では5本ないしは6本、鳥根県タテウ遺跡³⁵⁾では5・6本と縦の1本で山形文を分割しており、岡山県千軒町遺跡³⁶⁾では多条化している。

山形文と肩部の区画（爪形文・沈線・凸帯）を合せて考えると第48図の図式が成立する。

また、凸帯文の近畿地方からの波及を考える、滋賀里Ⅳ式A176が出現し、瀬戸内地方の原下層式からくる山形文と凸帯が合体し、A151～A153を生み出し、前池式からA154・A178や常全遺跡例が併存し、A178は西部瀬戸内の中山B式³⁷⁾の影響を受け、更に西方からの二条凸帯の波及で、前池式の伝統を持つ地域³⁸⁾として新宮・宮内遺跡に二条凸帯が現われ、口唇に刻目の伝統をのこすA179が出現する。更にA197～A199・A204・A205・A214・A215へと変化する。今宿丁田遺跡の土器がこの時期にあたるものであろう。

以上のとおり、播磨地方の晩期後葉について概観してきたが、付け加えると、山形文の一部は篠原A遺跡まで波及しているが、小刻目の中での押圧などの大刻目を施す土器は、



神図48 播磨の縄文時代晩期後葉の土器文様変遷図

加古川以西に分布しており、加飾の著しい爪形文や山形文の系譜は瀬戸内地方の枠内にあり、滋賀里Ⅳ式の影響で一条凸帯が生み出され、更に西方の二条凸帯文の波及で、地域性のある播磨型といってもいい加飾性のある二条凸帯を生み出している。

ここで、今宿丁田遺跡の土器群の検討が必要となるが、正式の報告をまちたい。靱原痕土器や北陸の下野式類似の浅鉢の存在と百間川遺跡の夜臼型壺の存在などと併せると、弥生文化の波及をひかえたものがあり、今後に期待したい。

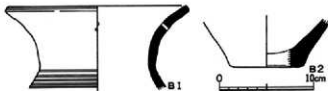
- 注1) 堅田直「京都府丹後町平遺跡調査概要」『考古学シリーズ』1 1966年。
- 2) 泉拓良・宇野隆夫編『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—北白川 追分町 縄文遺跡の調査—』1985年にて泉が近畿地方の中期末の土器群を、北白川C式としてまとめている。
- 3) 注2の文献を参照し、泉の分類に基づき考察を試みる。また、丁・柳ヶ瀬遺跡では深鉢B類・深鉢E類はない。
- 4) 泉の深鉢の分類の表現を用いる。
- 5) 沢下孝信「中津式土器について」『野多目括渡遺跡』1983年に中津式の成立にかかわる論考がある。
- 6) 山陰他日本海側に多い施文技術である。
- 7) 更に、A₁類として口縁部文様帯が退化したものがあがるが、丁・柳ヶ瀬遺跡では出土していない。
- 8) 泉は「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文中期後半を中心に—」『考古学論考小林行雄博士古稀記念論文集』1982年の中で中期末を古・新に細分し、古段階を間断式と星田式をあて、播磨を里木Ⅲ式分布圏としてとらえており、新段階を北白川C式で播磨もその分布圏に入り、瀬戸内は里木Ⅲ式bとしていた。そして、1985年「北白川追分町」の報告において、中期末を北白川C式でくり1~4期に細分を行っている。西日本縄文土器研究会例会において、北白川追分町遺跡出土土器の分析を通じて、泉氏より多くの教示を得ている。
- 9) 図面第5図A101・A102の実測図に口唇部の縄文が欠けているので訂正する。深鉢D類は、辻井遺跡発掘調査団『辻井遺跡発掘調査報告書』1971年に出土例がある。
- 10) 岡山県津雲貝塚出土例に指原荘真文列を施した凸帯をもつ土器があり、このモチーフが浅鉢への施文ともとれる。
- 11) 泉拓良・玉田芳英他『片吹遺跡』熊野市教育委員会 1985年。
- 12) 注5の文献と同じ。
- 13) 田中良之・松永幸男「広域土器分布圏の様相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」『古文化談叢』第14集 1984。
泉拓良「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅰ』1981年。
- 14) 昭和48年から始めている熊野郡家島町家島群島の分布調査において、家島小瀬手遺跡の表採資料がある。
- 15) 西日本縄文文化研究会の例会にて一乗寺K式について実見の機会を得た。A245の拓本が2枚掲載しているので訂正されたい。
- 16) 第9回埋蔵文化財研究会資料と原路市秋枝芳氏のご厚意により、実見の機会を得た。
- 17) 1981年兵庫県教育委員会が発掘調査した資料に、貝層出土の原下層式土器と石棒他について松下勝氏よりご教示を得た。松下勝「水尾川改修に伴う発掘調査—壹田遺跡—」『兵庫県年報—56年度』1984年。
- 18) 注9の文献と今里豊次「辻井遺跡—その調査の記録—」1972年及び1983年原路市教育委員会が発掘調査を行い滋賀里Ⅲb式併行の土器棺を調査している。
- 19) 但しA150~A161及びD地区出土のA243は縁帯文の土器と共存しているものでこの項より省く。
- 20) 家根祥多「縄文土器から弥生土器」『縄文から弥生』シンポジウム資料にて、「突帯」の分類・刻目の分類を巡り、各地域の「刻目突帯土器」の分析と編年を試み、弥生土器の成立と波及から、縄文土器すなわち「刻目突帯土器」の消滅まで言及している。
- 21) 浅岡俊夫「口酒井遺跡（第10次調査）」『兵庫県年報—57年度—』1983年。
- 22) 春成秀爾「縄文晩期文化中国・四国」『新版考古学講座3 先史文化』1969年。
- 23) 注20文献
- 24) 卜部吉博・宮本徳昭「九郎原1遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

- 書』鳥根県教育委員会 1980年。遺物については実見の機会を得た。
- 25) 野口光比古氏のご厚意を得て実見の機会を得た。野口光比古・井原忠昭「叶前(B)遺跡」『大三島・伯方島本四連幹道路(一般国道317号)埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会, 1980年。
 - 26) 岡田博氏のご厚意で実見の機会を得た。
 - 27) 今宿丁田遺跡発掘調査団「姫路市今宿丁田遺跡出土遺物について」『第9回埋蔵文化財研究会資料』1981年。
 - 28) 岡山県教育委員会『百間川原尾島遺跡2』1984年。
 - 29) 二宮治夫他「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12』岡山県教育委員会 1976年。
 - 30) 松本正信・加藤史郎「新宮・宮内遺跡」新宮町教育委員会 1982年。
 - 31) 岡崎他「菅野遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1976年。
 - 32) 真野修他「塩田遺跡2-第3・4次調査概要」高砂市教育委員会 1979年。なお、高砂市教育委員会のご厚意で実見の機会を得た。
 - 33) 南博史他「藤原A遺跡」財団法人古代学協会 1984年。
 - 34) 片岡肇「太子町常全遺跡調査概要」『兵庫県埋蔵文化財発掘調査報告第4冊』1971年。
 - 35) 卜部吉博他「朝酌川河川改修工事に伴うタテテウ遺跡発掘報告書(1)」鳥根県教育委員会 1979年。
 - 36) 岡健忠彦『鹿久居島の歴史』日生町文化財資料第2輯 1965年所収。
 - 37) 広島県三原市神谷川遺跡例が中山B式の分布圏に近い。
 - 38) 横位の二枚貝条痕を頸部に施す。

第2節 弥生時代の土器

1. 弥生時代前期 (図版35～52, 第12～33図)

丁・柳ヶ瀬遺跡の弥生時代前期の土器は、コンテナで約40箱分出土したが、この中で遺構からはSD01・SD02・SD07・SD08・SD22・SD24・C-1区ビット1から約3箱分出土したのみで、残りは自然流路等のSX01・SX02・SX09・SX10や包含層出土である。当然、遺構出土遺物のみで丁・柳ヶ瀬遺跡の弥生時代前期土器の様相を語ることはできず、自然流路という形ではあるが土器の様相が比較的純粋なかたちで出土していることから、遺構や自然流路等の単位で土器の



挿図49 A地区Aトレンチ出土I壺

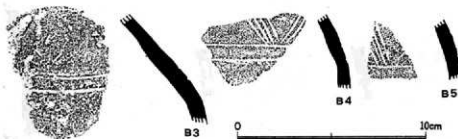
説明を行ない、各様相を明らかにしてゆきたい。なお、土器出土量に比して完形土器が少ない¹⁾ことから、全体のプロポーション、各文様帯の構成面からのアプローチに欠ける点が多いと思われるが、形態や文様の種類から説明を行ないたい。

A地区 (挿図49・50)

A地区は、西汐入川沿いの2本のトレンチ調査であった。当地区からは、壺破片が出土したのみで、口縁端部に浅い沈線をもち、蓋のためと考えられる孔を有し、頸部に5条以上の沈線をもつB1や、壺胴部最大径付近に4条の重線文をもつB4・B5の他は、壺底部やヘラガキ沈線の壺破片が若干出土したのみであった。

B地区 (挿図51～53・第12・13図)

B地区では、SD01・SD02・SX01 および包含層から出土遺物をみた。SD01 では、口

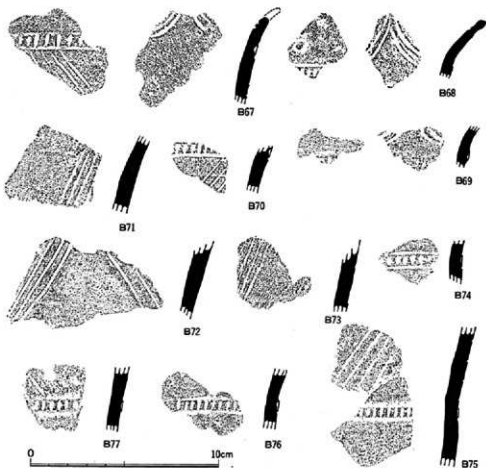


挿図50 A地区Aトレンチ出土II壺



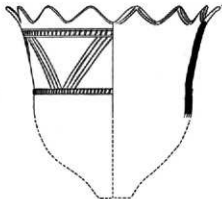
挿図51 B地区SD01出土甕

縁端部に刻目をもち、3条のヘラガキ沈線を有する大型の甕B6が出土したのみであった。SD02では壺・甕・鉢の破片が出土し、壺文様は、段³⁾や刻目をもつ貼付突帯1条以上B14の他はヘラガキ沈線2~3条・5条のものである。甕破片は10点出土しており、うち8点が如意形口縁でヘラガキ沈線3条をもつものばかりである。



挿図52 B地区SD02・包含層出土鉢

これに対し、逆L字形のものは2点あり、ヘラガキ沈線4条と6条のものである。鉢はB67～77で11個の小片から成るもので同一個体と考えられる。これらは小さい単位の波状口縁をもち、口縁内面には波状口縁に沿って篋による重弧文を施している⁴⁾。胴部外面の上位にはヘラガキ沈線2条をめぐらせ、篋状工具で押し切ったような刻目文をもつ。胴部中央にかけては山形文を配し、その下端に削出突帯をもち、上部にみられた同種の刻目をめぐらせている。胎土、成形や削出突帯の存在という点では弥生色が強く、その他の文様や器形は縄文色が強い土器であり、縄文～弥生の移行期を考えるうえで重要な遺物である。



挿図53 B地区出土鉢復原想定図(S=1:4)

SX01は各時代の遺物が混在し、弥生時代前期の遺物は段々ヘラガキ沈線1条の壺B25や口縁端部に刻目を有し、頸胴部上半には文様をもたない壺B27などが出土し、壺は大壺品でヘラガキ沈線2条もつものB29・B30、3条のヘラガキ沈線をもち、口縁が屈曲するものB31が出土した。

包含層出土のものは小片で各種文様がある。壺類部の削出突帯上にヘラガキ沈線1条をもつものB35や、ヘラガキ沈線1～5条以上まであり、また貼付突帯1・2条のものB49～B51や、4条1帯の貼付突帯をもつものB47など多種におよぶ。口縁端部の文様も、布巻押捺痕文をもつものB38や、端部に篋による沈線をもち、内外面に刻目貼付突帯をつけているものB39もある。また、底部付近で篋による3条の文様をつけたものB66がある。

甕は、如意形口縁をもつもので、ヘラガキ沈線の上端を押えつけ、段状に整形するものB52・B53や、ヘラガキ沈線1～4条までのものがある。

鉢は無文のものB64・B65の2点が出土している。

C地区(挿図54～60・第14～27図)

C地区ではC-1区でビット、C-1～C-2区にまたがりSD07、C-2区でSD08、C-2～4・6区でSX02が検出されたが、SD07では図示できる遺物はなかった。

C-1区ビット出土の土器B78は大きく外反する口縁をもつ壺で口縁端面を刻んだ細い貼付突帯を有し、頸部に6条、胴部に2帯のヘラガキ沈線を有する土器である。

SD08は土器出土量が少なく、壺はかろうじてヘラガキ沈線と判るものが若干出土した

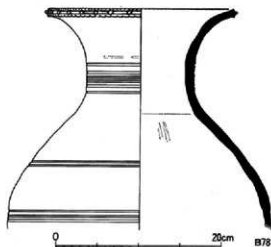
のみである。壺は2点出土し、B79は逆L字形口縁を呈する大型品で、端部に刻目を持ち、4条のヘラガキ沈線を有する。B80はほぼ直口する端部に粘土帯を覆い被せて押しした状態を示すもので、口縁端に部分的な刻目がみられる。

SX02は、C-3区を中心に検出された自然流路であり、一括品と考えられるものが存在するが、SX03古墳時代前期の自然流路や西沙入川（現河川）にも削られ、しかも複雑な土層堆積状況を示していることから、全てが一括品として扱えないと考えている。

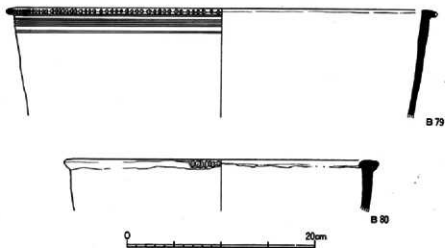
SX02出土の壺は、大・中・小型に分けられる他、無頸壺が出土している。また、文様として、段・段？・削出突帯・貼付突帯・ヘラガキ沈線・彩文・三角形列点文がある他、篲による流水文・貼付突帯による渦巻文・連弧文などがみられる。

壺頸部に段を有するものはB81・B83・B92があり、特にB81は短く開く口縁部から、頸部は細く長く、最大径が胴部中央付近にある土器で、土器焼成前、底部内面に竹管を施した土器である。

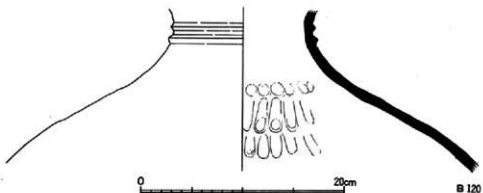
壺・頸部に削出突帯をもつ土器



挿図54 C-1区ビット1出土壺



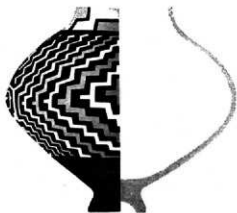
挿図55 SD08出土壺



挿図56 C地区42G出土壺

はB85～B87・B89～B92・B97・B162・B163・B166と11点あり、削出突帯第Ⅰ種B85から、削出突帯第Ⅱ種少条、第Ⅲ種多条（4条）までに及んでいる。また小片で、段か削出突帯か不明のものはB84・B94・B95・B164・B165・B167・B168の7点である。胴部に段をもつものはB99・B159～B161の4点あり、すべてヘラガキ沈線を施した後、上端を押え、段状にしているもので、1～3条のヘラガキ沈線を付加する。削出突帯を有するものは、B88・B96・B100・B169・B170で5点ありB88はヘラガキ沈線施文後、横方向にヘラミガキしたもので、削出突帯状に調整され、胴部最大径付近に刻目を有する貼付突帯を1条めぐらせている。また、段？+刻目貼付突帯を有する土器B180もある。胴部の段？はB93・B147・B171～B180の12点ある。この他、削出突帯+ヘラガキ沈線3条を有する無頸壺B106がある。壺における胴部のヘラガキ沈線のみによる施文のものも多種におよび、その中で3条のものが28.1%、4条が20.2%で両者を含めると、SX02全体の半数近くにおよぶ。

壺における貼付突帯の総数は91点で、そのうち突帯上に刻目が無いものは32点、35.2%である。この刻目を有しない貼付突帯はB121・B122の2点で、いずれも器体の大きさに比例した、しっかりした断面三角形の突帯をめぐらせている。また2条のものは、B123～B125・B141の4点ある。また胴部では2条1帯のものB213や3条1帯B211などがあり、5条のものB212までである。一方、刻目を有する貼付突帯も多く、59点（64.8%）で



挿図 57 中国遼寧省綾子窩
旱靴子出土の彩色土器
(S=1:3)

第4表 SX02出土壺文様構成一覧表

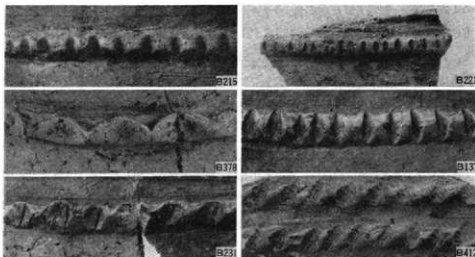
部位		口縁端部		頸部		腹部	
文様と条数							
段	+ 沈線 1			1			
	+ 2			1		3	
	+ 4			1			
段or側			9		16		
前出突帯	側出突帯のみ			2		3	
	突帯上沈線 1			2			
	+ 2			4		2	
	+ 3			4	25 (25.3%)	2	
	+ 4			1		2	28 (13.9%)
ヘラガキ沈線	1	7				1	
	1+ α			2		12	
	2			2		8	
	2+ α			11		30	
	3			3		16	
	3+ α			12		16	
	4			2		7	
	4+ α			6		16	
	5			1		4	
	5+ α			1		3	
	6						
	6+ α			2			
	7						
	7+ α						
8							
8+ α							
9							
9+ α			1				
11							
11+ α							
		7 (43.8%)			43 (43.4%)		114 (56.7%)
貼付突帯	1	内面 3	別目あり	2	別目あり 3	1	別目あり 19
	1+ α		2	3	7	3	13
	2	内面 1		5	5		3
	2+ α			2	3	5	2
	3	内面 1				2	2
	3+ α				1	1	1
	4						
	4+ α						
5							
5+ α							
		7 (43.8%)			31 (31.3%)	1	52 (25.9%)
三角形刺点文	内面 1					2	
突帯による弧文・重弧文						2	
流水文			2 (12.5%)			3	7 (3.5%)
端部押え	1						
合計	16	(100.1%)		99	(100%)	201	(100%)

ある。刻目も数種類におよび、O字を呈するもの（Aタイプ）、ヘラ状工具で小さく刻み、小型O字を呈するもの（Bタイプ）、棒状工具で幅広く押え、凸部を意識させ、長楕円を呈するもの（Cタイプ）、ヘラ状工具で細く切るように刻んだもの（Dタイプ）、竹管状工具で押え、先端で突いたもの（Eタイプ）、布巻棒状工具で押し压したもの（Fタイプ）に分かれる。（挿図58参照）

頸部における刻目突帯の条数は1～3条までである。この中では、Bタイプの刻目突帯の上に3条、下に2条以上のヘラガキ沈線で文様が構成されているものである。胴部における刻目突帯も1～3条のものがある。B138は、3条1帯で上・下がBタイプの刻目をめぐらしている。またB230は、Cタイプの刻目突帯を3条めぐらせ、部分的に大きく一体化している。

貼付突帯による各種文様として、口縁内面にめぐらせたものB128・B129・B148・B207～B209など6点みられ、この中には重弧文と竹管による刺突文を組み合わせたものB209があり、これらの土器の中でも新しい時期を示すものと考えられる。胴部外面には渦巻文を配するものB126・B127が2点出土した。

彩文土器は12点が出土しており、保存状態が良好なものもあり、全体に黒色物質を塗布し、その上に赤彩文を施したものと考えている。B139・B140は、同一個体と考えられ、細い頸部から口縁にむかい開くもので、口縁部には蓋と対になると考えられる穿孔があり、内側では蓋をかぶせた状態で周囲に文様が見えるように彩文しており、口縁端部か



挿図58 刻目の種類

B215 刻目Aタイプ、B221 刻目Bタイプ、B378 刻目Cタイプ
B137 刻目Dタイプ、B231 刻目Eタイプ、B412 刻目Fタイプ

ら頸部貼付突帯まで彩文が施されている。頸部は2条の相対するBタイプの刻目突帯を2帯有し、胴部の彩文は有軸の木葉文で飾られている。B140は、同一個体と考えられ、胴部上半で2条の刻目突帯がめぐらされていることから、木葉文も2帯以上あるものと考えられる。B142・B143も同一個体と考えられ、胴部上半に階段状文がめぐらせられ、最大径付近では、凸部を意識した刻目突帯を1条有し、さらに突帯の凸部の上下方向に孔を貫通させている資料である。B147は、壺胴部上半の段?+4条以上のヘラガキ沈線をもつもので、ヘラガキ沈線部に彩文を施し、胴部に山形文を描いている。その他の彩文土器では、口縁端面に施すものB148や、貼付突帯文間に彩文しているものB146がある他は部分的に彩文が残存しているもので、文様としては不明である。

SX02 出土の甕蓋は4点出土しており、B233は上面が平担で、すそ広がり口縁部にいたり、端面はほぼ垂直に仕上げられている。B234~B236の3点は上面が凹むものと考えられる。

SX02から出土した甕は、129個体を数えたが完形品はなかった。形態は如意形口縁を呈するもの111点(86%)、逆L字形口縁のもの18点(14%)である。如意形口縁のうちでも、口縁端部に刻目のあるもの68点(61.3%)や、刻目なしのもの11点(9.9%)、不明のもの32点(28.8%)があり、不明のものを除く比率では86.1%が刻目を有することになる。さらに如意形口縁をもつ甕の胴部文様として、無文のものB237などは5点あり、段?+ヘラガキ沈線のものB256・B257の2点ある他、貼付突帯を頸部にめぐらせるものB260・B261の2点と、ヘラガキ沈線9条以上を施文した下位に刻目突帯をめぐらせるものB262の1点がある。頸部文様としては、ヘラガキ沈線によるものが最も多く、1~3条までのものは79点(77.5%)、4条以上は23点(22.5%)を数える。逆L字形口縁をもつ甕のうち、口縁端部に刻目を有するものは10点(55.6%)で、刻目のないものは6点(33.3%)、不明は2点(11.1%)である。不明のものを除けば、刻目あり62.5%、刻目なし37.5%となり、如意形口縁をもつものに比べて刻目のない比率が高い。頸部文様は、無文が5点ある他、ヘラガキ沈線3条までが3点(25%)、4条以上は9点(75%)で、最多条は12条でB254・B255の2点あり、如意形口縁よりは多条化傾向がみられる。

甕におけるその他の文様は、ヘラガキ沈線間に竹管刺突文を施したものB258や、ヘラガキ沈線2条を単位とする山形文をめぐらしたものB259がある。端部の調整は、ヨコナゲによるものがほとんどで、僅かにハケ目調整がみえるものB245や、横方向のヘラケズリ調整を行うものB250がある。

鉢は20点出土しており、全体の器形を知りうるものはなく、口縁から胴部上半までの資料ばかりである。口縁のタイプは様々で、直線的に広がるものB305、直口のものB307、ゆるやかに外反するものB308~B312、口縁付近で屈曲し外反するものB314~B317、ゆ

第5表 SX02出土 竪口縁形態・胴部文様構成一覧表

文様と高さ	口縁形態			逆し字形口縁			点 数	百 分 率
	如意形口縁	刻目あり	刻目なし	不 明	刻目あり	刻目なし		
段	3+α	1					1	2 (1.6%)
	4			1			1	
無 文		3	2		4	2	11	11 (8.5%)
附付文書	1		1				1	2 (1.6%)
	1+α	1					1	
ヘ ラ ガ キ 沈 線	1	3		1			4	13 (10.1%)
	1+α	8	1				9	
	2	13		5	1		19	27 (20.9%)
	2+α	6		1	1		8	
	3	16	4	14			1	35 (32.6%)
	3+α	4	2	1			7	22 (17.1%)
	4	8	1	7	1	1	18	
	4+α	3			1		4	3 (2.3%)
	5			1	1		2	
	5+α			1			1	1 (0.8%)
	6						1	
	6+α							2 (1.6%)
	7				1		1	
	7+α	1					1	1 (0.8%)
	8							
	8+α							1 (0.8%)
9								
9+α							1 (0.8%)	
10					1	1		
10+α							1 (0.8%)	
11	1					1		
11+α							2 (1.6%)	
12					2	2		
12+α							2	
小 計	68	11	32	10	6	2	129 (100.3%)	
合 計		111	(86%)		18	(14%)		

るやかに広がりながら口縁付近でさらに外反するもの B313・B318～B324に分類される。また把手付のもの B306・B307が2点出土した。

また、土製品 BC1は高さ約6.5 cmで、先端は欠損し、中央部の周囲に凹みをめぐらせているもので用途不明の遺物である。

SX09は自然に生じた土塊状の凹地である。ここからは壺・甕蓋・甕の破片が出土したが完形品はなかった。

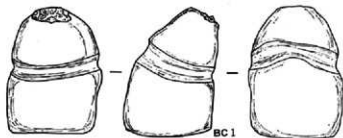
壺文様部は18点出土し、口縁部の破片では端部に刻目を有するもの B329や、内面に篋による2条の沈線を施すもの B330がある。頸部文様では、ヘラガキ沈線3条のもの B331・B337が2点あり、胴部文様では削出突帯+ヘラガキ沈線2条のもの B332と、段?+ヘラガキ沈線2条以上のも B333が1点出土している。刻目をもつ貼付突帯1条のものは B340～B342が3点あり、刻目なしで4条以上のもは B339が1点ある。また、胴部外面に貼付突帯による弧文をもつもの B343が出土している。

甕蓋は上面が凹んでいるもの B345が1点と、上面は僅かに凹み、さらに左右に大きくのびているもの B344が1点出土している。

甕は17個体出土し、そのうち如意形口縁が7点、逆L字形口縁は3点、不明が6点あり、口縁形態が識別できるものでは、如意形、逆L字形の比率は6:3である。また、ヘラガキ沈線をもつ直口縁のもの B356が1点あり、これは今回の発掘資料中でも唯一のものである。

SX10はD-3・4・7区で検出された弥生時代前期の自然流路であり、壺・甕蓋・甕・鉢がコンテナ約15箱分出土した。

壺は大・中・小型のもので、文様をもつ破片は41点である。口縁端部に刻目をつけ、頸・胴部に多条のヘラガキ沈線を施した完形品 B371や、口縁端面にヘラガキ沈線1条をめぐらせた上に縦方向の刻目を加え、頸部にヘラガキ沈線3条以上施された B373がある。大型壺の B373や、口縁が大きく開き、口縁端面に短い2条のヘラガキ沈線文をとまなり長楕円形の押圧文をめぐらせ、内面には、ヘラガキ沈線と三角形列点・竹管列点を組み



挿図59 SX02出土土製品 (S=1:2)

第6表 SX10出土 密文様構成一覽表

部 位		口 縁 端 部		頭 部		脚 部		
文様と条数								
段	+ 沈線 1							
	1+a					1		
	2							
	2+a					1		
	5							
	5+a					1		
埋線突帯	上 沈線 2			2	2 (9.1%)		3 (11.5%)	
ヘ ラ ガ キ 沈 線	1	1						
	1+a							
	2	1				2		
	2+a			1		1		
	3					2		
	3+a			2		2		
	4			2				
	4+a			4		2		
	5			1				
	5+a					2		
	6					2		
	6+a							
	7							
	7+a						1	
	8						1	
	8+a			1				
	9							
	9+a							
	10							
	10+a							
	11							
	11+a							
	12							
	12+a		2 (50%)	1	12 (54.5%)		15 (57.7%)	
貼 付 突 帯	1		割目あり	2	割目あり 1		割目あり 1	
	1+a				1	1		
	2						1	
	2+a							
	3							
	3+a			1	1	1	2	
	4			1		1		
	4+a							
	5							
	5+a							
	6							
	6+a			1	8 (36.4%)	1	8 (30.8%)	
三角形列点文		1	2					
口縁端部別み		1	(50%)					
合 計		4 (100%)		22 (100%)		26 (100%)		

合わせた文様をもち、頸部に断面三角形の貼付突帯6条+ α をもつ B376がある。また口縁端部を深く、幅広く押えて凸部を強調し、彩色を施し、頸部に断面三角形の貼付突帯を4条つけ、さらにその突帯上に棒状浮文を貼り付けているもの B377も出土している。

壺・頸部文様では、削出突帯+ヘラガキ沈線2条をもち、胴部にかけて寛による5条の直線文を施すもの B363があり、頸部文様と同じで、胴部が張るもの B364が出土している。ヘラガキ沈線で飾るものは、2～5条のものが10点あり、8条以上が1点と最多条は12条のもの B370が1点ある。貼付突帯による頸部文様としては、刻目をもたず、断面三角形の突帯をもち、精製された胎土で細かいヘラミガキ調整されたもの B375や、同種の小型の壺であるが、やや胴部の張りが少ないもの B374がある。また、頸部・胴部上半にCタイプの刻目突帯をめぐらし、最大径付近にも2条の刻目突帯を有する土器 B378がある。

壺胴部文様では、ヘラガキ沈線の上端を押えて形成した段?と、ヘラガキ沈線を施すもの B396～B398が3点ある。胴部のヘラガキ沈線を有する破片は、2～8条までみられ、この中には3条を単位に2帯6条をめぐらしているものなどがある。胴部の貼付突帯では3条+ α の布巻棒状瓦痕の刻目を有するもの B412や、刻目なしで、4条1帯のものを胴部最大径にめぐらせているもの B410や、6条以上で1帯のもの B411がある。この他に、上部を欠いているが、長い胴部を有する壺の底部中央に、焼成後の穿孔を有する土器 B379・B380がある。

蓋は、上面が凹み、縦方向にヘラミガキしたもの B382 1点が出土した。

甕は、24個体出土し、そのうち完形品は2点のみであった。形態は、如意形口縁をもつもの14点(58.3%)、逆L字形口縁は10点(41.7%)がある。如意形口縁の中でも口縁端部に刻目を有するもの8点、刻目がないもの1点、不明5点であり、不明分を除くと、刻目ありが88.9%、刻目なしが11.1%である。さらに、如意形口縁の壺の胴部文様として、無文のもの B383が1点ある他は、ヘラガキ沈線によるものである。1～3条までのものは3点(23.1%)を示し、4条以上のものは10点(76.9%)を数える。逆L字形口縁をもつ甕のうち、口縁端部に刻目を有するものは6点、刻目のないものは2点、不明2点で不明分を除くと、刻目あり6点(75%)、刻目なし2点(25%)となり、出土数の差はあるものの、SX02同様、如意形のもの、刻目のない比率は高くなっている。これらの刻目の中には、布巻棒状瓦痕のもの B389・B391の2点がある。また、逆L字形口縁成形技法も数タイプみられ、ここで一徹的なものは、直口あるいは、やや内傾ぎみの端部外側に、ほぼ水平に粘土帯を接合させるもので、この中でも端部が若干上方にそるもの B388や逆に下がるもの B421などがあり、また斜め上方に向かって、断面三角形の粘土帯を覆むもの B390もある。

第7表 SX10出土 罫口縁形態・胴部文様構成一覧表

口縁形態 文様と条数	如意形口縁			逆し字形口縁			点 数	百分率	
	刻目あり	刻目なし	不 明	刻目あり	刻目なし	不 明			
無 文	1						1	(4.2%)	
ヘ ラ ガ キ 沈 線	1								
	1+α								
	2						1	(4.2%)	
	2+α	1					1		
	3			2			2	(8.3%)	
	3+α								
	4	2			1		3		
	4+α	1			1	1	3	(25%)	
	5	2	1	3	2		8		
	5+α					1	1	9	(37.5%)
	6				1		1	2	
	6+α						1	1	(12.5%)
	7	1			1		2		
	7+α							2	(8.3%)
	8								
8+α									
9									
9+α									
10									
10+α									
合 計	8	1	5	6	2	2	24	(100%)	
	14 (58.3%)			10 (41.7%)					

胴部の器面調整では、ヨコナデによるものが多く、ハケ目調整によるものは B385・B390・B391・B420 の4点がある。また、挿図60-B436では、胴部下端の底部底面にかかるところに靉痕がみられた。

鉢は8点出土しており、斜め上方に直線的に開くもの B422 や、口縁にかけて外反するもの B393・B394・B424～B426 があり、把手をもつもの B424 や、把手が付き、さらに口縁近くにヘラガキ沈線4条以上を施すもの B423 がある。また小型の鉢で、口縁に刻目をもち、胴部にヘラガキ沈線1条を施し、胴部は縦方向のヘラミガキを施し、近くにヘラ状工具による、“あたり”がみられるもの B392 がある。

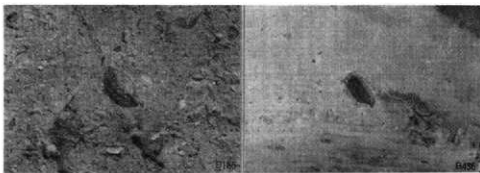
D地区における包含層や表面採集の土器として、D-4区にて表面採集された、ヘラガキの、木葉文土器 B325 がある。ヘラガキ沈線2条によって縦・横方向に区画し、その間に木葉文を描いた壺胴部破片であり、工業普通分類 X₇ に比定されよう。D-1区包含層

からは、削出突帯＋ヘラガキ沈線1条をもつ壺 B 326・B 327 が2点出土している。D-5 区では淡黄褐色中砂層の弥生時代中期土器に混在して、前期土器が出土したもので、B 427・B 428は、頸部にヘラガキ沈線を施した壺で、B 429は、口縁内面に刻目をもたない2条の貼付突帯をめぐらせたものである。また、頸部に刻目のない貼付突帯をもつ土器 B 432が出土している。要では、口縁形態が判るものは B 431・B 434の2点のみで、いずれも逆L字形口縁である。

E地区は大津茂川左岸部調査で、縄文～現代に至る遺物が混在していたもので、この中から、口縁が小さく開き、頸部にヘラガキ沈線3条を施し、器面をハケ目およびヘラミガキで調整された土器 B 435が出土した。

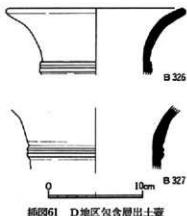
以上、各地区の遺構や自然流路等を説明した。そこで、各地区の土器の形態や文様等から様相を比較し、編年上の細分が可能であるか試みたい。

出土遺物の豊富さでは、C地区 SX02 とD地区 SX10 の両自然流路のものに代表される。SX02 出土の壺の様相は、削り出しや押えによる新しいタイプの段がみられ、古いタイプの段はみられない。その例としては B 81・B 83・B 159～B 161の5点にみられ、段第



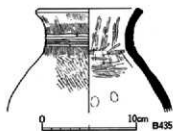
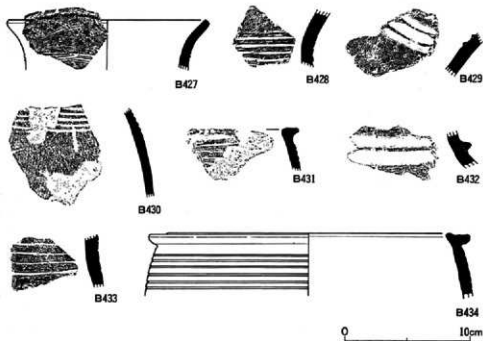
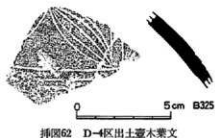
挿図 60 弥生時代前期土器底部の韜痕(2倍)

Ⅰ種のものではなく段の上・下位にヘラガキ沈線Ⅰ～4条が施されている第Ⅱ種のものばかりである。また佐原編年の古段階にみられるような口縁が短く外反し、胴部が若干張る形態に近いと考えられるもの B 82・B 83がある。特徴的な器形としては B 81のような頸部が細く長くのび、口縁で小さく外反するタイプがみられる。この器形に類似する土器は、兵庫県神戸市北青木遺跡⁸⁾にみられる他、大阪府東大阪市山賀遺跡⁹⁾や広島県深安郡神辺町大宮遺跡¹⁰⁾などで出土している。



挿図 61 D地区包含層出土壺

削出突帯第Ⅰ種は B85・B88・B162 の 3 点のみである。これに対し、削出突帯第Ⅱ種少条は B86・B87・B89・B91・B92・B106・B163・B166・B169 など 14 点、第Ⅱ種多条は B90・B96・B170 の 3 点で、いずれもヘラガキ沈線は 4 条である。削出突帯や段との文様の組み合わせのものは B88・B180



挿図64 E地区出土壺

土のものでは、2～4条のものにほぼおさまる。

貼付突帯については前述したように、同一個体中に削出突帯と組み合わせられているもの

の 2 点でいずれも刻目貼付突帯 1 条をともなっているもので、弥生時代前期の貼付突帯の初現を示しているものと考えられる。ヘラガキ沈線については、頸部・胴部共 3 条のものが最も多く、最多条のものは C-6 区出土の 9 条である。いずれにしても、壺におけるヘラガキ沈線は、2～4 条程度のものが総数の 82% を占めており、SX02 内、C-3・C-4 区出

の他、ヘラガキ沈線少条のものと貼付突帯1条とで構成されているものB121・B133・B231なども古い様相を示すものである。また、刻目のない断面三角形や、刻目のある1～2条の貼付突帯をもって頸部や胴部の区分文としている、B121～B125・B130～B134・B137・B139～B144などが古いタイプに含まれよう。また、多条化傾向を示すこの他の貼付突帯については、新しい要素を含んでいるが、すべて新しい段階のものであるとは即断できない。

つぎにD地区 SX10 自然流路から出土した壺について述べる。削出突帯第Ⅱ種少条を示すB363は、古い様相を示す。B364も同種の削出突帯をもつが、頸部下端にあることや、胴部には文様がないことなどから新しい傾向がうかがえるものである。この他、完形品のプロポーションには著しい変化はないものの、口縁端部に刻目などによる裝飾が顕著になり、ヘラガキ沈線による頸部文様においても4条以上のものが9点(75%)にも及んでいる。貼付突帯による頸部文様ではB374・B375・B378のように刻目貼付突帯のものは存在するが、胴部の文様がなかったり、頸・胴部間に文様を付加するものが現れる。しかし全体の傾向としてはB376・B377のように多条化し、しかも貼付突帯間に棒状浮文を加えるものが出現している。この他、貼付突帯3条1帯のものや、それ以上に及ぶ多条のものも顕著になる。

以上、C地区 SX02 とD地区 SX10 の壺について述べたが、SX02 ではSX10より段十ヘラガキ沈線・削出突帯をもつ比率は若干高く、SX02が(17.6%)、SX10は(13.8%)で、ヘラガキ沈線は少条のものが主体で、貼付突帯の中には区分文を示すような、頸部や胴部に1～2条のものをめぐらせている。これに対してSX10では、文様が多条化しておりSX02より新しい傾向は明らかである。

壺については、SX02では段?のものB256・B257が2点(1.6%)を示す。また、ヘラガキ沈線少条(1～3条)のものは63.6%をしめ、それ以上の条数は12条まであり、25%をしめる。また、逆L字形口縁をもつものは5点で、C-2区やC-6区のSX03と考えられる所からのものが13点で、C-2・C-6区を含めた比率でも14%である。これに対して、D地区では段や削出突帯をもつ壺はなく、ヘラガキ沈線少条のものが12.5%で、多条のものは4～7条があり、83.3%、その内5条のものが37.5%を示している。さらに、加意形口縁14点(58.3%)に対し、逆L字形口縁のものは10点(41.7%)にも及んでいる。

以上壺に関しては、SX02ではヘラガキ沈線少条のものが6割以上を占めるのに対し、SX10では僅かに1割強を示すにとどまった。また、逆L字形口縁の割合では、SX02が新しい時期の遺物混入を加えても、1割強であるのに対して、SX10では、4割強と半数近くを占める。これらからヘラガキ沈線少条を主体とするSX02が古い段階で、ヘラガキ沈線が多条化し、さらに逆L字形口縁が4割強を示すSX10は、新しい段階であり、

SX02 が古く、SX10 が新しいと考えられる。以上、編年のな位置づけは、C地区 SX02 が佐原編年¹¹⁾の中段階の新しいところ、井藤編年¹²⁾I-c 段階で、後述する播磨前期弥生土器編年c 段階である。D地区 SX10 が、佐原編年新段階、井藤編年 II-a 段階に相当するもので、播磨前期弥生土器編年d 段階と考えられる。

そこで、C地区SX02、D地区SX10の様相を他の遺構出土土器と比較してみるとどうだろうか。

A地区出土遺物は、壺破片が出土したのみであるが、胴部上半にヘラガキ沈線2条+上位に寛による山形文が施されている点からすると、c段階に比定できよう。

B地区SD01は、ヘラガキ沈線3条の1点のみの出土で比較の対象とはならない。SD02では、壺に段³⁾が存在するが、胴部にヘラガキ沈線多条のものがあり、壺では如意形口縁のものはヘラガキ沈線少条がある反面、逆L字形口縁が2点あることから、c、d段階が混在している。B地区SX01においては、段+ヘラガキ沈線1条のものB25がある反面、新しい要素である口縁端部に刻目を施すものB27がある。壺では、如意形口縁でヘラガキ沈線少条のB31は、口縁が逆L字形にちかく屈曲している。以上、SD02同様c、d段階が混在するものであろう。

C地区ビツト出土の壺B78は、口縁端部の装飾とヘラガキ沈線が多条化していることからd段階のものであると考える。

D地区においては、包含層出土の2点B326・B327は、頸部に削出突帯第Ⅱ種少条をもつもので、c段階である。SX09では、削出突帯や段³⁾が各1点ずつあるが、口縁端部の装飾や貼付突帯多条、貼付突帯による弧文などの新しい要素がみられることや、壺においても逆L字形口縁の比率が高いことから、c段階を含むが、多くはd段階のものであろう。D-5区包層出土の壺は、ヘラガキ沈線多条や、壺の逆L字形口縁の様相からd段階であろう。

また、E地区出土の壺は僅かに口縁が開き、頸部にはヘラガキ沈線少条ということから古い要素をもっているが、これだけでは不明である。

以上、各遺構や自然流路単位で、C地区 SX02 を代表とする古い要素を示すc段階と、D地区SX10に代表される新しい要素を示すd段階の2つの段階に分けたが、姫路市教育委員会が昭和55年度に実施した丁・柳ヶ瀬遺跡北端部調査で出土した遺物の中に、貼付突帯で流水文を描き、半截竹管による山形文を施したり、壺においては、逆L字形口縁の胴部にヘラガキ沈線多条を描き、その下位に刻目をもつ貼付突帯をつけたものなどが多く出土し、弥生時代前期の最終末の資料を含んでいることが判明した¹³⁾。このことは兵庫県教育委員会発掘分の、D地区 SX10 の資料よりさらに新しい時期c段階を示す遺物と考えられ、井藤編年の II-b 段階に相当するものと考えられる。これらから丁・柳ヶ瀬遺跡の中で、連続する3つの段階が設定できる資料が提示されたことになろう。

播磨における前期弥生式土器の様相

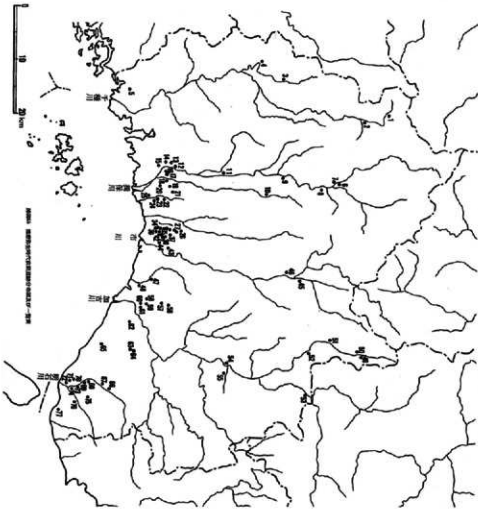
播磨の弥生前期をめぐっては、今里幾次の一連の業績がよく知られている。今里は縄文から弥生への移行期に関して注目すべき提言を続けてこられ、当地方の弥生前期の動向は「播磨弥生式土器の動態」などでまとめておられる¹⁴⁾。ここでは、以来資料の増加した播磨の現状を簡単に紹介し、つづいて土器の変遷についての若干の整理を試みることにする。

現在、管見にのぼる弥生前期の土器を出土した遺跡は、挿図65に掲げたように約80を数えるに至っている。各水系の下流域の平野部を中心に、川筋をさかのぼり、かなり奥まで前期の遺跡が分布している状況がうかがえる。しかし、それらの多くは、少量の土器の存在を知るにとどまるものであって、石器その他についての情報はきわめて少ない。量的に多くの土器の出土をみたものも、遺構ともなつて検出された例は限られている。遺構の検出された例も多くなく、住居址も、玉津田中¹⁶⁾・常本¹⁷⁾・砂部¹⁸⁾の三つの遺跡で知られているのみであり、集落の実態は現状では不明といわざるをえない。したがって、この分布一覽は弥生前期の集落の分布傾向を把握するために、知りうる土器出土地点を集成したものと理解されたい。たとえば、姫路市の平野部に密集する諸遺跡も、地元の研究者諸氏の地道な調査によって土器が採集されたものが多く、集落の分布等を考える場合には各々の性格を十分考慮すべきものである。

近畿地方の弥生前期の土器編年は、近年、佐原真による古・中・新の三段階区分案を批判的に継承するかたちで、井藤暁子の五段階区分案が提出されている。佐原による細分は基本的に正しいが、現状とくいちがう点が出てきたところがあり、再編を試みられたものである。

播磨に関しては、佐原と同様の基準で、前期Ⅰ～Ⅲに区分する今里²¹⁾の案が用いられてきている。本報告では、播磨の前期の土器の変遷を、いさ少し詳細に追うために、a～cの五段階に細分を試みる。ただし、現在報告されている限りでは、良好な一括資料も乏しく、各段階を明確に区分するのは困難であるといわざるをえない。幸い、前述のように、丁・柳ヶ瀬遺跡において、兵庫県教育委員会調査のC地区・D地区、姫路市教育委員会調査の北端部²²⁾で各々の傾向の異なる土器群を検出したので、その様相をふまえて、今後の再検討²³⁾を前提にきわめて不十分なものであるが、a～cの各段階の概略を提示することにする。

〔a段階〕 削出突帯が出現する前の段階である。吉田遺跡²⁴⁾がこの段階の標式遺跡として古くから知られている。壺形土器（以下壺と略する）の口縁・頸・胴部の区分文として段の使用がさかんであり、段階Ⅰ種・第Ⅱ種²⁵⁾がみられ、寛拙沈線を用いるものも少条をこえない。また、山形文・重弧文・木葉文等の文様も盛行している。壺形土器（以下壺と略す



NO.	NAME	LOCALITY	PLANT SPECIES
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

LIST OF PLANT SPECIES COLLECTED AT THE ABOVE LOCATIONS

NO.	NAME	LOCALITY	PLANT SPECIES
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

第8表 播磨の弥生時代前期土器文様等変遷表

時期	前 期					中期	
段階	a	b	c	d	e		
文 様 等 の 変 遷	段						
		削出突帯					
			貼付突帯				
					半載竹管		
	ヘラガキ沈線	少条		多条化	極多条	櫛目文	
					瀬戸内型使		
					三角形列点文		
					棒状浮文		
					円形浮文		
					突帯による弧文・重弧文		
主 要 遺 跡			丁・柳・瀬 C地区	丁・柳・瀬 D地区	丁・柳・瀬 北端部 門前 斑鳩寺		
			今宿・丁田 褐色土層	今宿・丁田 褐色土層	八反長 小山VIII 代田 小山VII		
	吉田	田中D3 調査区		砂部土器焼 成土壌	東中 東神吉土塚 1-5 砂部A地区 前期溝		
佐原編年	古	中	新		(近畿)		
今里編年	前期I	前期II	前期III		(播磨)		
井藤編年	I-a	I-b	I-c	II-a	II-b	(近畿)	
高橋編年	I期a	I期b	I期c	II期a	II期b	II期c	(山陽)
藤田編年	前半a	前半b	後半a	後半b		(中尾 瀬戸内)	

る)は如意形に外反する口縁部を有し、多くは口縁端に刻目を施し、頸部は無文であるが、段をもつもの、少条の篋描沈線を有するものもみられる。

この段階の資料はきわめて限られており、今のところ、播磨では明石川流域以外では明確な例は知られていない。²⁶⁾

〔b段階〕 削出突帯が出現する。削出突帯の古い段階であり、第Ⅰ種・第Ⅱ種少条がみられる。篋描沈線をめぐらせる例も少条にとどまる。木葉文をはじめa段階にみられた各種文様も盛んであり、刺突文などもみられる。前段階にひきつづき区分文の意識が明らかであり、段・削出突帯・篋描沈線によって口縁・頸・胴部を区画する。堿はいわゆる如意形に外反する口縁をもち、頸部にめぐる篋描沈線も少条をこえない。

播磨では明確にこの段階であると指摘しうるまとまった資料は多くないが、玉津田中遺跡D3調査区²⁷⁾の土器はこの段階と考えるとよいだろう。

〔c段階〕 削出突帯に加え、貼付突帯が新たに出現する。段の手法も残存するが顕著ではない。壺における区分文の意識は残るが、帯状文への変化の方向も認められる。区分文としての意識が残るものも、壺の成形の技法との関連は希薄になっているものが多い。壺口縁部の発達もめだつようになっている。

削出突帯は第Ⅱ種多条がみられるが、第Ⅱ種少条も多く、第Ⅰ種もある。ただし、削り出す手法は、明確に高く削り出す例は少なくなっており、ハケ、ヘラ磨きの技法によって突帯をうかがひがらせる、明確に削り出さない手法のものがめだつ。また、削出突帯とは認定したがいが、2条の沈線の上下と沈線間の調整の手法の相具によって削出突帯と同様の効果を求めたと思われる例も観察できる。

この段階に出現する貼付突帯は、高く明確に貼り付けられるもので、刻み目が付加される場合も、明確かつ整ったものが多い。²⁸⁾ 貼付突帯の条数は一条ないし少条である。幅広い粘土帯をめぐらせ、その中央をすどく窪ませて二条の突帯を形成する例もすでに出現していると思われるが、これも大きく明確に突出する類型である。また、壺の口縁内に施文される貼付突帯もこの時期にはじまっているようである。

篋描沈線も少条を単位とし、多条は少ない。

堿は、基本的には如意形に外反する口縁のもので占められている。しかし、逆L字形の口縁を有する堿が、ごく少量ではあるが、すでにこの段階で出現している可能性も考えておきたい。堿頸部の沈線も多条にわたるものは少なく、少条をめぐらせたものが主流である。削出突帯や段をもつものも微量存在する。

丁・柳ヶ瀬C地区の主体がこの段階であろう。ただし、C-2区、C-6区等は明らかに様相が異なっており、時期が下るものと考えられる。

現在c段階に考えている要素のうち、若干は次の段階に下げて理解すべきかと思われる

点もあり、より純粋なc段階を追う必要がある。

〔d段階〕 淵出突帯はほとんど見られなくなり、貼付突帯が盛行し多条化傾向を示す。篋描沈線も多条化し、数条を単位として施される例が増加している。すでに、帯状文の段階に移行している。

甕では、逆L字形を呈する口縁部をもつ、いわゆる瀬戸内型甕が出現しており、その分布が濃厚な地域の東端部を形成する。

次の段階にさらに顕著になる要素のいくつかがこの段階に出現しているようである。壺の口縁部に沈線や刻みを加える例、口縁内の加飾化などである。三角形列点文などもみられる。貼付突帯二条をつなぐように施される棒状浮文もこの段階のおおりに出現する可能性がある。しかし、現時点ではd段階とe段階の区分には、やや流動的な要素を残している。

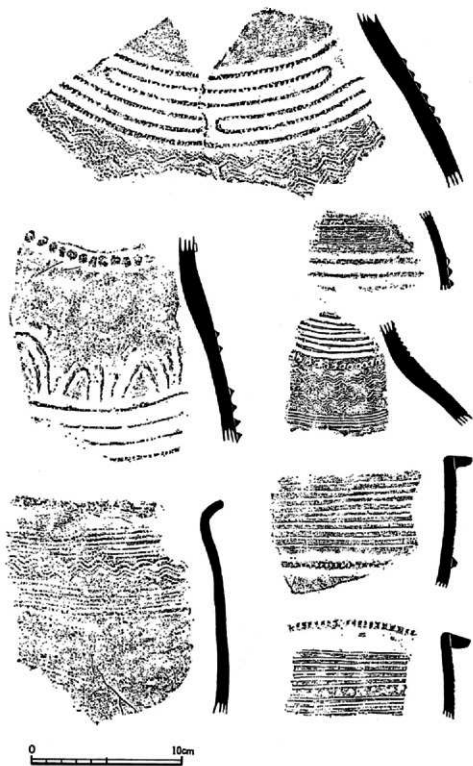
丁・柳ヶ瀬D地区の土器の主体がこの段階だと考えられるが、若干c段階にさかのぼる資料などが混入している。

〔e段階〕 播磨の地域色を強く発現してくる段階である。壺における貼付突帯、篋描沈線の多条化は極限に達し、多様な装飾が複雑なまでにみられるようになる。甕も播磨においては飾られた甕が主体をなす。また半截竹管による施文が出現する。

この段階の貼付突帯は、数条を接して施し幅広い突帯文帯を形成するもの、三条程度を単位とする場合は何帯かが壺頸部から胴部にかけて連続して施されるものなどが多く、多条化が著しい。何条かの突帯を接してならべる際に、一条ずつ貼り付けるものの他に、幅広いM字状の突帯の上にさらに一条の突帯を付加し三条の突帯を形成するというような手法を用いる例もみられるようである。また、突帯もやや小ぶりて弱い感じを与えるものがめだつようになり、強くナデ付けることによって形成された突帯が数条連なって一つの文様帯を形成する例が特徴的である。刻み目を施す場合も、弱く小さいもの、あるいはやや乱れる例が多い。

篋描沈線も盛行し、壺において、また特に甕の頸部において、きわめて多条を接して施文し、一定範囲を沈線によってうずめつくすという感がつよい。なかには螺旋状に一気に施文するもの、沈線が重なりあい、切り合っており、部位によって条数が異なるものなどもみられ、また、淵出突帯の手法をともなって幅広い沈線文帯を強調する例も存在する。²⁹⁾すなわち、貼付突帯も篋描沈線もそれ自身が幅広い帯状文となり、ある場合にはそれらが組み合ったり、赤色に彩色されたり、各種文様をともなったりして土器の表面をめぐるのである。

三角形列点文・円形浮文・棒状浮文なども盛行し、前述のように半截竹管による施文も出現し、直線文・山形文・波状文・流水文³⁰⁾などがみられる。また貼付突帯によって、波状文・流水文などを施文する例もみられ、弧文・重弧文を連ねるものもきわだつ。当地方の



揮図66 丁・柳ヶ瀬遺跡北端部出土遺物

特徴的なもののひとつである。この突帯による弧文はd段階からみられる可能性があるが、c段階のものは端部まで鋭い稜を形成するものより、弧文の端部を平たく押える特徴をもつものが多いようである。なお、この弧文は突帯文帯の下にめぐらされる例が多く、その間を赤く彩色した例も確認されている。

壺の口縁端部に、沈線文・刻み目・斜格子・貼付突帯などを付加したり、口縁内部にもおびたしい装飾を加えることも盛んである。

壺の形態も多様化し、やや肩のはった胴部に長く大きく開く口縁をもつものや、長胴化し、ごく短い口頸部をもつものなどがあらわれている。

甕では、瀬戸内型の増加が著しい。播磨でも東播と西播、また西播でも遺跡によって逆L字形口縁の甕の比率は一律に考えがたい面があるが、d段階にくらべて増加は著しいといえるようである。甕の口縁部形態には、如意形、逆L字形と区分するだけでは不十分ないくつかのヴァリエーションがみられる。また、丸く胴が張る甕、細長く胴がのびる甕などもめだちはじめ、器形にもいくつかのグループがみられる。さらに細かい検討が必要である。この段階の甕は、前述のように頸部にきわめて多条の沈線を有するものが一般的であり、半截竹管による直線・波状文などを有する例もみられる。これに三角形列点文・円形浮文・貼付突帯などをめぐらせるものも特徴的である。量的には少ないが、無文で荒いハケをもつ一群もともなっている。

古くから指摘されている円形浮文の他、突帯による弧文・重弧文をはじめ上述のように播磨の地域色を示す土器がみられるが、たとえば、円形浮文等はより西播に著しいようであるし、瀬戸内型甕の比率その他微妙な差異が播磨のなかでも存在する。さらに検討すべき点である。

また、この時期の特徴をそなえた土器と櫛描文を有する土器が共存する例や、同一個体に篋による沈線と櫛描の施文が存在する例などが知られてきている。c段階の後半をさらに分離できる可能性も含めて、中期との境界をどこに求めるか、他の地域との併行関係にも留意しつつ、今後さらに検討を重ねる必要がある³¹⁾。

以上、a～cの各段階について概観したが、すでに述べたように、まだ流動的要素も多く、今後の詳細な検討によって補足訂正を期する所が多々あるが、現状では次のような状況がうかがえよう。すなわち、a段階で播磨に出現した瀬戸内地方最古に属する弥生土器³²⁾は、c段階には各々の小地域の主要な地点に分布するようになり、以後遺跡の増加の度を強めつつd段階では瀬戸内地方と通じる特色を明確にしはじめ、e段階ではその中で播磨的色彩を発現してくる³³⁾。そして、形態的にはe段階と顕著な変化をみせぬまま篋描沈線文と櫛描文がおきかわってゆき、中期への移行をはたすのである。

註

- 1) 当遺跡出土の弥生時代前期土器のうち、完形品は壺・甕・甕蓋を含めて7点のみである。
- 2) 用語については、佐原真の論文に従った。
 - (A) 田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学Ⅱ 弥生時代』河出書房 1966年。
 - (B) 佐原真「山城における弥生式文化の成立—畿内第一様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」『史林』50-5 1967年。
 - (C) 佐原真「畿内地方」『小林行雄・杉原莊介編—弥生土器集成本編2』1968年。
- 3) ここで出土した段は、粘土の凝り目から生じる区画文ではなく、笄書き沈線の上・下を笄状工具で押えたものや、さらにコナダを施す手法が多く、段?は前述の手法がうかがえるものの、小片のため段か削出突帯かが不明なものであり、ここでは段?という表現を用いた。
- 4) 同種の口縁をもつものは、神戸市東灘区北青木遺跡、昭和59年度兵庫県教育委員会発掘資料中に、壺口縁部が波状口縁を呈し、内面に半截竹管による弧文を描き、頸部外面に笄書き沈線4条以上をもつ例がある。また波状口縁の影響は中部瀬戸内地域の縄文晩期凸帯文土器にみられるのか、近畿地方の浅鉢にみられる波状口縁の影響があったものか判断しがたい。
- 5) 複数の突帯を密に貼り付けるため、突帯間に生じる凹部が器面に達していないものを言い、この場合、4条で一帯を示すものである。
- 6) この時期の階段状文様については、我国での出土例はなく、昭和4年に東亜考古学会が報告した中国遼寧省新金県龍子宮単砦子の遺跡からの出土例や、同報告書中にメキシコ出土のものが紹介されており、この文様は自然発生するものと論ぜられている。また、単砦子出土の土器年代とは近似するものの、有機的な関係は今のところ不明であると言わざるを得ない。
- 7) 工業普通「達賀川式土器における木葉文の展開」『文化財論叢』同朋社 1983年
- 8) 昭和59年度兵庫県教育委員会により発掘調査されたものである。小川良大氏にご教示いただいた。
- 9) 西口陽一・宮野淳一・西美佐子「山賀(その3)」財団法人大阪文化財センター 1984年
- 10) (A) 小郡隆・上村和直「大宮遺跡第1次調査概報」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1978年
- (B) 是光吉基・桑田俊明・新谷武夫「大宮遺跡第2次調査概報」広島県教育委員会 1979年
- (C) 中田昭・桑田俊明「大宮遺跡第3次調査概報」広島県教育委員会 1980年
- 11) 註2の文献と同じ
- 12) 井藤暁子「入門講座弥生土器—近畿1—」『考古学ジャーナル』No. 195, 1981年
- 13) 姫路市教育委員会 秋枝芳・山本博利両氏に遺物を実見させていただいた。
- 14) 今里鋭次「播磨小山遺跡埋没地点の弥生式土器—弥生式文化初期の—様相—」『古代学研究』32, 1962年
- 今里鋭次「播磨弥生式土器の動態」『考古学研究』15-4, 1964年など。
- 15) 播磨の弥生前期遺跡の分布をめぐっては吉田昇「弥生集落の立地と分布—播磨を中心として—」『縄文から弥生へ』1984年がある。
- 16) 山本三郎他「玉津田中遺跡調査概報Ⅰ」1984年
- 17) 神戸市教育委員会「常木・西ノ口遺跡現地説明会資料」1978年
- 18) 岡本一士「砂部遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』1985年
- 19) 註2文献(B)と同じ
- 20) 註12と同じ
- 21) 註14の1964年文献と同じ
- 22) 今宿丁田遺跡発掘調査団「姫路市今宿丁田遺跡出土遺物について」『第9回埋蔵文化財研究会資料』1981年に資料の一部が提示されている。
- 23) この五段階区分案の作成にあたっては、昭和56年に兵庫県教育委員会で開かれた通称「すずめ

の会」での丹治康明氏をはじめ各氏の発表に教示をうけたところが大きいことを記して、感謝したい。

なお、各段階の土器のバリエーションを十分把握しかねるため、器種構成等については記述が不十分であり、全器形がわかる例が乏しいことから、筆文法などにかたよった記述となった。各期の主要な遺跡や諸先学の編年との関係等についても十分ふれることができなかった。第8表を参考にしていきたい。また、主要な資料や文献は、吉田昇・釜江秀典「兵庫県(播磨・摂津西部・淡路)『弥生前期地域論』1984年」に示してある。

- 24) 直良信夫・小林行雄「播磨吉田史前遺跡の研究」『考古学』3-5, 1932年
- 25) 技法、文様等の呼称はおおむね註2の佐原論文に従った。
- 26) 吉田の南800mにある片山遺跡(田辺昭三「吉田郷土館歴史資料展示室のしおり」1973年)でも古い土器が出土している。詳細は未報告であるが古段階にさかのぼるといわれる。
また、今里は前期Ⅰの設定にあたって吉田の他に岸の土器をあげておられるが、岸の資料で古く考えうるものは、段と重弧文をもつ壺の肩部の小片3点のみである。報告書(喜谷美宣「岸遺跡発掘調査報告」1961年)で、晩文晩期の土器中に混在していた可能性が指摘されるなどきわめて注目すべき土器であるが、この土器片の段は沈線をはいてその上方を軽く削り、主としてヘラ磨きの技法によって低くしたものであって、小片のなかにおいても段の形成が不十分な部分もみられ、この3片をもって積極的に近畿地方最古の弥生土器と対比するのは躊躇を覚える。やや時期が下る可能性を考えたい。なお、岸の弥生土器はこの3片をのぞけば、d段階以降のものが中心である。
- 27) 註16文献。なお、田中の壺の中に2点縄文系突帯文土器の口縁部と類似する形態のものがあり、1点は削出突帯Ⅱ種少朱の壺、高坏と同一の土壌で検出されており、注目される。
- 28) 貼付突帯を形成する際に、沈線文で下描きをした上に貼り付ける様子が観察できる例も少ない。この手法はe段階に限らず認められる。後出の進L字形口縁の壺口縁にも同様の手法を用いて形成する例がいくつか確認できる。
- 29) 千代田(註21文献)や東中(上月昭信ほか「東中遺跡発掘調査報告書」1981年)などにみられる。
- 30) 弥生前期の流水文については、今里幾次「播磨弥生土器の半截竹管文」『兵庫考古』19, 1984年で分類、変遷が整理されている。
- 31) e段階の土器群と樹描文が伴う例としては、今里も、かつて中期Ⅰの設定にあたって「遠賀川式後半の土器と複合する」例として、小山Ⅱ地点、辻井坂B地点の土器をあげておられる(註21文献)が、加えて、丁・柳ヶ瀬北端部の資料(註22文献)などが知られるようになった。播磨の中期前半の土器の出土例が貧弱であることもあって、当地方の前期から中期初頭にかかる様相を示すと思われるこれらの例は注目される。このような共存例は他にもいくつか指摘されている(森岡秀人「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大畠一小野忠博博士退官記念論集-1』1984年)し、中部瀬戸内の様相の検討からは、「初期樹描文土器出現期においては籠描文の壺・甕を補充するような形で共存して使用されていたことが考えられる」という指摘(伊藤実ほか「亀山遺跡-第2次発掘調査概報-」1983年)もなされている。
- 32) 本報告では、播磨における、いわゆる弥生前期の土器の変遷の概略を示すことを目標としたため、縄文土器との関係についてはふれなかったが、播磨に関しては、今里も「縄文式土器と弥生式土器は後者の前期前半の期間だけ並列して存在した」と推論しておられる(註14, 1962年文献)し、早くから注目された紀伊の状況(森浩一・白石太一郎「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相」『考古学ジャーナル』33, 1969年)などの他に、近年では、大阪平野でも長原式と古ないし中段階が共存する可能性が指摘されている(大野薫「大阪平野の縄文晩期終末の遺跡」, 中西靖人「前期弥生Ⅱの二つのタイプ」『縄文から弥生へ』1984年)などにま

とめられている)など、この時期の土器を考えると、突帯文土器との関係や、その伝統を具体的にどのように理解するかはきわめて重要な点であって、各遺跡における両者のあり方、土器の組成の問題、変形土器を中心とするさらに詳細な分析等を通して、単なる類似の指摘にとどまらない体系的理解が必要であろう。

- 33) 播磨では、c段階をさかのぼることが明確な遺跡は今のところきわめて少ない。明石平野にa段階からの系統的な発展をたどらう資料がみられるのが目をひく程度であり、特に前期末にはきわめて多くの遺跡が知られるようになる西播地方では、a、b段階の土器は未検出である。しかし、これは存在の可能性を否定するものではない。この問題は、縄文晩期の集落のあり方、またそれが弥生集落といかなる関係にとらえるのか、そしてその関係が地域によってどのような特徴を、そして変化を示すのかという問題と密接にかかわる点でもあり、いましばらく調査研究の進展をまちたい。
- 34) 井藤は、近畿地方各地のⅠ-b段階における地域性について述べておられる(註20文献)が、瀬戸内地方をみても、前期後半に形成された瀬戸内型変分布圏のなかに前期末には播磨をはじめいくつかの地域で、それぞれ特徴的な文様や形態を有する土器が出現することが指摘できる。

2. 弥生時代中期 (図版53・54, 第34~37図)

D地区, B地区, SX03, 及びE地区より弥生時代中期の土器が出土しているが, 他の時代の遺物に比べ出土量は少ない。また, 包含層もしくは表面採集の資料がほとんどで一括性は乏しく, 個々の併行関係も十分に把握しえなかった。

D地区 (B501~B528)

溝SD17やD-5区, D-6区の自然流路の砂や暗灰色粘土層からやや多く出土している。

壺 (B501~B504, B507)

B501は外筒気味に開く口縁部で, 端部の肥厚はみられない。外面はススが付着しており, 部分的にヘラミガキが行われている。B502は口縁端部が上下に若干拡張し, 頸部の突帯には指頭圧痕を施す。口縁部が水平に近くのみ, 端部は丸く肥厚する。外面はヘラミガキで調整を行い, 胎土は精良である。B504は口縁端部を欠損した頸部である。櫛描きによる波状文と直線文を加飾, 内面調整はハケとヘラケズリを施している。B507は口縁部が直立しなだらかに体部にいたる無頸壺で, 口径は13.6cmである。外面はハケの上から7条もしくは3条+4条の櫛描きの波状文と直線文を交互に配している。胎土に砂粒を含み, 淡褐色を呈する。

鉢 (B505, B506)

いずれも口縁部が直線的に開く鉢である。B505は口径23.6cmの大型のものである。外面は5条の突帯をめぐらせた上に棒状浮文を加え, 突帯の下位と口縁端部に円形浮文を貼りつけている。B506は口縁部外端に刻み目を施し, 外面を10条単位の直線文と波状文で飾る。口径は16.5cmである。

甕 (B508~B516)

すべて口縁部は「く」の字に屈曲し, 口径が腹径を超えないB508, B510, B511, B515, B516とそうでないものがある。B508は口縁部全体が肥厚している。B509の口縁部は逆「L」字に近く屈曲し, 口径は16.4cm精良な胎土を使用している。B510は端部が内側へわずかに肥厚し, B511とB512では丸く終わる。口縁部が全体に肥厚し, 端部は上下に拡張されたB513とB514は, 端面に斜めの刻み目を入れ, さらに円形浮文を貼りつける。口径はそれぞれ24.7cmと31.0cmをはかり, 大型甕である。B515とB516も大型の甕で, B515は口縁端部が内側に肥厚し, B516も上下にわずかに肥厚している。いずれも調整は不明である。

高杯 (B517~B520)

B517は口縁部が水平にのび、端部はわずかに垂下する。また、口縁部内端部には断面が台形を呈する突帯をめぐらせている。B518からB520は脚柱部である。B518は外面を櫛掻き波状文と直線文で飾り、施文の後に円孔を穿つ。B519は断面三角形の突帯を2条貼りつけ、B520は外面に縦ヘラミガキを行う。

蓋 (B521)

上面は段をもってくぼみ、外面を指でおさえて突帯状のつまみを作り出している。内外面ともにヘラミガキで調整する。

底部 (B522～B528)

B522とB524は平底もしくはわずかなあげ底である。B523は高台状の底部で、外面はハケ、内面は指オサエを行う。B525からB528はわずかなあげ底に穿孔を施している。

B地区 (B529～B537)

B地区の南西隅を蛇行する旧河道、暗灰色粘土と砂層の中から弥生時代前期の土器と混って出土している。

壺 (B529～B531)

B529は口縁端部を欠損した壺の頸部である。外面に断面三角形の突帯を2本貼り、内外面をハケで調整する。B530は口縁端部を上下に拡張し、端面に3条の凹線を加える。B531は口縁部を欠損する球形に近い体部である。外面はヘラミガキ、内面は指オサエの後一部ハケで調整する。

甕 (B532～B535)

B532とB533は口縁部が「く」の字に屈曲し、体部は大きく張る甕である。口縁端部は上方に鈍く拡張し、口径はそれぞれ17.2cmと15.5cmである。いずれも内外面はハケで調整を行っている。B534は口径18.5cmで腹径を上まわる。内外面はハケを行う。B535は完形に復原しうる資料で、口径17.2cm、器高26.4cmをはかる。口縁端部はつまみ上げるように上方に拡張されており、体部は倒卵形を呈する。調整は外面上半はハケ、下半はヘラミガキ、内面下半はヘラケズリと指オサエを行う。底部は焼成の後から穿孔を施す。

底部 (B536B537)

いずれもわずかにくぼんだ平底で、外面はヘラミガキ、内面はハケで調整する。B537は焼成後に穿孔を行う。

SX03 (B538～B548)

多量の古銅土器を出土する溝から若干の弥生時代中期の土器が検出された。主に青灰

色土よりの出土である。

壺 (B538～B540)

B538とB540は口縁端部が斜下方に垂下し、内面に1条の突帯を飾る。B538は外端面に凹線を施し、さらに斜線文と円形浮文を加え、突帯に刻み目をもつ。胎土に砂粒と雲母片を含み、灰黄褐色を呈する。B539は同じく端面に凹線文と斜線文を飾り、突帯と口縁上端に刻み目を施す。胎土に砂粒と雲母を含む。B540は口縁部を欠損する。調整は外面をハケ、内面をハケ、ヘラケズリ、指オサエを行い、外面には竹管文と柳描き波状文を飾る。胎土に雲母片を含んでいる。B541は口縁端部が大きく垂下する。ハケで調整を行い、口径は 26.5 cm である。

甕 (B542～B545)

B542は逆「L」字状に強く屈曲する口縁部をもち、外面はハケ、内面は粗いハケの後ヘラミガキを行う。ススの付着が著しく、色調は浅黄褐色を呈する。B543からB545は口縁部が「く」の字状を呈し、端部は上方にわずかに拡張されている。B544とB545はハケ調整を行う。

底部 (B546～B548)

すべて平底の底部である。外面はいずれも丁寧なヘラミガキを行い、内面はB546とB547はハケ、B548はヘラケズリで調整する。

E地区 (B549～B554)

大津茂川表面採集時に他の時代の遺物に混って若干出土している。

壺 (B549～B552)

B549は外傾する頸部からわずかに屈曲し、上下端が拡張された口縁部をもつ。外端面は4条の凹線文の上に2条以上を単位とする棒状浮文を加える。外面はハケが一部に認められる。B550は口縁端部は上下に丸く肥厚し、外端面を斜線文と円形浮文を加飾する。円形浮文は3個単位で6か所に行われたと考えられる。B551も口縁端部が上下に肥厚するが、加飾は端部上面に刻み目のみが施されている。B552は長い頸部をもち、口縁部は端部が斜下方に強く垂下している。外端面は4条の凹線文を加え、頸部と体部の境界には刻み目を施した断面三角形の突帯を貼りめぐらせる。内外面は細いハケを行い、内面は一部ヘラミガキもみられる。

甕 (B554)

口径 33.7 cm の大型の甕である。調整は不明であり、胎土に砂粒を多く含み、灰黄褐色を呈する。

高杯 (B554)

高杯の脚部である。なだらかに開いた脚端部は外に大きく肥厚する。外面はハケで調整し、沈線の集合を4か所に設ける。脚襖には三方に縦方向の細い沈線を加える。内面はヘラズリを行う。胎土に砂粒を含み、橙色を呈する。

第3節 古墳時代の土器

1. 土 師 器

古墳時代の土師器として、いわゆる古式土師器と須恵器出現以降の古墳時代中・後期に属する土師器に分けて述べる。

古式土師器（図版55～66，第38～49図）

いわゆる古式土師器と呼ばれる土器はSX03に集中して出土した他に，2棟の住居址，C-5地区の自然流路，42G，ならびにE地区資料があげられる。

SX03（C1～C185）

C2・3区にわたって検出された自然流路である。縄文～弥生時代の遺物が混入したが，出土した古墳時代初頭の遺物は，肩部で検出された土器群および自然流路内からのものである。











壺A







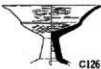


広義の二重口縁を有する壺である。完形の土器が出土しておらず体部以下の形態は不明であるが，口縁部の特徴から三種に細分した。

壺A₁（C1～C5，C8）

外反する頸部から屈曲して，幅広く内彎または直線的にのびる口縁部をもつ。屈曲部が鋭く，断面三角形の稜をもつものや，口縁部に波状文を施すものもある。C1，C2の口縁部は内彎してのび，端部は丸くおさまり，C3，C4は直線的に外傾し，端部に面をもっている。C1は口縁部を不規則な波状文で飾り，内面は丁寧なヘラミガキを行っている。焼成は良好で，灰黄白色を呈し，胎土に多量の雲母を含んでいる。C2は口縁の屈曲部に粘土で補強し，内面に稜をもたない。器表は剝離が著しく調整は不明，焼成は不良である。C3，C4は屈曲部が鋭く，断面三角形の稜を突出させ，色調は灰黄色で，砂粒を多く含む。C3は口縁部に腰凹線状の浅い沈線をとどめ，頸部外面をハケ，内面をヘラミガキを施し，C4は無文で，主にヨコナデで調整を行っている。C5は直立気味の頸部から短く内彎する口縁となり，屈曲部は著しく肥厚し，断面三角形に突出している。頸部は内外面ともハケを行った後ヘラミガキを施し，口縁内面は粗いヘラミガキで調整している。胎土に雲母の細片を含む。C8は二段に屈曲する幅広い口縁部をもち，外面の上段に2条，下段に1条の波状文を加飾している。色調は灰白色を呈し，一部橙色の塗料が認められる。

第9表 古式土器分類表

壺 A	A ₁		二段に幅広く外反する口縁部をもち、鋭い屈曲部をなす。	広義の二重口縁をもつ壺。
	A ₂		口縁部は直線的にのび、下端は垂下する。加飾性に富む。	
	A ₃		幅広い口縁部は内傾してのびる。	
壺 B			二重口縁をもち形態は変化に富む。内外面は丁寧なヘラミガヤ調整を行い灰黄白色系を呈する。	
壺 C			外方に単純に開く口縁部の壺。	
壺 D			口縁部は水平に近く、端部はコノナデによってつまみ上げる。内面の指オナエが顕著である。雲母片を含み、いわゆる讃岐系の壺。	
壺 E			短く直立する口縁部と扁球形の体部をもつ壺。	
壺 A			口縁部は外反してのびる壺。外面は右上がりの太い叩き、内面はナデかハケを行う。平底をなし、V様式壺の伝統を保持する。	
壺 B	B ₁		口縁部は外反し、端部は丸い。	口縁部はくの字に屈曲する。外面は右上がりの叩きとハケ、内面はヘラケズリを行う壺。
	B ₂		口縁端部はつまみ上げて終わる。外面の叩きとハケはやや細い。	

甕 C	 C84	口縁部は内埋気味にのび、端部は肥厚する。体部は球形で丸底である。外面は細いハケ、内面はヘラケズリ調整を行う。広縁の布留式甕。
甕 D	 C88	二重口縁は直立もしくは外傾して幅広くのびる。屈曲部は鋭をもち、端部は若干肥厚する。外面はハケ、ナデ、内面はヘラケズリを行い、いわゆる山陰系の甕である。
甕 D	 C103	二重口縁の屈曲部は鈍く、端部は丸い。口縁外面はコナデにより凹部をもつ。体部はナデ刷で、外面はハケ、ヘラミガキ、内面はヘラケズリを行う。技法は甕Bに共通する点が多く、但馬・丹後地方の甕である。
甕 F	 C118	口縁部は短く外方へのび、端部はコナデによりつまみ上げる。体部は肩がはり、底部は丸底に近い。外面はハケ、内面はヘラケズリ、指オサエを行う。甕Dと同技法の讃岐系の甕。
台付 甕	 C121	甕Eに小形の台部がつく器形。
甕 C	 C143	砲弾形の体部と、とがり底の甕または鉢の形態をもち、底部に穿孔を行う。
高杯 A	 C126	受部は内埋してのび、上半は大きく外反する高杯。
高杯 B	 C127	二段に屈曲した受部の口縁部がさらに上方にのびる高杯。脚柱部は中空で短く、脚部はなだらかにのびる。
高杯 C	 C129	内埋してのびる椀形の受部をもつ高杯。胎土は精良である。

高杯 D		皿形の受部が浅くひろがり、二段に屈曲してのびる高杯。調整にヘラミガキを多用し、雲母片を含む。
器台 C		受部は外彎して開き、二重口縁の屈曲は鈍く、端部は丸い。脚部はなだらかに外反する。調整はヘラミガキを行う。但馬・丹後地方に通有の器台。
鉢 A		内彎気味の体部をもつ鉢。平底のものが多い。
鉢 B		丸味をおびた体部から屈曲して内彎する口縁部がのびる鉢。平底をとどめる。
鉢 C		球形に近い体部から短く外反して口縁部が開き、丸底を呈する鉢。
小丸底 型壺		大きく発達した口縁部と碗形の体部からなる精製の土器。
蓋		つまみ部からなだらかに広がる笠形の蓋。つまみ部上端は平坦なものとかぼむものがある。

壺A₁ (C6, C7)

口縁部は直線的に外傾し、口縁下端は肥厚し垂下している。C6は口縁外面に波状文と円形浮文、C7は内外面ともに波状文を飾る。胎土はどちらも精良である。

壺A₂ (C9~C11)

幅の広い口縁部が内彎してほぼ直立するC9と内傾するC10、C11がある。C9は二重口縁の屈曲部がやや鋭く緩をもつ。外面に一部ハケをとどめるが、ナデ、ヨコナデで調整を行い、灰白色を呈する。C10は口縁部と頸部に乱れた波状文を飾り、褐灰色を呈する。C11は口縁部に上向きの鋸歯文を施し、外面をハケで調整している。色調は黄褐色である。

壺B (C12~C24)

厳密には壺Aと同様二重口縁の壺であるが、器形、調整、胎土に共通点が多いためここに一括した。但馬、丹後地方に多くみられる土器である。

口縁部は未発達で外面に擬凹線を施すもの、強いヨコナデによって端部をわずかにつまみ上げたもの、外反する口縁の屈曲が鈍いもの、逆に屈曲が鋭く断面三角形に突出するものがあり、変化に富んでいる。ほとんどの頸部はゆるやかに外反する。調整にはハケを行うこともあるが、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施すことが特徴である。胎土はわずか

に砂粒を含み、まれに雲母片の混入もみられる。概して灰黄白色系の色調を呈する。C12～C17の口縁端部は未発達のもので、特にC12、C13は端部に擬凹線をもつため古い段階に位置づけられるものであろうか。いずれも頸部は外傾し、外面はハケの後C12、C15、C17は縦、C13は横のヘラミガキを行う。口縁内面は一部にハケを残すが、横ヘラミガキを多用している。C18とC19は屈曲部に稜をもたず、なだらかに外反する口縁部で、内外面に丁寧なヘラミガキを行っている。C20、C20、C22は屈曲部に断面三角形の稜をもつものである。C20は短い頸部から肩の張った体部へ続く。C21、C22の屈曲部は鋭い稜を作り出している。いずれも口縁内外面は横、頸部外面は縦のヘラミガキで調整している。C23、C24は屈曲部の稜は鈍いが、外反する口縁が幅広くのびている。C24は内外面ハケの多用が目をはく。

壺C (C25～C30)

口縁部が外方に開く壺である。口縁には直線的に外に広がるものと、外彎気味にのびるものがある。C28、C29の体部は扁球形、C26、C30のそれは卵球形である。C29は体部と頸部の境に突帯状の装飾を加えている。調整はハケを行うものが大半を占めるが、C29は外面に丁寧なヘラミガキを施している。C30は平底を保持しており、体部下半に打ち欠いた痕跡が認められる。口径 10.7 cm 器高 19.1 cm である。

壺D (C31～C35)

基部が太く、内傾した頸部からはほぼ水平に近くびる口縁部が続く。口縁端部は強いコノナデによりつまみ上げ、口縁内面と外端面は凹線状にくぼんだ個所ができる。体部最大径は体部のやや上位か中位にあり、底部は平底もしくは平底に近い丸底となる。調整は外面は叩きの後ハケ、内面はヘラケズリを行い、体部内面上半の指オサエによる丘稜が顕著である。胎土には砂粒以外に雲母の含有が認められるのが一般的である。いわゆる讃岐系とよばれる壺である。C34の体部最大径はやや上位にあるが、C33、C35はほぼ中位におさまる。特にC35は扁球形の体部をもち、外面に叩きの跡をわずかに残す。すべて胎土に雲母を含んでおり、とりわけC31とC32は非常に多量である。総じて焼成は良好で、灰黄褐色から褐色を呈する。

壺E (C36、C37)

短く直立する口縁部と扁球形の体部をもつ壺である。C36の口縁端部は内傾する面をもつ。体部は強い扁球形を呈し、外面をヘラミガキ、内面をハケで調整している。C37は小型のもので、調整は不明。器表に赤色の塗料が付着している。

壺その他 (C38～C41)

C38、C39は頸部から大きく張る体部上半である。C38は内外面をハケ、C39はヘラミガキで調整を行う。砂粒を含み、灰黄白色を呈する。どちらも胎土、調整など壺Bに共通

する要素が認められる。C40は小さい平底，C41は平底に近い丸底である。内面の調整はどちらもヘラケズリであるが，外面はC40はハケ，C41はヘラミガキを行う。

甕A (C42～C52)

口縁部が外反もしくは短くなめ上方にのびるものである。体部外面上半は右上がり，下半は水平に近い比較的太い叩きで調整し，内面はナデかハケを施している。底部はほとんどのものが平底であるが，くぼみ底のものも見られる。胎土に砂粒を含むものが多く，第V様式甕の伝統を保持した甕と言える。口縁屈曲部内面はC44，C52にわずかな稜があるが，それ以外はゆるく外反し稜は認められない。外面の叩きはC43とC44を除きすべて右上がりであり，それを故意に消した痕跡はない。またC52は上半と下半で叩きの方向が異っている。体部内面はC46とC52がハケ，C51が底部に放射状のハケを残しているが，他はすべてナデ調整を行う。なお，底部はすべて平底と考えられるが，C51はわずかにくぼみ底となっている。完形に復原しうるC51は口径 14.1 cm，器高 17.9 cm，同じくC52は口径 17.0 cm，器高 26.3 cm である。

甕B

「く」の字状に外反もしくはわずかに屈曲する口縁部を有する甕である。体部外面は右上がりの叩きと縦のハケで調整し，内面はヘラケズリを行う。口縁端部の形態により，甕B₁と甕B₂に細分した。

甕B₁ (C53～C66)

口縁部は外反するものが多く，端部は丸くおさまる。体部はやや長く，外面は右上がりの叩きとハケ，内面はヘラケズリを行う。底部は平底かくぼみ底である。C59，C63，C66は器高 20 cm を超える大型甕で，他は 20 cm 以下の中・小型の甕である。内面は屈曲部までヘラケズリを行うがそこに明瞭な稜を作り出すことはなく，ゆるやかに外反する。外面の叩きはC56が水平である以外はすべてが右上がりであり，C54，C57，C58，C60～C63，C65～C66はさらにハケ調整を加えている。底部はC60とC65が平底，C64とC66が平底に近いくぼみ底である。また，C54とC60の口縁部は直立気味に立ち上がり，逆に，C56では鋭角に屈曲する。C53は口縁部外面にも叩きを施し，C55は口縁部内面にハケ調整を行っている。これら甕B₁はすべて胎土に砂粒を多く含み，灰黄白色系の色調を呈する。完形を保つC60の口径は 10.5 cm，器高は 14.2 cm であり，C64，C65，C66はそれぞれ，15.0 cm と 14.2 cm，13.1 cm と 15.3 cm，16.4 cm と 22.4 cm をはかる。

甕B₂ (C67～C83)

口縁部はわずかに屈曲しながら外方にのび，端部をつまみ上げ気味に終わるため若干肥厚するもの，上方に鋭く突出するもの，内面がくぼむものがある。体部外面の叩きは比較

的細く、上に加えられるハケも細いものが中心となる。内面はヘラケズリを行うが、ハケも散見される。体部の形態は球形に近いものもあるが総じてやや長く、底部は平底かくぼみ底である。中でも、C72、C74、C77、C83は器高が20cmを超える大型品である。口縁端部の形態はC67、C71～C73、C76、C77、C82が上方のつまみ上げが突出し、特にC71、C82は二重口縁状にのびきっている。その他はとがり気味につまみ上げるもの、もしくは外面か内面に段をもって終わるものである。口縁屈曲部内面はC71、C76、C77にやや鋭い稜が認められるが、他はゆるやかに屈曲し稜はもたない。体部はC80がほぼ球形、C74とC77に球形化の兆しがかがえる他は非球形でやや長手のものである。底部は資料に恵まれないが、今のところ丸底のものは見られない。体部外面の調整は右上がりの叩き、もしくは叩きとハケの併用を行うが、C74とC80は全面に縦ハケを施しており、新しい様相がかがえる。また、C67、C68、C70、C71、C74～C76、C82の外面叩きは屈曲部外面まで及んでいる。内面はC68、C78、C79、C81、C82がハケであるが、他はヘラケズリを行っている。大半の口縁部はヨコナデで仕上げるが、C77、C76、C79は内面にハケを残している。C69は口径13.2cmであるが体部は長く、口径が腹径をしのいでおり、C70も同様である。C71は胎土に雲母や角閃石を含み、褐色を呈する色調などから、いわゆる河内の土器に近似している。口縁部が短く、ほぼ直立するC79は口径11.1cm、器高14.4cmをはかる。C82は体部上半を右上がり、下半をほぼ水平の4条/cmの叩きの後、細い縦ハケを施し、口径13.6cm、器高18.6cmである。C83は口縁外端部に段をもち、口径14.2cm、器高21.8cmをはかる。

壺C (C84, C85)

口縁部はわずかに内彎して外方へのび、端部は丸く外へ肥厚するものと、若干内傾する面をもって内側へ肥厚するものがある。体部はほぼ球形を呈し、底部は丸底の資料が認められる。体部外面は縦ハケを行った後、一部に横ハケを施し、内面はヘラケズリ、同底部には指オサエを残すものもある。広義の布留式の壺と考えられる。C84、C85ともに口縁部は内彎し、端部は外方へ肥厚する。C84は胴の張らない体部をもち、口径は17.5cm、砂粒をかなり多く含む灰黄白色を呈する。C85は器表の風化が進んでいるが、外面に細いハケを残している。

壺D (C86～C89)

いわゆる二重口縁は直立もしくは外傾して幅広くのび、その屈曲部は鋭い断面三角形の稜をもつ。口縁端部はわずかに肥厚している。器壁は一般に薄く仕上げられており、体部外面はハケカナデ、内面はヘラケズリで調整を行っている。いわゆる山陰地方の壺である。口縁部の屈曲部突出はC86、C88はやや鈍いが、他のC87、C89は鋭い断面三角形を呈する。口縁端部はC86をのぞき、すべて肥厚して面をもつ。C89は肩部にハケ調整を行った

後、波状文で加飾し、外面全体にススの付着が認められる。

甕E (C90~C105)

いわゆる二重口縁を形成する点は甕Dと同じであるが、頸部の屈曲はにぶく、また口縁部との境界に明瞭な稜を残さず丸くおさめる。口縁部はヨコナデ調整を丁寧に行った結果、外面は凹部を作り出し、端部は丸く終わるものが大半を占める。体部は張りずナデ肩を呈し、最大径はほぼ中位にある。外面に叩きを残すものもあるが、一般にはハケまたはヘラミガキを行い、内面の調整はほとんどがヘラケズリである。但馬・丹後地方に多くみられる甕と考えられる。口縁部は強いヨコナデを行いが、呈した資料のうちC91とC102は残い裏凹線を残している。体部はC98が球形に近い以外はすべて長胴である。現存のものでは底部はくぼみ気味の平底しか知られていない。外面の調整はC92、C94、C95、C97~C99はハケ、C102~C104はヘラミガキを行い、C91、C96、C97、C100、C105では右上がりの粗い叩きが認められる。多くは胎土に砂粒を含み、色調は灰白色もしくは黄色を呈する。完形品のC103は口径が腹径より大きく12.8cm、器高は13.0cmと小型であり、同じくC105は口径17.3cm、器高23.9cmをはかる。

甕F (C110~C118)

口縁部は水平に近く短く外反し、端部は強いヨコナデで調整してわずかにつまみ上げて終わる。このため口縁内面と外端面に凹部を形成する場合がある。体部は中位より上半で肩が張り、腹径が口径より大きいものがすべてである。底部は丸底に近い平底となる。調整は外面は主に縦方向のハケ、内面は下半をハケまたはヘラズリを行い、特に内面上半は指オサエによる圧痕が顕著に認められる。胎土には砂粒の他に雲母片を含んでいることも特徴のひとつである。甕Dと同じ技法をもち、いわゆる讃岐系の土器と考えられる。図示した中ではC113とC117は口縁端部の突出が著しく、甕Fの範疇に属さない可能性も高いが、その他は共通の要素を有している。特にC118は完形に復原したもので、雲母片を多量に含み、色調は暗褐色、外面にススが付着し、口径12.8cm、器高27.9cmである。

甕底部 (C106~C109)

C106は球形に近い体部と平底からなり、叩きを行っている。他は平底気味の底部で、外面に叩き調整が見られる。いずれも内面のヘラケズリは施されており、甕Aに属するものと考えて大過なからう。

台付甕 (C119~C124)

いわゆる二重口縁をもち、屈曲部の稜は不明瞭で、口縁端部は丸くおさめる甕Eに台部を付加した形態をとっている。台部は内彎して開くものと外彎気味に開くものがある。C119とC120は小型の甕で底部には台が付くと考えられる。C119は調整不明であるが、C120はヘラミガキを行い、赤褐色の塗料が付着している。C121は甕Eそのものに内彎す

る台がつく。調整は器壁が剝離し不明であり、砂粒を多く含む胎土は灰色を呈する。口径、器高ともに 15.4 cm である。C122とC123は外彎気味に開く台部であり、いずれも淡黄橙色を呈し、C124は内彎し、C121と同様砂粒が多く、灰白色を呈する。

瓶 (C140~C143)

底部に穿孔を施した甕もしくは鉢の形態をとる土器を瓶と総称することにする。丹後系の土器であろうか。C140、C142は小さな平底、C141はあげ底に穿孔を行ったもので、外面には叩き調整がみられる。C143とC144は体部が砲弾形を呈し、とがり底か小さな平底に穿孔している。C143は内彎気味に口縁部がのび、外面はハケ調整を行う。底部穿孔は内面から外面に向けてなされている。灰白色を呈し、口径 14.2 cm、器高 8.9 cm である。C144は口縁部が内彎気味に直立し、外面調整はハケ、穿孔は外面から内面に向けて施され、灰黄色を呈する。口径 13.2 cm、器高 12.6 cm をはかる。

高杯A (C125, C126)

受部下半は内彎してのび、上半は大きく外反して開く高杯である。脚柱部は鈍角に屈曲して裾がひろがり、そこに穿孔を施している。2例とも器表は剝離しており調整は不明であるが、C126は受部内外面にヘラミガキの痕跡が認められる。C125は受部は深く、淡黄橙色を呈する。C126の受部は前者に比らべやや浅く、脚柱部もわずかに長い。穿孔は4か所にある。

高杯B (C127, C128)

二段に屈曲した受部の口縁端部がさらに上方にのびてゆくものである。脚柱部は中空で短く、屈曲してなだらかに外反して裾にいたる。図示した2例は口縁端部を欠損しているが、いずれも同型のものと考えられる。C127は調整に不明な点を残すが、脚部の穿孔は6か所あり、色調は淡橙色である。C128は内面が受部はヘラミガキ、脚部はハケ、外面は一部をハケの他はヘラミガキを施す。穿孔は4か所を数え、灰黄白色を呈する。

高杯C (C129)

内彎してのびる碗形の受部をもつ高杯である。脚柱部はなだらかに外反して裾にいたる。内外面ともにヘラミガキを行っている。C129は砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、色調は灰橙色を呈する。

高杯D (C130, C131)

皿形の受部は大きくひろがり浅く、二段に屈曲して外にのびる口縁部を有する高杯である。受部内面は丁寧なヘラミガキで調整し、胎土は精良で雲母片を含有している。C130は口縁部外面に4条の縦凹線を施し、受部内面のヘラミガキは放射状に行われる。C131も縦凹線が認められるが非常に残い。色調は灰黄白色を呈し、一部に橙色の塗料が付着する。

高杯脚部 (C132~C139)

C132は低脚で外面はヘラミガキ調整を行い、4方に円孔がある。高杯Cに属する脚部である可能性が高い。C134は高杯Aの脚部により近い。外面はヘラミガキ、内面はハケを行い、穿孔は4か所にある。C135は屈曲をもたずなだらかに開くが、C136、C137はやや長い脚柱部から内彎して大きくのびる脚部に続く。ともに脚柱部はヘラミガキ、襍はハケで調整を行う。C138はヘラミガキ、C139はハケを施している。

器台 (C145~C162)

受部は外彎気味に大きく開き、二重口縁の屈曲部は鈍く、端部は丸くおさまる。口縁部の形態は種々あり、屈曲部下端を肥厚させ断面三角形に垂下させるものもみられる。脚部はなだらかに外反し、脚部径が口径を上まわることはない。調整は受部内面を横ヘラミガキ、外面を縦ヘラミガキ、脚部はヘラミガキかハケを行うのが一般的である。胎土に砂粒を含み、しばしば雲母片を含をもも散見される。口径 10 cm 前後の小型と口径 20 cm 前後の大型の二種があり、小型の器台の方が胎土は精良で調整も丁寧に行われている。色調は大半が灰黄白色を呈する。但馬・丹後地方に通有の器台である。C145~C147は口縁部が鈍く屈曲し立ち上がりは短く、C148~C151はやや長くのび、C152とC153は屈曲部が垂下し長く外反する。また、C146、C147、C153の口縁部外面には浅い擬凹線を残している。完形のC146は口径10.9 cm、器高 9.1 cm で脚部に円孔をもつ。C148は口径12.9 cm、器高 11.6 cm、C149はそれぞれ 12.7 cm、10.1 cm であるが、脚部の穿孔はみられない。C150は胎土に雲母を含み、外面に塗料が付着している。C151とC152は厳密なヘラミガキを施し、C153は器表の刻磨のため調整は不明であるが、口径19.3 cm、器高16.8 cm をはかる。C154からC162は器台脚部である。脚部外面は縦ヘラミガキ、内面は横ハケ調整が主流であるが、C157、C159、C162は脚裾部に横ヘラミガキ、C161は縦ハケを行っている。円孔を設けるのはC155、C156、C159、C162であるが、確実な孔数はわからない。C155は一部に橙色の塗料が認められ、C157は胎土に雲母を含んでいる。

鉢A (C163~C170)

内彎気味の体部をもつ鉢である。底部は平底がくぼみ底で、体部外面に叩きを残すものもある。C163は外面に左上がり、C164は右上がりの叩きがあり、甕Aの体部下半を想起させる。C163は口径 10.6 cm、器高 6.6 cm である。C165とC166は口縁部は内彎気味で、底部はわずかにくぼみ底となる。C167は口径 19.1 cm と大型のもので、口縁端部は外方に肥厚する。C169は平高台状の底部をもち、口径は 9.6 cm、C170はヘラミガキを多用している。

鉢B (C171~C174)

丸味をおびた体部から屈曲して内彎する口縁部がのびる鉢である。C171は口径 7.5 cm、

器高 5.1 cm の小型のもので、丁寧なヘラミガキを行っている。C172, C173はともに口縁部はやや長く、ハケで調整を行う。C174は外面と底部をヘラミガキを行い、精良な胎土を用いている。

鉢 C (C175, C176)

扁球形もしくは球形の体部から短く外反して口縁部が開き、丸底を呈する鉢である。C175は胎土に赤褐色のチャートを含む。C176は口径 9.3 cm, 器高 6.9 cm で、ハケ調整が行われている。

小型丸底壺 (C177, C178)

C177はいわゆる小型丸底壺と総称される精製の土器で、口径は 8.8 cm である。調整は不明確であるがヘラミガキの痕跡をわずかにとどめ、色調は橙色を呈する。C178はとがり気味の丸底に木葉匠痕が認められる。

蓋 (C179~C181)

つまみ部からなだらかに広がる笠形の蓋である。つまみ部は直立気味におわり上端部が平坦なものと、外反して短くのび上端部がくぼむものがある。調整はナゲまたはハケを行う。C179はつまみ上端は平坦で刻目を施している。砂粒を多く含み灰黄白色を呈し、裾部径 13.0 cm, 器高 5.5 cm である。C180とC181はつまみ上端部がくぼむもので、裾部径と器高はそれぞれ 9.5 cm, 4.3 cm と 10.5 cm, 4.7 cm である。

製塩土器 (C182)

外反する短い脚部のみ現存しており、外面は指ナゲで調整している。焼成は非常に良好で、淡黄橙色を呈する。

手培り型土器 (C183)

細片のため詳細は明確にしがたい。器蓋は剝離が著しく調整も不明である。焼成は良好で、淡黄橙色を呈する。

ミニチュア土器 (C184, C185)

C184は鉢Aをさらに小型にしたもので、口径 5.2 cm, 器高 3.1 cm をはかる。全体を指ナゲと指オサエで調整を行い、胎土に砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。C185は須恵製の甕を想起させる形態の小型の壺であり、口径 6.9 cm, 器高 6.8 cm である。ナゲで調整するが未調整のままの部分もみられる。砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

以上、SX03 から出土した土器を概観してきたが、この薄の肩部より一括集中して検出された土器群を列挙しておく。

壺A₁-C3, 壺A₂-C11, 壺B-C12, C15, C18, C23, C24, 壺C-C25, C26, C29, 壺D-C34, C35, 壺底部-C40, 甕A-C47, C48, C52, 甕B₁-C53, C57,

C58, C60, C61, C64, C66, 甕B₁-C67, C74, C80, C81, 甕D-C86, 甕E-C95~C98, C100, C101, C103, C104, 甕F-C116, 甕底部-C108, 台付甕-C121, C124, 甕-C141, C143, C144, 高杯A-C125, C126, 高杯B-C127, 高杯脚部-C132, 器台-C146~C149, C153, 器台脚部-C160, 鉢A-C164

住居址1 (C186~C198)

C区に築かれた隅丸方形の住居址で、重複する住居址2を切っている。出土した土器はすべて埋土中のもので、明確な床面直上の土器は検出されていない。土器の大半は庄内式併行期(新相)と考えられる。

壺A₁ (C186)

なで肩の体部から内傾する頸部をへて二重口縁にいたる。体部外面には一部ハケを残し、内面はヘラケズリ、また一部に指オサエを行っている。

甕B₁ (C187)

くの字状に外反する口縁部で、口径は13.4cmである。表面は剝離が進んでいるが、内面はヘラケズリを施しているのがわかる。胎土に砂粒を多く含む。

甕B₂ (C188)

口縁端部はわずかにつまみ上げられている。調整は不明で、口径は14.2cmである。

甕C (C189, C190)

いずれも口縁部中ほどがわずかに肥厚し、内彎気味にのびる。C189の口縁端部は外方へ若干垂下し、外面はハケで調整している。C190は端部を引きのばして終わり、体部は球形に近い。外面はほぼ水平の叩きの後ハケを行い、内面はヘラケズリとハケを併用している。

甕底部 (C191, C192)

C192はわずかにくぼみ底で、底径は2.2cm、胎土に雲母を含有する。

台付鉢 (C193)

鉢Aに相似する体部に、「ハ」の字状に開く短い台部を接続している。外面は全面にハケ、台部内面はヘラケズリを行い、口径11.9cm、器高7.1cmである。

高杯脚部 (C194)

中ほどでわずかに肥厚してひろがり、脚部径は11.6cmである。5個ないし6個の穿孔がある。

鉢B (C195~C198)

C195は口縁部がわずかに内彎してのび、底部は小さな平底をとどめる。砂粒が多く灰白色を呈する。口径8.2cm、器高7.2cmである。C196は口縁部が短く外反するもので、

底部はとがり気味である。口径 7.2 cm, 器高 6.4 cm をはかる。C197は浅い碗の形態をもち、平底である。

住居址 2 (C199~C217)

住居址 1 に切られた隅丸方形の住居址である。埋土から検出された土器以外に、床面直上の土器も出土している。庄内式併行期(古相)のものであろう。

壺A₁ (C199~C201, C203)

口縁部が大きく外反するC199, C203, わずにつまみ上げるC200がある。C200とC201は同一個体と考えられ、頸部はゆるやかに外反し、底部は厚手の平底である。外面に太筋の叩きを施し、雲母を胎土に含んでいる。C203は口縁部が内彎気味にのび、端部はわずかに外に肥厚する。赤色塗料が外面に認められ、胎土には雲母を含んでいる。C203以外は床面直上の土器である。

壺B (C202)

本来の壺Bの口縁部を狭口縁としてさらに幅広い口縁部を形成し、そこに粗い波状文を施した後、竹管文を押圧した円形浮文を加飾する。胎土には砂粒を含み、色調は灰黄白色を呈する。床面直上の資料である。

壺D

図示しえないが壺Dの口縁端部細片が出土している。雲母片を多量に含み、暗褐色を呈する。

壺B₂ (C205)

口縁部は鈍くつまみ上げ、外端面に凹部を形成する。体部は長く平底をとどめており、外面は粗い叩きと一部にハケ、内面は横ハケで調整を行う。口径 14.3 cm, 器高 22.0 cm である。

壺E (C204)

口縁部に強いヨコナデを行った結果、外面は大きくくぼみ、端部と屈曲部は肥厚する。雲母を含み、灰褐色を呈する。床面直上の土器である。

甕底部 (C206~C211)

C207, C208は底部は厚く上げ底, C206, C209はわずかにくぼんだ平底, C210, C211は若干突出するものの平底をとどめている。なお, C208は底部に葉脈の圧痕を残し, C211の外面は水平に近い叩きを行った後に一部ハケで調整している。

高杯脚部 (C214, C215)

C214は脚柱部である。砂粒を含み、焼成は不良。C215は小型のもので、台付甕もしくは台付鉢の可能性も捨てきれない。床面直上の土器である。

器台 (C212, C213)

両者ともに磨減が著しく調整はわからない。C213は口径 16.2 cm, 器高 12.5 cm で、裾部の円孔は4か所に行われている。

鉢A (C216, C217)

どちらも平底の鉢である。C216は内面を不定方向のヘラケズリを行い、外面には右上がりの叩きで調整している。灰褐色を呈し、焼成は良好である。C217の底部は厚く、外周を指オサニを行っている。内外面ともにナデで調整している。

C-5 (C218~C240)

奈良時代の遺物を大量に検出した河道から若干の古式土器が混入している。

壺A₁ (C218~C220)

いわゆる二重口縁が大きく外反する。C218は口縁部がゆるやかにひろがり、砂粒を含む胎土は灰黄色を呈する。口縁の屈曲が水平に突出するC219は淡黄色の色調であり、C220は橙色を呈する。3例ともに表面は磨減し調整は不明である。

壺B (C221, C222)

C221はつまみ上げ気味の口縁部の端部に掘凹線を施す。C222はわずかに大型のものである。

壺E (C223)

ゆるやかに屈曲して直立する口縁部は短く外傾する。胎土に砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

壺 (C224)

体部はほぼ球形を呈し、丸底である。体部内面はヘラケズリで、上半部はナデを行っている。

壺A (C229, C230)

C229は外面を太い右上がりの叩き、内面をハケで調整を行い、C230は内外面ともハケを施す。

壺B₁ (C225, C226)

C225は内面の屈曲がやや強く、わずかに稜をもっている。外面は細い叩き、内面はヘラケズリで調整する。C226は口縁部を強いヨコナデによりつまみ上げ、外端面に凹部を形成している。

壺C (C227, C228)

いずれも口縁部はわずかに内弯してのび、端部は若干肥厚する。内面はヘラケズリを行っている。

壺E (C231~C233)

すべて口縁部の屈曲は鈍く、強いヨコナデにより凹部を形成している。C231は腹径が口径を上まわり、外面はハケ調整を行う。逆にC233は口径が腹径より大きく、口縁部に浅い縦凹線を施す。

高杯脚部 (C234)

脚柱部から屈曲をせず大きく裾がひろがる。三方に円孔を施している。

製塩土器 (C235)

製塩土器の台部と考えられるが、二次的な焼成は受けていない。外面は強い指ナデを行い、内面はハケで調整する。砂粒を多く含み、焼成は良好、淡黄褐色を呈する。

台部 (C236, C237)

どちらも外方に大きく張り出す台部である。剝離のため調整は不明であるが、胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈する。

器台脚部 (C238)

脚柱部からなだらかに外反し、ハケで調整を行う。色調は灰黄褐色を呈する。

蓋 (C239)

つまみ部は短く、上端面はくぼんでいる。砂粒を多く含み、焼成は良好、暗黄褐色を呈する。

鉢B (C240)

底部はわずかに突出し、内外面を指ナデ、オサエで調整し、一部にハケを施している。

42G

西沙入川旧河道部 SX03にあたる箇所第1次調査において42Gとして調査した地区である。

壺C (C241)

典型的な布留式壺と考えて大過ない。口縁部は内彎しつつ外方へのび、端部は内傾する面をもち内側に肥厚する。体部は球形で丸底である。外面は縦ハケの後肩部に横ハケを行い、内面はヘラケズリ、さらに底部と肩部の指オサエが顕著である。焼成は良好で、灰白色を呈し、口径 12.7 cm、器高 16.1 cm をはかる。

C-6区 (C242~C251)

西沙入川河川下部にあたり、機械掘削により遺物を採集したものであり、SX03の遺物を含むものと考えられる。

壺 (C242)

外傾する頸部から水平に近くびる単純な口縁部の壺である。外面にハケを施し、灰黄灰色を呈する。

高杯脚部 (C243~C246)

C243は直線的に開く脚部である。C244は短い脚柱部から屈曲し、内彎して大きく開く。外面はヘラミガキ、内面はハケを行い、精良な胎土を使用している。C245は高い脚柱部から徐々に外反し、胎土に雲母を含む。C246はなだらかに屈曲して大きく開く脚部で、外面は粗いヘラミガキ、内面は部分的にハケで調整を行っている。

器台脚部 (C247)

受部を欠損する脚部はなだらかに大きく開き、4個の円孔を有する。外面はヘラミガキ、内面は一部ハケを施す。

鉢B (C248)

口縁端部はとがり気味で、丸底の鉢である。外面と口縁部外面はハケ、底部内面は指オサエで調整する。口径 8.2 cm、器高 8.2 cm をはかる。

蓋 (C249, C250)

C249は裾端部を欠損するが、高いつまみ部をもつ。ヘラミガキを内外面に加え、灰黄色を呈する。C250は裾が直線的に閉き、端部は上外方に肥厚する。つまみ上面はくぼむ。外面に橙色の塗料が付着するが、本来の色調は灰白色である。外面はヘラミガキで調整する。裾部径 9.9 cm、器高 5.6 cm をはかる。

脚台部 (C251)

短く外へ広がる脚台部である。外面に強い指オサエの痕跡をとどめる。色調は暗褐色を呈する。

E地区 (C252~C258)

大津茂川の河川改修に伴ない調査したもので、付近の包含層の2次堆積層からの採集品である。

壺A₁ (C256)

口径 25.7 cm の大型の壺である。口縁部は屈曲部に断面三角形の稜を有し、大きく外反してのびる。調整は内外面の一部にハケを行うが、全体にナデを施す。胎土に砂粒を多く含み、灰黄色を呈する。

壺 (C252, C253)

どちらも平底をとどめる壺の底部である。C252の調整は外面はハケの後、縦のヘラミガキ、内面は上位をハケ、中位を横ヘラミガキ、下位をヘラケズリを行っている。C253は外面をハケ、内面をヘラケズリで調整する。

高杯 (C254)

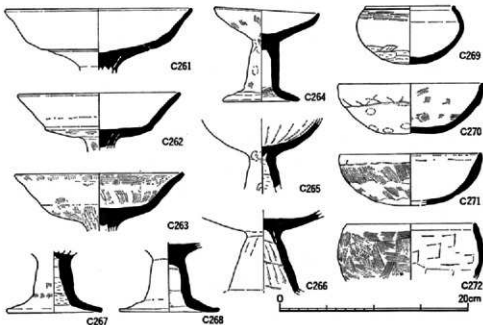
受部は内彎気味に広がり、わずかに稜を形成して立ち上がる口縁部をもつ。丁寧なヘラミガキで調整し、黄褐色を呈する。

鉢B (C258)

口径 6.4 cm, 器高 5.9 cm の小型の鉢である。全体にナデと指オサエを行い、灰黄褐色を呈する。

鉢D (C255, C257)

いずれも体部が内彎し、わずかに屈曲して短く外反する口縁部をもつ大型の鉢である。C255は口縁端部は肥厚し、下端は沈線状にくぼんでいる。C256は口縁部はゆるく外反し、外面はハケとヘラミガキ、内面はヘラミガキを施す。



挿図67 C地区土師器・高杯・杯・鉢

古墳時代中・後期の土師器 (図版66, 挿図67)

須恵器出現以降の古墳時代中・後期に属すると思われる土師器は、C-5区の自然流路SX01の青灰色砂中及びE地区から、他の時代の遺物と混じって出土する。器形としては、高杯・鉢・甕がある。ただし、当地方における該期以降の土師器の編年はまだ十分に進んでおらず、特に甕については、奈良時代のものとの明確な分離が困難であったため、確実に古墳時代に属すると思われるE地区出土のC273をあげるのみにとどめた。

高杯 (C261~C268)

高杯の杯部の形態は、底部と口縁部の境界に明確な稜をもつもの（C262）と、稜をもたずになだらかに広がるもの（C263・C264）および口縁部が内彎して腕状を呈するもの（C265）という三つのタイプに分けることができる。

C261は、C262と同様に、円板状の底部に口縁部を貼り足した接合痕が明らかであるが、この接合部のさらに外側で口縁部が屈曲して立ち上がる点が異なる。また、C264は、杯部が脚部との接合部からはほぼ直線的に短く開くもので、杯部の容量はごく小さい。杯部の調整は、口縁部内外面をヨコナデし、底部内面を不定方向になでるが、C263やC264では、放射状のやや粗い刷毛目が、なで消されずに残る。また、C265では、内面に放射状のヘラ磨きが暗文として施されている。

脚部は、C264・C267・C268のように上下であまり太さの変わらぬ脚柱部から、強く外方に屈曲して脚裾部に至るものが一般的なようである。他に、C266のように、脚柱部が下方でかなり開くものもある。なお、C265のように、脚部に円形の透孔をもつものは、この時期では、極く少数のように思われる。脚柱部の外面は、特に明瞭な調整痕は認められず、C264で若干刷毛目が残っている点と、C263のわずかに残る脚部に縦方向のやや広めの単位のヘラ磨きが認められる点が目につく。脚柱部内面は、C264ではなめらかになでてあり、C266・C267ではヘラ削りが施されている。なお、C266の内面には、粘土紐の巻き上げ痕と、縦方向の紋目状のものが認められる。杯部の接合法については、それを明確に示す資料は見当たらなかった。

胎土は、砂粒を若干含むやや粗めのもので、焼成は良好、色調は明るく白っぽい淡橙灰色のものが多い。

鉢（D269～D272）

D269は、79年度確認調査の42Gの暗灰黒粘土層より出土したものである。口径が脚部最大径より小さい口すばまりのタイプである。内面の調整はヨコナデで、外面は上位は一部ヘラ磨きが認められる以外はなでて仕上げている。底部は、一方向のやや短めの単位のヘラ削りする。胎土中には雲母・長石などが含まれ、褐灰色を呈する。底部外面は墨色を帯び、二次焼成をうけた可能性もある。

D270・D271は、半球形の鉢である。いずれも外面の調整は粗雑で、粘土帯の継ぎ目や指頭圧痕を残すのに対して、内面は、丁寧なヨコナデ、あるいは単位不明のヘラ磨きで仕上げている。胎土は、若干の砂粒を含み、焼成は比較的良好で、淡黄色または灰黄色を呈す。古墳時代後期あるいはそれ以降に属するものと思われる。他に何点か小片が出土している。

D272の鉢は、外面に刷毛目を施し、内面はヘラ削り後なでており、口縁部はつまんでヨコナデしている。時期、全形については不明である。

甕 (C273)

頸部の屈曲が、外面ではほとんど認められないタイプの甕である。口縁部内外面はヨコナデシ、端部はつまみ上げる。胴部外面は、1 cm あたり4条のごく粗い刷毛目を縦方向に施し、口縁部内面下位にも同じ単位と思われる刷毛目が横方向に断続的に施される。胴部内面は、横方向になでるが粘土の継ぎ目が残る。焼成は甘く、色調は淡赤橙色を呈す。

2. 須 恵 器

C・D・E地区から古墳時代の須恵器が出土しているので地区毎に詳述する。

C地区（図版67・88、第52図、挿図第68図）

古墳時代の須恵器が最も多く出土しているのは、C地区である。

杯蓋（C301～C309）

杯蓋には様々な時期の特徴を示すものが混在している。

天井部と口縁部とをわける稜を中心に、杯蓋を観察すると、C301・C302は共に稜が明瞭で鋭い、天井部は平坦さが残っており、口縁部端面は、内くぼみ気味に面を持つ。

C303は口縁部と天井部をわける稜は短く、鋭さに欠け、天井部も丸味を持っている。

C304になると、天井部と口縁部とをわける、突出部の稜は失われ、かわりに凹線をめぐる。天井部は偏平である。

C305・C308・C309では、稜もにぶくなり、ほとんど外方への突出が形式的になり、稜の下部が凹凸形態となっている。

さらに、C306・C307になると、稜や凹線は全く見られなくなる。そして、天井部も非常に丸くなっている。口縁端面に目を向けてみると、C306が他と異なって、丸くおさめられている。

杯身（C310～C316）

蓋同様、時期的に混在しており、バラエティーな形態を呈している。

C310は口径 13.5 cm と小型で、たちあがりは内傾気味で高い。このタイプの杯は、1点のみであり、杯蓋C301と対応すると考えられる。

C311は口径 13.5 cm と大きくなり、たちあがりは内傾し、端面に面を持つ。また、受部は丸くおさめられており、ヘラケズリ部分は、底部全体の3分の1弱である。

C313～316は小型の器形であり、たちあがりは低く、内傾の度合いも高い。

受部は、水平または上向きに、外方へのびる傾向にあるが、C313のように、下方へのびるものも見られる。受部の上面に、1条の凹線が見られるものもある。

C317では、更にたちあがりが高小化し、低くなっている。受部は水平方向へのび、底部の器壁は厚い。

高杯（C323～C336）

C327・C329は有蓋高杯であり、C327は脚部を欠失しているが、共に短脚と考えられる。全体的に器壁が厚く、粗雑な造りが目につく。C329の脚には、透しを持たないで、接合部で絞られたのち、脚端部までシャープさの見られないまま、鈍くおさめられている。

C318・C323～C326は無蓋杯の破片と考えられる。

C326は杯部のみしか残存していないが、口縁部は外上方へひらき、口縁部と底部とのさかいには、2条のつまみ出し凸帯を持つ。

C330・C331・C334は短脚高杯の脚部破片であり、脚端部には、下端が内側に入って踏ん張るタイプC331と、ほぼ垂直に着地して終るものがある。

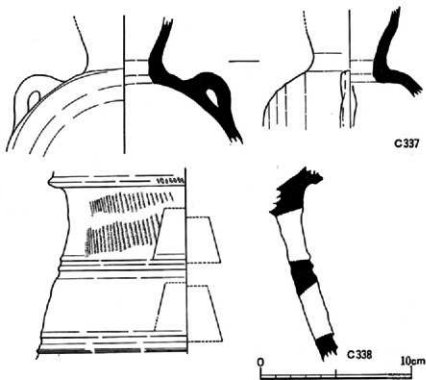
C328・C332・C333・C335は脚部のみ破片であり、全容を伺い知ることの困難なものも含まれているが、長脚のものも見受けられる。

C336は無蓋の高杯であるが、体部には、ロクロ目が顕著な他、何ら装飾は見受けられない。また、前述した脚部の中にも、このタイプの高杯の脚も含まれていよう。

提瓶 (C319・C337)

提瓶と考えられる破片が2点出土している。C319は口縁部の破片であり、やや小型の部類に属す。口頸部は短く外反し、端部は丸くおさめられている。口頸部中央には、2条の細い沈線が施されている。

C337は、口縁部と体部下半を欠いた提瓶破片である。体部側面の耳は獣状を呈しており、体部前面には、ヘラケズリが顕著に見られる。



挿図68 C地区 須恵器・提瓶・器台

台付長頸壺 (C320)

体部の一部を除いて、大部分を欠失しているが、台付長頸壺の破片と考えられる。

体部中央よりやや上方に、2本の凹線によって区画された文様帯を構成し、その間に襷描き列点を施している。

甕 (C321・322)

甕の体部破片が2点出土している。

C321は、明瞭に造られた肩部に、1条の凹線を施し、凹線の下には、襷描き列点文をめぐらせた文様帯を構成し、文様帯上に円孔を1個穿っている。体部下半はカヤ目調整である。C322は、体部中央よりやや上方に、2本の凹線を施し区画されているが、何ら装飾文様は持たず、その上に円孔を2個穿っているのである。底部は欠いている。

器台 (C338)

器台の脚部破片である。

基部よりなだらかにのびる脚部には、基部直下に、刻み目を施した断面三角形の凸帯を持ち、一定の間隔をおいて、2条の沈線によって区画された部分に、2段の襷描き列点文による文様帯を構成している。透しは、台形のもので、文様帯単位に各1個穿っている。

C地区出土須恵器の時期としては、5世紀末葉から7世紀前半までの各時期にわたって見られるが、全般的には、6世紀後半頃のものが多い。器種別では、杯身・杯蓋に次いで、高杯の多さが注目される。

D地区 (図版69, 挿図第69図)

D地区出土須恵器は全て破片であり、図示したのは、杯蓋・杯身・高杯・甕の5点である。

杯蓋 (C339)

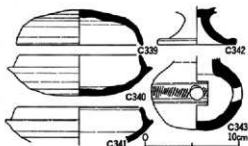
天井部と口縁部とをわける突出部の稜は消えており、天井部も丸い。口縁端部も丸くおさまられている。

杯身 (C341)

共にたちあがりは内傾し、丸い感じを持つが、たちあがり端部は、丸くおさまられているものC340と、内傾する面を持つものC341がある。底部はヘラケズリによる平坦さを残しているが、ケズリの範囲は3分の1弱である。

高杯 (C342)

高杯の脚破片であり、短脚を呈す。



図版69 D地区 須恵器・杯蓋・杯身・高杯・甕

脚端部は、なだらかに屈曲して延び、端部下端はやや鋭利となって、垂直に踏ん張る。

皿 (C343)

皿の体部破片であり、口頸部は残存しない。体部には、2本の凹線によって区画された間に、櫛揃き列点文をめぐらせ、文様帯を構成している。肩部は丸く、明瞭ではない。

D地区出土須恵器は、時期的には、6世紀中頃から後半頃の様相を呈している。

E地区 (図版77, 挿図第70図)

E地区出土須恵器は、杯・高杯のみであり、全て、現在の天津茂川河川域からの表採資料である。

杯身 (C344~C346)

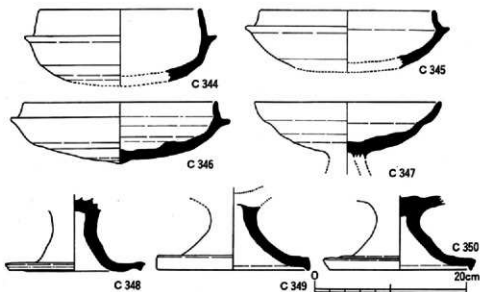
C344は口径 10.5 cm と小型で、たちあがりは内傾気味で高い。底部のヘラケズリは、3分の1よりもやや広い範囲でなされている。

C345・C346は共に、口径 12 cm 前後であり、たちあがりも低く、受部端部・たちあがり端部とも丸くおさまられている。底部のヘラケズリも3分の1以下と狭く、C346では、底部が瘤状に突出している。

高杯 (C347~C350)

無蓋高杯の杯部破片である。

体部は全体的に、口縁端部が丸くおさまられている。同様の類例としては、C地区出土のC336があり、全容を伺い知ることができる。



挿図70 E地区 須恵器・杯身・高杯

C348～C350は、高杯の脚部破片であり、全て短脚である。脚部の裾は一定ではなく、C348のように、一度垂下した後、なだらかに端部となるものと、C349・C350のように裾部がなだらかに、端部まで延び、端部を下方に拡張しているものがある。

E地区出土須恵器の時期としては、C344が若干古い様相を見せている他は、6世紀後半から7世紀前半の様相を呈している。

第4節 奈良時代の土器

奈良時代の土器¹⁾が、まとまって出土したのは、C-5区の自然流路SX01の青灰色砂中およびE地区からである。SX01の青灰色砂は、縄文時代からの遺物が出土するが、奈良時代のものが最も多く、それ以降のものはほとんど含まない²⁾。また、完形品やそれに近いものが多く、保存状態も良好で、遠く上流から流れてきたものではなく、出土地付近において流路中に投棄されたものと思われる。人形の出土と考えあわせると、意図的な投棄の可能性もある。

本節においては、このC-5区出土の遺物を中心に記述をすすめ、E地区やその他の地区のものは、それを補うものとして、C-5区にみられないもの、C-5区との違いを重点的に述べることにする。

1. 土 師 器 (図版70・71・85・88~90, 第53・54・64図, 挿図71・72)

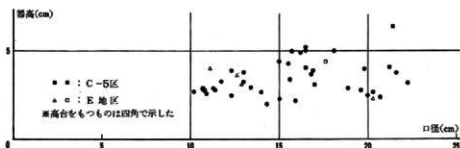
C-5区から出土している土師器には、杯・皿・台付皿・碗・高杯・鉢・壺・甔・甕・甕がある。E地区では、甕・鉢・杯・台付皿・皿などが出土している。他に、C-1区の住居址付近の上層からD67が、B地区表採品としてD68が出土している。

杯・皿・台付皿 (D1~D37・D74~D81・D66・D85・D86)

奈良時代の土師器の中で、最も個体数が多いのが杯・皿の類である。その大多数は高台をもたないもので、平城宮の杯B・皿Bにあたるものはごく少ない。D66・D74は高台をもつ皿であるが、これらの高台は、皿の底面のかかなり内側にとりつく高いもので、皿Bの高台とは異なる。そこで、D66・D74については台付皿と呼び、皿Bとは区別しておく。これらの杯・皿・台付皿は、若干の例外はあるが、精良な胎土を用いて丁寧に作られており、焼成も良好で、明黄橙色やにぶい黄橙色といった明るめの色調を呈する³⁾。

第10表は、C-5区およびE地区出土の杯・皿・台付皿のうち、口縁部が全周の1/8以上残っているものの口径と器高をグラフに示したものである⁴⁾。これを見ると、时期的なばらつきがあるためか、平城宮にみられるような明確な法量の分化は認めにくい。全体の形態や暗文などからみても、多種多様で、個体差がかなりある。しかし、しいて言えば、口径10~13cm、器高3cm前後の小型の杯と、口径15~17cm、器高4~5cmの深めの大形の杯および口径20cm前後、器高2.5cm前後の皿とに大きく分けることができよう。

D1~D7・D9~D17・D24~D26は小型の杯である。D1~D7は、内面に明瞭な2段の斜放射暗文と螺旋暗文をもち、外面はヘラ磨きを施し、底部はなでる。斜放射暗文



第10表 土師器 杯・皿法量表

の上段は、鋭い鋸歯状に続けるものがある。いずれも、胎土が緻密で、焼成もことに良好な精良品である。D1・D4・D5のように底部から口縁部がたちあがる屈曲が明瞭なaタイプと、D2・D3・D6のように底部からゆるやかに湾曲して口縁部に至るbタイプとがある。口縁端部は、玉縁状に肥厚して内側にまきこむものと、ほとんど肥厚せず軽く受口状をなすものがある。D1は器表の色調は明黄褐色であるが、断面をみると明赤褐色で、胎土中に白色のごく細かい長石粒が目立つ。河内からの搬入品の可能性がある⁵⁾。大型で2段の斜放射暗文をもつものはD8の1点だけである。胎土・色調はD1と似ている。口縁端部は外方へつまみ出すようにヨコナデを施す。外面のへら磨きはかなり密で、底部にも一部及ぶ。他に、D9にも、一段の斜放射暗文の上に、もう一段薄く斜放射暗文が施されている。D8・D9の外面のへら磨きや暗文は、かなり密である。

D10～D14・D16・D17は、内面に1段の斜放射暗文をもつ。D16・D17は、口縁部外面にへら磨きを施し、その他はヨコナデのみで仕上げる。底部の調整は、D12・D15・D16ではへら削りが施されている。また、D17は赤褐色で、底部外面にへら切り痕が認められ、轆轤を使用して作られたものらしい⁶⁾。D18・D36も、轆轤を用いた可能性が大きい。なお、D17の斜放射暗文は、他の土器とは逆の右下がり、左ききの工人によって製作された可能性がある。D33・D38の暗文も同様に右下がりである。D15・D24～D26は、暗文をもたず、口縁部外面の調整も、D26を除きヨコナデのみで、製作手法が省略されたものである。D24～D26は小型の皿と考えることもできる器形である。

D18～D23は深めの大型の杯である。平底のaタイプが多い。D18以外は口縁部内面に1段の斜放射暗文をもつ。口縁部外面は、へら磨きを施すもの(D18～D20・D23)とヨコナデのみもの(D21・D22)があり、前者の中にはD20のように、底部外面もへら削りの後へら磨きを施すものがある。また後者では、D22のように底部のみならず口縁部の下半までへら削りが及ぶものがある。D27～D30は浅い大型の杯で、皿に近い器形である。D27がaタイプである以外はみなbタイプである。いずれも内面に1段の斜放射暗文をもち、D29・D30は螺旋暗文も認められる。

D36は高台をもつ杯(杯B)である。口縁部の外傾度はかなり大きい。高台のとりつく位置は、ヘラ削りが施されている。胎土はやや粗く、焼成もややあまい。D37は、盤あるいは皿の底部であろう。胎土・つくりとも粗い。器表は赤橙色で、断面は灰白色である。

E地区の杯はほとんどが1段の斜放射暗文をもつものであるが、D89のように細かい2段の暗文をもつ破片が1点だけ出土している。これはD79とほぼ同様の器形になると思われる。D75は、暗文の上段に右下がりの工具(刷毛目原体か)の刺突痕がある。D76はほぼ完形品で正放射の暗文がよく観察できる⁷⁾。この2点はbタイプであり、口縁部外面はヨコナデで仕上げる。D79・D80は口縁部外面中位以下をヘラ削りした後ヘラ磨きを施す。

D31～D35は皿である。皿の個体数はかなり多いが、小片が大半で、図示したのもでも口縁の残存率が1/4に満たない。調整は、口縁部外面はヨコナデ、底部外面はヘラ削り。暗文は1段の粗めの斜放射暗文で、無文のものもある。口縁端部は玉縁状に内側にまきこむ。胎土は、やや粗めのものもある。E地区の皿D86は、「夫」の墨書をもつ。明赤褐色を呈し、胎土は緻密で硬い。内面には、1段の斜放射暗文と螺旋暗文を施す。いずれもaタイプである。

台付皿D66は、口縁部外面に「大伴」の墨書、高台の内側に「×」のヘラ記号がある。aタイプで、底部にヘラ削りを施した後高台をつけたらしい。口縁端部は玉縁状をなす。E地区のD74は、口縁部外面に疎なヘラ磨きを施す。暗文はD66よりも密である。bタイプで、口縁端部は玉縁状にまきこむ。高台は外方にふんばり、全体にD66より古いという印象をうける。なお、厚めの器壁をもつD38も、台付皿になると思われる。

土師器の杯・皿は、奈良時代の土器編年において、その指標ともなる器形である。当遺跡にみる土師器は、播磨の他の遺跡出土のものに比べ、都との共通性が強いものが多く⁸⁾また暗文の残りもよいところから、都の編年との対比が比較的容易である。C-5区土師の遺物については、D1～D9がほぼ平城宮Ⅰ＝飛鳥Ⅴに相当し、それ以外の杯・皿は、平城宮ⅡないしⅢに併行するものと思われ、8世紀初頭ないし前半の時期を与えてよいだろう。ただし、D17のような體輪を用いた杯など都にみられないものについては、検討が必要である。台付皿も、都では8世紀にはほぼ姿を消す器形である。なお、E地区のD75・D76は飛鳥ⅤあるいはⅣの杯Cに相当すると思われ、C-5区より若干古い様相が認められる。

碗(D39～D42・D81)

底部から口縁部へとなだらかに移行し、全体が半球形に近いものを碗と呼ぶ。

D39・D40は、内面は丁寧になで調整するが、外面は指頭圧痕を多く残す不調整のままである。D39の内面には、密だが不揃いな暗文がある。D40は、砂粒をかなり多量に含み、胎土は粗い。いずれも、白っぽい灰黄色を呈する。D41・42は、口縁部外面の中位以下をヘラ削りする。口縁端部はつまんで引き出し気味にヨコナデする。いずれも鮮やかな

橙色を呈し、D41は内面に斜放射暗文が一部残る。

E地区出土のD81は、砂粒をほとんど含まない土器で、内外面ともなでて仕上げる。

高杯 (D43~D45, D73)

D43は、碗状の杯部と面取りのない脚部からなる。杯部の端部は、つまんでヨコナデして薄くシャープに仕上げる。杯部内面は、1段の密な斜放射暗文と螺旋暗文を施し、外面下位は、不定方向にヘラ削りする。脚柱部上半は中実で、中位以下の内面には紋目と一部刷毛目が認められる。脚部はヨコナデし、端部は折り返し気味に丸くおさめる。胎土・焼成とも良好で淡橙色を呈す。E地区出土のD73は、D43に似ているが、胎土・焼成がやや劣り、端部もシャープさを欠く。内面は1段の放射暗文を施し、外面は疎なヘラ磨き。

D44・D45は、浅い皿状の杯部で、外面に面取りを施した脚部と組みあうものと思われる。両者とも外面はヘラ磨きを施し、内面は螺旋暗文を施す。色調は明赤褐色または橙色で、2点とも内外面に煤が薄く付着していた。面取りのある脚部は、C-5区に低いタイプの小片が1点だけある。

鉢 (D46・D47・D82)

D46・D47は、全体がほぼ半球形を呈する鉢で、他にも小片が何点かある。D46は、口縁の一部を折りまげ片口にしている。いずれも外面は不定方向の刷毛目を施すが、粘土の蒸気目や指頭圧痕が消えずに残る。内面は、主に横方向のシャープな刷毛目を施すものと、丁寧になでて仕上げるものがある。口縁端部は、玉縁状にふくらむものと、内側に小さくつまみ出すものがある。総体に、直径1mm程度の砂粒をかなり含むやや粗めの胎土であるが、焼成は良好で、明黄褐色など明るい色調を呈する。

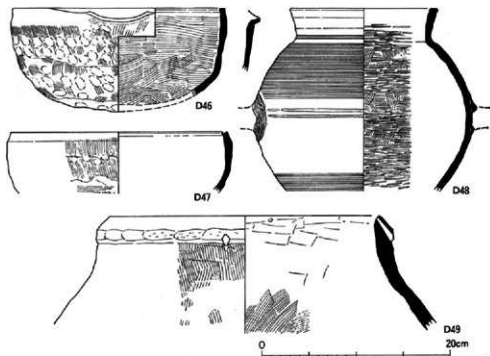
E地区のD82は、D46・D47に似るが、口縁の端面は内傾し、もっと深い器形らしい。

壺 (D48)

D48は、球形の胴部と、ほぼ直立する短い口縁部をもつ壺である。胴部最大径の位置に2条の浅い沈線めぐらし、それを目印としてとりつけられた一対の把手の剝離痕が認められる。把手は、おそらく厚味のある牛角状のものと思われる。胴部外面の上半や、下半の一部に、横方向のややシャープな刷毛目がみられ、その上からヘラ磨きを施したものらしい。把手の剝離した部位にも刷毛目が認められる。内面は、胴部の一部に縦方向の刷毛目が認められるものの、ほぼ全面が横方向にヘラ磨きされている。胎土は、砂粒をかなり含む、焼成もあまい。色調は赤褐色で、塗料の使用も考えられる。

甕 (D49)

D49は、移動式の甕(甕形土器)の釜口付近の一部である。小片のため、付け底系統か曲げ底系統かは不明である。口縁部外面は粗くヘラ削りし、縦方向に小孔が1個穿たれている。胴部は、内外面とも粗い刷毛目が施されている。砂粒をかなり含む、焼成は良好で



挿図71 C地区 土師器鉢・壺・甕

ある。なお、煤の付着は、ほとんど認められない。

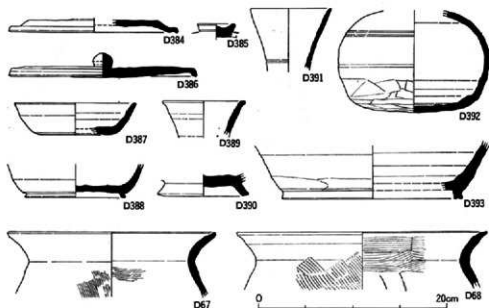
瓶 (図版90-1)

瓶の底部と思われる破片が2点ある。多孔式で古墳時代に溯るものである可能性が高い。なお、同図版中の把手の中には、瓶の把手も含まれていると思われる。

甕 (D50～D65・D67・D68・D83・D84)

甕は全形がわかるものが少なく、口縁部から肩部にかけての破片が大部分である。D51のように小型で球形に近い胴部をもつものと、D65のように大型で肩が張らず長目の胴部をもつものがある。D57～D61などは大型で球形の胴部をもつと思われる。図版90-1に一部示したような把手の出土から考えて、平城宮でいう甕B・鍋Bのような胴部に¹⁰⁾一対の把手をもつものも含まれているらしい。胎土は、石英・長石などの砂粒をやや多めに含み、明黄橙色から灰白色に近い明るい色調を呈する施成の良好なものが多い。

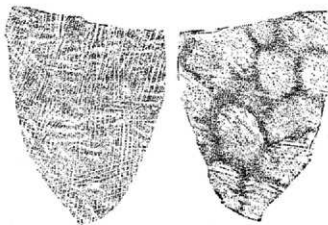
D51は完形品で器表ののこりも良好であるが、煤の付着は認められなかった。口縁部はやや薄手のつくりで、内面下位は横方向の断続的な刷毛目を施している。胴部外面は、胴部最大径の高さを境に刷毛目の方向が異なる。内面は、上半は刷毛目を残さない板ナデ、下半は不調整で大きめの指頭圧痕が残る。外型によって半球形の胴部下半をつくり、それに3段程度の粘土帯を継ぎ足したものであろう。D50・D52もおそらくD51に似たやや下ぶくれの胴部をもつものと思われる。ただしD52は胴部内面を右下がりにはへり削りし、



挿図72 B・C・D地区 須恵器・土師器

口縁部の形態も古墳時代前期のものに似ており、古墳時代中・後期に潤る可能性がある。

D54～D65は大型の甕である。胴部外面に縦あるいは右下がりの刷毛目を施し、内面は口縁部から頸部に横方向の刷毛目が認められるが、それ以下はごく細かい擦痕と板状工具のあたりが認められるだけのものが多い。肩の張らないD56とD65は、胴部内面にも刷毛目を施している。口縁部は、比較的頑丈なつくりで、端部をカットした後ヨコナデを施すものが多いが、D57のように外方に引き出すもの、D56・D60のようにつまみあげるもの、あるいはB地区表採のD68のように引き出してヨコナデを施したために、ほぼ水平な端面をもつものなどバラエティに富む。



挿図73 叩きと当て具痕

左の挿図73に示したのは、E地区出土の土師器の甕の胴部の破片の拓影である。外面は横方向の平行叩きの後に縦方向の刷毛目を施しており、内面には叩き目と対応して横方向の木目をもつ当て具痕が認められる。C-5区出土の轆轤を用いた土師器の杯と考えあわせると興味深い。

2. 須 恵 器 (図版72～87・94・第55図～第65図)

C-5区より出土した奈良時代の須恵器は、杯蓋・杯・皿・鉢・平瓶・横瓶・壺・片口鉢・甕などがある。E地区からも、ほぼ同様のものが出土している。それ以外の地区ではD-1区からD384・D388・D393, D-2区からD385・D391, C-6区からD387, 31GからD395, 42GからD396, 42G南からD392が出土している。表録品には、B地区のD390, C-3区のD386, C-6区のD389, 東農道橋付近のD394がある。

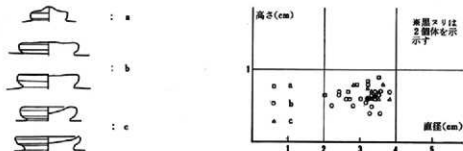
杯蓋・蓋 (D101～D139・D384～D386・D401～D408)

蓋の大半は第12表にみるように口径15～17cmで、第13表にみる杯Bの口径に合致する。また、C-5区ではかえりをもつものはごく少量で、かえりのないものが圧倒的多数を占める。かえりをもつものは、D101のように口径11.1cmと小型のものと、D102のように、かえりのないものと口径のほぼ等しいものがある。後者のかえりの方が退化している。D103～D136がかえりのない杯蓋であるが、これらは形態、胎土、色調などにかなりの差異があり、土師器と同様に時期および生産地の異なるものが混在するものと思われる。ここでまず、つまみの形態に注目すると、大きく3つのタイプに分けることができる。

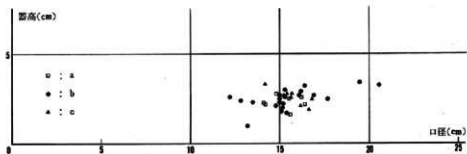
- a: つまみの中央が突出して、いわゆる覆宝珠形をなすもの
- b: つまみがほぼ扁平なもの
- c: 中心部が明らかにおちくぼむもの

かえりをもつ杯蓋の中でも、D101あるいはE地区出土のD401のようなかえりのしっかりしたものは、aタイプの高くて小さいつまみがつき、型式学的には、このタイプから低くて大きいものに変化し、扁平なbタイプが出現するものと思われる。

a・bが一般的なものであるのに対して、cは他地域にあまり例をみないもので、播磨の須恵器の地方色とみてよいかもしれない。D118・D119のように全体が厚手のものと、D131・D132のように薄いものがある。D135のつまみは小型で端部は薄く尖る。頂部は、丸い笠状のB形態が多く、回転ヘラ削りを施す範囲と回転ナデで仕上げる部分との境界で緩をもって屈曲するものもある。D106・D109・D112・D113は頂部が平らで縁部が



第11表 つまみの直径と高さ



第12表 須恵器 杯蓋度量表

屈曲するA形態であるが、屈曲はそう強くない。この4点は、下方に突出した縁端部をシャープに仕上げているが、B形態のものの中には、ぶ厚く丸くおさめたものもある。

平城宮では、A形態の杯蓋は平城宮Ⅱに出現し、平城宮Ⅲ以降には第Ⅰ群土器の杯蓋は全てA形態になるという。C-5区の杯蓋は、一部7世紀に入るものも含まれるが、その大半は、平城宮Ⅰないし平城宮Ⅱに併行するものとしてよからう。ただし、地方によっては、平城宮Ⅲ以降もB形態の杯蓋を生産していることは明らかであり、¹³⁾ 当地方の須恵器生産地における編年やその平城宮との併行関係についての研究がまだ十分でない現状では、より新しい時期に下る可能性も残る。

なお、E地区の杯蓋は、かえりをもつものをかなり含み、A形態のものがみられないことから、C-5区よりやや古いか、もしくは時間幅が短いことが考えられる。これは、土師器の杯の年代観とも合致している。

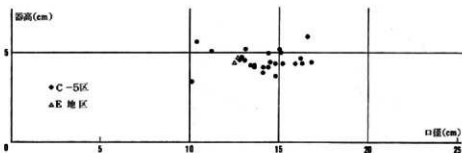
D137は高く突出したつまみとかえりをもつ小型の蓋である。長頸壺などの壺の蓋かと思われる。7世紀でも前半のものか。扁平なD138・D139は、薬壺などの壺類の蓋と思われる。D138は、bタイプつまみをもち、縁端部の稜はややあまく、端部は薄い。D139は、厚手で縁端部もしっかりしている。つまみを欠くが、おそらくはC-3区表採のD386と同様に、球形に近いつまみを持つものと思われる。

杯・皿 (D140～D314・D387・D388・D409～D413・D419～D461)

杯・皿には、高台をもつものもたないものがある。D140～D163までが高台をもつ杯B・皿Bである。D165やD164も高台をもつ可能性がある。

D140は高めの高台が底面のかなり内側につくもので、口縁部は上部の強いヨコナデによって、ゆるやかに屈曲する。D161はD140の小型とも考えられ、D140より高台はやや退化している。これらはD162のいわゆる稜腕に通ずる口縁部の屈曲する器形で、都や陶邑ではあまりみられないものである。高台からみて7世紀後半ぐらいであろうか。

D141～D158は、平らな底部から口縁部が直線的に開く杯Bである。これらの杯Bは第13表にみるように、口径は10～17cmとばらつきがあるが器高はほぼ一定で、平城宮などにみられるような径高指数のほぼ等しい相似形の大・中・小の法量分化は認められない。



第13表 須恵器 杯B法量表

E地区からは、D412のような口径が大きく、器高も深いものが出ている。これらの杯BはD143～D146・D151・D155～D158のように口縁部の外傾度が大きいものと、それ以外のものように口縁部がほぼ垂直に近い角度で立ちあがるものがある。前者の高台の方が後者に比べ内側にとりつくようであり、型式学的には前者の方が古いといえよう。E地区からは前者のみ出土している。

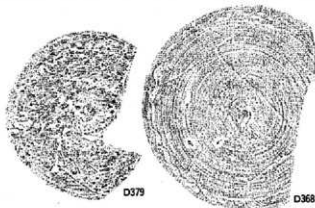
D159・D160は口縁部が丸味をもって立ちあがるもので、杯より碗に近い形態である。高台は退化しており、時期が下る可能性がある。D162は口縁端部を欠く残碗である。残は削り出されたものである。D163は皿Bで灰白色のやや軟質の土器である。

D164・D165は口縁端部のつくりが特徴的な皿である。D165は高めの高台がつくとと思われる。D164の底面は不定方向のヘラ削りが施されている。

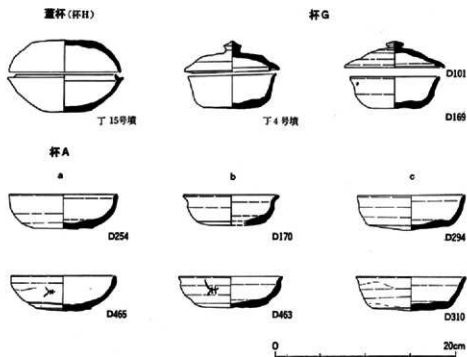
D166は高台をもたない皿で、D167も同じ器形になるとと思われる。底部は回転ヘラ削りを施す。E地区出土のD413の皿は灰白色の軟質の焼成で、部分的に煤を吸着し一見瓦器を思わせる。底部は一方向のヘラ削り、内面は不定方向のなでを施している。D167は鉢である。尖底のいわゆる鉄鉢形ではなく、平底になるのではないと思われる。

なお、杯Bの底部外面は、比較的丁寧な回転ヘラ削りが施されているが、中には右の挿図74に示したように、いわゆる爪状圧痕をもつものがある。爪状圧痕は、東播地方の西ノ池窯のものが知ら¹⁴⁾れているが、中播あるいは西播地区の窯でも存するらしく、産地の決め手にはならない。

C-5区およびE地区出土の遺物の中で、最も個体



挿図74 爪状圧痕



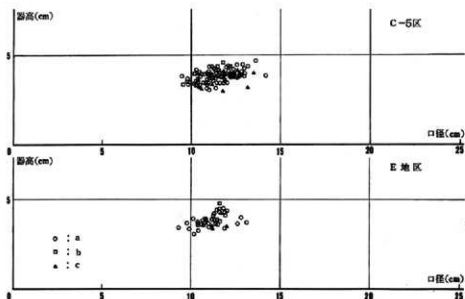
挿図75 杯Aの分類

数が多いのは、高台をもたない須恵器の杯つまり杯Aである。第14表にみるように、口径は最小で9.3cm、最大で14.2cm、器高は3.0~4.8cmであるが、C-5区では口径10.0~13.0cm、器高4cm前後、E地区では口径10.0~12.0cm、器高3.5~4.0cmのものが大多数を占める。胎土・焼成とも、良好なものから不良なものまでばらつきがあり、器形も変化に富む。杯蓋・杯Bと同様に、生産地あるいは時期を異にするものが混在するための現象と思われる。ここでは、口縁部の形態をもとに大きく3つのタイプに分類し、それぞれの系譜について整理し、今後の課題を明らかにしておくにとどめる。

- a : 口縁部が内彎気味に開く
- b : 口縁端部付近が強いヨコナデによって短く外反する
- c : 口縁部が直線的に外傾する

上記の3つのタイプのうち、cタイプは平らで全体の厚さがほぼ一様な底部と、そこから稜をなして立ち上がる口縁部との区別が明瞭である。このタイプは、平城宮などに一般的にみられるもので、D313・D314あるいはD461といった浅手のものを除いて、8世紀の初頃から前半に位置づけてよいものである。

それに対して、a・bタイプは口縁部と底部の境界が曖昧なものが多く、底部の厚さも周辺に比べ中央部が薄くなっているものが多い。また、口径に対して底径が小さく器高も



第14表 須恵器 杯A法量表

深い輪に近いものがある一方、ごく浅いものもある。特にbタイプは小型で浅いものと、中型で深いものに分かれる可能性がある。aとbの差は、口径部の仕上げのごくわずかな差ではあるが、ヘラ記号をもつものにbタイプが多いこと、また、「夫」の墨書をもつ杯A 4点中3点までがbタイプであることから、特に区別しておいた。

a・bタイプの浅いものを上下を逆に考えて、古墳時代の蓋杯(杯H)の杯蓋とする考えもあるだろう。しかしながらC-5区あるいはE地区から、蓋杯(杯H)も何点か出ているが(第52図・挿図68~70)、100点以上に及ぶa・bタイプの口径(10~13cm)に合致する杯身は、皆無といってよい。このことから考えて、当遺跡にみるa・bタイプは、杯蓋とは考えにくい。ただし、当遺跡から近い丁古墳群の15号墳からは、口径の小さい蓋杯(杯H)が出土している¹⁷⁾。丁15号墳出土の蓋杯(杯H)の杯蓋と、当遺跡にみるa・bタイプの杯Aでは、形態あるいは調整技法に若干の差があるようだが、両者を2型式に分けるのは難しい。また、播磨東部の家原・堂ノ元遺跡の土壇3では、bタイプの杯Aが、平城宮ⅡないしⅢに相当すると思われる土師器の杯や須恵器杯Bを伴って出土しており、このタイプの土器が8世紀前半まで存在することを示している。当遺跡でも、後に述べるように同筆と思われる「夫」の墨書をもつ土器群(D374・D463・D86およびD465・D85)を同一時期のものとするならば、a・bタイプが平城宮ⅡないしⅢの時期にも存在することになる。これは、cタイプの杯Aの時期と重なる。

a・bタイプの杯Aは、古墳時代の蓋杯(杯H)の杯蓋を逆転させた形から始まるもの

であろう。当時の中心と思われる畿内中心部などでは、cタイプの杯Aが出現する頃には消滅しているようだが、当地域においては少なくとも8世紀前半いっぱいには存続し、cタイプの杯Aと共存したらしい。周辺地域における伝統的手法の残存とみてよからう。

さて、飛鳥・藤原地域においては、丁15号墳出土の蓋杯のように口径・器高とも矮小化した型式の時期には、宝珠つまみのつく杯蓋をもつ小型の杯(杯G)が共存する。杯Gは飛鳥Ⅰに少量出現し、飛鳥Ⅱでは杯Gと蓋杯(杯H)がほぼ同量に近くなるという。この杯Gは平らな底部からほぼ垂直に近い角度で口縁部が立ちあがるもので、蓋杯(杯H)の杯蓋を逆転させたものとは全く異なる形をしており、おそらく承暦が異なるものであろう。丁古墳群の4号墳では、宝珠つまみのつく杯蓋と杯のセットが3組出土している。挿図75に示したものは、飛鳥・藤原地域にみる杯Gとほとんど差異がなく、7世紀中葉あたりに位置づけられるが、残り2組のうち1組はC229に類似した深めのbタイプの杯Aと杯蓋のセットであった。播磨中・西部では、杯Gは古墳などからの出土が知られているが、その時期の窯跡は今のところ発見されていないため、こうした宝珠つまみのつく杯蓋と組みあう杯のパラエティが、時間差によるものか、生産地の差によるものか、承暦の差によるものかは判断できない。ただ、当時の中心地からみれば変則的なセット、すなわち新たな器形である杯蓋に、古い器形の杯を組みあわせることが行なわれたことは確かである。当遺跡のa・bタイプの杯Aの多くは、数からみて蓋なしの器形として単独に用いられたものであろうが、挿図75にあげたD169あるいはD182・D183・D186などは杯蓋と組みあわせた可能性もある。

最後に、これら杯Aの底部外面の調整について述べる。ここでみられる調整は、ヘラ切り不調整・ヘラ切り後などで、ヘラ削りの3つで、それぞれの実例は図版94に示している。

D172・D247・D431・D451・D222は、ヘラ切り不調整である。D222のように粘土の削り屑が付着したものや、D172のように段をなすものもあるが、比較的平滑なものが多い。D451は、布圧痕がみられる。D437・D275・D170・D192・D272はヘラ切り後であるもので、D437・D272のようにヘラ切り痕が残るものと、完全に消すものがある。ヘラ削りは、D273とD299だけで、これらは器形も独得なものであり、特異な例と考えるべきであろう。D247・D451あるいはD437・D275といったものが一般的である。

平瓶 (D315~D317・D396)

D315~D317は平瓶で、口縁端部および底部を欠く。D317は、背部が扁平で、肩に稜をもち、体部はおそらく浅いものであろう。D315・D316は、いずれも小ぶりで頸は細い。水滴などに用いられるミニチュアの可能性がある。肩は丸く背部もややふくらんでおり、体部の深い古手のものと思われる。いずれも提梁をもっていない。

このほかに、42G出土のD396があり、C-6区のD389もおそらくは平瓶の口縁部であろう。D396は、D317に似た形態で、頸部内面に爪状の圧痕がめぐらる。

壺 (D318~D329・D418)

D323は、高台をもつ長頸壺(壺K)である。器壁の一部は気泡でふくれ、底面には焼成時の破損による破損の可能性のある孔があり、自然釉を肩一面かぶる。胴部の径は胴部高をしのぎ、高台は外方にふんばる。沈線はもたないが、7世紀後葉のものと思われる。D318~D322は、D323と同じ器形のものと思われる。D318は2条の沈線がめぐり、E地区出土のD418と似る。D320・D321の胴部は、D323より新しいものであろう。D322は杯Bの底部と似ているが器壁の厚さから壺底部と考えた。このタイプおよびD326のような高台のない底部の破片がそれぞれコンテナ1杯分ずつ出土している。

D325は高台をもたない長頸壺(壺K)である。胴部はずん胴で口縁部もあまり開かない。これも焼成時に破損した土器である。底部は一方向に粗いヘラ削りを施す。D-2区出土の長頸壺の口縁部D391はD325に似た形態をとる。42G出土のD392は、D325と同様高台をもたないが、器高は低く肩は丸みをもつ。底部外面は不定方向に削る。

D324は丸底の壺で、おそらく短く口縁部がつくものと思われる。胴部に沈線をめぐらし、底部に「×」のヘラ記号が施されている。

D327は、半球形の胴部に三方に長方形透孔を穿った脚部がつく。胴部外面上位には横方向のカキ目を施し、内面下位には同心円文の当て具痕が残る。高杯または器台の一種にみえるが、脚付壺になる可能性もある。焼成は不良で、灰白色の軟質の土器である。

D328はミニチュアの短頸壺である。肩部はよく張り、外面には、2段のカキ目を施す。胎土・焼成とも良好で、やや明るい青灰色を呈す。つくりも丁寧である。7世紀前半に溯る可能性もある。D329は、大型の短頸壺である。口縁端部は内傾する面をもつ。

その他にD-2区から長頸壺の口縁部D391が出ている。

片口鉢 (D330・D331)

D330・D331は、口縁部の一部を折り曲げて、片口にした鉢である。いずれも平底で、口径が胴部最大径より小さい口のすぼむ器形である。底部外面はヘラ削りを施し、底部内面は不定方向になる。D330は、セピア色に近い赤灰色で、焼成も悪くないが、D331は、焼成不良の灰白色の軟質の土器である。

横瓶 (D332~D335)

D334・D335は横瓶で、後者がやや大型である。他に、肩部の傾きからみて横瓶の口縁部と思われるのは、D332・D333である。口縁部の形態は、D332・D334のように、単に端部をカットして、端面をつくり出すだけのものと、D333のように、上部を屈曲させるもの、D334のように、内側にやや拡張する内傾する端面をもち、中位よりやや上に

1条の凹線をめぐらすものと、バラエティに富む。

甕 (D336~D358・D414~D417)

杯類に次いで、出土個体数の多いのが甕である。ただし、全体の器形のわかるものは少なく、口縁部から肩部までしかない資料がほとんどである。胴部の破片はコンテナ14杯に及び、量的には須恵器杯Aをしのぐ。他に平底の底部にあたる破片がコンテナ1杯程度出土している。底部は、平底から立ちあがる部分を粗くへら削りするものが目立つ。

口縁部あるいは胴部の形態は多種多様で、器壁の厚さから考えて、大きさも様々であったと思われる。ここでは、とりえず口縁部の形態によって、以下のように分けておく。

A: 細い頸部から長くのびて開く

B: 細い頸部から短く開く

C: 細い頸部から垂直に近い角度で立ちあがる。

D: 広い頸部から短く開く、または垂直に近い角度で立ちあがる。

D336・D337は甕Aである。いずれも口径 40 cm を越える大型の甕である。D336はカキ目の上に刺突文を施し、D337は細かい波状文を施す。いずれも一見は古墳時代のものと思えるが、D337は明青灰色を呈し、色調は奈良時代のものに似ている。E地区出土のD462もこのタイプに含まれる。

D338~D341・D345~D348・D352~D356が甕Bである。端部のつくり、肩の張りなどに差があり、さらに細分が可能である。D338・D347はカキ目を施している。E地区からは、D415・D417が出ている。

D349~D351が甕Cにあたる。D350・D351は沈線文を施す。E地区からD414が出土している。

甕DにはD357・D358といった大型のものと、D342~D344のようにやや小さめのものがある。E地区のD416はやや小さめのものである。

胴部の叩き目は、平行線・擬格子が多いが、中にはやや大きめの正格子・斜格子のものもある。また、当て具痕の中には、いわゆる車輪文の一種と思



挿図76 叩きと当て具痕

われるものもある(挿図76)

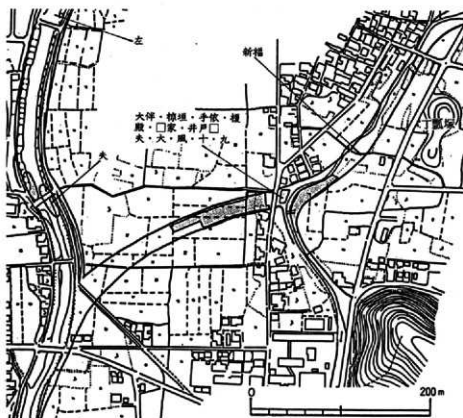
3. 特殊土器類(図版90~93)

以上述べてきた土器の中で、墨書・朱書・刻印などをもつもの、異物の付着したもの、ヘラ記号をもつものなどを扱う。

墨書土器類

土器に文字などを墨で記したものは、32点ある。他に朱書1点、ヘラで文字を記したものの1点、刻印したもの1点がある。これらを土器の種類・器形別にみると、須恵器の杯Aが最も多く15点にのぼり、須恵器杯Bが9点、杯蓋が5点ある。土師器は少なく、杯・皿・台付皿が各1点ある。出土地区は、C-5区が27点とその大半を占めており、他にE地区から7点、東農道橋付近から1点出土している。

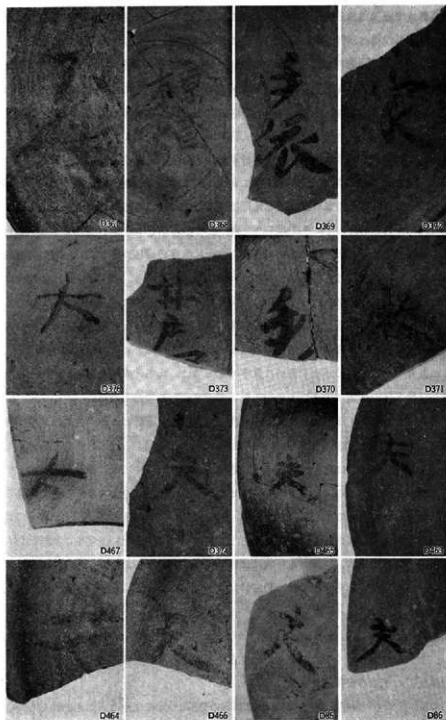
文字の記載位置や方向は、器形ごとにある程度の統一性を認めることができる。例えば



挿図77 墨書土器の分布

第15表 黒書土器等一覧表

No.	釈文	土器	器種	記載位置	出土地区	土器番号	その他
1	大伴	須恵器	杯蓋	頂外	C-5区	D359	
2	大伴	須恵器	杯蓋	頂外	C-5区	D360	
3	大伴	須恵器	杯蓋	頂外	C-5区	D361	
4	大伴	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D362	
5	大伴	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D363	
6	大伴	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D364	
7	大伴	土師器	台付皿	口縁外	C-5区	D 66	ヘラ記号あり
8	伴	須恵器	杯蓋	頂外	C-5区	D365	
9	伴	須恵器	杯A?	口縁外	C-5区	D366	
10	[伴]	須恵器	杯A?	口縁外	C-5区	D367	
11	椀	須恵器	杯B	底外	C-5区	D368	爪状瓦痕あり
12	手依	須恵器	杯A	底外	C-5区	D369	
13	手□	須恵器	杯A?	底外	C-5区	D370	
14	版	須恵器	杯B	底外	C-5区	D371	
15	□家	須恵器	杯B	底外	C-5区	D372	
16	井戸□	須恵器	杯蓋?	頂外	C-5区	D373	
17	新福	須恵器	杯蓋	頂外	東農道橋 付近表掘 C-5区	D394	
18	夫	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D374	
19	夫	須恵器	杯A	口縁外	E地区	D463	ヘラ記号あり
20	夫	須恵器	杯A	口縁外	E地区	D464	
21	夫	須恵器	杯A	口縁外	E地区	D465	
22	夫	須恵器	杯A	口縁外	E地区	D466	
23	夫	土師器	杯	口縁外	E地区	D 85	
24	夫	土師器	皿	口縁外	E地区	D 86	
25	大	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D375	
26	大	須恵器	杯B	底外	C-5区	D376	
27	大	須恵器	杯B	底外	C-5区	D377	
28	左	須恵器	杯B	底外	E地区	D467	
29	十	須恵器	杯B	底外	C-5区	D378	
30	□	須恵器	杯B	底外	C-5区	D379	爪状瓦痕あり
31	□	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D380	
32	□	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D261	
33	十九	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D381	朱書
34	九	須恵器	杯B	底外	C-5区	D382	ヘラ書
35	櫻?	須恵器	杯A	口縁外	C-5区	D383	刻印



捧圖78 墨書土器

須恵器杯Aでは、口縁部外面の中位に口縁のラインと平行した向きで書き、杯Bでは底部外面の高台の内側に、杯蓋では頂部外面のつまみの左側に書くのが普通である。

次に文字の内容であるが、最も多いのが「大伴」であり、「伴」を含めると10点に及ぶ。その内訳は、須恵器杯A 5点・同杯蓋4点・土師器台付皿1点で、いずれもC-5からの出土である。文字の書体、あるいは土器の各器形ごとにおける形態に関しては、あまり共通性は認められない。

これと対照的なのが、数としては「大伴」に次ぐ「夫」の墨書をもつ土器である。その内訳は、須恵器杯A 5点、土師器杯1点、同皿1点の計7点である。出土地点は、D347の1点がC-5区である以外は全てE地区である。この「夫」の墨書をもつ杯Aのうち、D374、D463、D464は、大きさに若干の差異が認められるものの、いずれも口縁端部付近を強くヨコナデするbタイプのものである。また、文字の書体に関しては、D374、D463、D38は、いずれも左のはらいを長くのばす特徴的な書体である。他にD465、D85も比較的類似した書体といえよう。また、そのみならず、全ての字の方向が一致している点も、興味深い。これらは、同一人の手になる文字の可能性もある。もしそうであった場合には、C-5区とE地区という200m離れた地点から出土しているという点は、注意すべきことになってくる。この「夫」という文字に関しては、氏名・人名あるいは建物・役所関係または地名との関連は考えにくい。夫役に関連あるものであろうか。

先に述べた「大伴」は、いうまでもなく氏名を示すものと思われるが、他に氏名と考えられるものとして、D368の「樽垣」がある。これは「倉垣」と通じ、建物関係の可能性も考えられないわけではない。書体は、当遺跡出土の墨書の中では、最も整った美しいものであり、土器そのものも、焼成はややあまいが、胎土、つくりとも良好なものである。

人名と考えられるものとして、D369の「手依」がある。D370の「手□」の欠字の部分もおそらく「依」の字が入るのではなからうか。両者の「手」という字も、比較的似た書体である。記載位置は、いずれも杯Aには珍しく、底部外面である。

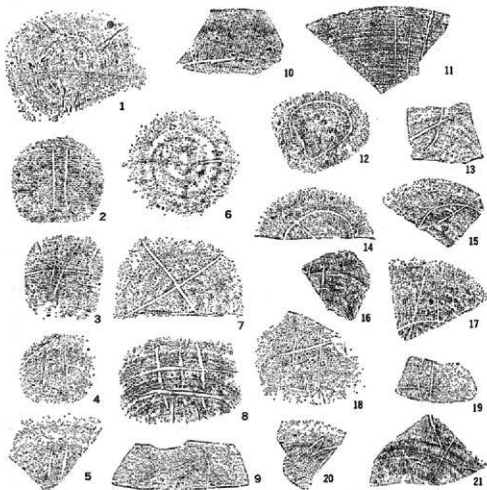
次に、建物・役所関係としては、D371の「殿」、D372の「□家」、D373の「井戸□」がある。

他に、吉祥句として、D394の「新福」がある。土器は、胎土・焼成は良好とは言えないが、中央が突出した小型のつまみという古い要素を備えたものである。出土地点は、東農道橋付近の単独の表採品である。

D375の「風」、D467「左」あるいは刻印のD378の意味は今のところわからない。D378は「覆」の裏文字または「財」であるらしい。刻印の押捺位置の頂度裏側に指紋が残っており、施文時に、器壁の裏側に手を添えていたことがわかる。D375・D376の「大」については、「大伴」の省略の可能性もある。

他に、判読可能なものとして、D378・D381・D381の「十」があるが、これは数字であるか否かは不明である。D381は、朱書である。なお、この土器は、形態からみて須恵器であり、硬質で器壁も薄いが、淡黄橙色の一見土師器を思わせる色調である。底部のつくりもやや特異であり、D307と形態はやや類似するものの、杯Aの中では少数派のcタイプに属する。他にD382のヘラ書の「九」が数字として挙げられる。

ここで、墨書として最も数の多かった「大伴」と当遺跡との関連について若干述べておこう。「大伴」の墨書をもつ土器の出土例は管見によれば、平城宮・多賀城・姫路市辻井遺跡・当遺跡と現在のところまだ少ない。文献で播磨と関連する大伴一族といえは、「大伴オホトモ部屋ウラベ栖古連ノリノ」が思い浮かぶ。この人物は、紀伊国名草郡宇治の大伴連の先祖とされているが、聖徳太子の師範侍者であり、推古17年(609年)2月、太子によって播磨国揖保郡内の279町5段余りの水田司を命ぜられている。しかしこれは、「大伴」の墨書土器よりはば



挿図79 へら記号

100年前の記事である。また、聖徳太子と揖保郡をつなぐものとして、斑鳩寺の存在がある。大伴氏を含めた当時の勢力の中心は、斑鳩寺付近にあったものと思われ、揖保郡でも南端に位置する当遺跡を大伴氏の本拠地と考えるのはむづかしい。ただ、奈良時代の播磨国造にも大伴氏がおり、辻井遺跡の例もあわせて、当遺跡出土の墨書土器の年代に至っても、播磨国内に大伴氏の勢力が存在していたことは確かなようである。

さて、当遺跡では、このように多数の墨書土器の出土をみたにもかかわらず、硯は当初より硯として作られたものは1点もみられず、杯蓋の内面を利用した転用硯が2点出土しているだけである。

ヘラ記号 (挿図79)

丁・柳ヶ瀬遺跡出土の土器のうち、ヘラ記号をもつものは、27点である。うち、土師器は1点のみで、「大伴」の墨書をもつ台付皿(D66)の高台の内側に「×」のヘラ記号が施されている。

ヘラ記号をもつ須恵器26点中の23点が杯Aである。他に、壺の口縁部外面と、壺の底部外面(D324)、高杯の杯部らしいものの外面の例がある。

須恵器杯Aのヘラ記号の記載位置は、口縁部外面が1点ある以外は、底部内面あるいは、口縁部内面から底部内面の境界付近と、土器の内面に限られている点が注目される。

ヘラ記号の種類の内訳であるが、最も多いのが長さのほぼ等しい単純な一本線「一」で、5点ある。全て杯Aである。ただし、長さ、方向等一定せず、実際は細分できる可能性がある。次に多いのが2本の直線をほぼ直角に組み合わせた「×」で、須恵器杯A 4点、同壺1点、土師器高台付皿1点がある。また、二本の平行する直線「||」を記したものは、須恵器杯Aで4点みられる。その他に、挿図にみるように、直線や曲線を何本か組み合わせたものが、それぞれ1点ずつ出ている。

付着物 (図版90-2)

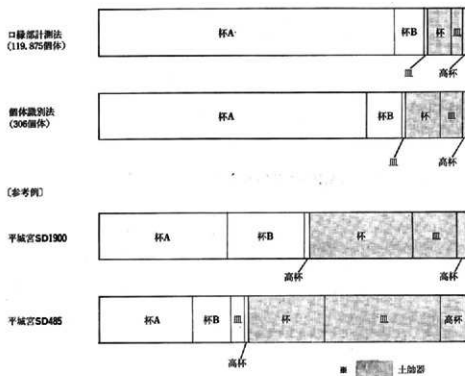
杯類の中には、内面に、暗褐色の付着物が認められるものがあつた(D274、D276、D312など)。小さな気泡を多く含み、底部一面に付着するものや、底部から口縁部にかけて付着するものがある。総体に、ごく薄い被膜状を呈するが、一部に小さい塊状の部分のみみられる。これを蛍光X線分析にかけたところ、無機質のものは検出されず、²³⁾ 顔料を含む漆の具などではなく、有機質のみからなる物質、例えば漆などであることが判明した。

C-5区出土の土器は、以上述べてきたように、7世紀後半から8世紀前半にかけての時期のものであり、平城宮ⅠないしⅡに併行する時期を中心とすると思われる。このような時間幅をもつ流路堆積物であるところから、各器形の厳密な量的な分析はあえて行なわなかったが、実測図を掲載した土器の量によって、その器種構成の大まかな傾向は伝え得

るものと思われる。

ここで特に注目すべき事実は、供膳形態における土師器と須恵器の比率である²⁰⁾。第16表に、平城宮Ⅰの基準資料であるSD1900、ならびに平城宮ⅡのSD485の供膳形態の内訳を100分比で示したが、須恵器と土師器はSD1900ではほぼ同量、SD485では土師器が須恵器を上まわっている。平城宮に限らず畿内中心部においては、奈良時代の供膳形態は土師器が重きをなし、時期が下るほどその比率がふえるようである。それに対して、当遺跡においては、土師器より須恵器が圧倒的に多い。また須恵器では杯Bに対する杯Aの比率の高さが目立つ。

C-5区は、丁・柳ヶ瀬遺跡の奈良時代の集落の本体を離れており、当時の集落の土器の様相を正しく反映していない可能性がある²¹⁾。しかし、当遺跡に限らず、播磨あるいは摂津西・北部あるいは丹波や但馬においても、奈良時代の供膳形態の主体は、須恵器が占めるようである。これらの地域の多くは、平安時代・中世に至るまでの須恵器生産地帯でもある。土器の生産と不可分の関係にある消費、流通の問題を解明するには、消費遺跡における土器の様相の地域的、時間的な変化の追求が必要である。今後、諸遺跡の供膳形態の内訳が量的に明らかにされてゆけば、この丁・柳ヶ瀬遺跡出土の土器の語るところも、いっそう意義深いものになるであろう。



第16表 C-5区出土供膳形態の内訳

註 1) ここでいう奈良時代は、7世紀の飛鳥時代も含む。ただし7世紀の遺物の一部は、古墳時代の節で扱っている。なお、土器の編年や器形の名称などについては、平城宮あるいは飛鳥・藤原地域の遺跡の報告や研究を参考にした。また、奈良国立文化財研究所考古第二調査室の方々には、土器を実見させて頂いた上、数々の御教示を頂いた。

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅳ 1976年 同『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ 1978年など。

- 2) 整理当初において青灰色砂層としてとりあげられた土器はコンテナ約80杯におよんだが、うち1杯弱が平安末から中世のものであった。これらは、青灰色砂の上層のものが混入した可能性がある。なおE地区の遺物は、コンテナ13杯であった。
- 3) この色調・焼成・胎土は、小片であっても弥生式土器や古墳時代の土器等との区別が可能ほど特徴的なものであり、胎土の選定や準備、焼成法に工夫がなされたのかもしれない。なお、細片が多いためほとんど固化しなかったが、灰白色で器表のみ赤色を呈する胎土・つくりとも粗雑な土器の一群があった。
- 4) 土器の杯以外の法量表も、口縁部の全周の1/8以上残っているものを扱っている。なお、原則として口縁部が全周の1/8以上残っているもの全ての実測図を掲載した。
- 5) 西弘海氏の御教示による。
- 6) 巽淳一郎氏の御教示による。
- 7) 斜放射線写真は、斜線が何組かの単位に分かれており、何本か施文しては杯を動かすという作業が想定されるが、これは正放射線より作業が簡略化されたものと思われる。
- 8) 姫路市辻井遺跡・上原田遺跡など。前者は秋枝芳氏の御好意により資料を実見させて頂いた。
- 9) 稲田李司「忌の窟と王権」〔考古学研究〕第25巻第1号 1978年)
- 10) 舌状ではなく、牛角状の把手については、古墳時代のものとしたほうがよいだろう。
- 11) 播磨の須恵器については、森内秀造氏・永井信弘氏・山本雅和氏らに多くの御教示を頂いた。
- 12) 図面では、ヘラ削りの開始あるいは接合部は実線で、削りの単位は1点切りで、回転ナデの単位は2点切りで示している。
- 13) 第1群以外の土器群では平城宮Ⅱ以降もB形體の蓋が一般的である。
- 14) 藤井祐介他『西ノ池古窯址群調査報告書』1979年
- 15) 永井信弘氏の御教示による。
- 16) D290・D381は土器に近い。
- 17) 上田哲也他『姫路丁古墳群』1966年
- 18) 丁4・5・16号墳からはa・bが蓋杯を伴わずに出土している。
- 19) 森下大輔他『家原・堂ノ元遺跡』1984年
- 20) D281・D284～D288のような大型品で筒に近いものは新しくなる可能性がある。これらは白っぽい軟質のものが多く。
- 21) 墨書の軟文については、鬼頭清明氏・佐藤信氏の御教示を頂いた。
- 22) 日本書紀による。
- 23) 鑑定に際しては、薬科哲男氏・清水芳裕氏の御配慮を頂いた。
- 24) 古墳時代中期以降、貯蔵は須恵器、煮沸は土器という二種の土器による機能分担がなされるが、供膳形態においては両者の機能的な差はなく、それ以外の何らかの要因によって地域あるいは時代によって両者の比率が異なるという現象が現われる。その要因の一つは損耗率の違いであるが、それだけでは説明できない。
- 25) 例えば当遺跡が須恵器の集散地である可能性もある。事実受けひずんだものも多い。

この節を書くにあたって、上記の註にあげた方々以外にも、多くの方々の御教示を頂いたことを感謝いたします。また過日物放された西弘海氏には、土器全般特に土器について貴重な御教示を数々頂きました。記して感謝するとともに御冥福をお祈りいたします。

第5節 平安時代から中世の土器

平安時代から中世に位置する土器は、須恵器・土師器・瓦器・灰釉陶器・備前焼・輸入陶磁器等がコンテナ2箱分出土した。大津茂川や西汐入川の旧河道部分や旧耕土と整地土に包含されて出土しており、土器の組合せ等は不明で、各々種類に分けて述べる。(図面第70・第71図)

(1) 須恵器

C・D地区で出土しており、器種は碗(E1~E12)、鉢(E20)、すり鉢(E29~E33)、甕(E37・E38)がある。

碗は重ね碗の痕がみられ、糸切り底である。完形のものはなく図で復原したものと底部のみのものがある。E1は褐灰色で焼成が良く、口縁がやや外反し、口径15.2cm、器高5.8cm、底径5.2cmをはかる。底はやや凹み、体部はロタロ回転による成形が観察される。E2も口縁端が外反しないが、同手法の成形であり、11世紀後半から12世紀初頭の製品である。E3は口径11.9cm、器高4.3cm、底径4.9cmで、焼成時の淡赤色の火ダスキがみられ、見込みに同心円様の成形痕が有り、底の高台状のヘラによる作り出しは、E1が5mmと高いものがE3では3mmと減ずる。E4は底のつくりが違い5~6mmと高いが、焼成もあまく、色調も灰白色を呈し、E3、E4は12世紀後半の所産である。またE1~E4は西播磨で生産されたものであろう。E5は底径指数が49と大きく、色調も灰白色と特徴があり、備前または相生産のものであろう。E6は器高指数が33と低く、底径指数も小さく、胎土中に8mm大の小石が混じり、色調も明青灰色と焼成も良くないので、魚住産のもので、12世紀末から13世紀初頭に焼成されたものである。底部については、焼成があまいもの(E7・E8・E10)と、良いもの(E9)があり、凹底はE9のみで、他は平底で糸切りである。

鉢はE20で、焼成は良く口径18.8cm、残高7.5cmである。姫路市辻垣内遺跡に同様のものがあり、時期は11世紀代とされている。

すり鉢は神出産(E29)と魚住産(E30~E34)のものがある。器形を復原できるものが少なく、口縁形態より特徴を認める。E29は12世紀中頃のもので、口縁に一朱の沈線が入っている。E30は13世紀初頭のもので、口縁端はやや斜めに作り出しており、器壁も薄く、胎土も良好で色調は灰白色である。E34は14世紀代のもので口縁が断面三角形になり、E31は更は上へ拡張し、E32は胎土が悪くなり、5mm大の小石を混ぜ、口縁は内へ巻き込むものと、焼成などから疑問もあるが、魚住産の最後の時期のものE35がある。

甕は魚住産のもので、口縁に細い平行タタキを残し、外反した端部を垂下させたもの

E37と断面三角形状になったものE38がある。前者はタタキ目の間隔も細く、焼成も少し良い。E37は13世紀代、E38は14世紀初頭とする。

(2) 土師器

土師器に杯(E12)・皿(E13~E17)・羽釜(E39~E42)と土鍋(E44)があり、D地区とE地区の資料である。

杯E12は口径14.6cm、器高5.4cm、底径7.1cmで高台の高さが1cmと厚く、底より外に開く形をとっており、底は糸切りである。

皿は3分類でき、E13~E15は口径9.5~10.5cm、高1.4~2.1cmで底はヘラ切りによる痕が著しく残し、上をナゲる特徴的なものである。12世紀前半の時期である。E16は底を回転ヘラ切りし、やや内凹気味に口縁へ立ち上げ、外面はナゲで内面は指痕を少し残し、丁寧に仕上げている。焼成は良く橙色で完品である。E17は手捏ねで成形され、下半はそのままで、上はナゲ調整している。底が少し凹み、軽くケズリ整形のままで、口縁は丸く少し巻き込みながら終る。14世紀前半の時期である。

羽釜はE41・E42とも口径が24cm前後で鋳から口縁の破片で色調はにぶい黄橙色である。E41は内面に刷手目調整がみられ、外面鋳より上は丁寧にナゲ、下半は削ったままで、鋳部の成形時の指押えが残っている。E42は下半にススが附着している。時期は13世紀代のものである。羽釜には別に瓦質製のE39・E40があり、土師質のものに較べると厚手で鋳も厚い。口縁が段状のものE40と普通のものE39があり、E40が口径23cm、E39は19cmとやや小形である。

土鍋E44は、口径約30cmの口縁部破片であるが、底は丸く終るもので、下半に平行タタキ目を残し、口縁内上半と外面にススが附着しており、色調はにぶい黄橙で15世紀代のものである。

(3) 瓦器

瓦器は37Gで出土したE18・E19があり、E18は口径11.9cmで器面は摩滅しているが、下半に指成形のあとが残り、内面に異方向横位のヘラ磨きがみられ、口縁は浅い沈線をまわし少し屈折する。E19は底見込に斜格子目風の磨きが残り、高台は断面三角形で3mmの高さで、高台径は4.6cmと小さい。

(4) 灰胎陶器

灰胎陶器E28は黒笹90号窯式碗の底で、高台径6.0cmでオリーブ色の釉で灰白色の胎土であり、内底に重ね焼の痕がみられる。

(5) 備前焼

備前焼は甕と搦鉢の破片がある。E35はⅡ期の備前で灰色を呈し、E36はⅣ期後半またはⅤ期の搦鉢の破片である。

(6) 輸入陶磁器

輸入陶磁器には白磁と青磁がある。

E21・E22は白磁碗N類で口径 14.0 cm・14.9 cm，色調はオリーブ味の灰白色で折返しの玉縁口縁を特徴とし，E24はその高台で底径 4.5 cm，高台高 1.2 cm の破片である。E23は高台径が約 6 cm で高台高が約 1.8 cm と高い白磁碗である。色調は灰白色である。

E25は同安溪系青磁平底皿で，全面施釉ののち外底を削露胎としたもので，底は良く使われていたもので摩滅している。口径 11 cm，高 2.1 cm で明緑灰色を呈する。

E26は龍泉窯系青磁碗の底部で，器外壁に蓮弁を彫刻するもので，高台の削りが悪く，粘土の動きがみられる。以上は12世紀代のものである。E27は唐津産の碗高台で16世紀末から17世紀初頭のものでこの項より省く。

文献

1. 『第3回中世土器研究会資料——各地域における中世土器研究の現状——』 1984年
2. シンポジウム「平安時代の土器・陶器」——各地域の諸様相と今後の課題—— 1981年
3. 福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告N「博多——高速鉄道関係調査(1)——」 1984年

第6節 近世及びそれ以降の土器

遺物はE地区の表採資料およびC・D地区の試掘資料に限られ、直接遺構に伴うものはないので、図化したものについて、(1)染付磁器、(2)青磁、(3)施釉陶器、(4)無釉陶器、(5)土師器、(6)その他、に分類して記述する。(第72図)

(1) 染付磁器 (F1～F5)

いずれも伊万里系の製品である。F1はくらわんか手の碗で、高台際に界線が描かれた上に、省略された梅樹文が手描きされるが、呉須の発色は悪く、絵付けにだみがある。釉は生掛けで貫入が多く、やや黄味をおび失透気味で光沢に乏しい。高台皿付は露胎になっており、高台をつまんで釉につける「ズブがけ」といわれる方法である。厚手で磁胎は灰味をおび、皿付付近は淡い橙色を呈す。高台内は上の銘様の不明文が描かれる。F2は高い高台をもち、胴部下半の装りの少ない、いわゆる²⁾広東碗である。見込、高台、高台際に界線があり、外面体部に文様が描かれるが欠損しているため不明である。釉はやや青味がかかった透明のガラス質で光沢は強い。高台皿付は釉をぬぐい取り、砂がわずかに付着する。F3はスタンプによる松文を表に二つ、裏に一つ施した猪口で、絵付けの発色は純度の高いコバルト絵具による鮮やかなものである。全面釉が飛んだ状態で、磁胎は白色のガラス質で高台皿付は削りを施す。F4はくらわんか手の碗で、コンニャク印判(菊花文)と手描き(格子文)が併用される。呉須の発色はやや淡く、釉は青味をおびたガラス質である。F5はくらわんか手の皿で、手描きの絵付けがされる。見込に2本の界線が入るが、文様は欠損のため不明である。呉須は⁵⁾マンガンなどの不純物が多く発色は黒ずんでいる。釉はやや青味をおび光沢に乏しい。見込は釉を蛇の目にかき取り、高台皿付は釉をかき取る。高台際から外面体部は⁶⁾ロクロケズリが施される。時期的にはF1、F5は18世紀前半、F4は18世紀後半、F2は19世紀代と考えられ、F3は明治以降のものである。

(2) 青磁 (F6)

F61点のみであるが、三田系のものか東山系のものかは判別しがたい。型物の輪花鉢で、花の陽刻文が施される。釉は厚く、やや濃緑色を呈し、ガラス質で光沢が強い。磁胎は灰白味をおび、外面にわずかに釉切れがある。⁷⁾19世紀代の製品である。

(3) 施釉陶器 (F7, F11, F12)

F7は型物の緑釉の深皿で内面は亀甲と松文が陽刻される。焼成はやや軟質で胎土は黄味をおび、重量は軽い。外面はロクロケズリである。釉は内面の亀甲は淡緑色、松文は濃緑色、外面は緑色にかけ分けられ、鉛釉である。F11は全面に褐色の鉄釉を施した壺であ

る。全面ロクロナデで成形され、口縁際の細い突帯はなでてつまみ出した後、上から強くなでてつけてある。F12は丹波系の甕で陶胎はやや明るい橙色を呈す。外面胴部は赤褐色の化粧土を施し、外面頸部は濃緑色の灰釉を掛け流す。口縁端部および内面も灰釉を全面に施す。内面体部はロクロ目が残る。時代的には18世紀後半から19世紀前半のものと考えられる。

(4) 無釉陶器 (F8, F9, F10)

F8は備前系の壺蓋である。表面の調整は手持ちのケズリ、裏面はロクロナデで、口縁部は強くなでてつまみ出す。周囲はコナデで一部に手持ちのケズリが施される。表面、裏面とも重ね焼きの痕がある。F9は備前系の挿鉢で口縁部は緑帯状に形成される。挿鉢はクシ状の工具で施され、単位は3条以上である。胎土は5mm以上の小石を含む。F10は備前系の植木鉢で暗赤灰色を呈し、焼成は堅緻である。全面ロクロナデで成形された後、外面、口縁端部はロクロケズリを施す。外面体部上半には赤灰色の火罨がみられる。

(5) 土師器 (F13~F17, F19)

F13は土場でやや傾斜する体部を持つ。底部を形成した後⁸⁾に体部を継ぐ方法で、内面の一部に接合痕がみられる。全面に炭化物が付着している。体部は低く、⁹⁾18世紀後半以降のものと考えられるが、体部はコナデによる凹凸がある。F14, F15, F16は焙烙でいずれも内外面コナデで成形された後体部に指おさえが施され、全面に炭化物が付着する。F16は大ぶりなもので口径は55.6cmを測る。全面コナデで形成された後、内面はケズリが施される。焼成は土師質であるが、やや硬質で断面は黒褐色を呈し、F14, F15の2点と異なる。いずれも時代的には18世紀終末から19世紀代のものである。F17はやや硬質に焼成された場である。内面は明るい橙色を呈し、外面はうすく炭化物が付着する。内外面ロクロナデ後、外面体部下半はロクロケズリが施される。F19はやや硬質の土師質の火鉢で口径は44.4cmを測る。内面はロクロケズリが施され、外面はコナデされる。外面には縦2cm、横3.5cmにわたって割離の痕があり、あるいは把手がついていたものかもしれない。外面および口縁端部には炭化物が付着する。胎土は金雲母が若干含まれている。

(6) その他 (F18)

F18は瓦質の火舎で表面は黒褐色を呈し、口縁端部は手ずれのため滑らかになっている。全面ロクロナデで成形された後、面および口縁端部はロクロケズリが施され、内面体部は他と異なる原体によるロクロケズリが施される。胎土は細かい雲母を少々含んでいる。

註 1) 永竹 威「歴史と技術の伝統」『日本のやきもの3有田』淡交社 1975年

2) 高台台端ともいう。大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布—発掘資料を中心として—」『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館 1974年

- 3) 長谷川 真氏の御教示による。
- 4) 吉田光邦「技術と歴史」『やきもの』NHKブックス 1973年
- 5) 註4)と同じ。
- 6) 岡田章一氏の御教示による。
- 7) 青木重雄「三田焼の歴史と作品」『三田焼陶史』1981年
- 8) 森内秀造氏の御教示による。
- 9) 岡田章一・長谷川 真両氏の御教示による。

第7節 木 製 品

丁・柳ヶ瀬遺跡出土の木製品は、弥生時代前期・古墳時代前期の自然流路及びそれに関係する包含層から出土したものであり、その種類は農耕土木、狩猟、生活、紡織、祭祠などに分けられ、中世以降の時期の橋脚と考えられる杭材も出土している。

用途	No.	形 態	出土地	時 期	寸 法 cm			樹 種	木取り	備 考
					長 さ	幅	厚 さ			
農 耕 土 木 具	BW 1	狭 鋸	SX10	弥生前	(43)	11.5	5.6	アカガシ 亜属		
	BW 2	鋸	〃	〃	22.6	(8.4)	1.1	〃		
	CW 2	〃	SX04	古墳前	(19.4)	(11.2)	3.0	〃		
	CW 3	丸 鋸	SX03	〃	25.8	(45.9)	0.5	〃		
	CW 1	鋸柄	〃	〃	(9.7)	16.6	2.5	〃		
	CW 6	柄	〃	〃	(60.6)	7.6	3.0	シ イ		
狩 猟 具	BW 4	弓	SX10	弥生前	(22.5)		径1.3	針葉樹		
	BW 5	〃	〃	〃	(30.7)		径1.7	カヤ		下端焼失
生 活 用 具	BW 7	蓋	〃	弥生前	径(32.7)		0.4	樹皮		ヤルナン? つるあり
	BW 8	槽	SX02	〃	(25.8)	(7.5)	高さ5.0	クスノキ	横木	
	BW12	彩文鉢	SX10	〃	径(41.8)		高さ(7.8)	ケヤキ		
	EW42	漆 桶	C-5区	中 世	径(11.3)		高さ(3.0)	シ イ		
	EW43	〃	〃	〃	径(10.9)		高さ(2.6)	ケヤキ		
紡 織 具	BW 6	布 巻 具	SX10	弥生前	(71.0)		径2.9	ヒノキ		
	CW 7	布 巻 具	SX03	古墳前	62.1		径2.7	モ ミ		
	CW 5	枠	SX03	〃	(16.4)	21.6	1.5	ヒノキ		
祭 祀 等	DW 1	付札状木器	SX05	奈良	(27.6)	4.7	0.4	ヒノキ		顔面墨書
	DW 2	人 形	E地区	〃	(12.5)	2.4	0.65	〃		
	DW 3	〃	SX01	平 安	(52.6)		0.2~0.5	〃		
不 明 木 器	BW 3	加 工 材	SX10	弥生前	24.3	13.0	2.3	アカガシ 亜属		
	BW 9	尖頭状木器	SX02	〃	(25.3)		径4.3	〃		
	BW10	〃	SX02	〃?	22.4	8.9	0.9	〃		
	BW11	加工材(穿孔)	SX10	弥生前	(117.2)	10.5	3.8	ヒノキ		
	CW 4	〃	C-5区	古墳前	30.2	1.8	2.2	スギ?		
	CW 8	面取り棒	SX04	〃	(134.5)		5.5	アカガシ 亜属		

第17表 木製品一覽表

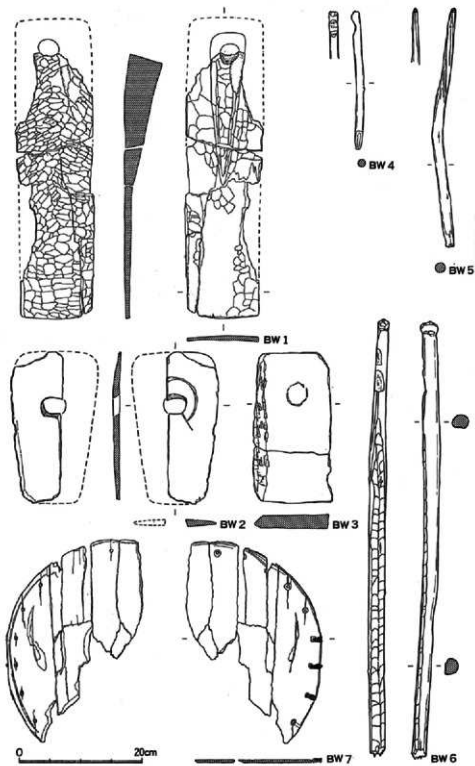


插图80 SX10 铁铤·铁·加工材·弓·布卷具·盖

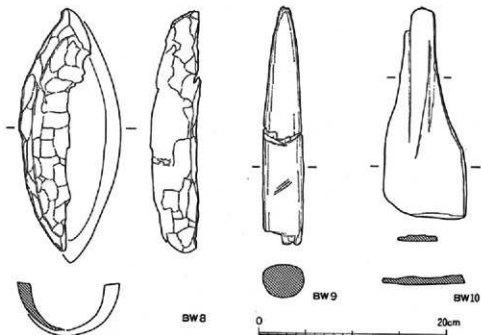


図81 SX02 槽・尖頭状木器・不明木器

弥生時代前期の木製品 (図版4・95~99, 挿図80~83)

C地区 SX02(自然流路)では、用途が明確なのは槽 BW8のみである。これは、全体の約2分の1が残存し、舟形を呈する資料と考えられる。中央は深くえぐられ、粗い仕上げがなされており、上端 1.5cm の平坦面がつくり出されている。BW9 は、用途不明であるが、尖頭状を呈するもので先端は丸みを帯び、心持材を用い丁寧に仕上げている。また、一部に3条の切込みがある。BW10 も用途不明である。残存長 22.4cm の欠損品で厚さ 0.9cm の薄い仕上げで、中央部に僅かな突起がうかがえるが下方ではなくなる。横断面は、若干彎曲している。以上 SX02からは3点の木製品が出土したが、自然木や自然遺物なども多く出土した。

D地区 SX10(自然流路)では、9点出土している。農耕土木具では、狭楕(BW1)がある。残存長 43cm で頭部は欠損し、中央・周縁共細かいケズリがなされたものである。舟形突起は、細みであるが高く、身部中央あたりまでのび、頭部先端から厚みを減じて刃縁にいたる。ケズリの痕跡も顕著で頭部付近では、中央を境として対象的であるが刃先付近は横方向である。また、埋没に至るまでの間、乾燥したようで全体が反っている。

BW2は、全長 22.6cm で刃部の多くと一方の側縁は欠損している。柄装着孔付近は溝をめぐらせて区画されており突起部は折れている。狩猟用具として弓が2点出土している。

BW4 は、針葉樹を用い、弓矢付近のみを残す資料である。現存する身部は、僅かに彎曲しており、断面は円形を呈する。弓矢部分は、先端部の一部を斜めに削り、両面に「くの字状」の抉りを入れている。BW5 は、カヤノキを用い、弓矢部分は周囲を削ってつくられ、一方の弓矢しか残存しないもので身の断面は円形を呈し、僅かに彎曲している。生活用具としては、蓋と彩文鉢が出土している。BW7は、樹皮を円形に加工し周囲を約 5 cm 間隔で穿孔し、そこにサルナシ? のつるで何かをしばっていたものであり、内側には周辺から 0.5~1 cm 内側に凹み部分をもうけていることから蓋と考えられる。BW12 は、ケヤキの横木どりで周囲に約 1.5~2 cm の平担をつくり浅く皿状にえぐられ、外部底面は平担で鉢状を呈する。彩文は、外面に黒色物を塗布したのち、赤色顔料で有軸の木の葉文を 2枚で 1 単位えがき、間に山形を配し、4 単位からなるものと考えられ、周縁に帯状の彩文がうかがえる。底面は、円形に床ずれした状態と考えられるが黒色物質もみられず、高杯脚部が欠損したのち、鉢として使用されていたものと考えられる。紡織具として BW6 がある。残存長 71 cm、直径 2.9 cm で残存する端部付近を削り込み、側面は細かく削られている。全体的に身が反っており、布巻具と考えられる。その他、用途不明木器として、BW11 がある。全長 117.2 cm 幅 10.5 cm 厚さ 3.8 cm の角材で一方の端部寄りに約 4 cm 四方の穿孔がある加工材である。BW3 は、片面に直径 3.7 cm の刻みを入れ、片側縁は両面から削られ尖っており、反対側は折れた状態である。

古墳時代前期の木製品 (図版96・98・100 挿図84・85)

C地区 SX03・SX04・C-5 区赤褐色砂礫層から 8 点出土しており、農耕土木具や紡織具などが主である。CW2 は、鍔で上部のみ残存する。頭部先端は僅かに残り、側縁は一部分残存する。舟形突起は頭部先端まで及ばず、刃部方向にのび、幅と厚みを減ずる。背面の孔付近においてわずかに隆起する。CW3 は、刃先部分のほとんどが欠損しているが、全体を知りうる丸鍔である。側縁及び上部は平担につくられ、ほぼ中央に直径 4.5 cm の柄着装孔をもつ。また中央から刃先部分にかけて大きな稜をもち曲がっている。CWI は、残存長 9.7 cm 幅 16.6 cm の鋤である。全体の残りは悪く細部調整は不明であり、突起部分も木目の方向と直角であるため均一でない。CW6 は、鋤の柄と考えられる。把手部分は、角を面取りし、頭部には細かな調整がうかがえる。紡織具としては布巻具と杵が出土した。CW7は、全長 62.1 cm 直径 2.7 cm の布巻具完形品である。残存状態は悪く、両端部付近を削り込んでおり全体的に身がそっている。CW5 は、2つの部分からなる丁寧なつくりの杵である。頭部には杵をあげ、各々の木の接触部は平担に仕上げられている。全体的に角をとったためらかなもので、下部は喪失している。用途不明木器は、2点出土

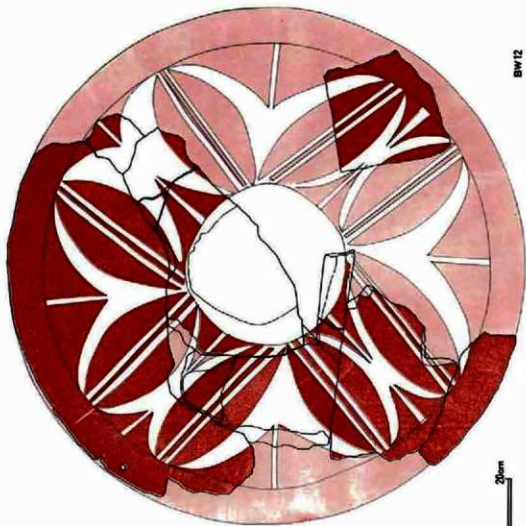
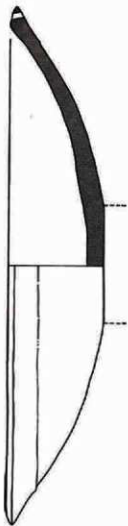


图 100 壳口内面观

BW12



插圖83 SX10 加工材

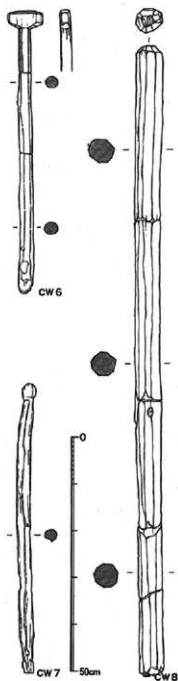
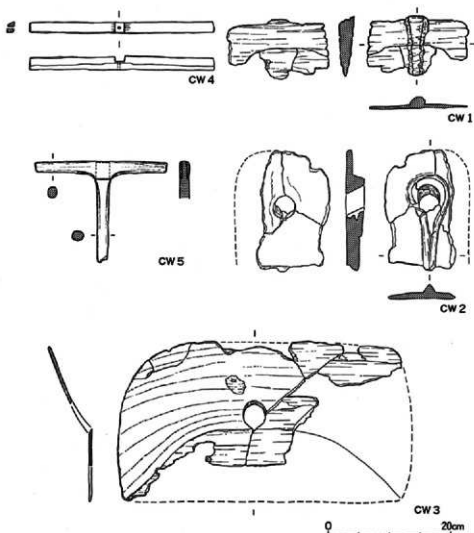


插圖84 SX03·SX04 網·布造具·不明木器

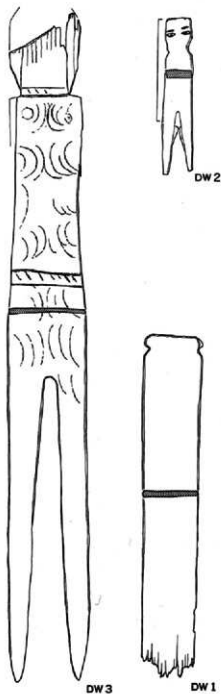
している。CW4 は、全体が丁寧に仕上げられた方柱状のもので、中央に挟りを設け中心に径 3mm の孔を穿つ。また側面には、組み合わせ痕と考えられるものがある。CW8 は、周囲を 9 面に面取りされた棒状木器で、頭部は周囲から斜めに削り込み、先端部は平担である。

奈良・平安時代の木製品（図版101，挿図86）

この時期の木製品と考えられるものに、人形 2 点と付札状木製品 1 点がある。樹種はい



挿図85 SX03・SX04 銀・丸銀・不明木器・杵



挿図86 B・C・E地区人形・付札状木器

づれもヒノキを使用している。

人形は2タイプ出土しており、DW2はE地区千日橋付近で第3次調査で発見したもので、全長12.5cm、最大幅2.4cm、厚7mmを計る。肩部をくの字状に切りこみ、脚部は鋭く刃物で削出している。腕の表現は欠損して不明であるが、下から刃物で削りを入れたものであろう。顔は眉と目を墨で書き入れている。時期は奈良時代に属するものである。

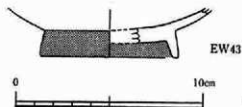
DW3は、B地区SX01暗灰色粘土中層の砂で発見したものである。頭部を一部欠いているが、残長約52.6cm、最大幅6.2cm、厚さ2~5mm、脚長は24.3cm、肩幅5.2cm、腰幅5.8cmを計る大型品である。顔は損傷して表現は不明で、体部に墨書痕が見られ、頸に二条の線とその間に右下りの列点が観察される。腰にも二条線と右下りの列点がある。その上下に孤線が4段、左右対称を意識し描かれ、腰下にも2段みられる。時期は平安時代前期に属する。人形は県下において、9遺跡70例を超え出土しているが、肩部の形態や顔の表現などから分類がなされる。DW3の孤線の墨書の表現に近いものは城崎郡日高町川岸遺跡例の頭部表現にみられ、京都府長岡京例に近いものがあると聞く。DW3の表現例は着衣の素材を表わしているやにも考えうるものである。

DW1はC地区から出土した残長約27cm、幅約4.5cm、厚さ4mm圭頭状につくり、左右に切り込みをいれた木札状木器製品で墨書はない。

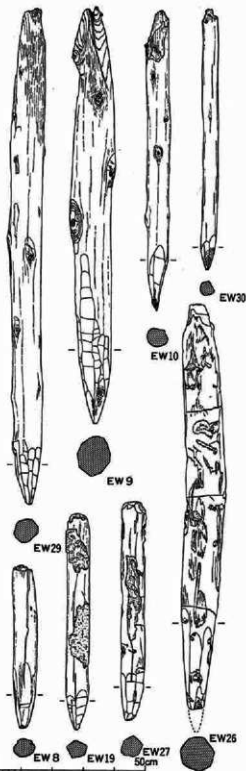
中世及び以降の木製品(図版102・103
挿図87~89)

SX05 (槇状遺構) の杭材及び C-5
区出土の漆剣 2 点がこの時期のもので
ある。

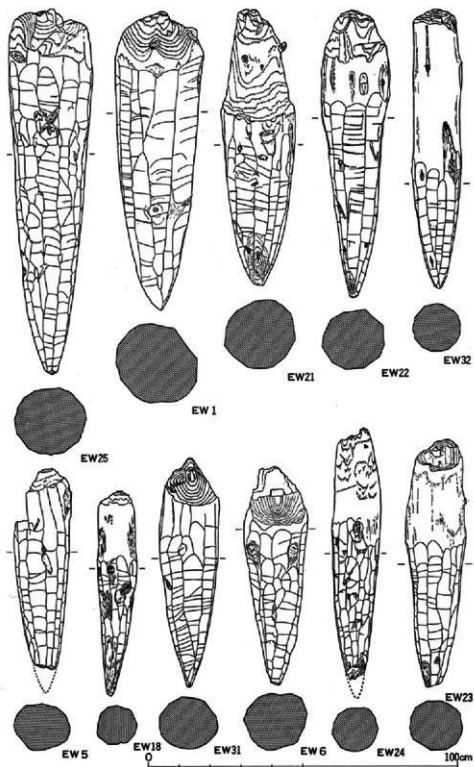
杭は、40点検出され直接 SX05に関
連する32点を計測した。杭は、いずれ
も完存でなく後世の影響で欠損或は腐
食したものである。樹種は、マツが多
く、ヒノキ?サクラ属、ヤマハゼ?ス
ギ?がまれに見られる。長さは、EW
29が154.7cmのヒノキ?材で最長で
あり、直径はEW1の29cmが最大
で、15cm以上の大型のものはサクラ
属のEW5を除けば全てマツでしめら



挿図87 C-5区 漆 杭



挿図88 SX05 杭-1



排四89 SX06 坑-2

れる。形態は、マツ、サクラ属は太さの関係があり、杭先端を削り出すハツリが上部から見られる。これに対して、他の樹種を用いた杭は先端部を少し削ったのみである。杭の表面の樹皮の残存状態は、保存状態の関係で不明な点が多かったが、EW19・EW27のシイ材2点が認められたのみである。

漆桶 EW42 は、口縁部を欠失し、低い高台をもつ中型のものである。内外面共黒漆を塗り、内面はほぼ中央に朱漆による文様を描き外面には二重の狐線文と二階菱文様がほどこされている。EW43 は、高台部が 1.4 cm と高く全体はシャープなつくりである。保存状態も良好で体部内外面に朱塗りし、高台部は黒漆を塗布している。

第18表 SX05 橋状遺構杭一覧表

No.	全長 cm	直径 cm	樹種	No.	全長 cm	直径 cm	樹種
EW 1	95.5	29	マ	EW 17	38	8	
2	43	10		18	65.6	13	マ ツ
3	54	14		19	69	7.5	シ イ
4	56	7		20	55	8	
5	64.5	18.2	サクラ属	21	88	24.2	マ ツ
6	70	20.7	マ ツ	22	92	22	＃
7	58	6		23	79.7	19.7	＃
8	52	7.7	ヤマハゼ?	24	80.8	16	＃
9	133	14	ヒノキ?	25	116.8	27	＃
10	96	7.6	スギ?	26	129	13	シ イ
11	34	5		27	70	7.8	＃
12	29	10		28	32	7	
13	26	6		29	154.7	11	ヒノキ?
14	48.8	14	マ ツ	30	83.2	5.2	＃
15	14	8		31	73	19.3	マ ツ
16	46.4	11	マ ツ	32	89.5	16	＃

第8節 石 器

丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した石器は、縄文・弥生時代のものが大半で、若干古墳時代のものもある。遺物総数は、71点出土しており溝状遺構出土のものが若干存在する他、自然流路からのものが大半を占める。しかし、発掘調査の面積や土器出土数に比べると少ないことが判る。以下、遺構・包含層・出土時期を一覧表と参考として石器の種類別に説明する。

石鏃 (AS1~AS3, BS1~BS15)

石鏃は、18点出土し、AS1~AS3は縄文包含層出土のものですべて凹基無茎式でやや風化の進んだサヌカイト製である。3点共重量は、0.5g までで小形軽量で縄文の特徴をそなえている。

弥生包含層及び遺構から出土したものは、15点で凹基無茎式7点、平基無茎式4点、凸基無茎式3点、五角形鏃1点で、五角形鏃BS7は、縄文時代晩期を示す石鏃と考えられており、当遺物もその可能性は高いと思うが、弥生時代前期溝から出土しているが、その時期の石器組成も不明確で、縄文時代晩期後半凸帯文土器が出土しており、弥生時期との関係の中でとりあえず弥生時代の欄に掲げた。

石錐 (AS4)

石錐は、B地区の砂層から出土しており、先端部は側縁からの打撃と使用により丸みをおびている。

楔形石器 (BS16~BS18)

出土位置からいずれも弥生時代のものと考えられる。BS16・BS17は、相互両端から裁断されBS16・BS18は端部の幅が狭い。

削器 (AS5, BS19~BS22)

AS5は、打面は明瞭に残し、刀部は両面からつくり出されている。その他は、いずれも打面部は折損しており、BS20~BS22の刃部は両面に加工されているBS19は、片面に大きく自然面を残し各々の片側縁に刀部加工がされている。

石斧 (AS6, BS23~BS26)

石斧は5点出土したが、明らかに縄文時代のものはAS6で、A地区砂層縄文時代中期末~後期初頭の土器と伴出している。全体はよく磨かれており、刃部打痕が著しく、石斧としての使用は限界に達していたものであろう。他4点は、弥生時代の遺構や包含層から出土したものの、BS23・BS25は弥生初頭まで縄文要素の残る石斧かも知れない。BS24は、同様の泥板岩製の扁平片刀石斧でBS26は、結晶片岩製の柱状片刀石斧である。

石剗丁 (BS27)

第19表 石器一覽表(1)

石 鏃

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	形 態	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石 材	備 考
AS 1	B地区 B ₁ B ₁₃	凹基無茎	14.4	11.3	2.2	0.3	ヤスコイト	素材の折 れ面利用
	B地区 A ₁ 砂	凹基無茎	20.0	14.5	1.9	0.45	〃	
	59G 黄褐色 Baco 上砂	凹基無茎	(18.2)	(12.7)	2.1	0.5	〃	
BS 1	B地区 SD02	凹基無茎	14.7	(10.5)	1.5	0.25	〃	
	44G SD01	凹基無茎	19.0	12.9	2.7	0.5	〃	
	B地区 B ₁ 黒色 シルト	凹基無茎	21.0	19.6	2.2	0.75	〃	
4	B地区 SD02	凹基無茎	25.2	14.4	2.3	0.7	〃	
5	C-2区 茶灰色土	凹基無茎	(16.8)	13.8	2.8	0.65	〃	
6	40G 6層 暗灰粘	平基無茎	17.6	15.8	2.1	0.9	〃	
7	B地区 A ₁ 灰褐砂	五角形	21.9	14.3	2.6	0.7	〃	
8	D-2 SD26	凹基無茎	(19.3)	15.2	3.9	0.9	〃	
9	A地区	平基無茎	20.0	18.0	3.7	0.9	〃	
10	D-2区 SD17	凹基無茎	(26.0)	(20.8)	4.0	2.4	〃	
11	B地区 A ₁ 灰褐砂	平基無茎	31.4	22.1	6.1	4.1	〃	
12	C-3区 11層 青 灰色砂質土	平基無茎	29.6	24.1	4.3	2.5	〃	
13	A地区	凸基無茎	(28.2)	15.1	2.7	1.7	〃	
14	B地区 A ₁ 砂層	凸基無茎	35.9	9.9	2.6	1.2	〃	
15	C-3区 SX03 青灰砂泥	凸基無茎	(45.4)	15.9	3.7	3.1	〃	

石 鏃

(単位 mm・g)

No.	出 土 地 及 層 位	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石 材	備 考
AS 4	B地区 A ₂ 砂	40.0	13.5	7.1	3.85	ヤスコイト	

復形石器

(単位 mm・g)

No.	出 土 地 及 層 位	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石 材	備 考
BS 16	D-6区 表面採集	28.8	7.8	7.2	1.8	ヤスコイト	
17	C-2区 SD06	22.6	13.8	8.0	2.42	〃	
18	A地区 10層黒粘	44.7	18.2	11.3	9.9	〃	

削 器

(単位 mm・g)

No.	出 土 地 及 層 位	最大長	最大幅	最大厚	重 量	石 材	備 考
AS 5	A地区 13層下14層	28.9	64.4	5.3	9.7	ヤスコイト	
BS 19	E地区	56.2	42.6	9.2	20.7	〃	打面部折損
	60G	27.1	45.7	5.8	7.6	〃	
21	D-3区 SX10	40.0	85.3	8.0	25.0	〃	〃
22	D-3区 灰色粘土	52.8	83.0	8.6	96.7	〃	〃

石器一覽表(2)

石 斧

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石 材	備 考
AS 6	B地区 A 2砂層	84.8	61.4	26.0	255		刃部打痕著しい
BS 23	B地区 表面採集	79.0	45.9	19.8	120	粘板岩	完形 縄文 石斧?
BS 24	B地区 SD02	64.3	36.4	12.2	44.75	泥板岩?	完形 扁平 片刃
BS 25	32G 6層黒色粘土層	64.5	31.2	13.8	43	緑色片岩?	完形 縄文 石斧?
BS 26	C-6区	121.8	36.8	25.5	280	結晶片岩	完形 柱状 片刃

石 匙 丁

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石 材	備 考
BS 27	D-3区 灰色土層	(48.4)	57.2	11.3	36.3	粘板岩	側端部に磨 製痕あり

石 鏟

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石 材	備 考
AS 7	B地区 SX01	89.0	27.2	22.0	79.3		切目石鏟
8	A地区 14層	33	26.1	11.1	12.6		
9	B地区 SD02	42.4	31.8	14.4	26.6	流紋岩?	
10	A地区 12層	49.5	44.7	12.5	37		
11	B地区 B ₁ 砂層	47.7	49.6	16.0	56.3		
12	A地区 9層	51.4	39.6	14.6	38.4		
13	A地区 黒色粘土層	62	46.7	13.6	55.3	砂岩	
14	A地区 14層	57.9	39	13.5	47.7		
15	B地区 A ₆ 黄褐色砂質土	51.3	39.3	11.6	29.5		
16	A地区 14層	49.7	40	12	33.3		
17	A地区 11~13層	52.2	30.2	12.7	35.7		
18	A地区 13層	63.5	52.8	13.5	96.5		
19	A地区 13層	64.2	51.9	14.6	54.7		
20	B地区 B ₁ 黒色粘土	64.5	48.2	18.5	86.1	流紋岩?	
21	B地区 A ₁ 砂層	63.7	41.2	17.0	62.6	流紋岩	
22	A地区 14層	74.6	44.7	18.9	95.2		
23	C-6区	85.1	49.2	18.2			
24	C-3区 SX03	88.4	101.8	20.6	300	流紋岩	側面に打ち かきあり

石 棒

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石 材	備 考
AS 25	B地区 A ₁ 砂	9.4	4.1	26	155	結晶片岩	
26	C-3区 SX02 暗青灰色 砂泥	191	62	43	635	結晶片岩	
27	C-3区 茶褐色土	335	66	53.5	1678	結晶片岩	

石器一覧表(3)

砥石

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
BS 28	D-3区 下層褐色砂層	102	102	92	495	砂岩	
29	D-5, 65	102	108	28	420	砂岩	

敲石

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
BS 30	B地区 B-暗灰色粘土	147	72	28	558	流紋岩	
31	C-5区北 青灰色砂礫層	78	67	57	400	花崗岩	両端に敲打痕あり
32	C-4区 SX04	113	58	48	408	流紋岩	弥生前期
33	C-6区	109	55	57	460	緑色片岩	側縁に敲打痕
34	D-5区	117	63	39	570	緑色片岩	石斧転用

磨石

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
BS 35	C-5区 SX05	108	90	54	555	花崗岩	凹石としても使用
BS 36	C-6区	82	58	63	272	流紋岩	側縁一部に敲打痕あり
BS 37	A地区 黒色粘土層	128	97	65	1005	流紋岩	凹石としても使用

凹石

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
BS 38	D-3区 SX10 第2 暗灰色シルト	12.8	18.3	82	1985	花崗岩	両面に凹みあり

台石

(単位 mm・g)

No.	出土地及層位	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
BS 39	C-2区 SX02	137	37	56	440	花崗岩	
BS 40	D-3区 黄褐色泥土	222	58	69	785	花崗岩	
BS 41	C-4区 SX02 暗灰色砂泥	203	137	58	2580	流紋岩	
BS 42	D-3区 SX10 黒色シルト	190	113	65	2110	花崗岩	
BS 43	D-3区 SX10	155	201	95	5170	流紋岩	
BS 44	D-3区 SX10 第1 暗灰色シルト	206	114	119	4690	花崗岩	

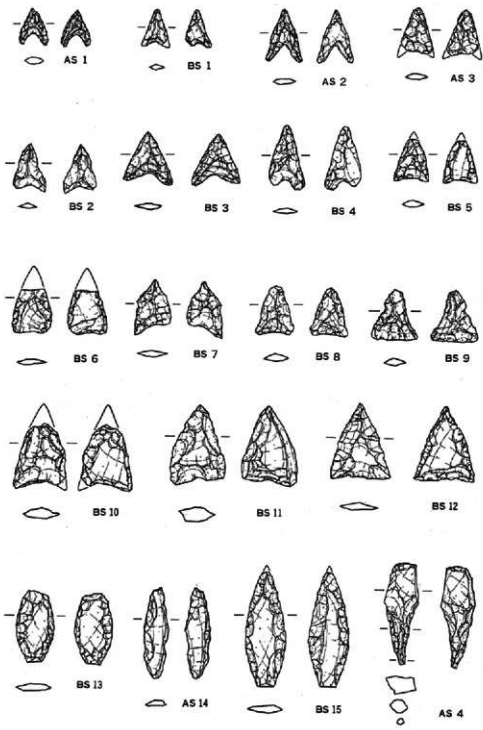


插图90 A~D地区 石镞·石鏃

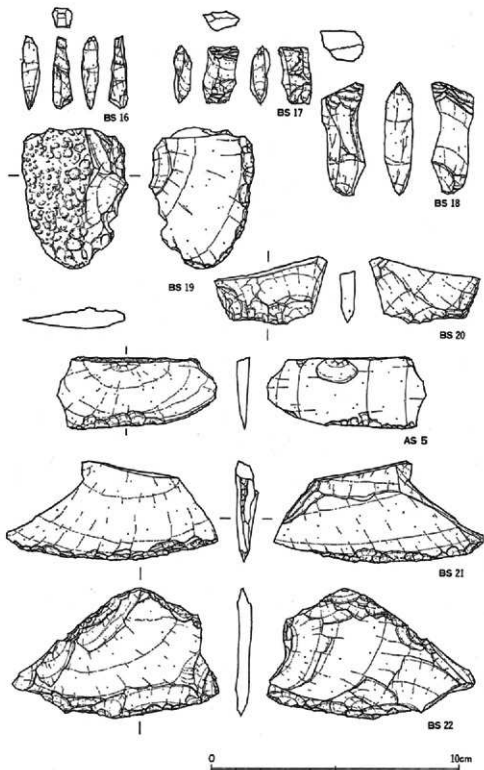
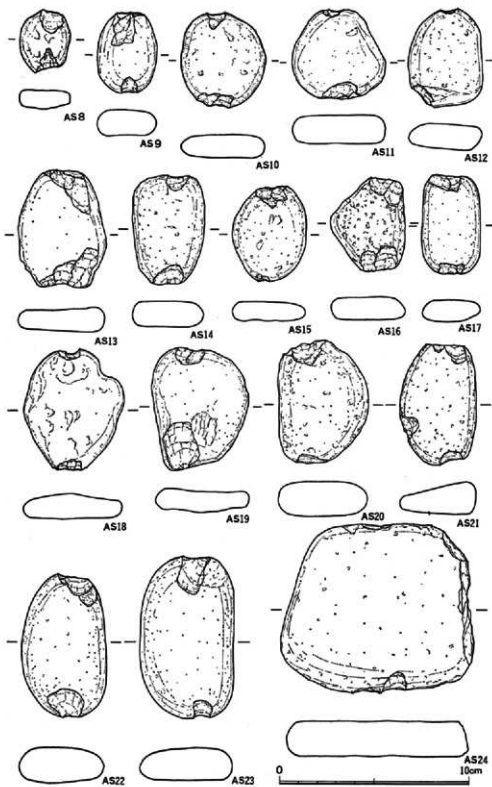


插图91 A~E地区 楔形石器·削器

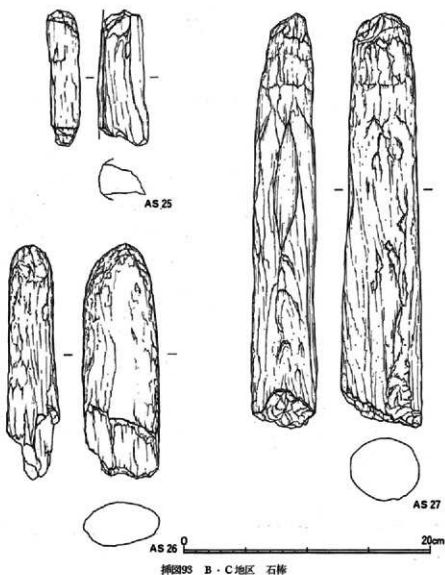


柳園92 A~C地区 石鏟

石砲丁は、粘板岩製で半分以上欠損しているものが1点出土したのみであった。現存部分には穿孔がなく、側端部に磨製による狭りが存在することから打製石砲丁の側端部の形態を意識して製作されたものと考えられる。

石錘 (AS7~AS24)

石錘は、縄文時代の包含層を中心に18点出土した。そのうち1点のみが巾約5mmの溝をほぼ全周にめぐらせた切り目石錘で、その他は、両端打ちかきのものである。大きさも様々で、最大長33mmから89mm、重量も12.6gから300gまでのもので全体をみるとばらつきがある。



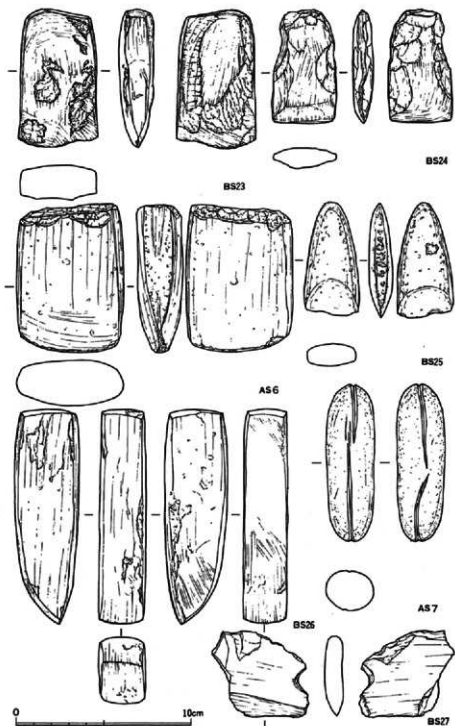


插图94 B~D地区 石斧·石锤·石剋丁

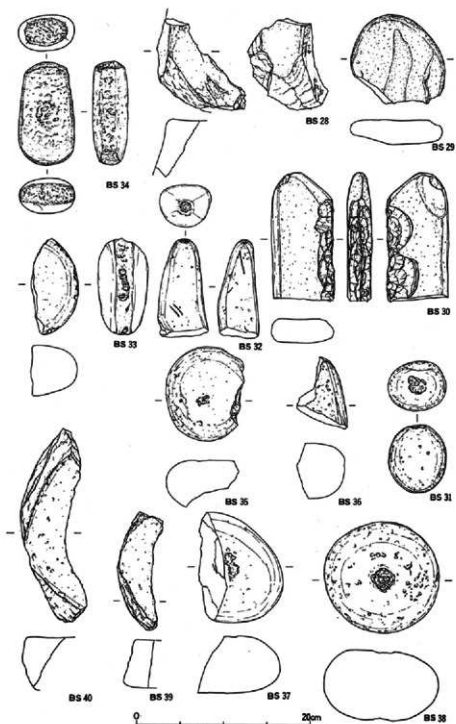
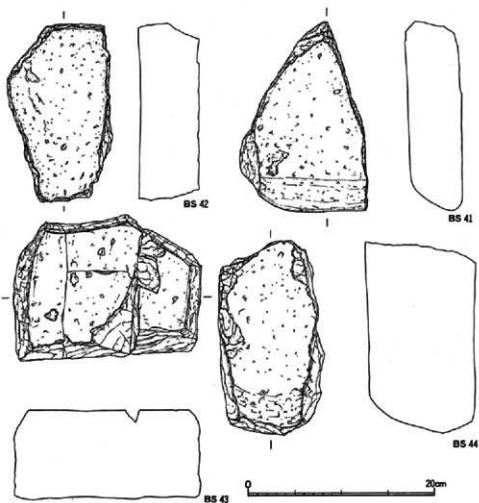


插图95 A~D地区 砾石·卵石·磨石·凹石·台石



挿図96 C・D地区 台石

当時の環境を考えるならば、海岸も近く、河川も間近にせまっており、漁撈等の活動からも他の石器出土比率に比べて多いことは十分理解しえるものである。

石棒 (AS25～AS27)

石棒は、3点出土しており石材は全て、結晶片岩である。最大のものはAS27で、長さ33.5cm、重量は1678gをはかる。形態は、先端部は敲打により丸くおさまめ、すぐ下に挟りを意識した凹みが見られる。また、側縁の中央部の一部に特に念入りの磨製をほどこした箇所がみられる。これらの結晶片岩を使用した石棒は、特に縄文時代晩期のものに多くみられる。

砥石 (BS28・BS29)

砥石は、弥生時代中期包含層から2点出土したもので、いずれも砂岩を使用している。

BS28 は、厚み、幅とも推定しえないが、断面が台形を呈する大形品で側面も使用している。また、BS29 は円形を呈し、中央部分を砥石として使用したもので、厚さは 2.8 cm と薄いものである。

敲石 (BS30~BS34)

敲石は、5点出土しており、いずれも弥生時代包含層などからのものである。BS30、BS33 は、側面縁で敲打したもので、BS31、BS32 は一方の端部を使用したものである。BS34 は、太型始刃石斧を転用して、刃部・基部・側縁などの全ての部分を使用しているものである。

磨石 (BS35~BS37)

磨石は3点出土しており、いずれも弥生時代のもと考えられる。これらの3点は、直径 10 cm 前後の花崗岩や流紋岩の円礫を使用し、一部浅い凹みが見られることから、凹石として機能したものであろう。

凹石 (BS38)

磨石と兼用されていたものが2点存在するが、凹石のみの機能を有するものは1点のみである。直径 13 cm 厚さ 8.2 cm で、花崗岩の円礫を使用し、両面に凹みをもつ。

台石 (BS39~BS44)

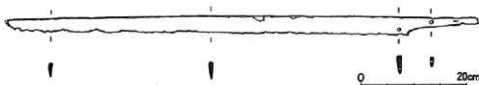
台石は6点出土しており、全て弥生時代前期のものである。断面は円形状を呈する。一部砥石とまではゆかないが、磨面を持ったり、打痕を残すものも存在する。

第9節 鉄 製 品

今回の発掘調査で出土した鉄製品は、鉄鍔1点と直刀1点にすぎなかった。

CI1 鉄鍔は、C-3 区 SX03 自然流路土器群中から出土したものである。最大長 7.2 cm、幅 2.1 cm、重量 8.4 g をはかり、両面共縁は明確でなく柳葉形のものである。共伴土器から庄内式併行期のもと考えられる。兵庫県下においてもこの時期の集落からの出土例は、川西市栄根遺跡¹⁾、神戸市北神ニュータウン No45 地点²⁾、洲本市下内膳遺跡³⁾が知られるのみで、出土例が少なく、今のところ資料の増加に期待したい。

DI1 直刀は、SX05 自然流路、青灰砂礫最下層から出土した。この土層は、SX06 橋状遺構（中世以降）の枕が打ち込まれていた土層で奈良時代前半の遺物を多量に包含している自然流路と考えられる。直刀は、全長 90 cm、幅 3.3 cm、最大厚 1.0 cm をはかり平造りで刃先は切り刃、刃部は内巻を呈している。また全国的にみても、奈良時代の小刀の出土は若干みられるが、全長 90 cm 余りの直刀の出土は不明である。しかし、正倉院や出雲大社などの伝世品が知られているものは、刀ぞりでしかも象嵌されているものであり御物的な色彩が強い。これらに対して当遺跡出土のものは機能面から考えれば実用的であり、この様なものも存在していたものと考えられる。



挿図98 SX05 直刀

注

- 1) 田中達夫・岡野慶隆・池田正男・深井明比古「栄根遺跡」兵庫県教育委員会 1982年
- 2) 「北神ニュータウン内遺跡現地説明会資料」神戸市教育委員会 1981年
- 3) 浦上頼史「下内膳遺跡」『埋蔵文化財研究会第16回研究会発表要旨』1984年
- 4) 千鶴 浩・深井明比古「兵庫県下における弥生時代から古墳時代初期の鉄製品一覧表」『埋蔵文化財研究会第16回研究会発表要旨』1984年

第5章 ま と め

丁・柳ヶ瀬遺跡は河川改修工事に伴い、対象面積約17,500㎡のうち確認調査を経て、約3,300㎡について二箇年の全面調査を実施し、低地に着目した発掘調査において、前述のごとく数々の成果を生み出した遺跡であります。整理事務所の二度の移転などで中断したりしながら行った遺物の分析を経た概要を列記することで、まとめにかえたい。

(1) 現河道・旧河道を中心とした低地・湿地の調査において、最近の島浜貝塚等諸例のような河道部分を含めた調査体制・調査方法を組むことはできなかつたが、播磨地方の大規模な低地調査への先がけとなった。

(2) これまで縄文時代後期の配石墓や土偶、住居址を発掘調査した揖保郡太子町東南遺跡や晩期の常全遺跡や立岡遺跡が周辺に点在していたが、中期まで遡る大津茂川下流域の遺跡は初めてであり、丁・柳ヶ瀬遺跡は後・晩期へも継がる拠点的な集落である。なかでも、中期末葉から後期初頭にかけは、宍野市片吹遺跡や宍粟郡一宮町福野遺跡の住居址群の調査と併せて、北白川C式の地方化と中津式成立の問題まで波及させうる土器群が検出され、今後の播磨各河川流域での研究成果に期待するものがある。

晩期の土器については、弥生時代前期の土器組成と明確なかわりあいを示す遺構や遺物の良好な出土状況を示すものがないが、神崎郡神崎町福本遺跡や宍野市門前遺跡などで、凸帯などの技術は縄文時代の伝統性を残し、胎土や調整などは弥生式土器と考えるものが存在する例も有り、今後の資料の増加をまち検討を加えたい。

(3) 弥生時代前期の土器については「播磨の弥生時代前期土器文様変遷表」などで述べているように、丁・柳ヶ瀬遺跡ではc～e段階が地区を換えて出土しており、調査区外の自然堤防にのる微高地に推定される住居址などの調査を経て、より精緻な研究を展開しなければならぬ。

また、付章で工業・沢田両氏の黒色塗抹物と赤色顔料の分析などから、彩文土器の研究が試みられるなど、自然流路から出土した遺物群ではあるが、重要なものが多い。

(4) 弥生時代前期の木製品も自然流路中に出土したものが多く、保存が良いものもあり彩文鉢などともに、付章にて渡辺・嶋倉両氏の分析で述べられているように、アケビ属の繊維を使った我が国では最も古いとされるコイリングによる罎物(籠)の出土がある。

(5) 古式土師器の資料が多く、自然流路と住居址1・2出土のものがある。その中に、壺・壺・器台などに但馬・丹後地方で多くみられるものや、山陰地方や讃岐地方系といわれる土器があり、土器の流通が考えられる資料である。丁・柳ヶ瀬遺跡の東、前方後円墳

丁・瓢塚古墳の年代観と住居址1・2などの土器の年代観とは示峻に富むものがあり、丁・瓢塚古墳を維持し支えた集落の端にあると思われるが、それ以上は想像の域にあるが、興味のある位置に存在する。ここで、A・B地区の隣接地を含め、C地区隣接地の保存が今後、重要な課題となる。

(6) 古墳時代中、後期の遺物は丁古墳群をひかえているにもかかわらず、以外と少なく住居址なども検出されていない。

(7) (飛鳥)奈良時代の遺物は比較的多く、自然流路や大津茂川より出土している。

なかでも、土師器は河内からの搬入品の可能性があるもので、(飛鳥V)平城宮Ⅰと平城宮Ⅱ又はⅢに伴い、8世紀初頭から前半に位置づけられるものがある。須恵器は杯蓋が平城宮ⅠまたはⅡ、稜輪は7世紀後半にいくかと思われるものがあるが、杯は8世紀初頭から前半にかけてのものが多く、甕に車輪文のタタキが施されるなど特色をみい出すものがある。

また、墨書土器32点、朱書1点、ヘラ書1点、刻印1点があり、大伴の墨書が多く、播磨国内での大伴氏の勢力が7世紀後半から8世紀前半にわたって活躍していたと考えられ、上流の下太田庵寺跡との関係も含め、流出してきた人形や平瓦片とともに興味深いものである。

(8) 平安時代から近世にかけての遺物が少ないが、中世の橋脚と考える枕材の出土は、今後、古代の長越遺跡³⁾や吉田南遺跡と併せて検討の時期が来るものと考えられる。

(9) 石器については、付章で述べられるとおり薬科・東村両氏の分析によると19資料のうち17点が金山東か金山西群の産で、残りは法印谷群または金山西群と淡路産の原石を使用している。そのうち、縄文時代は全て讃岐産のもので、弥生時代前期は1点が淡路産で他は讃岐産のものであり、播磨から海に面した、近い原石産地のもを使用している。

(10) 付章で述べられている絶対年代について、高橋氏が微地形の形成過程の論考より、⁴⁾¹⁴C年代測定でD地区砂礫層中の埋木Y-3に3,270±65 B.P.を報告され、安川・井口両氏の古地磁気分析より縄文時代中期末(c層)3,200 B.P.を与えられた。

以上のとおり、成果は多くあるが、丁・柳ヶ瀬遺跡は広大で、主に縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代と地区を各小期の中でも異りながら複合し、なお、現集落下や畑、水田下に眠っているものと考えられる。丁・瓢塚古墳の年代を与えること一つについても、問題が大きく、大津茂川流域史を解く鍵がここにあることを記して、丁・柳ヶ瀬遺跡が今後とも保護されることを望むものである。

註1) 姫路市内の水尾川改修や今宿丁田遺跡での旧河道部の調査が大規模に、増加している。

2) 鎌木義昌「水神について」『兵庫の歴史』14 1978年

3) 明石市所在で明石郡新推定地と考えられている遺跡である。

4) 安川・井口氏の第1回試料の採取位置については、本文挿図20を比較されたい。

a層(1,600 B.P.)は弥生時代中期以降の土器を含み、b層(1,800 B.P.)は弥生時代前期の土器を含み、c層(2,000 B.P.)は弥生時代前期貼付突帯文土器を含み、d層(2,200 B.P.)は縄文時代晩期凸帯文土器を含み、e層(3,200 B.P.)・f層(3,300 B.P.)とも中期末の土器を含む結果がでており、著者が述べられているとおり、少し年代の値が若すぎる感がある。

付章 自然科学的方法による調査

- 第1節 丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境 ……………高橋 学
- 第2節 丁・柳ヶ瀬遺跡の古地磁学的研究
……………井口博夫・安川克己
- 第3節 丁・柳ヶ瀬遺跡の花粉分析 ……………前田保夫
- 第4節 珪藻分析……………熊野 茂・居平昌士・宮本文子
- 第5節 弥生土器の黒色化手法について
……………工業善通・沢田正昭
- 第6節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土のサヌカイト遺物の
石材産地分析……………薬科哲男・東村武信
- 第7節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土木製品の樹種 ……………嶋倉巳三郎
- 第8節 編 物……………渡辺 誠

第1節 丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境

高 橋 学
(立命館大学・地理)

はじめに 山間盆地において地形調査を行っていると、必ずといって良いほど耳にするのが「湖伝説」である。これと同様に臨海平野においては「内湾伝説」の残っていることが多い。現在は陸となっている場所が、かつては湖であったり海であったというのである。そして、その証拠として井戸掘りや土木工事の際に貝殻が出土したことや、裏山の岩石に貝化石が含まれていることなどがあげられる。また、かつての陸域・水域を描いたという古絵図が残っていることもある。このような伝説の中には、単なるお話しとしてかたづけてしまうわけにはいかない真実が含まれていることも多い。しかしながら、それらを地形・地質学的に検討してみると、「かつて」といわれる時代が何時であるのか明らかでないために、ゆがんだイメージが創り出されていることに気づく。すなわち中生代の貝化石をはじめ、新生代第三紀のもの、第四紀更新世のもの、そして最も新しい完新世の化石までが、すべて「かつて」という一言で、あたかも同時代に属するもの様に取扱われたために混乱が生じてしまっているのである。

さて、このような平野の地形や地質に関する研究は、戦後の経済の高度成長期に急速に進歩をみせ、1975年頃になると、最終末期以後の地形形成過程について各地の状況が明らかになるとともに、かなり質の高い議論がなされるようになった。本報告では、このような研究動向をふまえ、さらに細かなタイムスケールでの地形環境の復原や、地形変化について考察してみたい。研究を進めるにあたっては、以下のことに特に留意した。

①丁・柳ヶ瀬遺跡は、現在、大津茂川の流域に立地するが、この場所は平野の形成途上において、揖保川や林田川の影響を無視することができないところである。そこで、揖保川や林田川の流域を含めた、揖保川下流域平野を調査の対象とした。そして、1/25,000地形図をベースマップとし、1/10,000カラーを中心に各種の空中写真判読や既存のボーリングデータの収集整理を行なった。また当地域で実施される発掘調査や工事現場において、地層の観察をしばしば行なった。

②大津茂川流域のうち川島から宮田の集落までの間については、より詳細に検討を加え

るため1/5,000地形図をベースマップとし、同スケールのモノクロ空中写真の判読や現地踏査を行なった。

③発掘区域においては、地層の観察に主力を注ぎ、層序を確立することや埋没微地形の把握に努めた。

揖保川下流域平野の地形 本地域の地形については、すでに幾つか先学の業績がある。まず、それらについて簡単にふり返ってみたい。

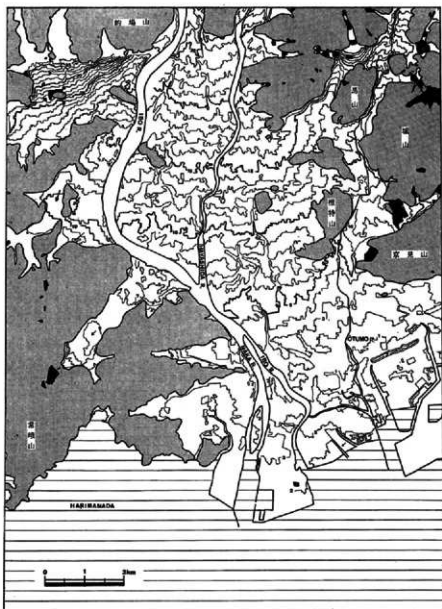
揖保川下流域平野にも、前述した様な内湾伝説があった。1955年発行の姫路市史第一巻には、「第三紀末以後には、海水は今の平野を浅く広くほとんどおおうて、当時は、姫山・栗師山・朝日山など、今平野中にある丘陵はすべて海上に浮んだ島であった。」と記されている。また、井上完爾氏の説として、海進は現在の10m等高線の位置付近にまで及んだことを紹介している。

他方、渡辺久雄氏は1971年に刊行された川島・立岡遺跡の発掘報告書において、「(沖積平野)形成開始当時、現在の揖保川低地は播磨灘に連なる内湾の一つで、ところどころに島状をなして、立岡山・朝日山・檀特山などの沈降性山地が分布していた。」と述べている。また、この内湾が形成されたのは、洪積世末の海進によるとした。しかしながら、同報告書において、前田保夫氏はボーリング資料の検討から、海進によって形成された海成粘土層は、大津茂川と網干川合流点付近まで分布していることを指摘した。さらに、少し強引な作業仮説ではあると断りながらではあるが、現海面の高さと海底堆積物との差を考慮して、海水準が現在より約3m高かったとし、現地表面の3m等高線付近に旧海岸線を想定している。また、海進の時期については、大阪湾や周辺地域の研究成果と比較した結果、縄文時代であると考へた。

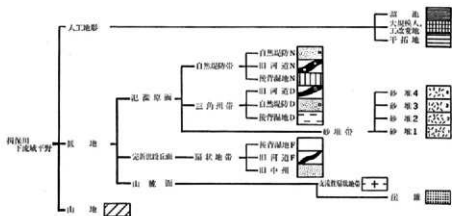
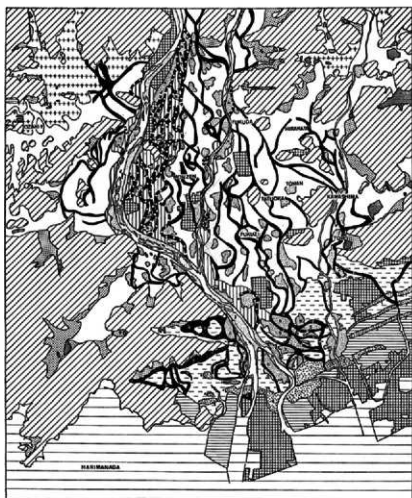
さらに、1978年発行の播磨・長越遺跡の報告書において、田中真吾氏は空中写真判読とボーリング資料の収集整理から①縄文海進が現海面上および3mに達したこと②約2,000年以前までに現海面下2~3mまでの海面低下があり延長川が形成されたこと③その後海水準が現高度へ復帰するにつれて、流路勾配が減少し、氾濫・堆積がくり返すことによって沖積氾濫原が形成されたという考えを公にした。

また田中氏は龍野市史第一巻(1978年)において、縄文海進時の海岸線を標高4~5m、現在の海岸からおよそ3~4kmほど内陸にあったことを指摘し、具体的には姫路市広畑区小坂の北方、勝原区宮田、網干区坂出、余部区上余部を連ねた線にあたることとした。

これらを見て気づくことは、揖保川下流域平野が内湾化していたという共通の指摘があることである。しかしながら、その時代や海域の広さについては、かなり説を異にしている。すなわち、近年の研究ほど内湾が新しい時期のものであるとしており、海進の規模も小さかったと考へているのである。



第1図 等高線図 (1mインターバル)

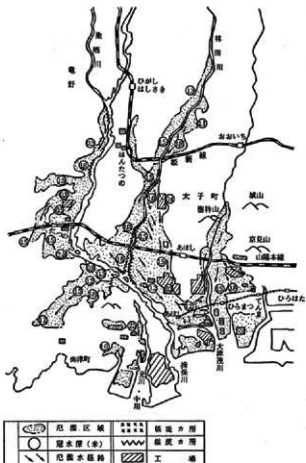


第2圖 地形分類圖

以上の様な先学の研究をふまえ、今一度、揖保川下流域平野の地形の特色について検討してみたい。

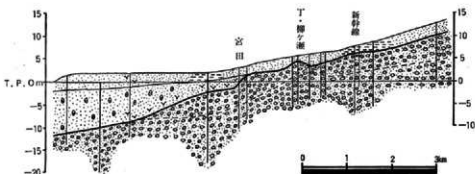
第1図は当地域の1m等高図線である。これによれば、いっけん平坦に見える平野も、かなり起伏に富んでいることに気づく。従来、揖保川下流域平野はデルタ性平野とか、氾濫平野とか呼ばれてきた。しかし、この図を見る限り、この平野は扇状地的な性格を有していると言わざるを得ない。

もう少し詳しく見てみよう。揖保川の左岸城の等高線パターンと右岸城のそれとは、かなり趣きを異にしていることに気づく。すなわち、揖保川左岸城の地形



第3図 洪水氾濫図(揖保川下流域昭和16年8月)

が、盛んに河川の氾濫堆積を受けて形成された扇状地状であるのに対し、右岸城のそれは、突出した尾根によって本流性の土砂の流入がほとんど妨げられ、さらに谷の出口を本流性堆積物によって堰止められたため埋め残されている。ここでは、本流の影響を強く受ける



第4図 大津茂川沿い地質断面図

谷の出口付近を除き、かなり低湿な土地条件を示す。ただし、土砂搬出量が多い中垣内川の谷には支流性の扇状地が形成されており、比較的高燥な場所となっている。

揖保川の左岸に目を転じてみると、馬山・楳特山・朝日山等の基盤岩の突出によって本流の影響をあまり受けず、埋め残されたと考えられることのできる大津茂川の河谷が平野の東端に位置している。これは、揖保川が810km²の流域面積を持ち、流路長70kmであるのに対し、大津茂川では、それらが41.5km²、20kmにすぎないため、土砂搬出量が格段に少ないことが大きな要因となっていると言えよう。

さて、龍野市日銅付近を扇頂とする扇状地は、3.3%の傾斜で南へ低下していくが、標高5~4m付近を境として、それより下流側では、海岸に平行して延びる微高地群とそれに挟まれた凹地群の卓越するデルタ的性格の地域へと変化している。

次に空中写真(1/10,000カラー、1/10,000モノクロ2種)の判読をもとに現地調査を行ない作成した地形分類図について見ていきたい。第2図に示した様に、揖保川下流域平野の低地は大きく三つの面に分けられる。そのうち広い面積を占めるのが氾濫原面と完新世段丘面である。従来、当地域には現在なお形成過程にある沖積面(氾濫原面)が広く展開していると考えられていた。ところが、詳細に空中写真判読や現地調査を行なった結果、ここは0.5~2mの崖によって限られた二つの地形面よりなることが明らかとなった。そのうち低位のものが氾濫原面であり、今なお地形の形成が続いている。他方、高位の地形面である完新世段丘面に洪水が及ぶことはほとんどない。(第3図参照)また、極めてまれに洪水が達したとしても積極的な地形形成が行なわれることはない。この完新世段丘面上には集里タイプの土地割が広がっており、谷岡武雄(1964年)によって詳細な検討がなされている。また、すでに報告書の刊行されている川島遺跡・立岡遺跡や福田天神遺跡をはじめ、近年発掘された福田片岡遺跡、宝林寺北遺跡、片吹遺跡等はいずれも完新世段丘面に位置している。今回報告する丁・柳ヶ瀬遺跡も、これらと同じ位置を占めている。

完新世段丘面は、さらに細分が可能である。すなわち、現在集落が立地したり畑として利用されることが多い微高地と帯状に長く延びる凹地をなす旧河道、そして、いずれにも属さない平坦部である。このうち、旧河道について注目すると、ほとんどのものが現在の流路と比べ東向きに網状流をなしていたことが判る。川島付近では旧揖保川もしくは旧林田川が大津茂川に合流しており、丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境を考察する際に、これらの河川が存在を無視するわけにはいかないことも判る。なお、これらの旧河道に沿って岩浦井(岩見井・浦上井)をはじめ小宅井、赤井、片吹井等の主要幹線用水が築られ利用されている。

他方、微高地は土地条件図等の分類では、自然堤防とされてきたが、それらは大礫~中礫から構成されていることが多く、むしろ中州として形成されたものであると判断される。また、平坦部は、小規模な旧河道や旧中州が後背湿地性の氾濫堆積物で埋積されてしまっ

た所と考えられる。以上のことから、完新世段丘面はかつて扇状地帯として形成されたものであると判断される。このことは第1図の読図結果とも一致する。

次に、氾濫原面について検討したい。この面は、微地形の配列パターンからさらに三つに分けられる。すなわち、河川の影響のみで形成された自然堤防帯と、海と河川の二つの営力が形成に関与した三角州帯、そして主に海の営力の下に成長した砂堆帯である。

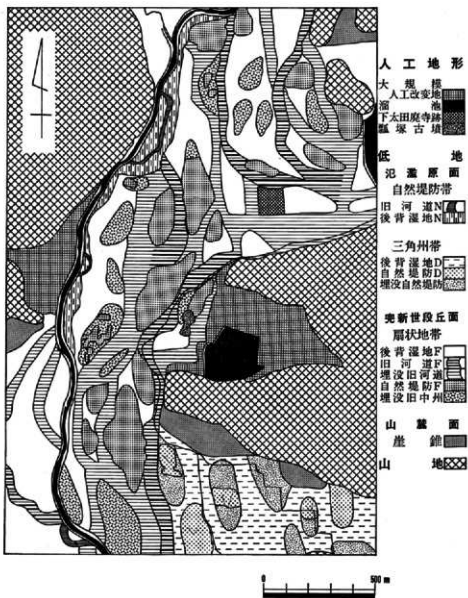
自然堤防帯は、完新世段丘面と氾濫原面との境をなす崖が形成されてから以降に成長した新しい地形である。林田川左岸に位置する福田片岡遺跡の発掘結果によれば、自然堤防帯を構成する微地形のひとつである自然堤防は、16世紀以降に著しい形成が進んだことが明らかになっている。灌漑システムや土地条件等の点で、人間生活に大きな影響を与えた完新世段丘面の崖形成時期を、より正確に把握するためにも、今後、自然堤防帯の調査が進展することが期待される。

さて、三角州帯について検討するためには、後氷期において最も広く海域が拡大した時の海岸線をおよそ求める必要がある。そこで、既存のボーリング資料を収集し、整理を行った。そのうち第4図に示したのが、大津茂川に沿う地質断面である。断面の最下部には礫層が連続して認められる。この礫層は、2層に細分されるが、このうち下層のものは固結度が高く、連続が良い。これに対し、上層のものは固結度が低く、連続性もあまり良くない。ここでは、前者を埋没段丘礫層、後者を狭義の沖積層基底礫層および新期扇状地礫層と考えた。海進堆積物の分布しない所において、既存のボーリング資料の解析から、狭義の沖積層基底礫層と新期扇状地礫層を区別することは現在のところ不可能である。

次に海成層の分布範囲についてみたい。貝殻を含む青灰色砂層とボーリング資料に記され、海成層であると判断される地層は、揖保川沿いでは姫路市下余部付近まで分布し、上余部より上流側においては礫層が卓越する。これに対して、大津茂川沿いでは、確実な海成層は姫路市田井付近まで認められる。さらに、海進にともない低湿化した場所に堆積したと思われる有機質に富む砂・シルト層は、京見山の南麓から姫路市宮田、岡市坂出付近にまで広がっている。

新期扇状地礫層や海成層を覆い、断面図の中で最も上層に位置するのが氾濫堆積層である。三角州帯を構成する自然堤防Dや後背湿地Dは、この地層が形づくるものである。したがって、それらの形成時期は縄文海進のピーク（およそ6400年B.P）以降に属すると判断される。

砂堆帯は4列の砂堆から構成されている。ここでは、形成時期が古く最も陸側に位置するものを砂堆1とし、海へ向い順に砂堆2、3、4とした。三角州帯の自然堤防Dのなかには、河口州として形成され砂堆へ連続すると見ることのできるものもある。本来、それぞれの砂堆間は堤間湿地とすべきであるが、三角州帯の後背湿地Dとの境界を引くことが



第5圖 大津茂川流域微地形分類圖

困難なため、ここでは総て後背湿地Dとして表わした。なお、砂堆帯の形成時期については、三角州帯のそれとほぼ同じであろうと考えられる。

丁・柳ヶ瀬遺跡周辺の微地形 播磨平野には、完新世段丘が広く分布している。この地形面はすでに形成を終えているため、現在その上に残されている微起伏は、過去の地形環境を復元するのにかなり有効なデータとなる。かつて、日下・高橋他(1979年)、高橋(1980年)は、現地表面の10cm等高線図を描き、それが1~2m程度に埋没している自然堤防・旧中州・旧河道といった地形を良く反映していると報告した。また、1/5,000以上といった大縮尺の空中写真判読によっても、発掘調査の基礎データとして用いられる程度の精度で、埋没微地形を検出できることが確認されつつある。これによって、微地形図を描くデータを欠く地域についても、発掘以前に埋没微地形の状態をおおよそ知ることができるようになった。もちろん、両方のデータが併用されることが望ましいのは言うまでもない。

第5図は1/5,000の地形図をベースマップとして、同縮尺の空中写真の判読や現地調査の結果に基づいて作成した微地形分類図である。大津茂川流域の場合、広い面積を占めるのは完新世段丘面であり、氾濫原面はかなり狭小なものとなっている。

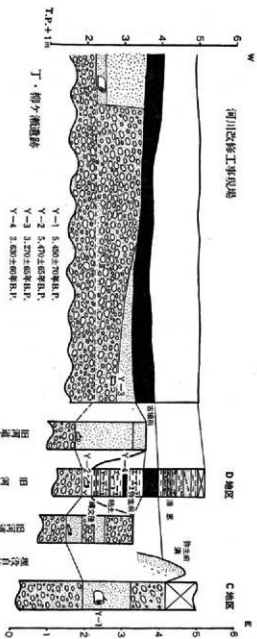
完新世段丘面は、次の五つの微地形から構成されている。自然堤防Fは、現在、地割や土地利用に影響を与えるほど比高をもつもので、表層は自然堤防砂で構成されている。これに対し、埋没旧中州は現地表面の地割や土地利用に影響を及ぼしていない。この微高地は、現地表面下1~2mまでに埋没しているもので、1/5,000以上の大縮尺空中写真の判読や現地表面の10cm等高線図を作成することなしに認識することは困難である。かつて中州や自然堤防として形成されたものと考えられる。

旧河道は微高地と同様に2種類に区別できる。そのうち現在に影響を及ぼしているものが旧河道F、埋積されてしまい現地表に影響をもたないものが埋没旧河道である。

そして、埋没旧中州や埋没旧河道と同じ様に形成されたものの、規模が小さかったり、その後堆積した氾濫堆積物が厚かったりしたために、現地表面に全く影響が表われていないのが後背湿地Fである。

なお、ここで言う微地形とは、一回の土砂の堆積で形成されたものは少なく、それらが複合したものである。たとえば、旧河道と分類された部分であっても、それは小さな中州と流路から構成されていることに注意する必要がある。堆積ごとの微地形を認識するためには、高橋(1982年)が報告したように、1/200程度のスケールで微地形分析を行なわねばならない。

完新世段丘面については、扇状地帯として形成されたため、網状をなす旧河道と中州状微高地が特徴的であると前に述べた。しかし、より厳密に言うならば、扇状地帯を構成する新期扇状地礫層が堆積した後、自然堤防や後背湿地をつくる氾濫堆積物が堆積しており、



第6圖 丁・橋ノ橋道跡地質断面図

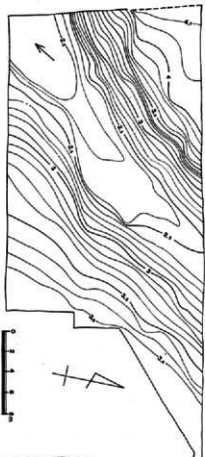
一部をのぞき現地表面に扇状地礫層が露われているわけではない。すなわち、当地域の地形は、扇状地帯と自然堤防帯の重層したものであるといえる。ただし、自然堤防帯を構成する氾濫堆積物の堆積量は少なく、下層の扇状地帯の特徴を消滅させるには至っていない。このため完新世段丘面には扇状地帯の地形的特徴が卓越するように見えるのである。

丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境 当遺跡は4地区に分けて発掘が実施されている。完新世段丘面上の微地形分類によれば、A・B地区は共に埋没旧中州に沿った旧河道Fにあたる。C地区は後背湿地Fから旧河道Fにかけて、D地区は埋没旧中州から埋没旧河道に跨ってトレンチが設定されている。このうち実際に埋没微地形や地層の観察ができたD地区およびその南西に続く河川改修工事の現場を中心に考察をすすめてゆきたい。

第6図はC地区の西端、D地区、およびそれに連続する工事現場で掘ることのできた地質断面を示したものである。T.P. 2m 以下には流紋岩を主体とした非常に連続の良い中礫層が存在する。この礫層は周辺のボーリング資料との比較から、おそらく埋没段丘に連続するものと考えられる。この層を覆って青灰色シルト質細砂層が堆積しているが、ここには直径30cmを越える流木が多量に挟在する。この流木の¹⁴C年代測定を日本アイソトープ協会に依頼したところ、5,450±70年 B.P. (N-4686)、5,470±65年 B.P. (N-4687)の値が得られた。また、この層は熊野茂・厩平昌士の両氏によって珪藻分析が実施され、小川の流れこむ湿地であったと考えられている。縄文海進の間接的な影響で、当遺跡付近でも排水が不良化したのであろうか。

流木層の上に堆積するルーズな礫層は、下層のものとは異なり、レンズ状の断面を示す連続の悪い地層である。この中にも木片が含まれており、その¹⁴C年代は3,270±65年 (N-4688)であった。礫層の上面はかなり起伏に富んでおり、その凹部には第7図左に示したように北東-南西方向をした旧河道が検出されている。旧河道の底からは縄文時代後期の遺物が出土する。また、旧河道埋積物中に挟在する植物遺体層は、2,630±60年 B.P. (N-4689)の¹⁴C年値を示している。この植物遺体層の存在から、当時、この流路は湿地性堆積物によってほぼ埋積され、すでに機能を失っていたことが判る。これは珪藻分析から得られた環境復原の結果とよく一致する。

さて、D地区の東端では、ルーズな礫層上に黄灰色中砂が堆積した。その上面形態を示したのが第7図の右半分である。北東-南西方向に延び、ゆるやかに北西にむけて傾く斜面をもつこの層は、その形態や西側ほど構成物が細粒化することから、東側に存在した河川の氾濫氾濫によって形成された自然堤防と考えられる。自然堤防上には、その軸とほぼ同方向に延びる弥生時代前期の溝が発見されている。したがって、自然堤防の形成は弥生時代前期かそれ以前に遡ると判断される。以上のことから、この自然堤防の形成に関与したのは、第8図の旧河道1(弥生時代前期の遺物を含む地層により埋没している)であっ

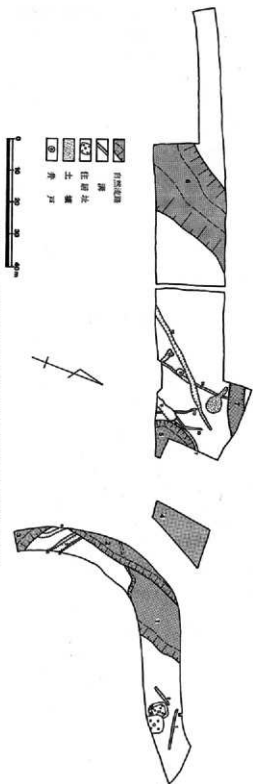


1:2

第7图 D地区里改地形图



中生代
第四系
震旦系



たと推定できよう。またC地区東端の自然堤防も同時期に形成されたものと思われる。

今一度、第6図に目をもどそう。自然堤防のうち相対的に低い部分は、古墳時代前期になると後背湿地の拡大によって埋没してしまった。他方、相対的に高い部分はほとんど変化のないままであったらしく、C地区東端では古墳時代前期の住居が立地する場所となった(第8図参照)。

その後、後背湿地は水田として利用されながら、幾度か洪水による埋積を受けた結果、中世までには自然堤防との比高がほとんどなくなった。ただし集落が立地し続け人為によって積極的に比高が保たれたところでは、その後も微高地として存続したようである。

以上のことをまとめると第1表の様になる。なお、溝や自然流路(旧河道)の数字は第8図に対応している。

このような地形変化が当地域に独特のものであるか、あるいは一般化が可能なものであるかについては、今後、他の遺跡の場合と比較検討してゆく必要がある。

引用・参考文献

- 姫路市史編纂委員会編「姫路市史」第1巻 地理編 1955年
谷岡武雄「平野の開発」古今書院 1964年
渡辺久雄「川島・立岡遺跡の環境・地理的環境」太子町教育委員会編『川島・立岡遺跡』所収 1971年
前田保夫「川島・立岡遺跡の環境・古地理的環境」太子町教育委員会編『川島・立岡遺跡』所収 1971年
田中真吾「長越遺跡付近の地形と地質」兵庫県教育委員会編『播磨・長越遺跡』所収 1978年
田中真吾「龍野とその周辺の地質と地形」龍野市史編纂委員会編『龍野市史』第1巻 1978年
日下雅義・高橋学他「大岡遺跡及びその周辺部における完新世後期の環境復原」豊中古池遺跡調査会編『大岡遺跡』所収 1979年
高橋学「志知川沖田南遺跡の地形環境」兵庫県教育委員会編『淡路・志知川沖田南遺跡』所収 1980年
柳澤忠「大津茂川の流れ」1980年
高橋学「志知川沖田南遺跡の地形環境Ⅱ」兵庫県教育委員会編『淡路・志知川沖田南遺跡Ⅱ』所収 1982年

第1表 丁・柳ヶ瀬遺跡環境変遷表

ステージ	層 相	開 発	時 代	そ の 他
ステージ15	灰色シルト質極細砂 黄灰色シルト質極細砂 黄褐色シルト質極細砂	水田	現在	
ステージ14	灰褐色シルト質極細砂	水田	鎌倉	水田埋没と 再開発
ステージ13		橋状遺構	奈良時代以降	自然流路4・5・7
ステージ12	褐色極細砂	住居址1.2	古墳前期	起伏わずか
ステージ11	(暗灰色シルト) (灰色シルト質極細砂)		古墳前期	起伏減少
ステージ10		溝掘削 3・5・9・10・11・ 12	弥生中期	自然堤防上 自然堤防成長
ステージ9	淡黄灰色シルト		弥生中期	自然堤防上
ステージ8		溝掘削 1・2・4・13・14	弥生中期	
ステージ7	黄灰色中砂		弥生中期	自然堤防形成
ステージ6	(黒色シルト)		弥生中期 2,630±60年 B. P.	起伏減少 流路変更 自然流路2・3
ステージ5	(淡灰色シルト)		縄文後期	
ステージ4				自然流路1 自然流路6
ステージ3	砂礫2		3,270±65 B. P. 縄文中期末	中州
ステージ2	流木		5,450±70年 B. P. 5,450±65年 B. P	
ステージ1	砂礫1			

附章第2節～第5節は
公開していません

第6節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土のサヌカイト遺物の 石材産地分析

薬科哲男・東村武信
(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で13年前から、蛍光X線分析法により研究を始めた。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている^{①②③}。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を判定する。

大津茂川・西汐入川河川改修事業に伴って、遺跡発掘調査が行なわれた。そのうち丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した20点のサヌカイト遺物の産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

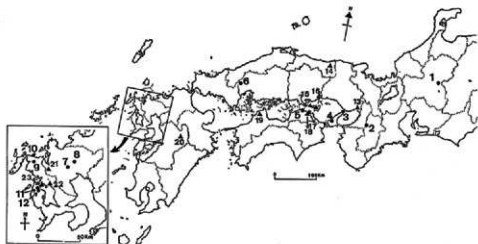
サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、励起用の⁵⁵Fe、¹⁰⁶Cdの放射性同位元素とSi(Li)半導体検出器を組み合わせたエネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。⁵⁵Feの線源で励起したとき、K、Ca、Tiが、¹⁰⁶Cd線源で励起したとき、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの元素がそれぞれ分析される。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サマカイトでは、K/Ca, Ti/Ca, Fe/Sr, Rb/Sr, Zr/Sr, Nb/Sr をそれぞれ用いる。

サマカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地など、合わせて23ヶ所の調査を終えている。図1にそれらの地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサマカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かたれる。図2にこの地域の調査した地点を示した。

これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると30の原石群に分類できる。その結果を表1に示した。金山・五色台地域のサマカイト原石を分類すると、金山西群, 金山東群, 国分寺群, 蓮光寺群, 白峰群, 法印谷群の6ヶの群に、ガラス質安山岩は五色台群の単群に分類された。

金山・五色台地域産のサマカイト原石の諸群にはほとんど一致する元素組成を示すサマカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが



1. 下呂地域 2. 二上山地域 3. 岩屋地域 4. 淡路島中部地域
5. 金山・五色台地域 6. 冠山地域 7. 多久地域 8. 老松山・寺山地域
9. 福井地域 10. 平田地域 11. 大串地域 12. 亀岳地域 13. 甲山
14. 馬ノ山 15. 豊島 16. 小豆島 17. 屋島 18. 紫雲山
19. 皿ヶ峰地域 20. 阿蘇 21. 西有田 22. 川棚 23. 崎針尾

●: は石器原材として良質と考えられる産地

▲: はあまり良質と考えられない産地

図1 サマカイトの原産地

金山・五色台地域から流れ着いたことが分かる。淡路島中部地域の原産地からは、岩屋第一群に一致する原石と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。遺物が岩屋の原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表2のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためササカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製ものは風化に対して安定で、表面に薄い水合層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗いするだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。

今回分析した遺物の結果を表3に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするため K/Ca の一変数だけを考えると、表3の試料番号11388番の遺物では K/Ca の値は0.563で、岩屋第一群の [平均値] ± [標準偏差値] は、 0.576 ± 0.018 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.7σ 離れている。ところで岩屋第一原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.7\sigma$ のずれより大きいものが48ヶある。すなわち、この遺物が、岩屋第一群の、 0.7σ 以上離れる確率は48%であると言える。だから、岩屋第一群の平均値から 0.7σ しか離れていないときには、この遺物が岩屋第一群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群と比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 8σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 8σ 以上離れている確率は、百万分の一であると言える。

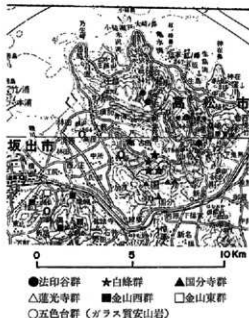


図2 金山・五色台地域のササカイト、ガラス質安山岩の原産地

このように、百万分に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は岩屋第一群に48%、金山東群に百万分の1%の確率でそれぞれ帰属される。」各遺跡の遺物について、この判断を表1のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、岩屋第一群の原産地だけとなり、岩屋もしくは淡路島中部地域の両産地のいずれかの石材が使用されていると判定される（この遺物1点では、どちらの産地か特定できなく、前項で述べた表2を用いて産地の特定を行なう）。実際は K/Ca といった唯1ヶの变量だけでなく、前述した7ヶの变量で取り扱うので变量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca 元素と Rb 元素との間に相関があり、Ca の量を計れば Rb の量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca 量が一致すれば当然 Rb 量も一致するはずである。したがって、もし Rb 量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングの T^2 検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^④。丁・柳ヶ瀬遺跡より出土した遺物の産地推定の結果を表4に示す。原産地は確率の高い産地のものだけを選んで記した。原石群を作った原石試料は直径 3cm 以上であるが、小さな遺物試料、例えば 0.6cm とすると、原石試料との面積比は 1/25 になる。このため原石試料と同じ測定精度で、遺物から元素含有量を求めるには、測定時間を約25倍にしなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている 0.1% に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

原産地（確率）の欄にマハラノビスの距離 D^2 の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている 0.1% の確率に達しなかった遺物でこの D^2 の値が原石群の中で最も小さな D^2 値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低い、そこの原産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。

丁・柳ヶ瀬遺跡出土の20点の遺物の中で信頼限界の 0.1% に達した遺物は、18点、1点はマハラノビスの距離 D^2 の値によって石材の原産地は判定され、これらの方法によっても判定できなかった遺物は1点にすぎなかった。この結果、原産地の明らかになった

19点の遺物の中で17点には金山東もしくは金山西の群の原石、1点に法印谷群もしくは金山西群の原石、1点に淡路島の諸群の原石が使用されていることが明らかになった。しかし、法印谷群や金山東群、金山西群に属する原石が用いられているからといっても、それぞれ、法印谷や金山に産出するサマカイト原石を用いていると結論するのは早計である。というのは、淡路の岩屋原産地からも、金山・五色台地域の白峰、法印谷、国分寺、蓮光寺、金山東、金山西の諸群の原石と極めてよく似た原石を産出しているからである。したがって、今のように法印谷群および金山東群、金山西群に帰属される原材から作られた遺物が得られた場合、もっと一般に言えば、遺物を分析してこの遺物が、岩屋原産地の原石の組成に関係する金山・五色台地域の白峰、法印谷、国分寺、金山東、金山西などの諸群に帰属された場合、この遺物の石材産地は帰属された原石群の産地の他に岩屋原産地からの原材である可能性をも考慮しなければならない。これら両地域の原産地のうちのどちらの産地の原石を使用したかの判定は、一つの遺跡より出土した多数の遺物を分析して遺物が岩屋原産地に関係した諸群に帰属される頻度を求めて、この頻度分布と表2に示した岩屋原産地のサマカイト原石の分類結果の頻度分布とを比較して行なう。すなわち、これらの遺物が、もし岩屋原産地から原材を採取して作られたものならば、分析の結果は、表2に近い頻度分布で、各原石群が現われるはずである。例えばA遺跡のB時代の層から出土した100点の遺物の産地分析の結果が、二上山群に帰属された遺物点数は44点で岩屋原産地に関係すると考えられる遺物点数が66点であって、この66点はまた岩屋原産地に関係した諸群に帰属される頻度が岩屋第一群に20点(30%)、岩屋第二群(白峰群)に22点(33%)、法印谷群に6点(9%)、国分寺群に5点(8%)、蓮光寺群に4点(6%)、金山東群および金山東群に3点(5%)で、またいずれの群にも帰属されない原石産地不明が6点(9%)であったとするとA遺跡出土のこの66点の頻度分布は表2に示した岩屋原産地のサマカイト原石の頻度分布と一致しているからこれらの遺物石材には金山・五色台地域と岩屋および淡路中部地域などの原産地の原石が使用された偶然に前述の頻度分布になって現われたと考えるよりも、岩屋原産地から採取した原石が使用されて66点の遺物が作られたと判定される。この方法を用いて丁・柳ヶ瀬遺跡出土の弥生時代前期の9点のサマカイト遺物の考察をすると岩屋原産地に関係した諸群の中の金山東、金山西の群に7点(78%)帰属され、岩屋第一群には1点(10%)帰属されたにすぎず、原石産地不明の遺物1点(10%)である。これらの遺物が示す頻度分布は岩屋第一群に10%、法印谷群、岩屋第二群、国分寺群、蓮光寺群の各群には0%で、金山東、金山西の群に78%で、原産地不明の遺物が10%である。この遺物の頻度分布は、表2に示した岩屋原産地のサマカイト原石の頻度分布との間に大きな差が認められるため、この9点の遺物すべてを岩屋原産地の原石である言い切れない。本遺跡出土の遺物の中に岩屋原産地の原石を使用したという証拠になる

淡路地方の原産地固有の岩屋第一群に帰属された遺物が1点みられることから、本遺跡が淡路島地方の原産地の原石を使用していることが明らかであるが、金山東、金山西の群に帰属された頻度は、岩屋原産地における金山東、金山西の群の頻度に比べて高いということは、この遺物石材には讃岐地方の金山原産地よりの原石が用いられていることを示唆している。岩屋原産地からX個の原石を採取してこの中に岩屋第一群に帰属される原石を1個含む場合、表2の頻度分布を使って、X個の中に含まれる金山東、金山西の群に帰属される原石の個数を推定すると、金山東、金山西の個数は、 $1 \times (\text{岩屋第一群の原石個数}) \times 5\%$ (金山東、金山西の群の出現頻度) + 30% (岩屋第一群の出現頻度) \approx 約0.2個となる。1.2個の原石は採取できないので1個が岩屋原産地から採取された金山東もしくは金山西の群の原石であると考えると、この1点を本遺跡出土の金山東、金山西の群の原石と判定される遺物7点から差し引くとは金山原産地の原石と考えられる遺物は6点になる。岩屋原産地に関係した他の諸群の原石を採取せずこの金山原産地の原石と判定された6点のみを岩屋原産地より採取する確率を求めると、この確率は0.05 (金山東、金山西の群の出現頻度5%) を6回掛ければ足り、その確率は一億回に一回現われるような非常に低い確率となる。換言すればこの6点のみを岩屋原産地から採取することはありえない事柄であるといえる。したがってこの6点の遺物を金山原産地よりの原石と決定された。本遺跡出土の弥生時代中期の3点および縄文時代中期～後期の7点の金山東、金山西の群の原石についても同じ方法で考察すると、この場合岩屋第一群に帰属された遺物は出土していないのでこれら3点および7点を岩屋原産地から採取する確率を求める。この確率は3点の場合一万回に一回また7点の場合拾億回に一回現われるような非常に低い確率となり、これらの時期の遺物も金山原産地よりの原石と決定された。本遺跡出土の20点の遺物を時代別に記すると、弥生時代前期の9点の遺物の中で、7点に金山産原石が、1点に岩屋もしくは淡路島中部地域産原石がそれぞれ使用され、1点の原産地は不明であるが考察の結果岩屋もしくは淡路島中部地域産原石である可能性が大きい。弥生時代中期の3点の遺物には金山産原石が使用され、縄文時代中期～後期の8点の遺物の中で7点に金山産原石が使用され、1点に金山もしくは法印谷原産地の原石がそれぞれ使用されている。本遺跡より南西方へ直接距離約100km離れた金山原産地との交流は縄文時代中期～後期および弥生時代前期、中期にみられ、この原石の使用頻度も高いことからこの交流が活発であったことが推察できる。弥生時代前期には本遺跡より南東方へ約40km離れた淡路島との交流が弱いと認められ、この時期は讃岐地方の生活情報に加えて、淡路島地方の生活情報が原石の伝播に伴って本遺跡に伝達したと推察される。

第1表 各ヤスカイトの原産地における

原産地		個数	K/Ca X±σ	Ti/Ca X±σ	Fe/Sr X±σ	
岐阜県下呂		56	1.475±.041	.248±.010	.745±.011	
奈良県二上山		57	.243±.009	.227±.010	4.389±.145	
兵庫県岩屋第一		17	.576±.018	.249±.009	3.559±.096	
〃 第二		19	.482±.017	.269±.007	3.399±.070	
香川県	五色台	国分寺	32	.408±.016	.259±.008	3.558±.061
		蓮光寺	20	.418±.013	.255±.009	3.541±.060
		白峰	57	.486±.015	.267±.007	3.349±.070
		法印谷	34	.349±.013	.244±.009	4.590±.121
	金山	金山西	34	.367±.014	.223±.009	4.691±.124
		金山東	37	.437±.016	.230±.006	4.496±.030
*五色台		57	.785±.031	.129±.008	2.015±.032	
広島県	冠山	冠高原	58	.564±.023	.534±.020	2.940±.068
		冠山東	38	.266±.016	.385±.033	1.497±.043
		飯山	34	1.067±.114	.523±.034	2.018±.066
佐賀県	多久第一	53	.734±.045	.417±.011	4.696±.194	
	〃 第二	23	.726±.051	.420±.018	5.235±.372	
	〃 第三	8	.811±.040	.369±.013	5.270±.200	
	老松山	26	.624±.029	.320±.011	5.255±.137	
	寺山	22	.546±.022	.319±.008	5.325±.101	
	西有田	17	.387±.017	.352±.006	6.728±.154	
長崎県	大串	13	.943±.034	.142±.006	1.674±.014	
	亀岳	17	.976±.038	.157±.007	1.675±.017	
	半田第一	29	.697±.086	.375±.017	4.617±.151	
	〃 第二	13	.531±.044	.354±.018	7.530±.387	
	川棚	38	.436±.017	.310±.006	4.190±.089	
	福井第一	15	.563±.013	.344±.009	7.578±.141	
	〃 第二	25	.460±.010	.334±.008	7.106±.100	
	崎針尾第一	45	.337±.026	.255±.009	4.037±.132	
	〃 第二	12	.553±.110	.407±.028	5.299±.672	
熊本県阿蘇	9	.889±.070	.559±.0312	.693±.164		

* : ガラス質安山岩

X : 平均値 σ : 標準偏差値

原石群の元素比の平均値と標準偏差値

Rb/Sr X $\pm\sigma$	Y/Sr X $\pm\sigma$	Zr/Sr X $\pm\sigma$	Nb/Sr X $\pm\sigma$
.283 \pm .005	.029 \pm .005	.442 \pm .010	.040 \pm .006
.212 \pm .008	.055 \pm .010	.582 \pm .016	
.369 \pm .006	.056 \pm .010	.800 \pm .023	
.337 \pm .007	.044 \pm .008	1.038 \pm .023	
.304 \pm .009	.040 \pm .011	.937 \pm .026	
.305 \pm .007	.043 \pm .013	.941 \pm .022	
.339 \pm .009	.041 \pm .012	1.033 \pm .023	
.283 \pm .011	.066 \pm .013	1.105 \pm .026	
.291 \pm .010	.064 \pm .008	1.035 \pm .023	
.320 \pm .012	.064 \pm .009	1.133 \pm .030	
.495 \pm .014		.648 \pm .025	
.188 \pm .006	.025 \pm .010	.421 \pm .011	.180 \pm .010
.047 \pm .005	.004 \pm .007	.357 \pm .043	.017 \pm .013
.259 \pm .007	.019 \pm .007	.483 \pm .012	.248 \pm .011
.503 \pm .026	.051 \pm .010	.807 \pm .020	
.531 \pm .045	.061 \pm .017	.815 \pm .029	
.635 \pm .016	.069 \pm .015	.788 \pm .039	
.538 \pm .027	.051 \pm .010	.637 \pm .019	
.484 \pm .014	.051 \pm .012	.597 \pm .014	
.306 \pm .014	.172 \pm .384	.480 \pm .021	
.246 \pm .004	.023 \pm .006	.432 \pm .009	.064 \pm .007
.244 \pm .004	.017 \pm .006	.441 \pm .006	.069 \pm .006
.824 \pm .119	.215 \pm .028	.679 \pm .049	.316 \pm .035
1.068 \pm .091	.334 \pm .034	.942 \pm .060	.508 \pm .043
.219 \pm .007	.081 \pm .007	.739 \pm .029	.048 \pm .007
1.163 \pm .032	.356 \pm .013	.996 \pm .024	.554 \pm .024
.916 \pm .018	.286 \pm .010	.845 \pm .016	.437 \pm .015
.171 \pm .012	.053 \pm .007	.383 \pm .018	.071 \pm .013
.340 \pm .040	.079 \pm .010	.610 \pm .059	.115 \pm .021
.294 \pm .013	.093 \pm .008	.996 \pm .038	

第2表 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群名	個数	百分率	岩屋原産地に関する他群名
岩屋第一群	20個	30%	淡路島だけに出現する固有群
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
〃	5	8	国分寺群に一致
〃	4	6	蓮光寺群に一致
〃	3	5	金山東群, 金山西群に一致
〃	6	9	不明 (どこの原石群にも属さない)

第3表 丁・柳ヶ瀬遺跡出土のサヌカイト製石器, 石片分析結果

試料番号	元 素 比							
	K/Ca	Ti/Ca	Rb/Sr	Zr/Sr	Fe/Sr	V/Sr	Mn/Sr	Nb/Sr
11383	0.406	0.217	0.312	1.032	4.718	0.072	0.084	0.000
11384	0.404	0.220	0.329	1.121	4.464	0.079	0.077	0.051
11385	0.407	0.224	0.308	1.082	4.393	0.085	0.064	0.037
11386	0.400	0.223	0.307	1.080	4.488	0.065	0.068	0.024
11387	0.446	0.216	0.305	1.065	4.400	0.087	0.047	0.021
11388	0.363	0.261	0.362	0.776	3.387	0.071	0.025	0.053
11389	0.409	0.223	0.327	1.153	4.345	0.071	0.066	0.034
11390	0.404	0.223	0.321	1.106	4.180	0.067	0.055	0.044
11391	0.400	0.219	0.295	1.022	4.530	0.085	0.077	0.014
11392	0.480	0.218	0.329	1.087	4.592	0.075	0.078	0.030
11393	0.358	0.220	0.310	1.002	4.586	0.076	0.066	0.043
11394	1.048	0.674	0.583	1.612	10.966	0.205	0.091	0.061
11395	0.410	0.220	0.326	1.119	4.254	0.067	0.055	0.038
11396	0.392	0.231	0.314	1.125	4.389	0.057	0.031	0.025
11397	0.405	0.226	0.317	1.103	4.252	0.061	0.038	0.000
11398	0.408	0.226	0.328	1.102	4.375	0.063	0.046	0.000
11399	0.442	0.241	0.313	1.150	4.326	0.089	0.039	0.020
11400	0.411	0.223	0.315	1.149	4.003	0.079	0.031	0.034
11401	0.404	0.229	0.315	1.126	4.363	0.084	0.026	0.011
11402	0.396	0.229	0.324	1.141	4.479	0.060	0.043	0.025

第4表 丁・樽ヶ瀬遺跡出土のヤスカイト石片原料の産地推定結果（兵庫県姫路市勝原区丁）

試料番号	名称・位置・層位	時代（伴出土物）	原石産地（産率）	判定	ヤスカイト石片	備考	試料提供者
11383	C-4区 S D15	弥生時代中期	金山西(8%), 金山東(0.4%)	金山	〃	T・C4-6	〃
11384	C-3区 S X03 11層青灰色砂質土	〃	金山東(13%), 金山西(0.1%)	〃	〃	T・C3-9-4	〃
11385	D-2区 S D17	〃	〃 (10%), 〃 (1%)	〃	〃	T・D2-13-1	〃
11386	B地区 S D01	弥生時代前期	〃 (56%), 〃 (20%)	〃	〃	T・B・No.16	〃
11387	〃	〃	〃 (1%)	〃	〃	〃	〃
11388	B地区 A ₁	〃	岩瀬産1(16%)	岩瀬・淡路中部	〃	T・B・No.17	〃
11389	〃	〃	金山東(1%)	金山	〃	〃	〃
11390	〃	〃	金山西(0.1%)	〃	〃	T・C2-29	〃
11391	C-2区 茶灰色土 C-2区南 S X02 淡黄褐色砂質粉質土	〃	〃 (6%), 金山東(4%)	〃	〃	T・C2-11-4	〃
11392	C-2区 S D08	〃	金山東(0.02%)	〃	〃	T・C2-21-4	〃
11393	〃	〃	金山西(5%), 金山東(0.2%)	〃	〃	T・B・A2・No.1	〃
11394	B地区 A ₁	〃	〃	不明	〃	T・B・No.12	〃
11395	B地区 B ₁ 茶褐色砂	縄文時代中期末～後期	金山東(0.1%)	金山	〃	T・B・No.9	〃
11396	B地区 A ₁ 砂	〃	〃 (2%), 金山西(2%)	〃	〃	T・B・A1砂	〃
11397	B地区 A ₂	〃	金山西(0.5%)	〃	〃	T・B・A2・No.7	〃
11398	〃	〃	金山東(7%), 金山西(0.3%)	〃	〃	〃	〃
11399	A地区 13層T14層	〃	〃 (1%)	〃	〃	T・A13層T14層No.19	〃
11400	〃	〃	法印谷(D=39), 金山西(D=74)	金山・法印谷	〃	〃	〃
11401	A地区 14層	〃	金山東(2%), 〃 (0.1%)	金山	〃	T・A・14	〃
11402	〃	〃	〃 (5%), 〃 (0.4%)	〃	〃	〃	〃

謝 辞

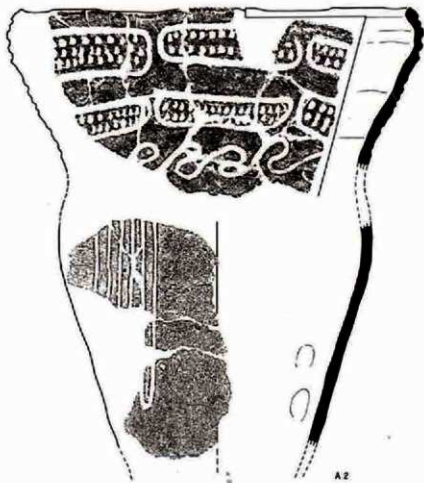
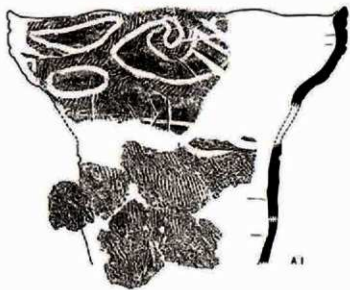
本報の作成にあたり、香川県内のサヌカイト原産地調査には新潟大学の小野昭氏、香川県引田中学校の六車恵一氏、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館の方々、板出市教育委員会の方々および、また岩屋原産地の調査に協力して頂いた檀上重光氏、淡路中部地域原産地調査には、京都大学の山中一郎氏にもお世話になった以外に各地の教育委員会の方々および一般の方にも御協力を頂いた。深く感謝の意を捧げる所である。

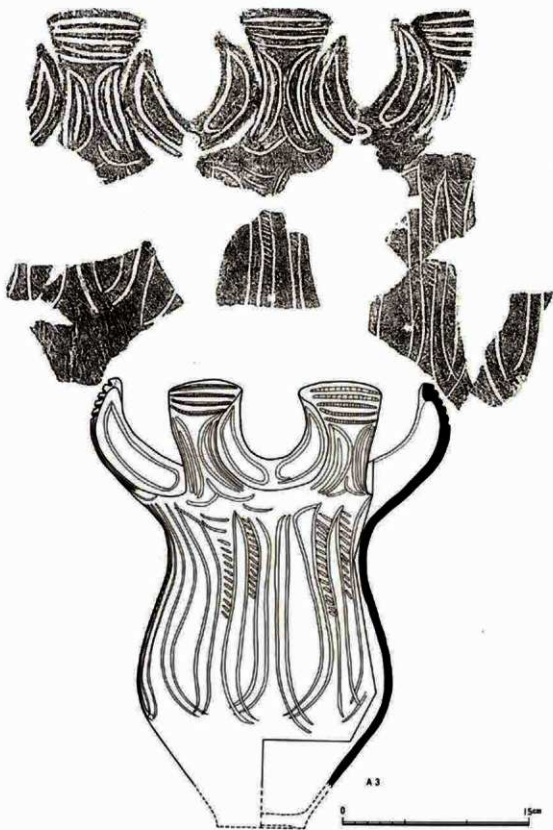
参 考 文 献

- 1) 藤科哲男・東村武信 (1975) 「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (I)」『考古学と自然科学』8: 61-69
- 2) 藤科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978) 「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (II), (III)」『考古学と自然科学』10, 11: 53-81: 33-47
- 3) 藤科哲男・東村武信 (1983) 「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16: 59-69
- 4) 東村武信 (1976) 「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9: 77-90
- 5) 東村武信 (1980) 『考古学と物理化学』学生社

附章第7節～第8節は
公開していません

圖 面





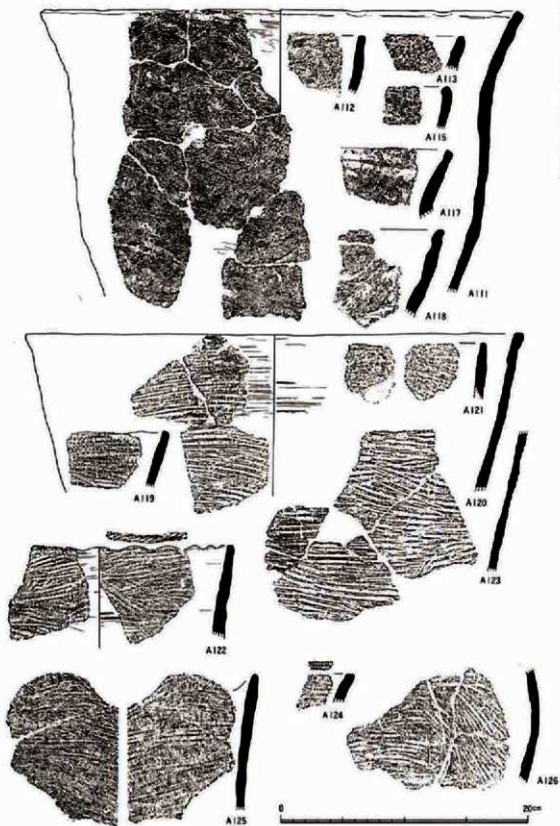


A·B地区 深鉢

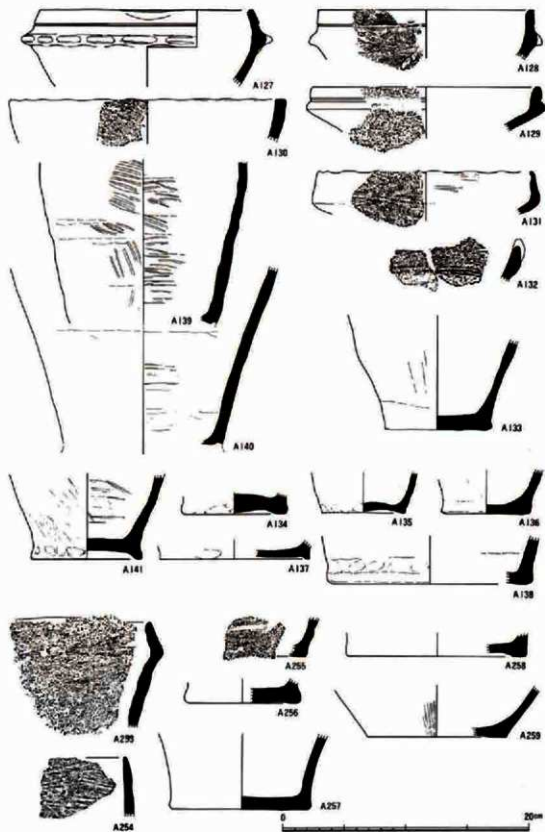




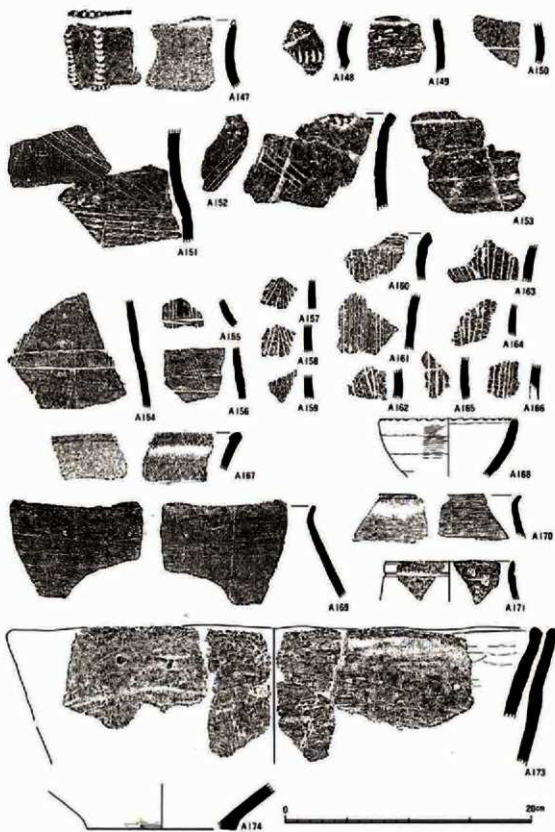
A・B地区深鉢



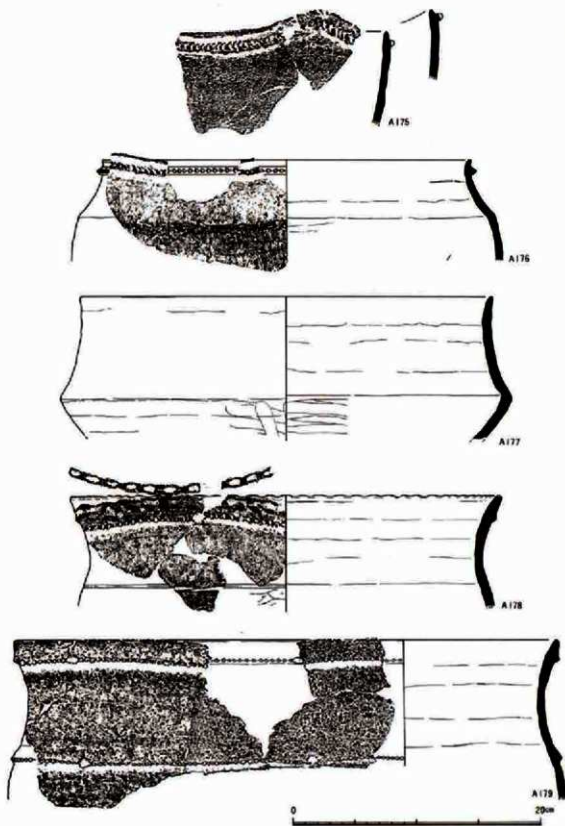
A·B地区 深鉢・浅鉢



A・B・C・D地区 浅林・深林

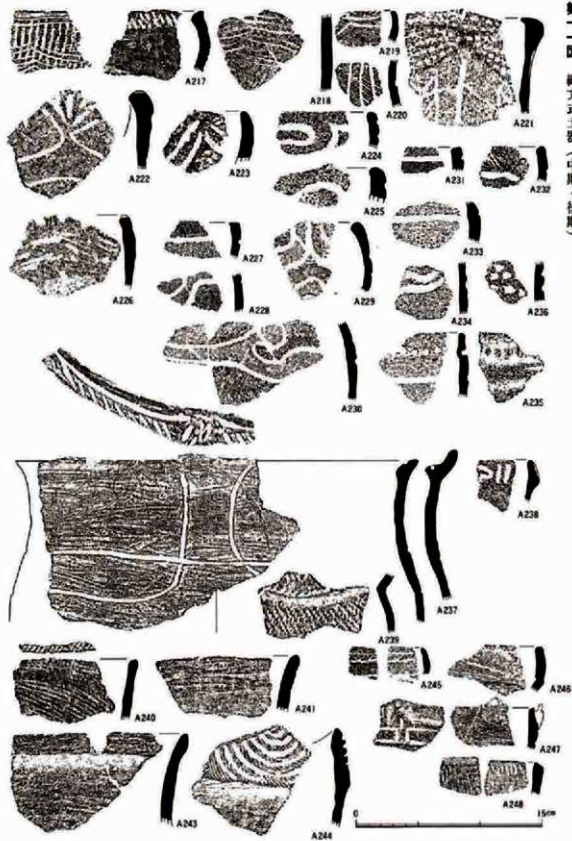


A·C·D·E地区 深鉢・浅鉢

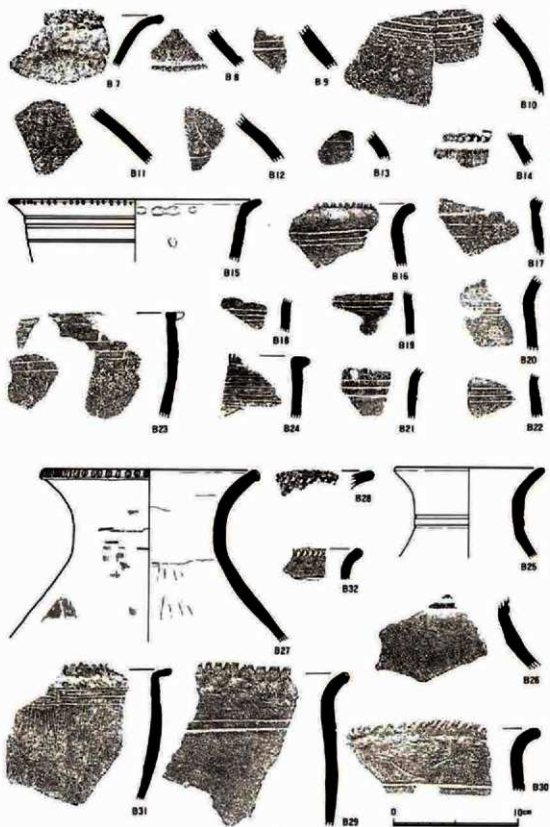


C·D地区 深鉢

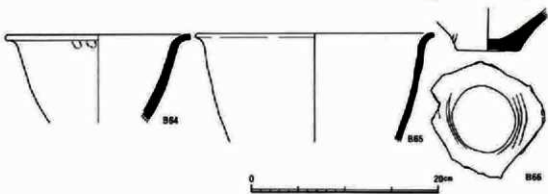
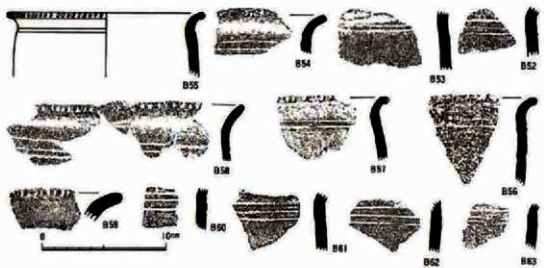
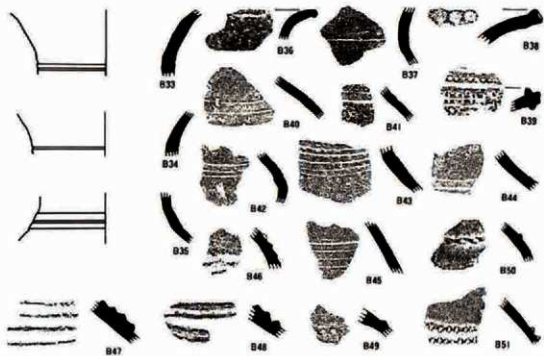




C・D・E地区 深鉢・浅鉢



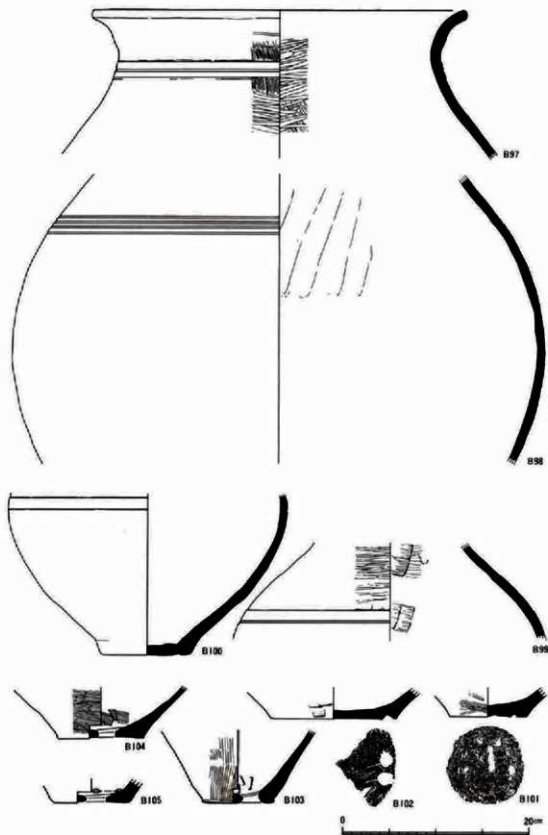
B地区SD02 甕・甕(B7~24)・SX01 壺・甕(B25~B32)



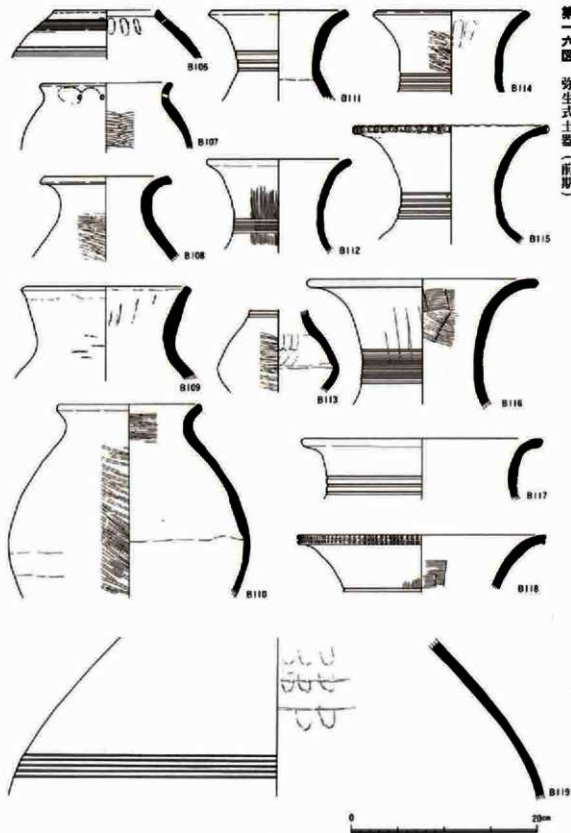
B地区包含層 壺・甕・鉢



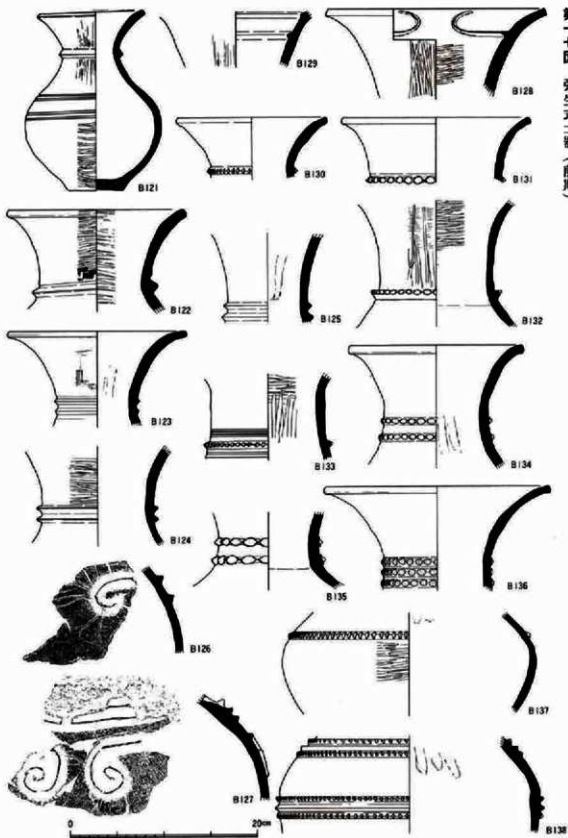
C地区SX02 壺 C-2区(B85)・C-3区(B81-B84・B87-B91・B93・B95)
C-4区(B86・B92・B94)・C-6区(B96)



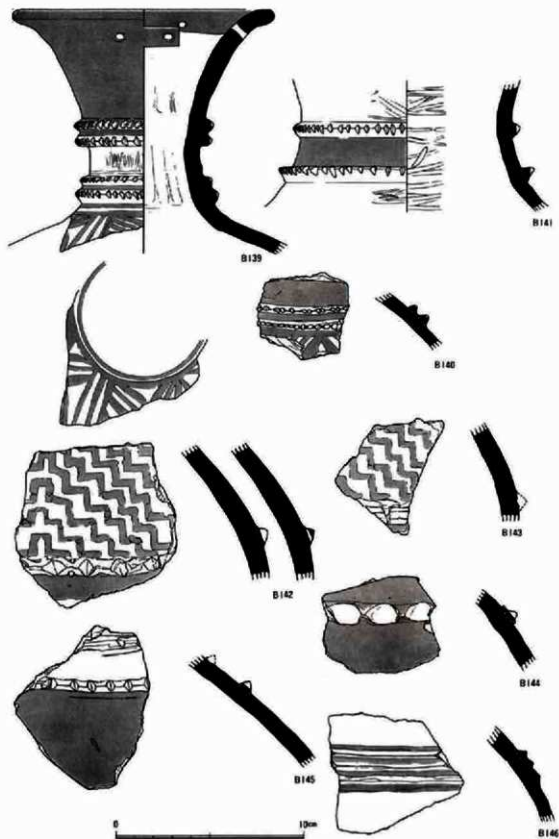
C地区SX02 壺 C-2区(B101・B102・B105)・C-3区(B97~B100・B103・B104)



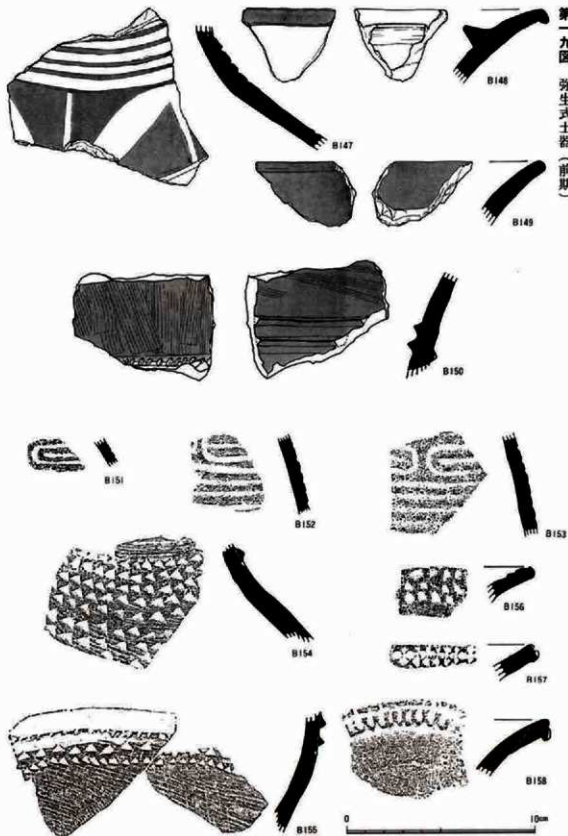
C地区SX02 壺 C-2区(B113・B119)・C-3区(B106・B109~B112・B114・B115・B117・B118)
C-4区(B108)・C-6区(B107・B116)



C地区SX02 查 C-2区(B129·B136)·C-3区(B122-B124·B126-128·B130-B133·B135·B137·B138)·C-4区(B121·B134)·C-6区(B125)



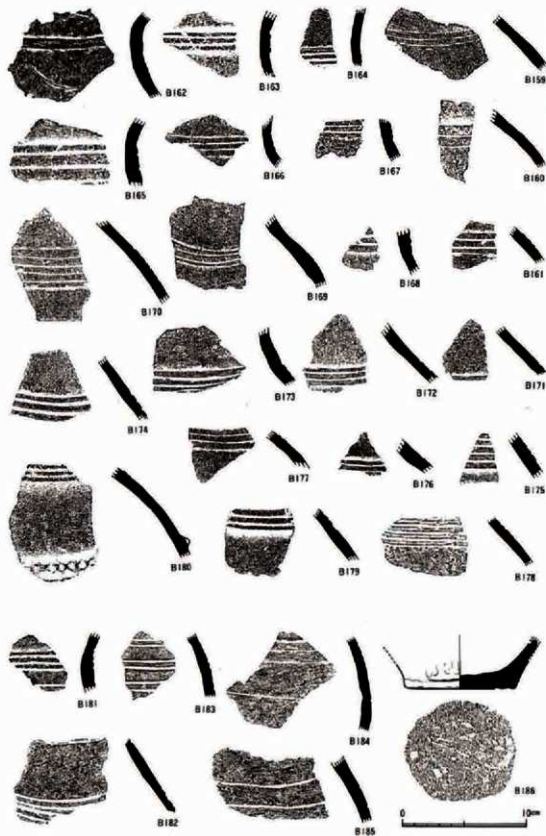
C地区SX02 壺 彩文土器 C-3区



C·D地区 彩文土器片

C-2区(B156)·C-3区(B147~B149·B152·B157)

C-4区(B151)·C-6区(B153~B155·B158)·D-3区(B150)



C地区SX02 査

C-3区(B159・B162~B164・B166~B176・B178~B180・B182・B183)

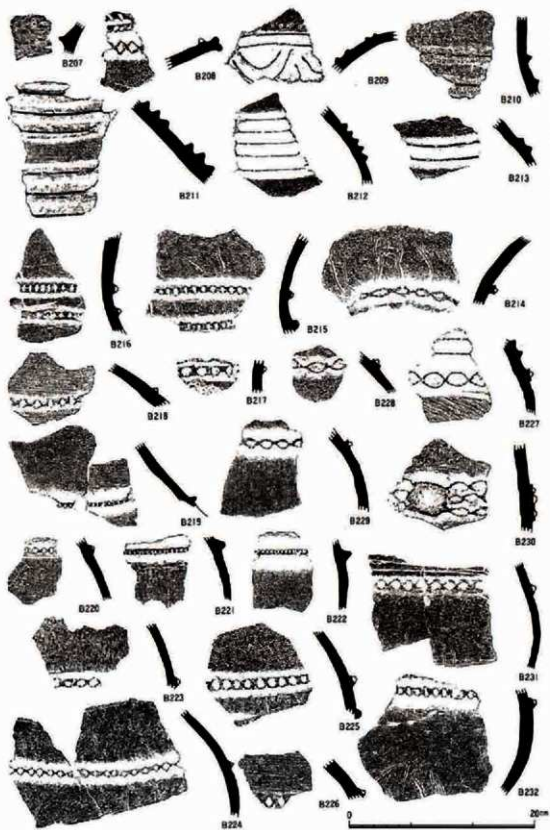
C-6区(B160・B161・B165・B177・B181・B184~B186)



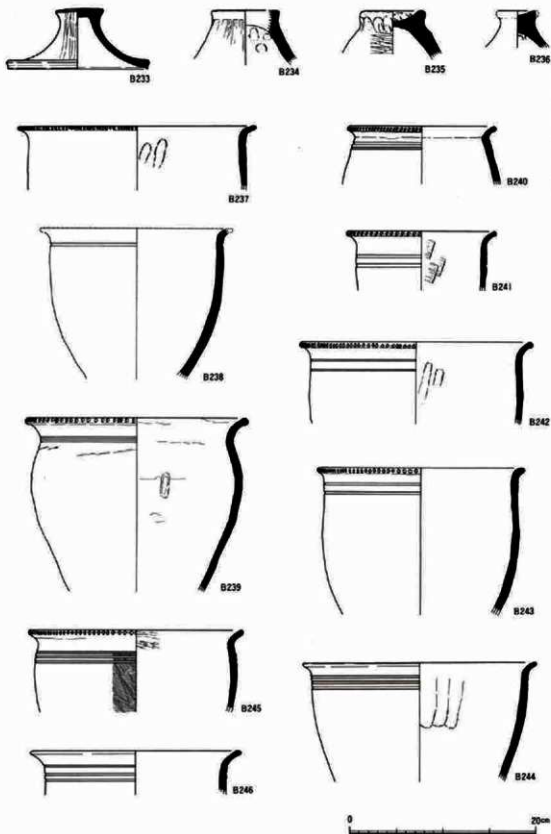
C地区SX02 壺

C-3区(B187~B189·B191~B198·B201·B202·B204~B206)

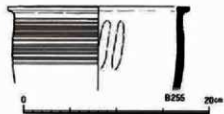
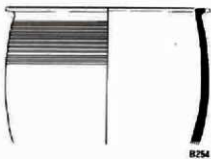
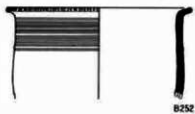
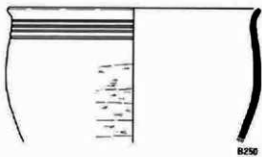
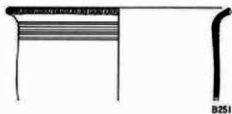
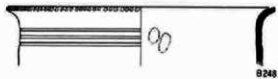
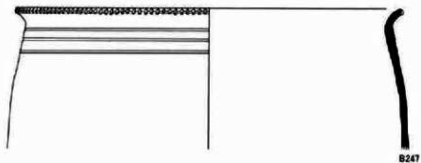
C-4区(B199)·C-6区(B190·B200·B203)



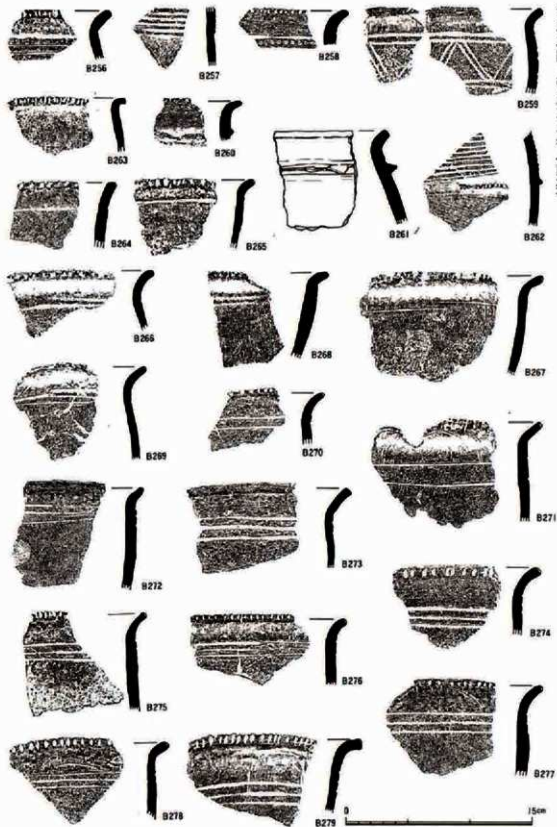
C地区SX02 壺 C-2区(B208・B209・B215)・C-3区(B207・B210・B211・B214・B216~B211・B223~B226・B230~B232)・C-6区(B212・B213・B222・B227~B229)



C地区SX02 甕蓋・甕 C-2区(B236・B238)・C-3区(B234・B235・B237・B239・B240・B242~B246)・C-4区(B233)・C-6区(241)



C地区SX02 表 C-2区(B254)・C-3区(B247-B253・B255)



C地区SX02 表 C-2区(B280·B267~B269·B271)·C-3区(B256·B257·B259·B261·B265·
B266·B270·B274~B276·B279)·C-4区(B263)·C-6区(B258·B262·B264·B272·B273·
B277·B278)

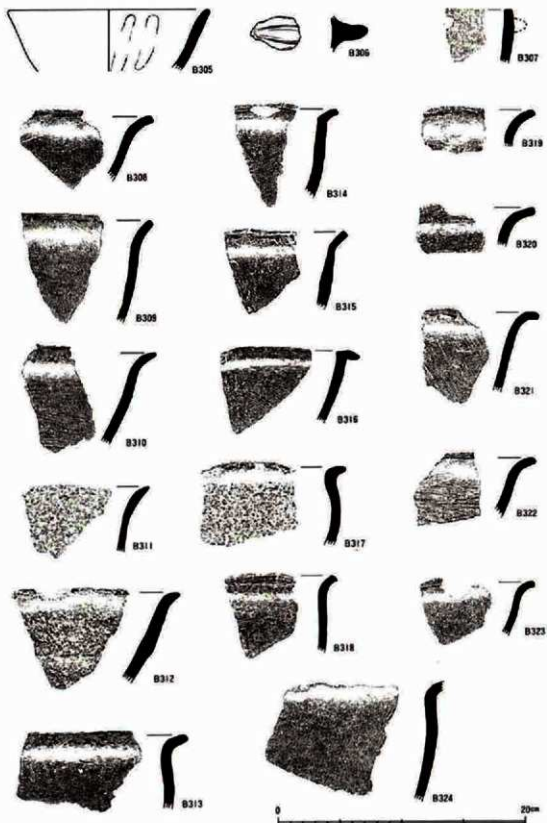


C地区SX02 復

C-2区(B281・B286・B288・B290・B291・B296・B300・B303)

C-3区(B282・B284・B287・B292・B294・B299・B302・B304)

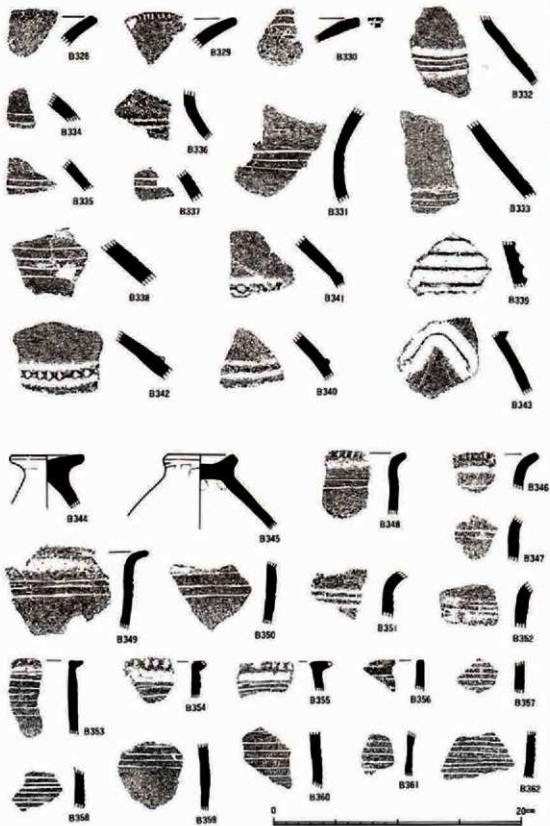
C-4区(B289)・C-6区(B280・B285・B298・B301)・不明(B293・B295)

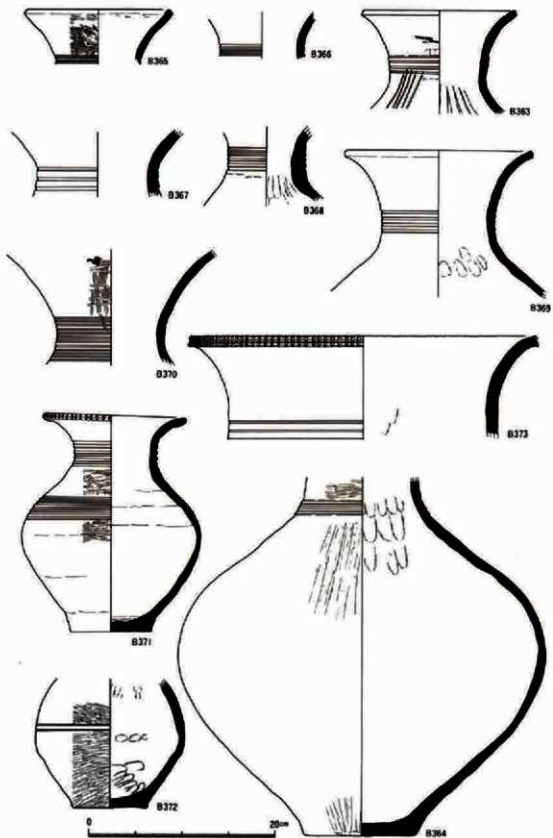


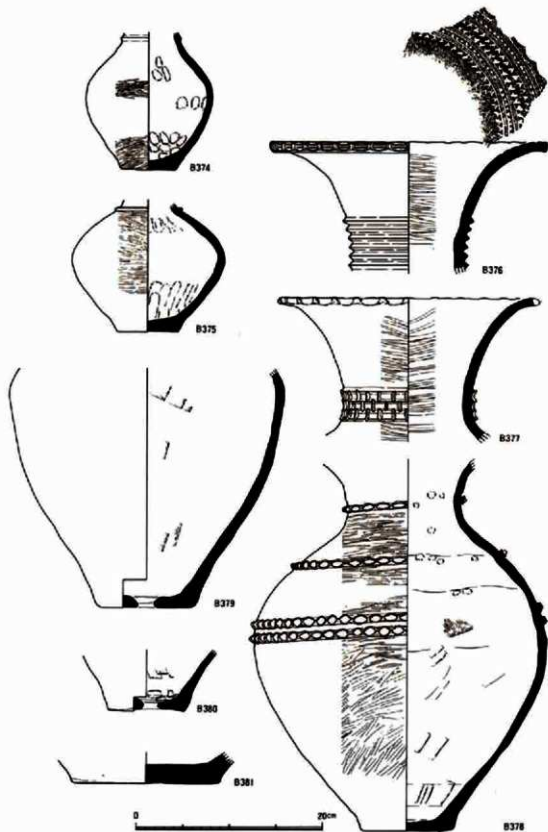
C地区SX02 种

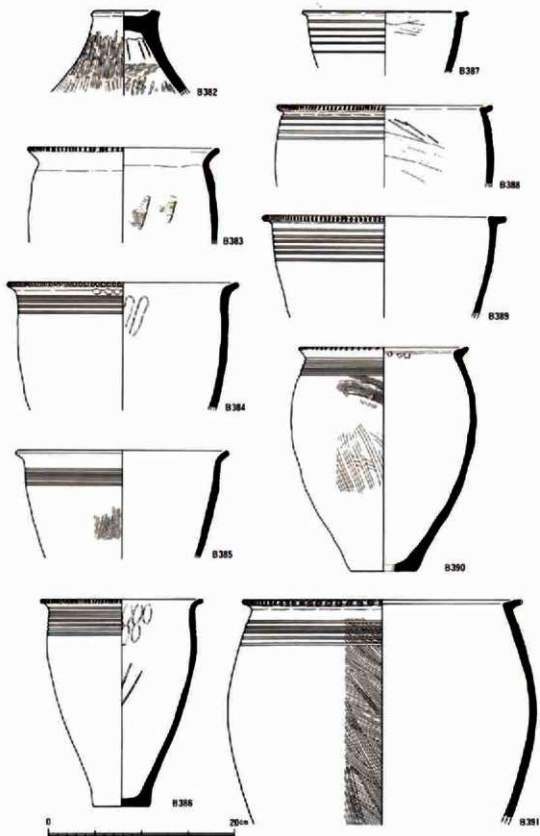
C-3区(B305~B308·B310~B312·B314·B320~B323)

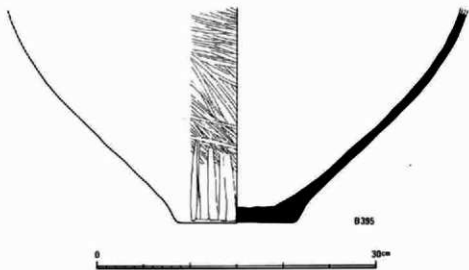
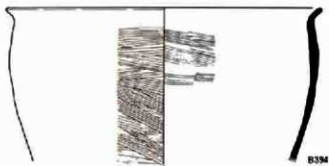
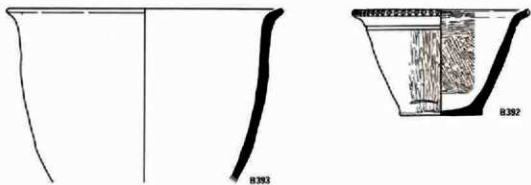
C-6区(B309·B313·B315~B319·B324)

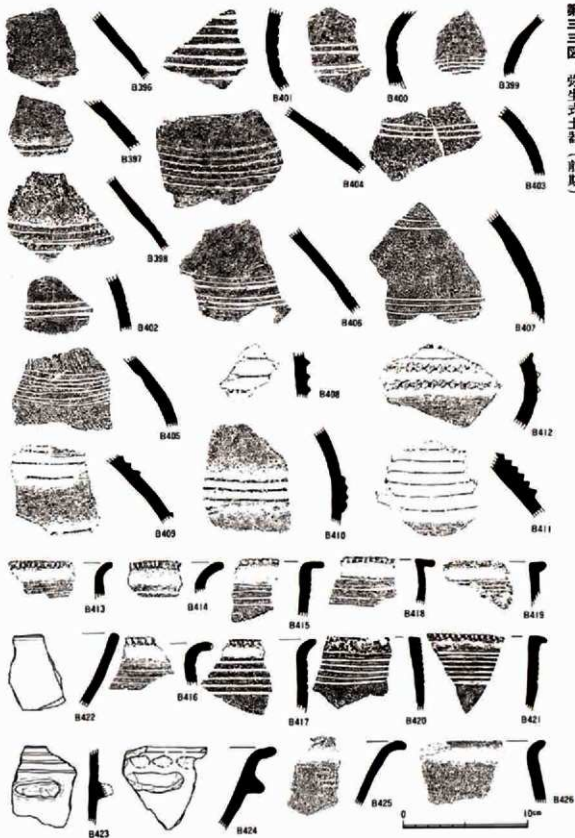




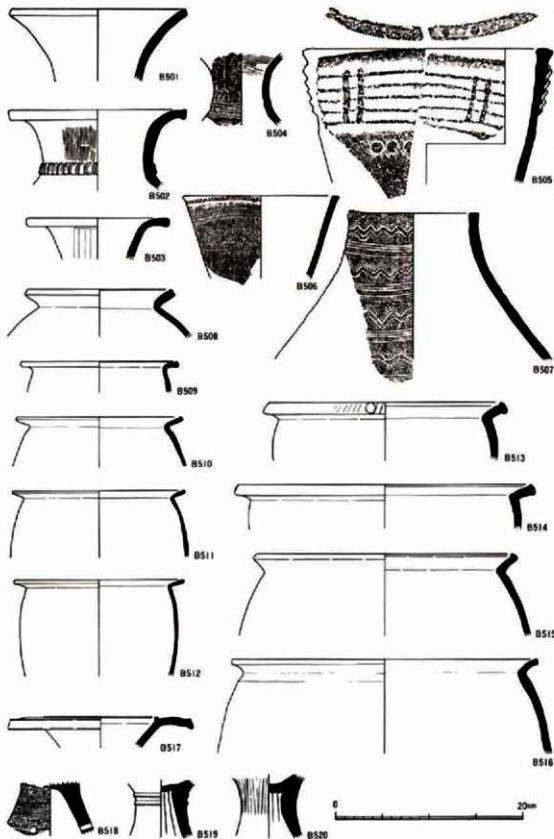




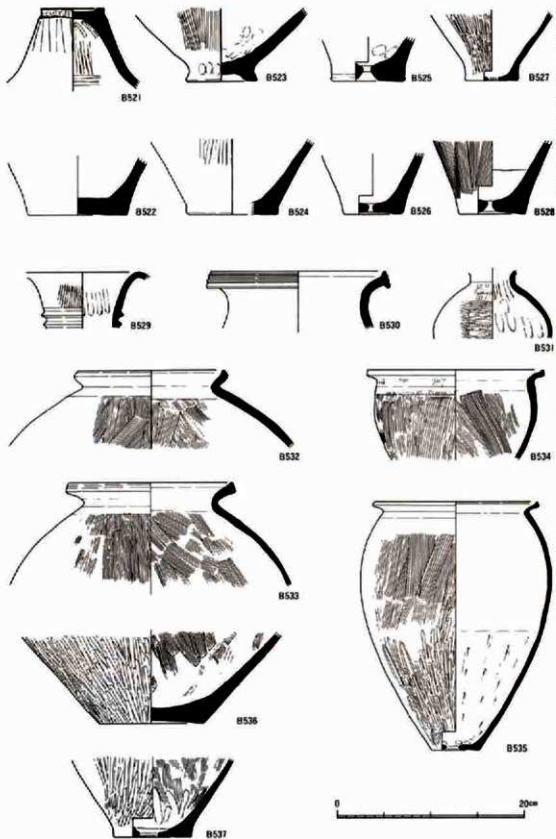


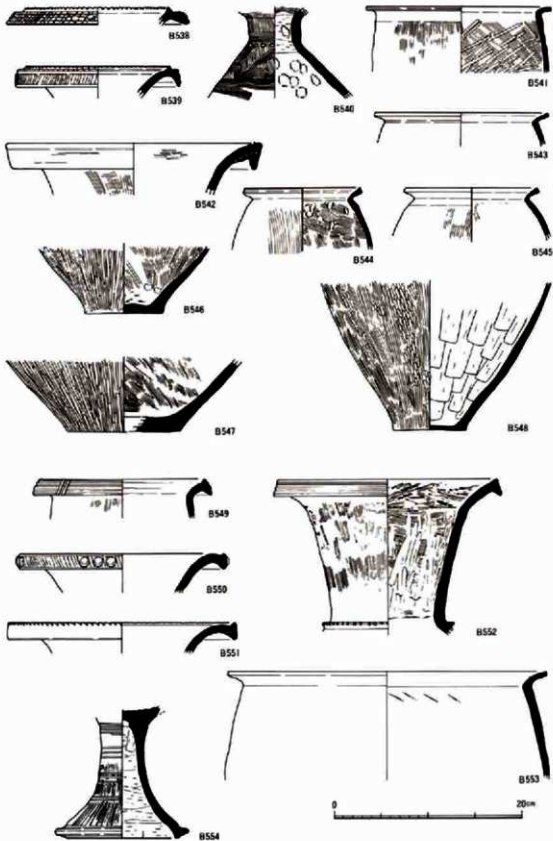


D地区SX10 壺・甕・鉢

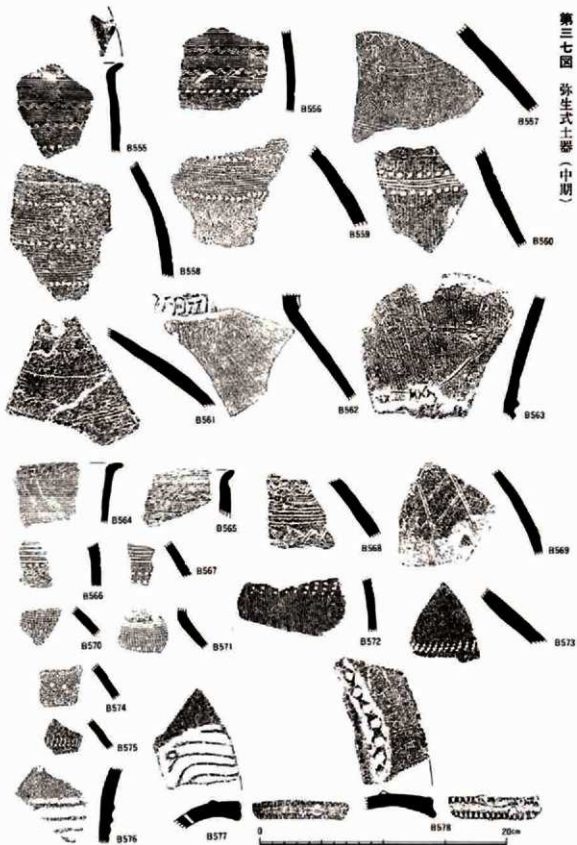


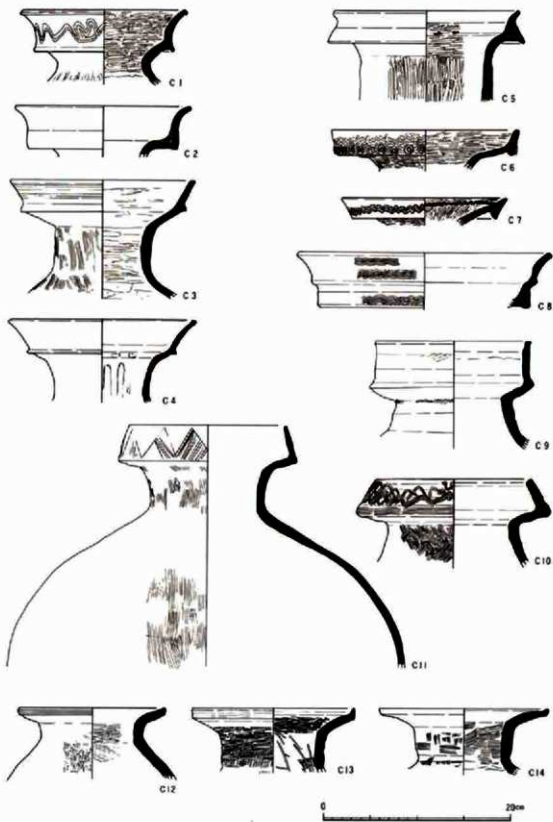
盃・鉢・甕・高杯

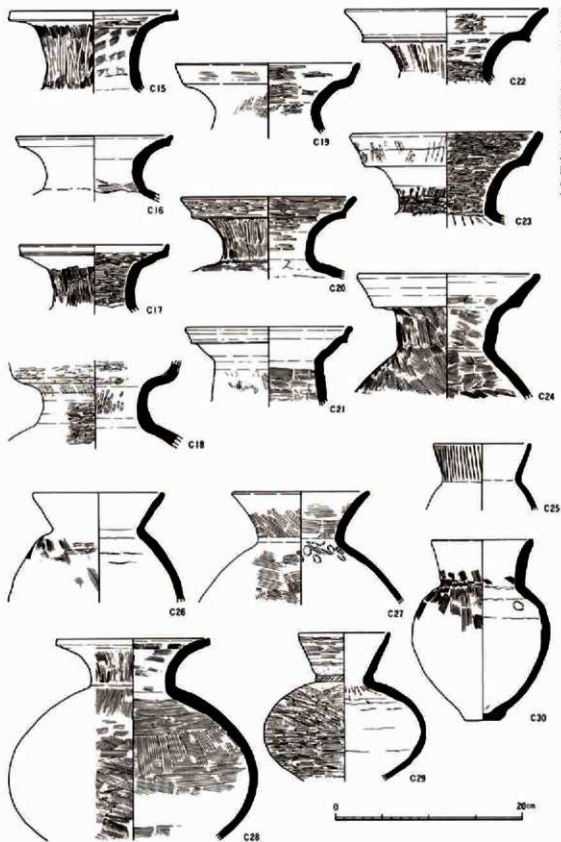




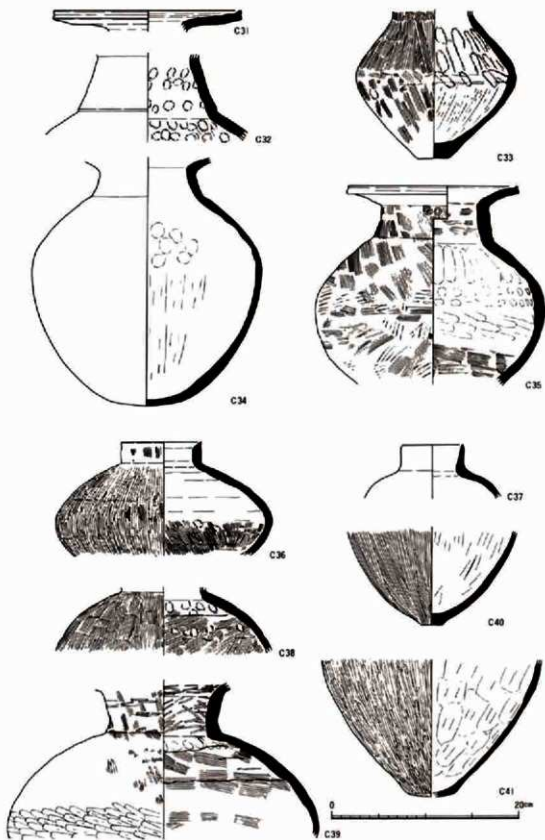
C地区SX03・E地区 壺・甕・高杯





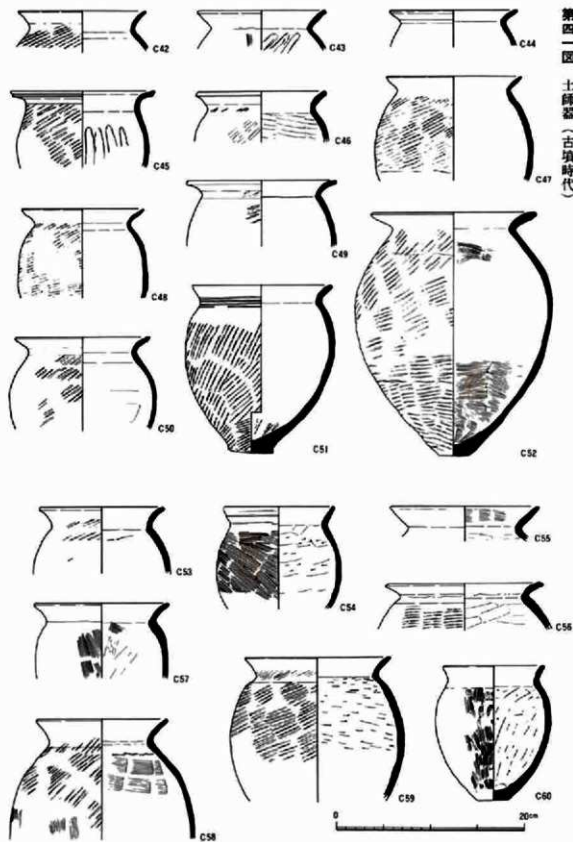


C地区SX03 壺

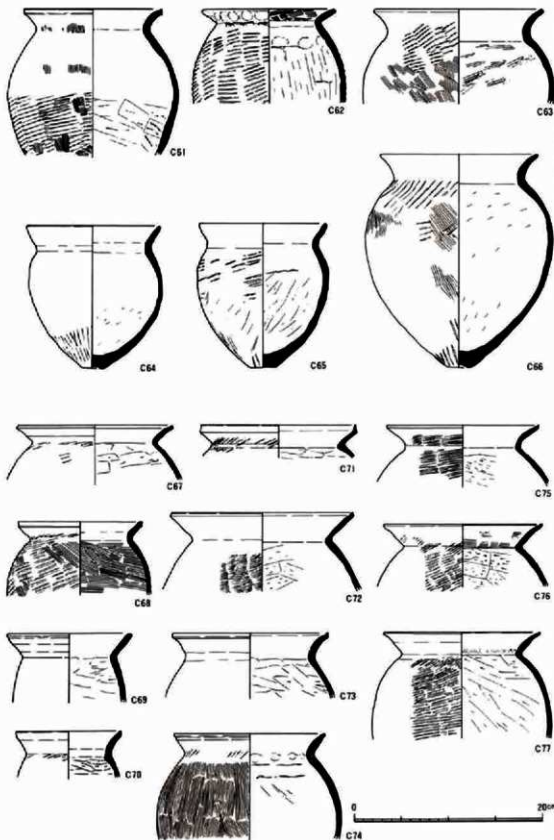


C地区SX03 壺

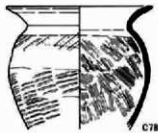
第四一圖 土師器 (古墳時代)



C地区SX03 復



C地区SX03 表



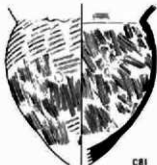
C78



C79



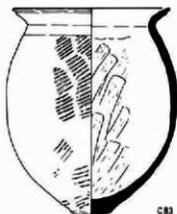
C80



C81



C82



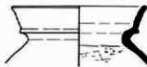
C83



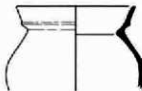
C84



C85



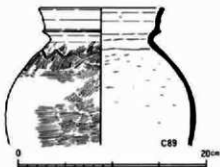
C87



C86

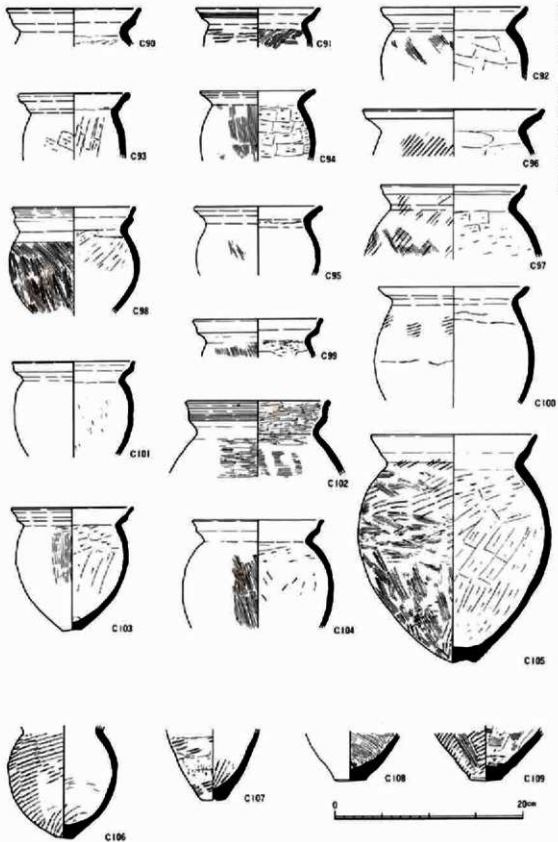


C88



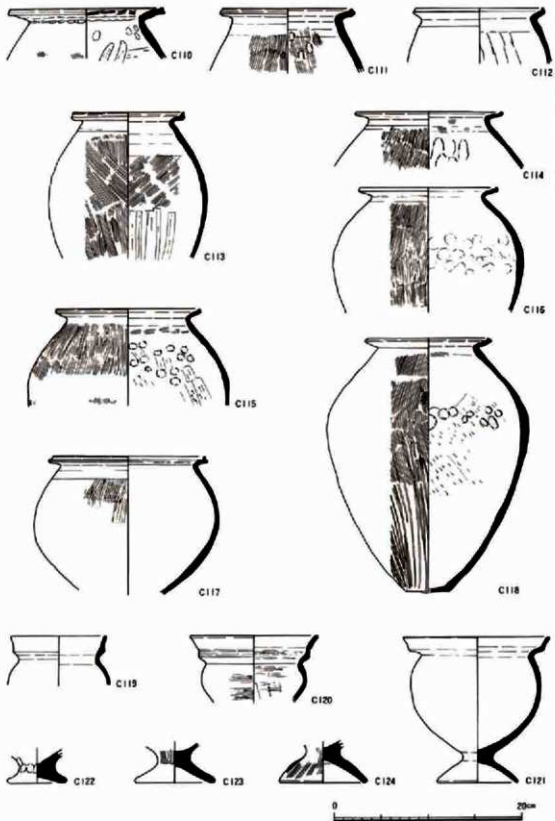
C89

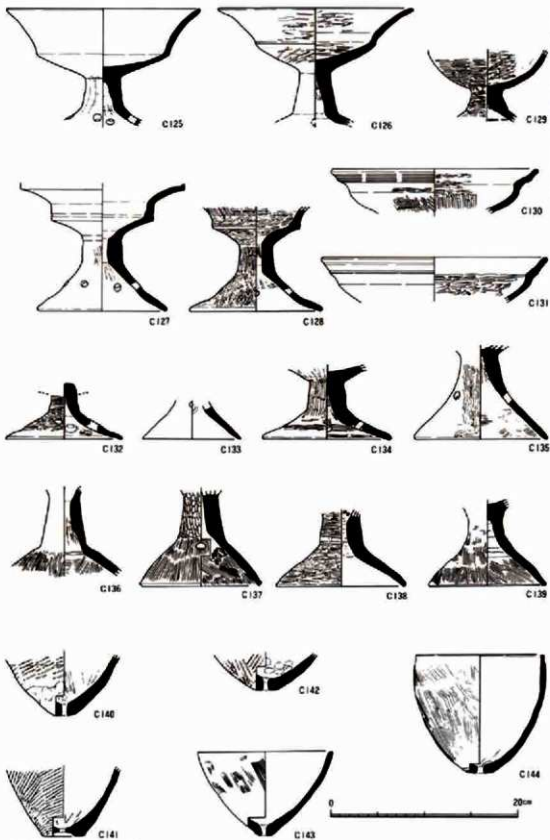
20cm



C地区SX03 罍

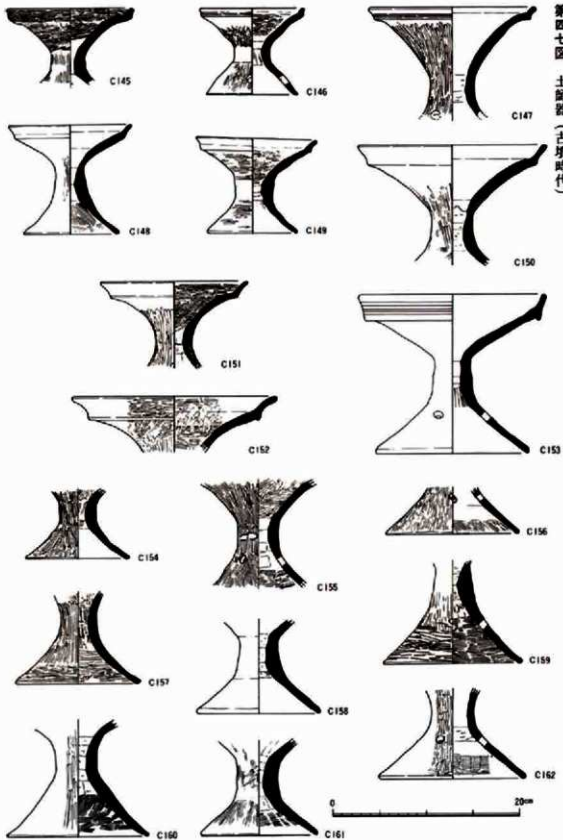
第四五圖 土師器 (古墳時代)



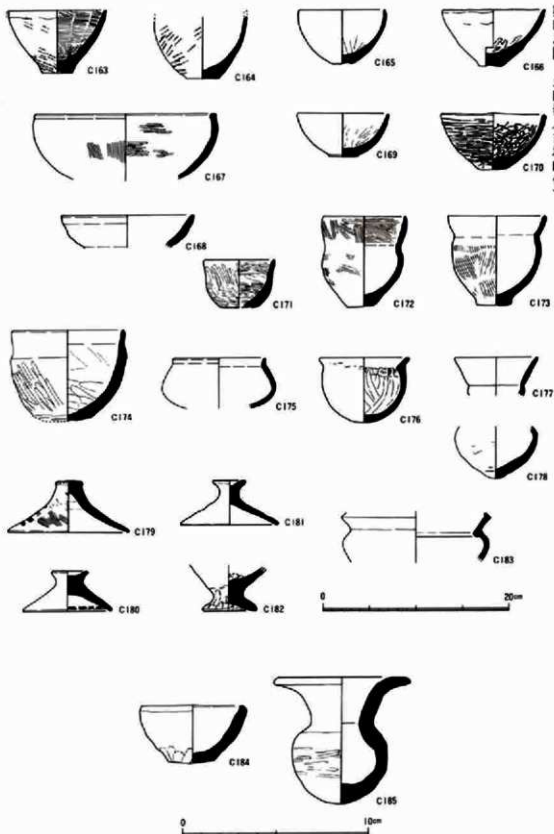


C地区SX03 高杯・飯

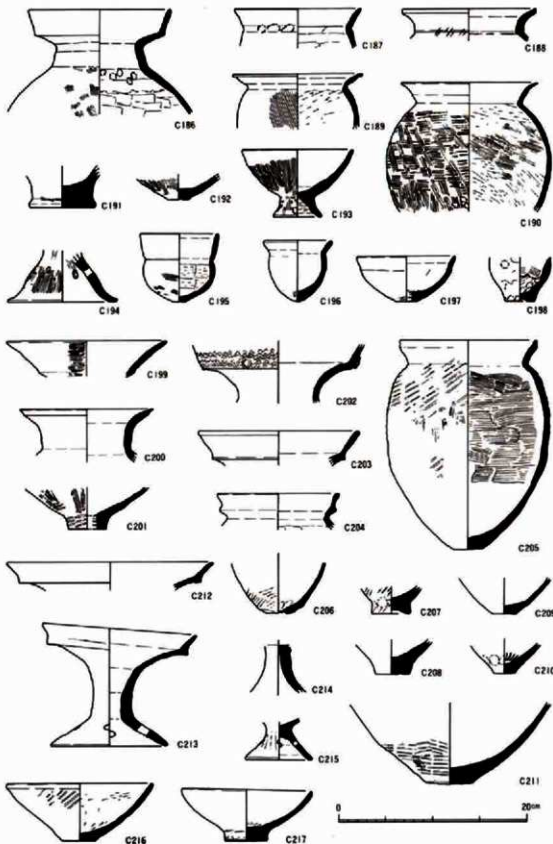
第四七圖 土師器 (古墳時代)



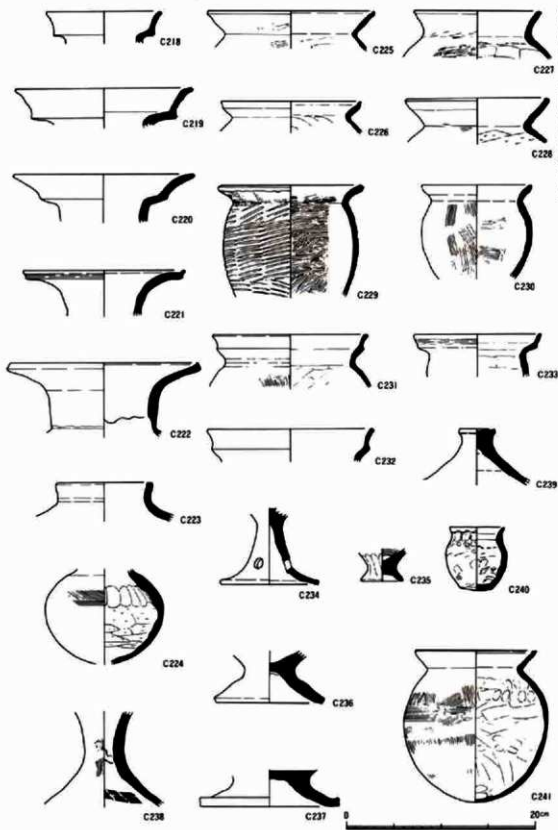
C地区SX03 器台



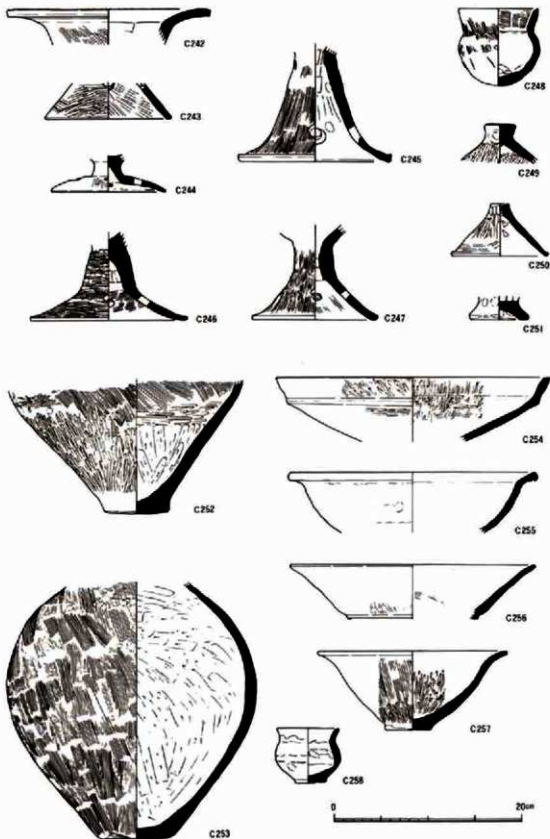
C地区SX03 鉢・蓋・製塩土器・小型丸底壺・手焙形土器、ミニチュア土器



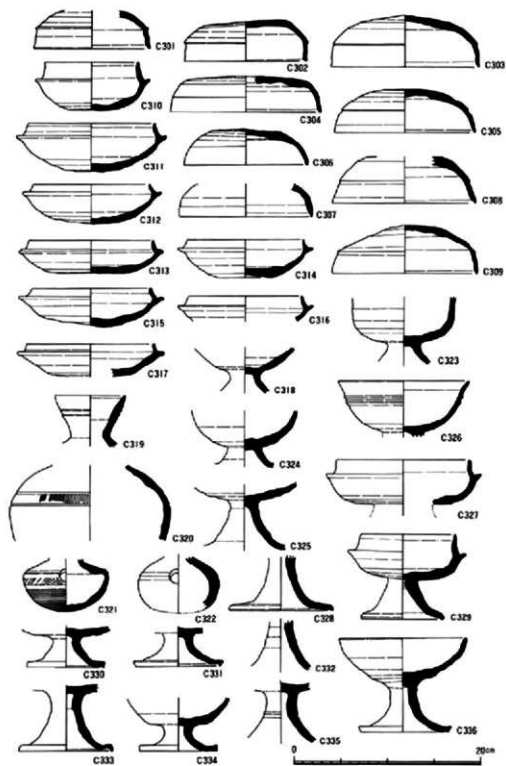
C地区SI01・SI02 甕・甕・高杯・器台・鉢



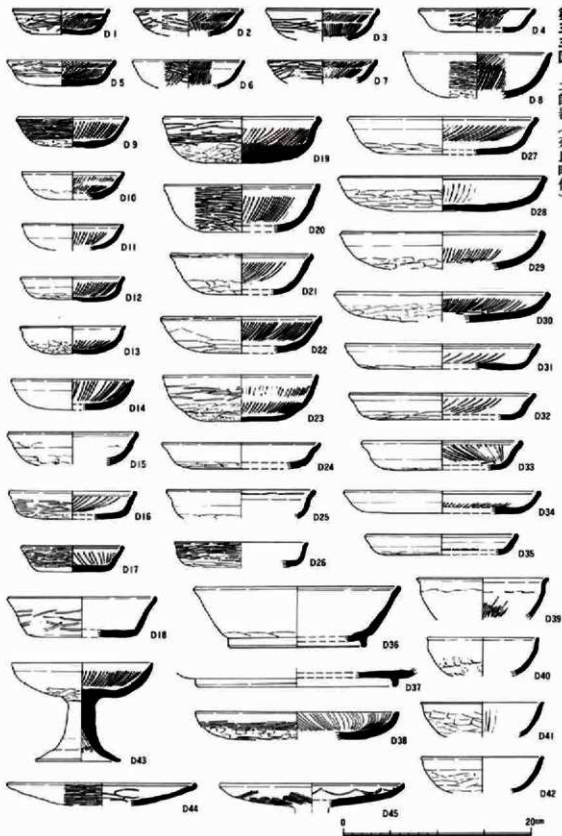
C-5区・42G 壺・甕・高杯・器台・蓋・鉢・製塩土器



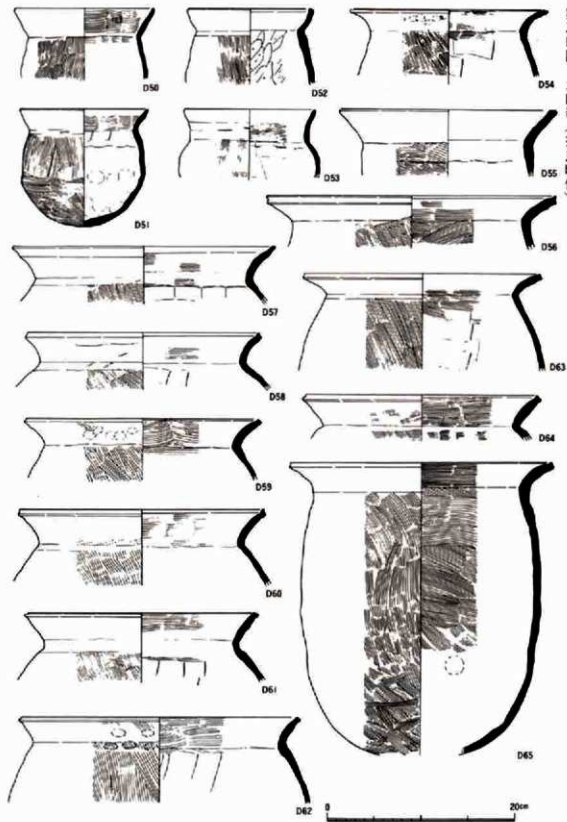
C-6区・E地区 壺・高杯・器台・鉢・蓋

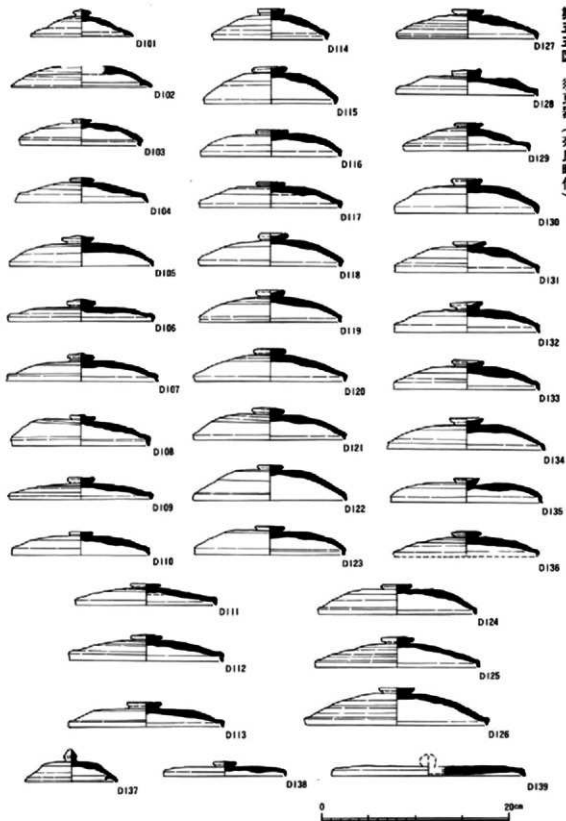


C地区 杯蓋・杯身・高杯・提瓶・肥

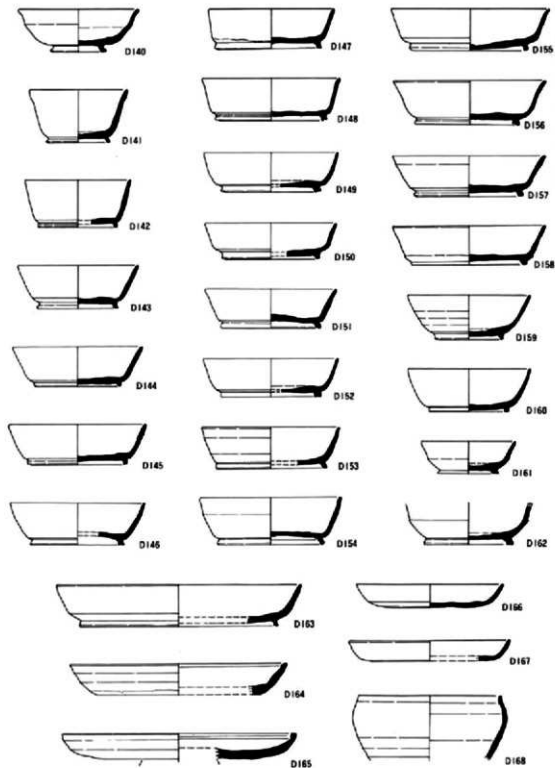


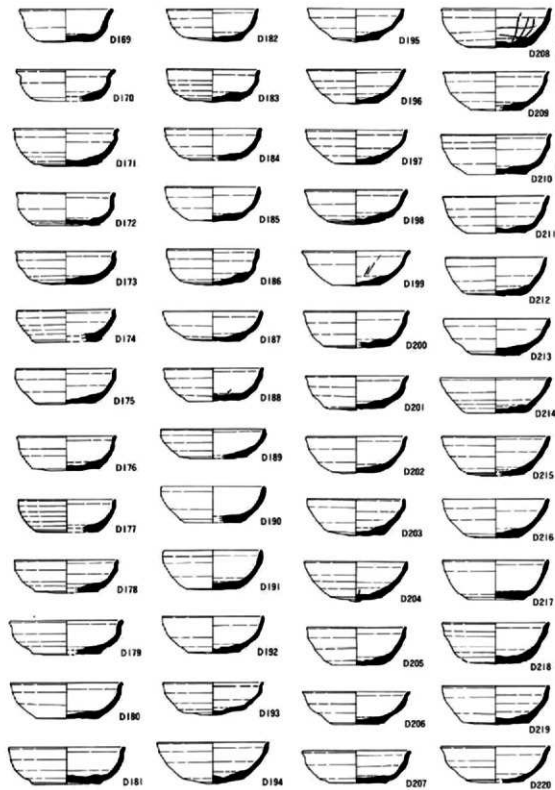
C地区 杯・皿・高杯・碗

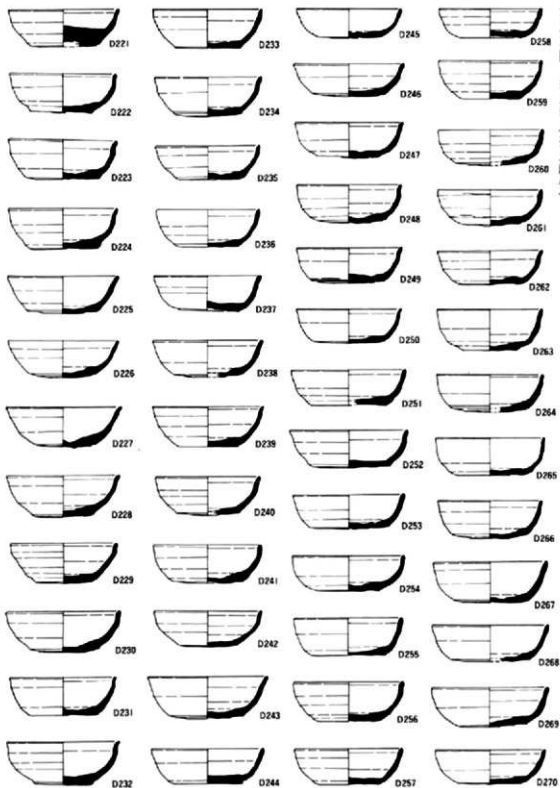


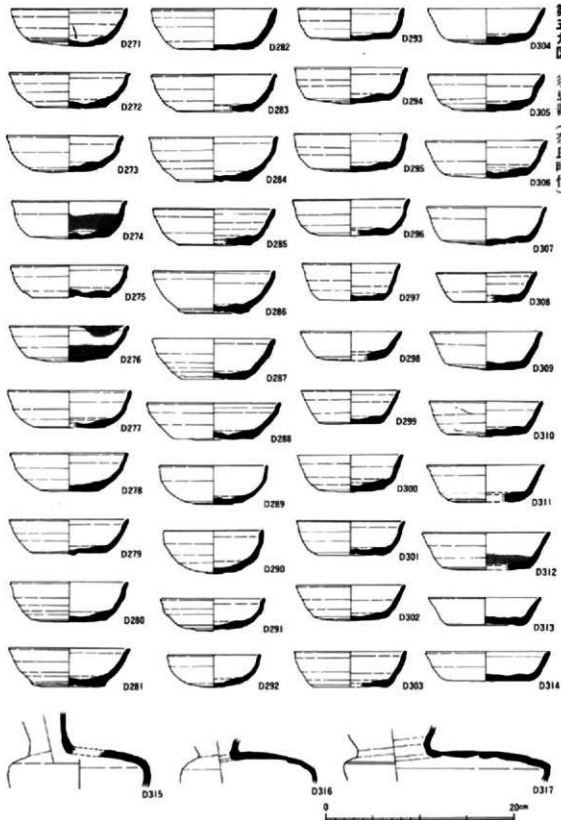


第五六圖 須惠器（奈良時代）



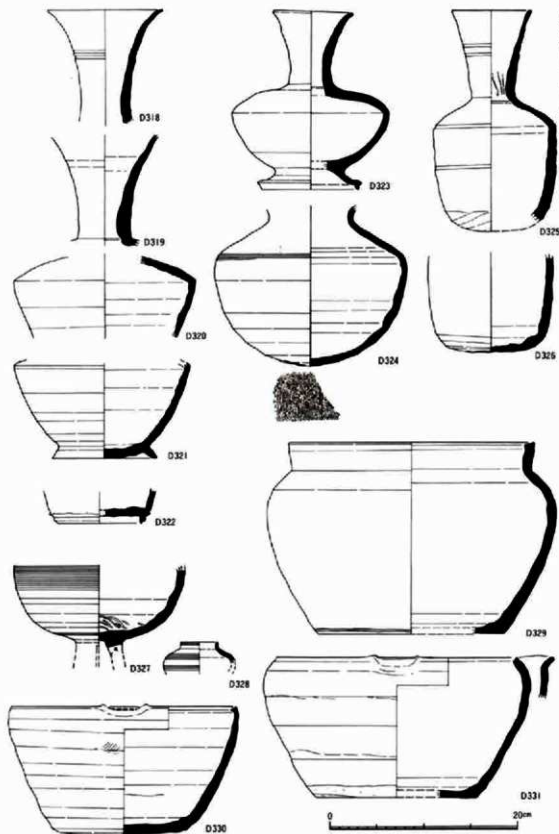


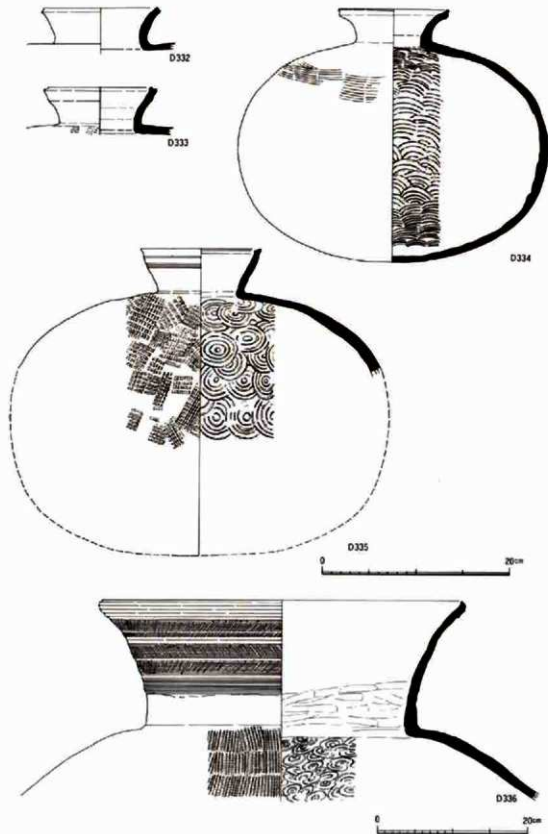


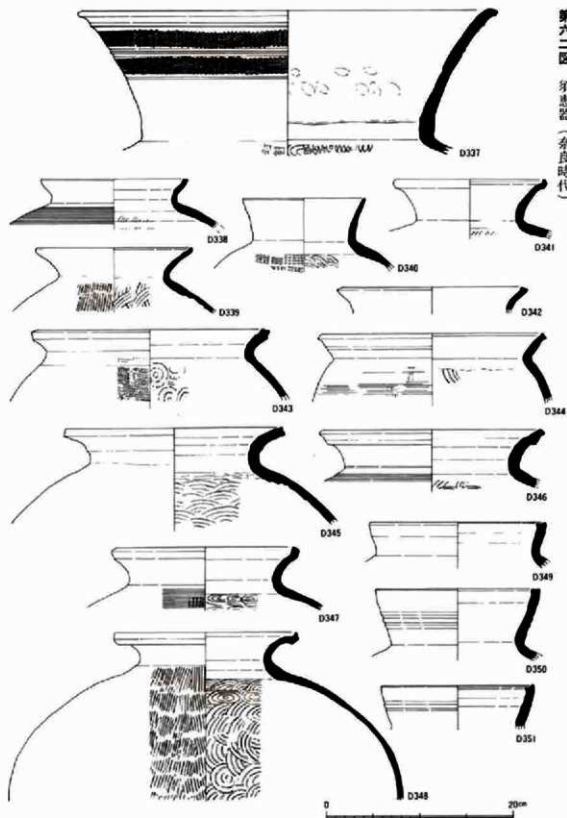


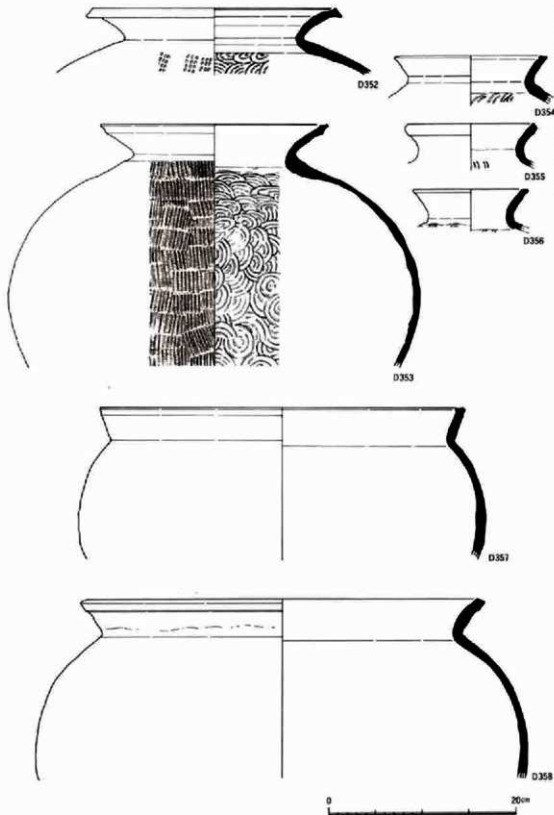
C地区 杯・平皿

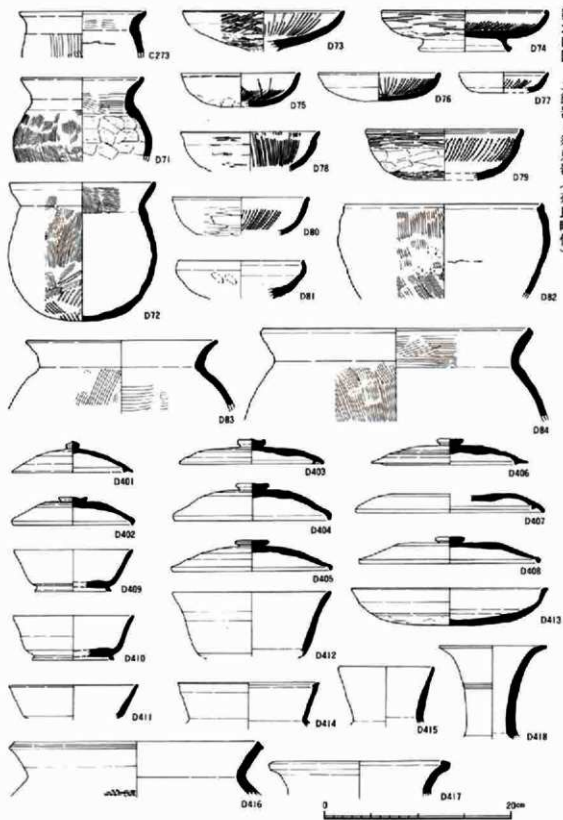
第六〇圖 須惠器（奈良時代）

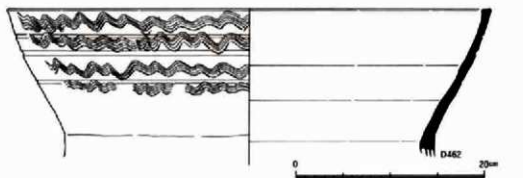
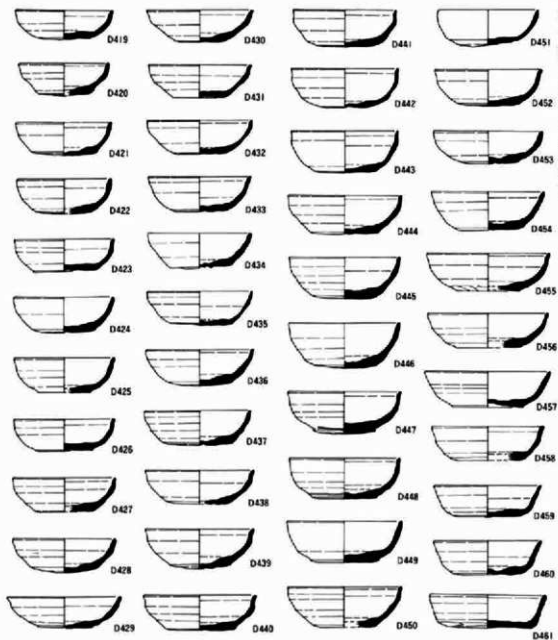


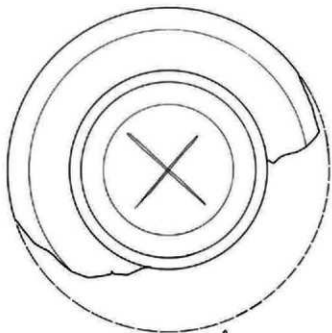
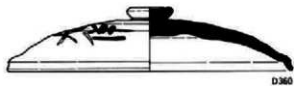
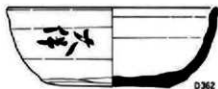


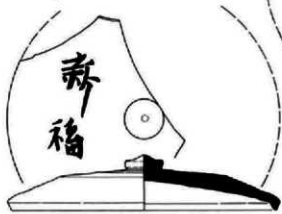
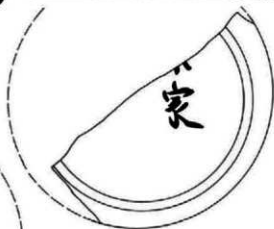
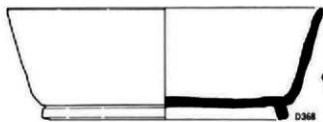






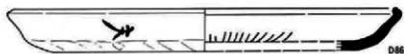
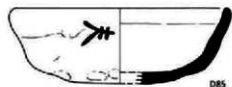
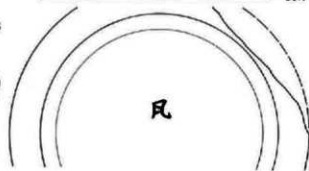
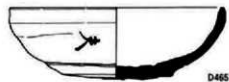
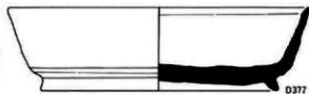
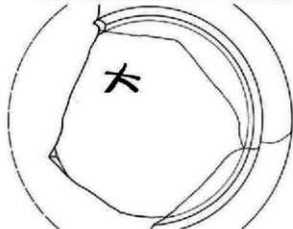
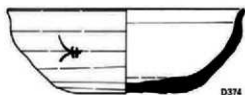


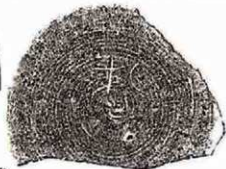
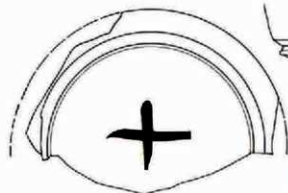




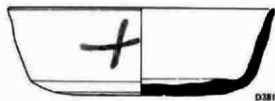
D394

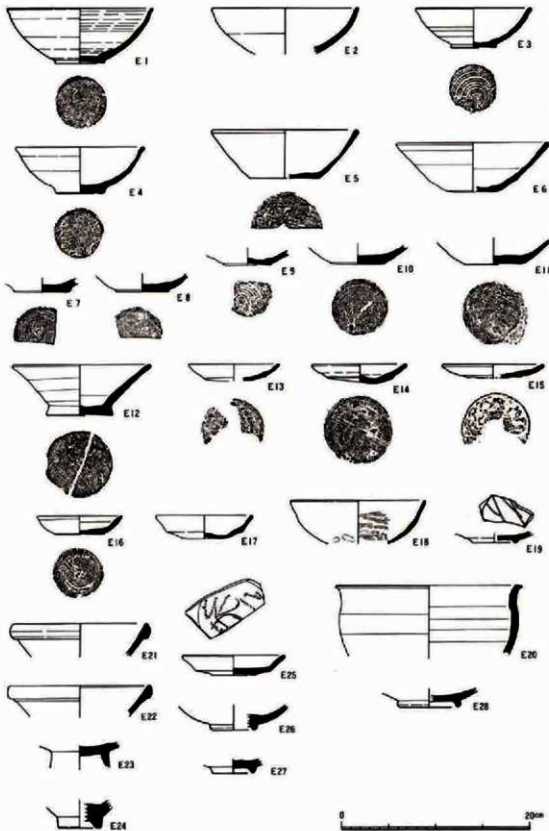


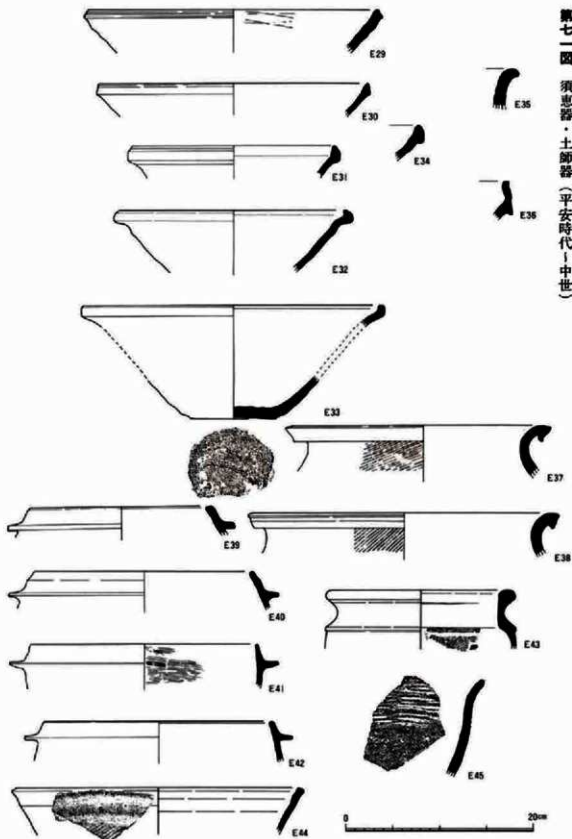




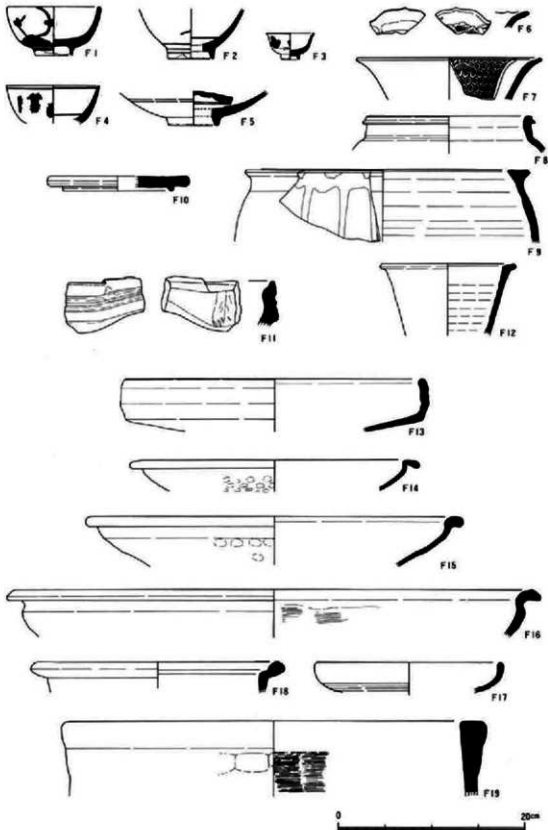
横







鉢・甕・羽釜・土鍋



丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書
— 本文編 —

昭和60年3月20日印刷
昭和60年3月30日発行

編集 兵庫県教育委員会
発行

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社真陽社

〒600 京都市下京区油小路弘光路上ル
TEL (075) 351-6034